

# 霊使い達の宿題

土斑猫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

現代（今）でない時。

現実（ここ）でない場所。

次元の狭間の何処かにある世界。

そこで、精霊を繰る少女達が織り成す物語。

お暇とあらば、しばしの足止めを……。

魔法族の里にある魔法専門学校。

そこに在学する霊使い達に、講師であるドリアドからある宿題が出される。

その内容とは……？

遊戯王OCGのカードキャラクター達を主役においた、冒険ファンタジーです。

物語の形式上、オリジナルな設定が多い事、また漫画・アニメのキャラクターは登場しない事をご了承ください。

目次

始まり	1
風の場合	5
火の場合	23
水の場合	46
地の場合	162
闇の場合	191
光の場合	207
採点	260
逃亡	299

## 始まり

「それでは、宿題を出します。」

「……………!!」

終業の開放感にざわめいていた教室が、その一言でピタリと静かになった。

「……宿題……ですか？」

教室にいた6人の少年少女達を代表する様に、朱髪の少女がおおずおずと先の言葉を発した女性に向かって尋ねる。

「はい。宿題です。」

問いかけられた女性―精霊術師ドリアードは、その顔に穏やかな笑みを浮かべながら、もう一度きっぱりとそう言った。

「何か、問題でも？」

ニッコリと小首を傾げる仕草に沿って、長い黄金こがねの髪がサラサラと歌う。

別に、恐ろしい形相をしている訳でも、声にドスが効いている訳でもない。

本当に。ただ、本当に微笑んでいるだけ。

しかし、その背後からは言い様のない“気”が立ち昇る。

それが、教室の皆（一部除く）の背筋を泡立てる。

「い、いえ。何でもないです……。」

おおずおずと引っ込む、朱髪の少女。

「そうですね。他には？」

そう言って、教室を見渡す。

「……………」

常に代表を務める少女が沈黙させられたのである。

他に意を唱えられる者など、いる筈もない（もつとも、候補はいるが肝心の本人にその気がない。）

ドリアードの問いに返るのは、沈黙だけ。

「・・・そうですか。」

それに満足した様にその笑みを深めると、彼女は改めてこう言った。

「それでは、宿題の内容を説明します。」

・・・ここは魔法族の里。

多くの魔法使い族達が暮し、日々を営む地。

その一角に、小さな学び舎があった。

その名も、「ミナコ魔法専門学校」。

この里を、ひいてはこの世界を牽引する次世代の魔法使い達を育成する場所である。

片田舎にあるにも関わらず、優秀な教師が多く所属する知る人ぞ知る名門校である。

育成内容はいくつかのコースに分かれており、「黒魔導師コース」や「召喚術師コース」等幾つか存在する。

先の会話はその内の一つ、「精霊術師コース」のクラスから聞こえてきていた。

現在、このクラスに配属されているのは6人の少年少女。

風霊使いのウイン。

火霊使いのヒータ。

水霊使いのエリア。

地霊使いのアウス。

光霊使いのライナ。

闇霊使いのダルク。

皆が揃って、地水火風の四大元素と光と闇の双極を司る。

六身一体、一心同体で真価を発揮するチームである。

逆に言えば、個々人ではまだ長短が目立つ凸凹半人前の集まりであるとも言える。

このクラスの専属講師である精霊術師ドリアードは、その端麗な容姿とは裏腹に、授業内容や出す宿題がえげつない事に定評があった

(本人に悪気はないらしいが)。

そして今回も、ドリアードはその顔に女神の笑みを浮かべたままサラリと言い放つ。

「ドラゴンです。」

「……は？」

「来週までの七日間、あなた達に公休をあげます。その間に、自分と同じ属性のドラゴンを一匹、しもべにしてつれてきてください。」

サ——ツ

その言葉に、全員の顔から血の気が引いていく(やっぱり、一部メンバーを除く)。

彼女たちが学ぶ「精霊術」とは、術師である自分と同じ属性のモンスターと契約を交わし、しもべとして使役する事から始まる。

よって、しもべとするモンスターを隷属させる術を身に付ける事は必須である。

しかし……

「ドラゴン……だと……？」

「ドラゴンですって……？」

「ドラゴン……」

数多くあるモンスターの種族の中で、ドラゴン族はその多くが別格である。

人語を解するものもいるが、そんな奴らは大概レベルが高く、彼女達の手に負える存在ではない。必然的に、レベルの低い中位〜下位種をターゲットにする事になる。しかし、そうなると今度は凶暴性が強く、猛獣を相手にするのと変わらない場合が多い。

恐らくは、命がけの実習になるだろう。

あからさまにゲンナリとしている(やっぱり、一部(ry)教え子達に気付いているのかいないのか、ドリアードは満面の笑みでこう言った。

「おk?。」

「……おk……」

ドラゴンは恐ろしいが、怒ったドリアードはもつと恐ろしい。

彼女達に、選択の余地はない。  
こうして、霊使い達の受難の日々は始まった。

「霊使い達の宿題・

風の場合」に続く

## 風の場合

— 1 —

ヒユウウウウー

遙か高空を強い気流が通り過ぎていく。デザートストームと呼ばれる、この地域特有の季節風。

周辺は乾燥していて植物が少なく、荒涼とした岩場が続く。空は良く晴れ、太陽がカンカンと照っている。それでも砂漠の様な熱感を感じないのは、このデザートストームが運ぶ、程よい湿気を含んだ空気によるもの。遙か遠くの海から運ばれる湿気を糧に、この地域は貧相ながらも、それなりの生態系を育んでいた。

ガタゴト ガタゴト

そんな風景の中に、何やら無骨な音が響く。

見れば、延々と広がる荒地の中を一台の荷台が進んでいる。

荷台を引いているのは、鎧を着込んだ中年の男。

戦場へ必要な物資を運ぶ、物資調達員。

何かと争い事の多いこの世界では、食いつばぐれのない職として需要がある。

男は一際岩の多い場所に着くと、途端に大声を上げた。

「おうい、嬢ちゃん!! ついたぞう!!」

その声に反応した様に、荷台の後ろから小さな生き物がピヨコンと頭を出した。

黄緑色の長い身体に蝙蝠の様な翼。「プチリュウ」と呼ばれる下級ドラゴンの一種である。

「おう、お前さん、ご主人様んとこ、起こしてくれや。こっちもあんまりゆつくりできねえんでなあ。」

男の言葉に、「分かった」と頷くプチリュウ。



そのまま、再び荷台の後ろへと戻る。

そこには、ローブを身に着けた少女が一人横たわっていた。

照りつける日差しを気にする様子もなく、心地よさそうに寝息を立てている。

『ねえ、ウイン。ウインってば!!』

「ふうえっ？」

プチリュウの呼びかけに、ウインと呼ばれた少女は薄っすらと目を開ける。

「なあにい？ぷつちん。もう、お昼ごはん？」

荷台の上に身を起こしながら、風霊使いウインは寝ぼけ半分の声でそんな事を言う。

ポリポリと頭をかくと、ポニーテールに纏めた若葉色の髪がサラサラと歌を奏でる。

『そうじゃないよ!!目的地についたんだよ!!ほら、目えしっかり開けて。よだれふいて。おじさんにお礼なさい!!』

ウインはしばしボくとした後、やっと相方の言葉が脳に滲みたのか、「ああ。」と手を打った。

ポン

軽やかな音と共に、小さな身体がと荷台から飛び降りる。

そのまま、トテテと前の方に行く。

「ありがと、おじさん。おかげで助かったよ。」

そう言っつて、プカプカと煙草なぞふかしている男に向かって頭を下げる。

「なあに。いいって事よ。だがよ、嬢ちゃん。本当に大丈夫なのかい？多分、＼アイツ＼嬢ちゃんの手には余るぜ。下手うつと・・・」

ピンツ

手にした煙草を弾き、男が言う。

「死ぬぜ。」

その目には、冗談の色も悪ふぎけの気配もない。

しかし、ウインはコロコロと笑うところ切り替えした。

「大丈夫。やってみれば、何とかなるよ。それに、行き先で死ぬかも

しれないのは、おじさんも同じでしょ。」

それを聞いた男はしばし目を丸くし、「違いねえ。」と言ってゲラゲラと笑った。

「それじゃ。」

そう言つてウインが拳を出す。

「おう。」

それに応える様に、男も拳を出す。

「御武運を。」

カツン

軽い音を立てて、二人の拳が打ち合わされた。

『さて、ウイン。これからどうするの?』

男を見送つた後、プチリユウがウインに問いかける。

「うくん、そうだね。取り合えずは・・・」

『取り合えずは・・・?』

「お昼にしよう!!」

そう言つと、ウインは適当な岩に腰掛ける。

どこから出したのか、いつの間やら膝の上には大きなバスケットが一つ。

カパツと蓋を開け、取り出したのはこれまた大きなサンドイッチ。満面の笑みとともに、かぶりつく。

『ちよつと、ウイン!!少しは真面目にムゴマゴムゴ・・・』

ずっこけて、そこらの砂場に突っ込んでいたプチリユウ。

ようやく引き抜いた頭。

その勢いで喚こうとする口が、まろやかな卵の味と香ばしいパンの香りで塞がれる。

「大丈夫だつて。ぷっちん。」

プチリユウの口にたまごサンドを押し込みながら、ウインは笑う。

「ここはね、植物が少ないから必然的に動物も少ないの。だから・・・」

ドウンッ

何処か遠くで、砂が爆ぜる音がした。

『今の音・・・ウイムグガゴ!!?』

目を白黒させてたまごサンドを飲み込んだプチリュウの口に、今度はサラダサンドが詰め込まれる。

そして自分はピーナツバターサンドなど齧りながら、ウインはあくまでのんびりした口調で続ける。

「ここに住む肉食のモンスターは、何時でも何処でも、獲物を見つけられる様に五感が物凄く鋭く出来てるんだって。」

ドウンッ

また、音。

今度は、少し近い。

「だからね・・・」

ウインが、サンドイッチの最後の一片を口に放り込んだその瞬間――ドオンッ

彼女の背後で、大きく砂が弾ける。

巻き上がる砂ぼこりの中から現れたのは、ウインの身体を丸々収める程に巨大な顎。

グワシヤア!!

鋭い牙を幾重にも重ねたそれが、猛スピードで閉じる。

次の瞬間、ウインの座っていた岩とバスケットが粉々に粉碎される。

しかし、そこにウインの姿はとうにない。

彼女の身体は木の葉の様に風に舞い、砕けた岩から数メートル離れた場所にフワリと着地した。

「こっちが探さなくても、待ってれば向こうから来てくれるんだよ。」

胸に抱いたプチリュウにそう語りかけるが、彼の意識はもうそこにはない。

シユルルルル・・・

彼が凝視する砂ぼこりの中。

そこから聞こえるのは、低く響く唸り声。

ズシリ

砂を踏み締める、重い足音。

バサリ

羽ばたく音とともに、巻き立つ砂煙が吹き飛ばされる。

その中から現れる、異形。

大きく広がる翼。

蛇の様にうねる、長い首。

10メートルはあろうかという身体を包むのは、鈍く光る砂色の鱗。

殊更奇異なのは、その胴体部。

首の付け根には、長く後方に伸びる捻くれた角。

暗い緑色に光る、もう一对の眼球。

己が身体を二分するかの様に裂け開くのは、ギリギリと鋭い歯牙を軋ませる巨大な口。

それは、胴体に悪魔の如き顔を刻みつけた異形の竜。

『で・・・出た・・・。』

「狙いはバッチリ。初めまして。『魔頭を持つ邪竜』くん♪」

そう言って、口をパクパクさせているプチリユウを宙に放つウイン。

背中からすらりと杖を抜き取ると、クルリと一回転させて手に収める。

「さーて。折角とったカロリー、あんまり無駄遣いしたくないんだよね。手早く終わらせてもらおうよ。」

そんな彼女の言葉を聴いているのかいないのか、魔頭を持つ邪竜はゆっくりと大顎を開く。

身体が二つに裂けるのではないかと思える程に、大きく開く口。

濁った緑色の唾液が滴り、ジュツと焼け付く様な音を立てて地面に落ちる。

そして―

ヴシャアアアアアアアツ!!!

荒地の静寂を引き裂く様に、響き渡る咆哮。

軽い口調とは裏腹に、緊張で強張った顔で杖を構えるウイン。  
そんな彼女に向かって、死の顎あぎとは飢欲のままに襲いかかった。

ザグウツ

「わっ・・・と!!」

鋭利な歯牙の群れが、広がる砂原をえぐる。

それから転がる様にして逃れたウイン。

体制を立て直すと、その勢いそのまま杖の先端を邪竜に向ける。

「―踊れ風精あかしま 暴吼あかしまえよ嵐精あかしま 暴の歌 其が名がもとに集い来て  
偽なる理を吹き砕け―」

ヴオンツ

朗々と響く詠唱。

杖の先に灯る深緑の魔法陣。

そして―

「破壊サイクの旋風ロン!!」

ギヤルルルルルルツ

結ばれる言の葉。

それと同時に、巻き起こった旋風が唸りを上げて邪竜に襲いかか  
る。

ダウンツ

重い炸裂音とともに立ち込める砂煙。

濛々と視界を遮るその向こうを、息を飲んで見つめるウインとプ

チリュウ。

しかし、次の瞬間プチリュウの耳がピクリと動く。

『ウイン、避けて!!』

「!!」

咄嗟に身を翻すウイン。

途端、

ドガアアアアアンツ

舞い立つ砂煙を吹き飛ばし、飛んで来た何かがそれまでウインがい  
た場所に大穴を開けた。

「ひええ〜。」

思わず青息を吐くウイン。

そんな彼女の目の前で、ユラリと姿を現す巨体。魔頭を持つ邪竜。

その身体は、鱗の一片すらも欠けてはいない。

「あつちやく。やつぱり、ダメか。」

バツが悪そうに舌を出すウイン。

『当たり前だろ!? サイクあロンれは対魔法用の術なんだから!! モンス  
ターに使ったって意味ないよ!!』

「あはは。牽制ぐらいにはなるかな?とか思ったんだけどなあ。」

ギャアギャアと喚きたてるプチリュウをなだめながら、ウインは苦笑いを浮かべる。

『やめてよ!! パニくらないのは君の良い所だけど、こんな時くらい  
危機感持って!!』

「ごめんごめん。そんな怒らないですよ。ぷっちん。」

『いいや、良い機会だから言わせてもらおうよ!! 大体君はね・・・』

シユウウウウウ・・・

『『ハッ』』

場所も時もわきまえずに言い合いをしていた二人(?)。

すんでの所で殺気に気付き、左右に避ける。

ゴシャアアアアッ

その間を何かが猛スピードで通り抜け、先にあった岩を粉々に砕き  
散らす。

「あつぶなく。」

『さっきのはあれか・・・。』

シユウウウウウ・・・

再び響く怪音。

見れば、邪竜の身体が見る見る風船の様に膨らんでいく。

鱗と鱗の間が伸びきり、下の皮膚が頭になる。

これ以上膨らめば、身が弾けると思われた瞬間―

ガバアッ

胴体の魔頭が、ガバリとその大口を開ける。  
途端、

ゴヴウアアアツ

そこから轟音を立てて飛び出す、何か。

それが、圧縮された空気の塊と察すると同時に、ウインは三度身をかわす。

ゴアアンツ

轟音とともに着弾。

「どうやら、あれがあの子の持ち札みたいだね。」

巻き上がる砂埃にむせ込みながら、ウインがそんな事を言う。

『結構な破壊力だよ!!どうする!?!』

「うん。」

相方の言葉に頷くと、ウインは再び膨らみ始める邪竜を見やる。

「威力は凄いけど、発射するまでに時間がかかるみたい。一度出したら次弾までには間がある。そこを叩こう。」

『分かった!!』

頷き合う二人(?)の視界の端で、邪竜がその大口を開くのが見える。

『ウイン!!』

「今!!」

姿勢を低くしたウインの上を、空気の砲弾が唸りを上げて通り過ぎる。

かすった髪の毛が削り散らされるのを感じながら、這う様な姿勢で地を走る。

そして―

「入った!!」

邪竜の懐に入ったウインが、杖を構える。

その先に展開する、真紅の魔法陣。

それを邪竜の身体に叩きつけようとした、その瞬間、  
ゾク　　リ

それまでとは違った悪寒が、彼女の背筋を走る。

思わず見上げる。

その視界に、自分を見下ろす竜の顔が映った。

邪竜が、その首に頂く本当の頭。

それが、クワツと口を開いた。

途端、真つ赤な華が視界を覆う。

それが、飛び散る自分の血だと気付くのと同時に、ウインはそのズタズタになった身体を地面に叩きつけられていた。

『ウインー!!』

叫ぶプチリユウ相方の声が、酷く遠くに聞こえた。

— 2 —

— 「魔頭を持つ邪竜」 —

荒地や砂漠に生息する、風属性の下級ドラゴン族。

体長は8〜10メートル。

様々な形状に派生するドラゴン族の中でも奇種と呼ばれ、その形状は特異を極める。

最大の特徴はその胴体。

そこには竜本来の頭部の他にもう一つ、「魔頭」と呼ばれる特殊器官が存在している。

「魔頭」は第二の視覚、聴覚、嗅覚、そして摂食機能を有しており、文字通り“副頭部”とも呼べる器官である。

これの存在により、魔頭を持つ邪竜はその体格に対して大型の獲物を捕食する事が出来るようになっていく。

これは食料資源の乏しい地において、獲物の選択範囲を広げる事に役立っている。

非常に貪欲であり、その獲物には当然の様に人間も含まれる。

同種が生息する地域を移動する際は、注意が必要である。

同種が持つ攻撃は二つ。

上部の竜頭が放つ「レザ斬裂疾風」。そして胴体の魔頭から発射される「バレットブレス烈風弾」である。



「烈風弾」<sup>バレットブレス</sup>は体内で圧縮した空気を弾丸の様に打ち出すもので、破壊力が高く、直撃すれば岩さえも粉碎する。しかし、身体の正面から直線上の軌道にしか発射出来ず、連射も出来ない。そのため、察するのもかわすのも容易い。

一方、上の竜頭が出す「斬裂疾風」<sup>レザールブレス</sup>は薄皮を裂く程度の真空刃を無数に飛ばす攻撃で、威力こそ低いが連射がきき、長く稼働のきく首に乗った頭から発射されるため、四方八方満遍なく飛ばす事が出来る。これで獲物の動きを封じ、「烈風弾」<sup>バレットブレス</sup>で止めを刺すのが主な攻撃パターンである。

同種と対峙する際は、これにはまらない事が重要である。

「あ……っう……」

全身に受けた衝撃と、痺れる様な痛みで身体が動かない。

霞む視界に、口を開けて迫る魔頭が映る。

洞窟の様に暗いそれは、底の無い奈落の入口の様に見えた。

(うわ……。これ、ヤバイかも……。)

朦朧とした思考。

何処か他人事の様な感覚の中で、ウインは迫る邪竜の姿を見つめる。

と、

グイッ

襟首が、強い力で引かれた。

見れば、そこにはいつの間にかプチリュウが食いついていた。

『フィンニユウウウ——っ!!』

彼はありつただけの力を込めると、背負投げの要領でウインの身体をぶん投げる。

ドサアッ

「むぎゅっ!!」

投げられた先で、叩きつけられたウインが踏みつけられたアマガエルの様な声を上げる。

しかし、そんな事には構ってられない。

『うわわっ!!』

今度はこちらが逃れる番。

自分を噛み潰そうとする歯牙の群から、間一髪飛び抜ける。

ガチイイイイイインッ

獲物を逃した牙が、苛立たしげな音とともにぶつかりあった。

『ウイン、ウイン!!大丈夫!!しっかりして!!』

「あ……うん。平気。ありがとう。ぷっちん。」

主の元に飛び寄り、声をかけるプチリュウ。

どうにか身を起こしたウインが、気丈に笑顔を浮かべながら答える。

「どうやら、地面に叩きつけられたショックで意識がはつきりしたらしい。」

『怪我は!?!』

「あ、うん。」

言われて、自分の身体を確かめる。

全身に刻まれた切り傷。

纏ったローブには血が染み、じつとりと重くなっている。

見た目はズタズタの体で、大怪我の様にも見える。

しかし。

「大丈夫みたい。手も、足も動く。」

そう言って、よろめきながらも立ち上がるウイン。

実際、傷は浅かった。

出血は多いものの、それ自体は皮一枚程度のもので、大きな血管や筋と言った致命傷になりうる器官には届いていない。

「何があったの?」

再び杖を構えながら、事の次第を見ていたであろう相方に尋ねる。

『ウインが懐に入った時、邪竜あいつが上の口から何かを吐いた。途端に、その有様だよ。』

「見えなかったの?」

『見えなかった。その代わり空気を切る様な音がした。』

「そっか……。」

それを聞いたウインが、得心した様に頷く。

「真空刃かまいたち……だね。」

『多分。』

二人（？）が頷きあったその時――

ガボオツ

鈍い音が響き、不可視の圧力が襲いかかる。

『うわっ!!』

「ととっ!!」

咄嗟に避ける。

ガボンと陥没する地面。

『また空気弾くれ!!』

「なら、隙が――!?!」

振り向いたウイン。

しかし、その視線の先で竜の顔が口を開く。

「!!」

バシユウツ

今度は明確に聞こえた。

しかし、間に合わない。

ザザンツ

ウインの足から、血がしぶく。

「痛うっ!?!」

傾ぐ身体。

バズウツ

その隙を逃さず、放たれる空気弾。

『危ない!!』

慌ててタツクルするプチリュウ。

もつれ合つて倒れ込むその横を、轟音が通り過ぎる。

響く爆音。

地が揺れる。

『駄目だ、ウイン!!一旦隠れよう!!』

「う、うん!!」

慌てて近くの岩場に潜り込む。

『はあ、はあ、はあ・・・』

お互いに、荒い息をつく。

「空気弾と違って、かまいたちの方は連射が効くのか・・・。隙がないなあ・・・。」

困った様な顔をするウインに、プチリユウが言う。

『このままじゃジリ貧だよ!!憑依装着を!!』

「そうだね。分かった!!」

憑依装着とは、しもべと自分の魔力を同調・一体化する事によって各能力を底上げする呪法。

精霊使いの切り札とも言える秘術である。

『早く!!』

「うん!!それじゃ、いくよ!!」

ウインが、プチリユウを抱きしめようと手を伸ばすが。

フツ

突然、差していた日が陰る。

『え?』

二人(?)そろって上を見る。

—10メートルの巨体が宙を舞っていた。

グオオオオオオツ

そのまま、二人(?)に向かって降ってくる。

『うわあああああつ!!』

「にやあああああつ!!」

慌てて、てんでの方向に逃げる。

ズシイイイイインツ

邪竜の身体が、ウイン達の隠れていた岩を粉碎する。

分断されたウインとプチリユウ。

これでは、肝心の憑依装着が出来ない。

別の岩陰に隠れたウイン。

彼女に向かって、向うの岩陰からプチリユウの念話が飛んでくる。

『ちよつとウイン!!これマジでヤバイよ!!何か作戦とかないの!?'  
そんな相方の声に、ウインは頭をかきながら答える。

「いや、おびき寄せるまでは考えてただけど、その後はまあ相手のレベルも低いしなんとかなるかなうなんて・・・。」

『だ・・・駄目だこりゃ・・・。』

岩の向うで、プチリュウが脱力する気配がした。

ウインは岩の陰からそつと顔を覗かせ、低い唸り声を上げている邪竜の様子を見る。全身の鱗が逆立ち、明らかに苛立っている。相当空腹らしい。

「うゝん。下の頭が出すのは簡単に避けられるんだけど、上の頭が出すヤツがなあ・・・。」

実際、威力が低いとはいえこれだけ食らえば流石にダメージも堪ってくる。

重なる失血で、時折強い目眩が襲う。体力も落ちている。血が染み込んだローブが重い。足元がふらつき始めており、このままではあの空気弾や押し潰しを食らってしまうのも時間の問題だろう。

そうだったら、一卷の終わりである。

そして、その事はしもべであるプチリュウも重々承知だった。

それが、彼に一つの決断をさせる。

『こうなったら・・・。』

バツ

突然、プチリュウが隠れていた岩陰から飛び出した。

「ぶっちん!?!」

驚くウインに、念話が届く。

『ボクがアイツの首の動き止めるから!!ウインはその間に契約の印章を!!』

その言葉とともに、プチリュウは邪竜に向かって真つ直ぐに突っ込んで行く。

気が付いた邪竜は頭を素早く廻らすと、その口から無数の真空刃を吐き出した。

『う・・・く・・・。』

鋭い真空の刃が鱗に当たり、鈍い音を立てる。  
プチリユウの小さな身体はその衝撃だけで弾き飛ばされそうになるが、それに耐えて尚も突き進む。

『こんの!!』

そしてついに邪竜の頭部に飛びつくと、そのエラに齧り付き、自分の細長い身体を邪竜の首に絡み付けた。

『ウイン!!動き、押さえたよー!!』

「え?あ、うわ!?あー、ちよつと、待って。チャージ完了まであと3分!!」

慌てて杖の先へと精神を集中し始めるウイン。

シァアアアアアツ

怒り狂った邪竜が、ブンブンと頭を振り回す。

『は、早くしてー!!』

プチリユウは全身の力を込め、必死に齧りつく。

と、振り回されていた頭がピタツと止まった。

『へ?』

途端、邪竜がその翼を大きく広げた。

『!?』

バサアツ

砂煙が舞い、巨体がふわりと宙に浮く。

『まずい!!』

押し潰す気だープチリユウが気付くのと、邪竜の身体がウインの上  
に踊りかかるのとは同時だった。

『ウインー!!』

ズズウウウン

叫びも空しく、邪竜の巨体が鈍い地響きとともに地に落ちた。

もうもうと立ち込める砂煙。

自身の主の無残な姿を想像し、プチリユウは思わず目を閉じる。

ーと、

「絶望するのは、まだ早いんじゃないかなあ?」

聞き慣れた声が思わぬ方向から聞こえ、プチリユウは思わず頭上を

見上げた。

見れば、そこには赤い魔法光を散らしながら軽々と宙を舞うウインの姿。

『えっ・じゃこっちは!?!』

慌てて目を戻す。

邪竜の下にいたのは、これまた巨大な翼を交差させてその巨体を受け止める巨鳥の姿。

『シールド・ウイング』!! って事は、「シフト・チェンジ位相転移」!?! いつの間に!?!』

― トラップ・スベル罫魔法・「シフト・チェンジ位相転移」―

敵の攻撃行動をトリガーに発動し、術者自身とそのしもべの位置を一瞬にして取り替えるトラップ・スベル罫魔法。

邪竜の挙動は、ウインにも見て取れた。

最大の攻撃時は、最大の間でもある。

ウインは、咄嗟にもう一匹のしもべであるシールド・ウイングを空中に召喚し、さらに自分の真下にシフト・チェンジを展開していたのである。

プチリユウに向かって、得意げにVサインをするウイン。

一方、慌てたのは邪竜である。必殺の一撃を突然出てきた新手に易々と受け止められた上（シールド・ウイングの翼は文字通り鋼鉄の強度を誇る）、狙っていた筈の娘が自分の上にいるのである。訳が分からない。

と、狼狽する邪竜の真下で、再び赤い光が走る。

その光は猛スピードで地を走り、瞬く間に巨大な六亡星を描き出す。

『プリンシプル・ヘキサグラム六芒星の呪縛』!!』

驚いたプチリユウが離れるのと入れ替わる様に、地から浮かび上がった六亡星が邪竜の身体を拘束する。

― トラップ・スベル罫魔法・「プリンシプル・ヘキサグラム六芒星の呪縛」―

対象とした相手を、その力の強さに関わりなく拘束する術である。

ジュルアアアアアアアアアアッ

苦悶の叫びを上げる邪竜。

「もう、逃がさない!!」  
そう言うウインの手の中で、杖が新緑の輝きを放つ。  
「チャージ完了!!これで・・・」  
そして邪竜に向かって落ちながら、杖を思いっきり振りかぶる。  
「終わりだああああああああつ!!!」  
パツチイイイイイインツ  
叩きつけられる杖。  
邪竜の身体に、新緑の光が散った。

「ふやあく。疲れたなあく。」  
すつかり大人しくなった邪竜の横で座り込みながら、ウインはそう声を上げた。  
『全く、こんな身体で術の並行励起なんて。いつも無茶が過ぎるんだよ。』

荷物の中から引つ張り出した救急セットで手当をしながら、プチリュウが呆れた様に言う。

「えへへ。」  
そんな彼に向かって、微笑みかけるウイン。

『な、何さ?』  
「ぷっちゃんがあんなに頑張ってくれたんだもん。あたしがへたれる訳にはいかないよ。」

『そ、それは・・・』  
顔を赤らめて畏まるプチリュウに、ウインが軽くキスをする。  
「ありがとう。ぷっちゃん。」  
そう告げると、力尽きた様に邪竜の身体にもたれかかる。

『ウ、ウイン!!』  
慌てる相方に、もう一度微笑みかけるとウインはそつと目を閉じる。

「疲れちゃった・・・。ちよつと、寝るね・・・。」  
『あ、ああ。うん。』  
「・・・あく、お腹減ったなあ・・・。」



眩く様にそう言うと、その口からはもう穏やかな寝息が漏れ始めていた。

『・・・お疲れ様。ウイン。』

プチリユウはそう言って、その小さな翼で小さな主の顔に差す日差しを遮った。

— 3 —

—それから数日後。

件の荒地の近くを、空の荷台を引きながらあるく物資調達員の姿があった。

「やれやれ。今回も何とか生き残れたか。」

そう言いながら、カラカラと荷台を引く男の姿は包帯だらけである。

「ま、命あつてのものだねってもんさな。」

などと言いながら、岩場を通り過ぎようとしたその時—

「おーじちゃん♪」

聞き覚えのある声に、男は足を止めて振り返る。

そこには、小さな竜を肩に乗せて手を振る少女の姿。

男に負けず劣らずボロボロの体で、満面の笑みを浮かべている。

その少女が大声で叫んだ。

「ちよつとそこまで、乗っけてつてくれないかな？」

男もニヤリと笑うと、「おうよ。」と言って空の荷台を指差した。

「火の場合」に続く



と、その肩に乗っていた獣が少女に声をかける。

『姫、気を抜くなよ。ラヴアルの守備兵なんかに見つかると、面倒だぞ。』

「分かってるよ。何回ここに來てると思ってたんだ。」

朱髪の少女―火霊使いヒータは肩の使い魔、きつね火にそう応える。

“ラヴアル”とは、この炎地帯を領土とする土着民族である。

焼けた岩石の様な肌と灼眼炎髪が特徴の民族で、この炎地帯に古くから住まっている。

歴史は古く、土地の名に民族名が冠されている事からもその事が伺える。

性質は猛々しい風貌に相応しく、荒々しくて好戦的。

近隣の国や民族にちよくちよく小競り合いを仕掛けては、世間に騒動の種を振りまいていた。

当然、その気質は個人にも向けられる。

通りかかる旅人達が見咎められ、不条理な拘束を受けたり金品を巻き上げられたりする被害がちよくちよく聞かれていた。

では、何故ヒータ彼女はそんな物騒な場所を訪れたのか。

答えは簡単。

件の宿題。自分の管轄である、炎属性のドラゴンを探しに來たのである。

炎の属性を持つモンスターには、その身に常に火が燃える器官を持つものも多く、それ故生息場所が限られてしまうものが多い。

普通の森や草原では周囲を火事にしてしまうし、湖や川、或いは雨の多い場所だとその身の炎が消えてしまい、命に係わる事になりかねない。

それ故、連なる火山の噴炎が雨雲を払い、燃える樹海が地の水分を干上がらせるこの地域は、必然的に炎属性のモンスターが多く生息する場所となっているのだった。

当然、その類に属するドラゴン族も然りである。

それに加え、火霊使いであるヒータはその特質上、当然炎属性のモ

ンスターをしもべにしなければならぬ。故に、この地域にはちよくちよく通い詰めており、ここら一帯は彼女の庭の様なものであった。限られた時間。地理的調査の手間が省けるといいうのも、彼女がここを選んだ理由であった。

・・・もつとも、理由は他にもあるのだが。

焼け付く岩場をくぐり抜けると、ヒータは小高い丘に上がった。そこから、下を見下ろす。

見渡す限り、赤い溶岩と炎、黒い噴煙と焼けた岩の二色だけの世界。「つたく。相変わらず無粋な所だよなあ。もう少し目麗しい場所はないもんかねえ？」

水筒の水をコクコクと飲みながら、ボヤク様にそんな事を言う。すると、

「言ってくれますの。これでも私の故郷ですの。」  
背後から、そんな抗議じみた声が聞こえてきた。

「あ、いや。そんなつもりで言ったんじゃないよ。わりいわいい。」  
バツが悪そうに振り返るヒータ。

その視線の先には、いつの間に来たのか一つの人影が立っていた。目深に被った黒いフードに、同色のシヨール。

冷えた焼石の様な色をした肌。

長い髪は燃える炎の様に赤く、ざわめいている。  
紛う事なき、“ラヴァル”の民の特徴。

ただし、その手足は小枝の様に細く、身体つきも酷く華奢。

フードとシヨールの間から除く顔にも、戦闘民族らしい猛々しさは微塵もない。

むしろ、愛らしいと言っていいだろう。  
そう。

そこにいたのは少女。

確かに、ヒータとは民族も種族も違う。

けれど、その風貌は紛う事なく可憐な少女のそれだった。

「じゃあ、どういふつもりですのっ？」

まだ許しはしないとばかりに、飛んでくる言葉。けれど、その響きには怒りや敵意の色はない。

むしろ、感じられるのは友人に対する様な穏やかな親しみ。

「結構なご身分ですの。東の人は。平和や平穏が当たり前のもと思つてますの。」

「いや。だから、悪かったって・・・。」

「これは重大なる風評加害ですの。」

と、遊び半分の皮肉を口にしながら、炎髪の少女はステップを踏むような足取りでヒータに近づいてくる。

そして、互いに顔を突き合わせる距離まで来ると、

「賠償を請求しますですの!!」

そう言つて、『ラヴァル炎樹海の妖女』は舌と一緒に手を差し出した。

『久しぶりだな。妖女。変わりはなかったか?』

「そーね。ここ半年は特になかったですの。珍しく。」

きつね火の言葉にそう返しながら、妖女は手にしたフワフワの塊を頬張る。

「んー!!おいひーですのー!!」

喜色満開の声とともに、その顔が花が咲いた様にはこころびた。

実はヒータはこの炎地帯に通う中で、幾人かのラヴァルの民と親交を持つ様になっていた。

好戦的で排他的と思われがちなラヴァルだったが、そこはそれ。

やはり個人差と言うものはあるもので、中には比較的温厚な性格の者や人好きのする者もいた。

この妖女もその一人。

奔放な性格で、頭首の館での小間使い勤めを抜け出しては遊び回っている。

そんな勝手を許すあたり、ラヴァルの頭首とやらも案外懐が広いのかも知れない。

ちなみに、ヒータとはお気に入りのお気に入りの炎樹海で出会って意気投合して

以来の仲である。

「やっぱり、姉様あねさまの特製シフォンケーキはオイシーですよ。中に詰めたナチュル・ストロベリークリームの甘さ加減なんか、絶妙ですよー!!」

「ちえっ。妙に絡んでくると思ったら、目当てはそれかよ。」

水とは別に用意した水筒から、手にしたカップに熱いレモンティーなど注ぎながらヒータはぼやく。

「いいじゃないですよ。私の数少ない生き甲斐なんですの。ラヴアルの国には、甘味屋さんなんてないですよー。」

言いながら、ヒータからレモンティーの入ったカップを受け取る妖女。

その熱さをもともせず、コキユコキユと飲み干す。

「んー!!幸せー!!」

「ほらほら、少しは気をつけて食べよ。だらしねーな。」

ヒータの指が、妖女の頬に付いていたクリームをぬぐい取る。

「ああん。どうせなら口でとって欲しいですよ。口でー。」

「気持ち悪い事言ってんじゃねーよ。馬鹿。」

指先のクリームを舐め取りながら、ヒータはわざとらしく顔をしかめる。

「姉様あねさま、相変わらずつれないですよー。」

ケタケタと笑う妖女。

しかし、その顔がふと真顔に戻る。

「……まあ、冗談はおいといて……」

灼眼の目が、ヒータを見つめる。

「今日は、何の用で来たのです?ただの物見雄山じゃないのです?」

「分かるか?」

ヒータの言葉に、妖女は馬鹿にするなどばかりに胸を張る。

「当然ですよ。って言うか、姉様あねさまの方からコンタクトしてくるなんて滅多にないですよ。何か、思う所があるに違いないですよ。」

そう。この丘に来る途中、道程にあった炎樹海でヒータは炎樹の幹に印を刻み込んでいた。

炎樹海を遊び場に行っている妖女が気づくのを見越しての事である。

「なら、話は早いや。実はな……」

事のあらましを話すヒータ。

妖女が、心底気の毒そうな顔をする。

「ドラゴンですの。話には聞いてたけど、無茶を言う先生ですの。

ロード様のご命令の方がまだマシですの。」

「……だよなあ。」

ゲンナリとした顔をするヒータ。

しかし、すぐに気を取り直す。

「まあ、文句を言ってもしょうがねえ。と言う訳で、この辺で炎属性のドラゴンの住んでる場所ってないか？」

ヒータが、炎地帯（ヒート）を宿題の遂行場所（タスク）に選んだ理由がこれ。

地域事情に詳しい知人がいれば、有力な情報が手に入ると踏んでの事である。

その問いに、妖女は顎に手を当てて考える。

「うーん。ドラグーンなら、館の竜小屋にいるですの。」

「おい。館まで行って小屋からかつぱらって来いつてか？命がいくらあっても足りねえよ。」

ヒータは冗談じゃない、と首を振る。

「じゃあ、龍神様にでも挑戦してみるですの？」

「龍神様って……『ラヴァアルバル・ドラゴン』かよ!?!馬鹿言え!!それこそラヴァアル全体を敵に回しちまうじゃねえか!!」

「注文がうるさいですの。」

「いや、頼むから真面目に考えてくれよ。こちとら、命がかかってるんだぜ?」

ちなみに、「命がかかる」の下りは、半分本気である。

「うーん。」

再び頭を捻る妖女。

しばしの間。

やがて――

「そうですの!!」

妖女がポンと手を打った。

「あっち!!」

指さした先には、赤黒く脈打つ山脈の中で一際高く噴煙を上げる巨山の姿。

「・・・『バーニングブラッド』?」

“それ”を見たヒータが、呟く様に言う。

炎山、『バーニングブラッド』。

多くの火山を有する炎火山の中でも、一際高い峰を持つ山。

一年中、真つ赤なマグマを流し続けるその姿から『バーニングブラッド焼け付く鮮血』と名付けられた。

「あの麓で、ドラゴンを見たって話を何回か聞いた事があるですの。」

「確かか?」

「ラヴアルの民、嘘つかない。」

誓いを立てる様に、片手を上げる妖女。

確かに、ラヴアルは戦好きな反面、敵を欺く様な策は練らない事で有名だった。

民族的な気質として、“騙す”と言う類の行為を嫌っているらしい。

「よし。なら、善は急げだ。」

そう言つて、立ち上がるヒータ。

傍らで丸くなっていた狐火も、それに倣う様に身を起こす。

「ありがとな。礼は改めてするよ。」

「じゃあ、次はワツフルがいいですよ。」

「分かった分かった。取り敢えず、今はそれ食つとけ。前金だ。」

そう言い残すと、ヒータと狐火は丘の斜面を滑り降りていく。

その背中に向かって、妖女が声をかける。

「そう言えば、西の樹海の方はロード様と護衛達が狩りに出てるですの。行くなら、北の炎湖畔沿いの道を行くといいですよ。」

「分かった。サンキュー。」

返つて来た声に「気をつけてですよ。」声をかけ返すと、妖女はホ



クホク顔で残されたケーキに手を伸ばす。

と、

「あれ？」

その手が止まる。

「確か、あそこで見られたドラゴンって……」

一人ごちる声。

しばし、考える。

しかし、

「ま、いつか。」

あっけらかんとそう言うと、妖女は改めてケーキにかぶりついた。

……「細かい事は気にしない」。

ラヴアルに伝わる、健康法である。

それから数刻後、ヒータと狐火は件の山の麓へと到着していた。

「さて、どーしたもんかねえ。」

ムツとももる様な熱気と硫黄臭の中を進みながら、ヒータは辺りを見回す。

周囲には火山由来の熱泉が吹き出す蒸気が立ち込め、極端に視界が悪  
い。

「この中で、どうやって探し出す？」

その問いに、困った様に小首を傾げるきつね火。

「硫黄の臭いが強すぎる。これじゃ、それがし某の鼻も効かない。」

「もうちよつと、妖女の奴に詳しく聞いて来れば良かったかねえ？」

「姫は気が早いからな。」

苦笑交じりに、きつね火が言う。

「そう言えば、肝心のドラゴンがどんな奴かも聞いてなかった  
な……。」

『迂闊だね。』

「火属性のドラゴンって、どんな奴がいたっけか？」

少し、考える様な素振りを見せるきつね火。

『そうだなあ……聞く所では「ブラック・ローズ・ドラゴン」や「タ

イラント・ドラゴン」、「八俣大蛇」辺りが著名な所かなあ……。』

「おいおい、冗談言えよ。」

その答えに、今度はヒータが苦笑いを浮かべる。

「そんな連中、オレの手に負える訳ねーだろ？」

『気弱だな。』

「自分を知ってんだよ。」

そう言っつて、額に浮いた汗を拭う。

「オレはウインみたいに器用でもねーし、アウスみてーに知恵が回る訳でもねーからな。だから……」

拭った手を上にかざし、ギュツと握る。

「やるときや真正面からのガチンコ。これしかねえ。」

それを聞いたきつね火はふむ、と前足を顎に添える。

『それじゃ、丁度いいのが出てくる事を祈るとするか。』

「だな。」

そんな事を言いながら、二人(?)は顔を合わせる。

と、

「!?」

突然、ヒータが上を仰ぎ見た。

『姫?』

きつね火が怪訝そうな顔をしたその瞬間――

「<sup>きち</sup>吉、危ねえ!!」

そう叫ぶと、相棒を掴み寄せてその場を飛び退く。

ゴワシヤア!!

響く破碎音。

満ちる蒸気を引き裂き、落ちてきた何か。

それまでヒータ達がいた場所の地面が、鋭い爪に踏み砕かれる。

きつね火を庇う様に胸に抱いたヒータの身に、無数の瓦礫が打ち当たる。

『ひ、姫……!!』

「大丈夫だ。黙ってる!!」

白い肌を、飛び散る瓦礫が傷つけていく。

鈍い痛みを堪えながら、ヒータは腕の中の相棒をギュツと抱きしめた。

『姫、無事か!?』

腕の中から顔を捻じ出したきつね火が、彼女に向かって呼びかける。

「気にすんな!!それよりアレを!!」

『え!?!』

キイルルルルル・・・

向けた視線の先にいたもの。

それは、獲物を爪にかけ損ねた怒りに身をいからせる一頭のモンスター。

その姿は、銀色に光る巨大な猛禽の様に見えた。

『あいつは・・・。』

『『ホルスの黒炎竜・LV4』・・・か!?!』

キユルルルルル・・・

その言葉に答える様に、黒炎竜がその眼差しをヒータ達に向ける。

『件のドラゴンってのは、こいつの事か・・・。』

「へっ、ちようどいいじゃねえか!!向こうの方からお出ましと来たぜ!!」

ヒータは口元の血を親指で拭くと、杖を構えてニヤリと笑う。

『けど、あいつは・・・!!』

「つべこべ言うな!!向こうはやる気だぜ!!」

その言葉は正しく。

ホルス神の名を冠するその竜は翼を大きく広げ、再び空へと舞い上がり始めていた。

金色の目が、暗く輝いている。

そこには、一度逃した獲物を捕まんとする殺気が満ち満ちていた。

「はっ、戦<sup>や</sup>るなら真正面からってか!?!望<sup>や</sup>む所じゃねーか!!」

キイアアアアアアッ

その言葉が終わるや否や、黒炎竜は雄叫びを上げてヒータに襲いかかった。

構えられた爪は、真つ直ぐに彼女の心臓を狙っている。

「させつかよ!!」

ヒータが、黒炎竜に向かって杖を突き出す。

真紅の魔法陣が閃き、その光が急速に渦を巻き始める。

トランプ・スベル  
トランジェント・トランクフル  
罫魔法、『攻撃の無力化』。

相手の攻撃をトリガーに発動し、それを無効化する魔法<sup>スベル</sup>。  
迫る爪が光の渦に阻まれ、弾かれる。

キイアツ

バランスを崩した黒炎竜。

一端宙に戻り、再び攻撃の態勢を整える。

それを見たヒータが叫ぶ。

「<sup>きち</sup>！憑依装着だ!!」

『で……でも……』

再び降下を始める黒炎竜。

「急げ!!」

『ぎ……御意!!』

答えるきつね火を、ヒータは再び抱き締める。

途端、二人(?)の姿を朱色の炎柱<sup>ほほしち</sup>が包み込む。

驚いた黒炎竜が、慌てて急旋回をして空へと戻る。

その視界の端。

踊る様にうねった炎柱が、無数の燐火となって宙に散る。

宙に流れる、淡い燐光を纏った羽衣。

杖が一閃し、舞い散る火燐を払う。

そこから現れるのは、天女の如く羽衣をなびかせるヒータと、巨大な犬狼の如き姿に進化したきつね火―稲荷火の姿。

「さあて、勝負はこっからだ!!」

天の黒炎竜に向かって叫ぶヒータ。

その横で付き従う稲荷火が、地を震わせんばかりの咆哮を上げた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

黒い噴煙が立ち込めた空に、呻き苦しむ様な低い地響きが響き渡る。

昏い空の下。

大きく開いた火口。

真つ赤な血を流し続けるのは呻きの主、鮮血の巨峰、バーニングブラッド。

その麓。噴煙と蒸気で満ちた世界に、山の呻きとは別の音が響き渡っていた。

キィアアアアアッ

暗天の下。巨大な翼を広げ飛び回るのは、巨禽の如き姿をした銀色の竜。その竜、『ホルスの黒炎竜』は甲高い叫びを上げると、その名に相応しき黒炎の塊を己の眼下に向かって幾つも吐き出した。

その先にいるのは、淡く光る羽衣をなびかせる朱髪の少女と、尾の先に真紅の火炎を滾らせる巨狼の如き炎狐。

ウオオオオオオンッ

炎狐―稲荷火が一声咆哮する。その尾に燈る炎が大きく燃え上がり、巨大な炎帯と化す。稲荷火はそれを振るい、天から降り落ちてくる黒い炎塊を尽く風ぎ払った。

朱髪の少女―ヒータはその炎帯を盾にして黒炎の雨を凌ぎながら、素早く呪文を詠唱する。

「火蜥蜴の囁き 神竜の羽風 世に滾りし創生の炎よ 灼熱の御霊となりて敵を撃て!!」

言葉の結びと共に、ヒータの杖に火球が燈る。

「炎の飛礫!!」

通常魔法、『炎の飛礫』。

声と共に杖から放たれた火球が、黒炎の隙間をくぐる様に黒炎竜に向かう。しかし朱炎の輝きが直撃するかと思われた瞬間、銀色の装甲に覆われた足がそれをいとも容易く蹴り潰してしまった。

「アチッーアチチッ!!」

舞い落ちてきた火球の残滓に肌を焦がし、慌てて自分の尾の影に隠

れるヒータを庇いながら稲荷火が唸る。

『スタンピング・クラッシュ竜 足 撃』ですか。伊達にホルス神の名は冠していませんな。』

「相手を褒めてんじやねーよ!!」

怒鳴る主を横目で見ながら、稲荷火は冷ややかに言う。

『竜足撃は一度に一つの術しか潰せませぬ。故に、術の並行励起の鍛錬をしておくべきだと常々進言していた筈ですが。』

「だから、オレはウインみてーに器用じゃねーの!!」

『言い訳ですな。』

稲荷火はがなる主を諭しながら、振りそそぐ黒炎を払い続ける。

『それにしてもまずいですな。このままではジリ貧ですぞ。』

「わーってるって!!今どうすつか考えてんだ!!邪魔すんな!!」

『やれやれ。』

溜息をつきながら尾を振るう稲荷火。帯状に伸びていた尾の火炎が、今度は槍状になって黒炎竜に向かう。

キィアツ

黒炎竜は嘲る様に鳴くと、鋭く旋回してそれをかわしながら黒炎を乱れ撃つ。

無数の火炎弾が周囲に着弾し、立て続けに爆発を起こす。

「つの野郎、調子ンのりやがって!!」

爆発をかくぐりながら、ヒータが毒づく。

『完全に地の利が向うにありますな。いかがいたしますか? 姫。』

「.....」

相方の言葉にしばらく無言で考え込んだ後、ヒータは囁く様な念話を炎狐に送った。

「しばらく時間稼ぎ、頼めるか?」

「.....!」

その言葉だけで、稲荷火は全てを悟る。

『如何ほど?』

「3...5分だ。」

『御意。』

領くと、稲荷火は尾の炎で地を叩いた。

バウンツ

叩きつけられた炎が地で爆ぜ、その勢いで稲荷火の身体が宙を舞う。

キイツ!?

不意の事態に驚く黒炎竜に、稲荷火は唸りをあげて踊りかかった。

キィアアアアツ!!

ゴアアアアアツ!!

灼熱の暗天の下で、竜と獣の叫びが交差する。

稲荷火の牙が黒炎竜の喉元を狙うが、銀の装甲に弾かれる。

代わりに鋭く閃いた黒炎竜の爪が、その腹をかすめる。

亜麻色の毛が抉られ、火の粉の様にパツと舞った。

『……これはなかなか、難儀ですな。』

地へと落ちながらそう考え、それでも主の願いを叶うため、再度尾の炎で地を打って舞い上がる。

「すまねえ。吉。」きち

そんな相棒の奮闘を見上げながら、ヒータは杖を地面に打ち立てる。

「来い!!ガイヤ・ソウル!!」

その呼びかけに応じる様に、地面から沸き立つ蒸気。

轟々と立ち込めるその中から、真っ赤な球体が現れる。

ボコボコと沸騰する灼熱の身体。

— 『爆炎集合体 ガイヤ・ソウル』 —

大氣中に在する炎精が集合して生まれたと言われる、靈的生命体。

ヒータが使役出来る中でも、最大の攻撃力を誇るしもべ。

知性を持たぬそれは、言葉の代わりに真紅の単眼で己の主をギョロリとねめつけた。

そんなを存在を前に、ヒータは手にした杖を構え直して目を閉じる。

肌を焼く様な熱感を受けながら、それでもその身は微塵たりとも揺るがない。

やがて、その口が高らかに呪文を詠唱する。

「テス・タル・ラー・テル・テスタロス 来たれ炎精 焦熱の使徒  
来たれ火霊 灼熱の使徒 我が沿うは神竜の御心 我が願うは炎帝  
の怒り 回れ輪転 始原の理 在りし御霊を朱に染め 其が鼓動を  
破壊と変えよ」

詠唱とともにヒータの足元に朱い光が走り、地面に複雑な文様を描き始める。

其が形作るは、巨大な魔法陣。

完成したそれは朱い燐光を散らしながら浮かび上がり、ヒータとガイア・ソウルをその内に納める。

同時に、朱の光に包まれるガイア・ソウル。

そこでヒータは目を開き、宙で戦う相方に向かって呼びかける。

「きち来い!!」

その声を聞いた稲荷火は踵を返し、主の元へと宙を走る。

それに異常を察した黒炎竜。大きく羽ばたくと、戦線離脱を試みる。

しかし――

「遅えよ!!」

ヒータはそう叫ぶと杖を大きく振りかぶり、野球のスイングの様に朱珠あけだまと化したガイア・ソウルに叩きつける。

「火霊術!! 『紅』!!」

瞬間、朱球は朱い閃光となる。

それは流星の如く宙を走ると、逃げる竜を打ち貫く。

――黒い空に、音高らかに炎華が散った――

――霊術――

それは霊使い達が個々に持つ、固有魔法。オリジナル・スペル

複雑な呪文の詠唱、術の媒体となるモンスターが必要である等、少なからずのコストが存在するが、その効果は絶大なものを誇る。

ヒータの霊術は、『火霊術・紅』くれないと呼ばれる。

媒体となったモンスターの攻撃力を、全ての物理・概念法則を無視



して直接相手に叩き込む術であり、火力という点では霊使い達の中でも最大級の威力を誇る。

ガイヤ・ソウルの高い攻撃力を直接その身に受けた黒炎竜は、成す術なく地へと墜ちた。

「よっしゃ!!」

ガッツポーズをするヒータ。

そこまでは良かった。

良かったのだが――

「おい、どーなってんだよ!?これ!!」

暗い煙天の下に、ヒータの怒号が響いていた。

「契約の証印がつかねえぞ!!どーいう事だよ!」

確かに、地に伏した黒炎竜の身体に押された契約の証印は、その身に刻まれる事なく宙に霧散してしまう。何度繰り返しても同じである。

それを見た稲荷火が、呟く様に言う。

『うゝむ。やはりですか……。』

「ああ!?!やはりって何だよ!!」

イラつく主に対し、あくまで冷静に答える。

『忘れましたか? 『ホルスの黒炎竜・LV4』は、契約の証印等の洗脳に類する効果を受け付けません。』

「……へ?」

ポカンとするヒータを見て、稲荷火はあからさまに嫌な顔をする。

『知らなかったのですか? 授業でドリアド講師が言っていたではありませんか。』

「えゝ、あゝ、その……。』

しどろもどろになるヒータ。どう見ても挙動不審である。

『……。また居眠りしていましたな。』

「う、うるせえ!!おめーも知ってんだったら何で言わねーんだ!」

『何か妙案でもあると思っていたのですが……。期待した某が愚かでした……。』

「んだとテメエ!!しもべの分際でケンカ売ってんのか!？」

『こういう事案に、主もしもべもありませんまい!!』

ギヤーギヤー言い合う二人(?)。

しかし、そのケンカは突如起こった異変に中断される。

傍らで伏していた黒炎竜の身体が、突如眩い光を放ち始めたのだ。

「な、何だ!？」

『こ、これは!!』

驚く二人(?)の目の前で、黒炎竜の身体がドンドン大きくなってゆく。それと同時に身体のおちこちにひびが入り、その下から長い尾や新たな羽が生え始める。

「な、なんなんだよ!?!これ!!」

『レ、進化でござる!!』

いつもの冷静さも何処へやら、完全にテンぱった様子で稲荷火が答える。

「レ、レベルアップウ!？」

『お忘れか!?!こやつらLVモンスターは条件を満たすとさらに高位の存在に進化するのです!!』

「じよ、条件ってなんだよ!?!」

『た、確か黒炎竜こやっの場合は特定数の敵の撃破の筈!!』

「や、殺られてないぞ?!オレ達、殺られてないぞ?!」

『そ、そんな事言われましても某も知らそれがしないでござるですよ!?!』  
狼狽する二人(?)を他所に、黒炎竜の進化は進む。

稲荷火と大差のなかった体格は今や見上げる程となり、より巨大となった羽は天を覆わんかと思う程である。

「.....」

『.....』

絶句する二人(?)の前で、閉じられていた目がゆっくりと開く。  
燃え盛る火炎の瞳が足元をねめつけ、神を冠する己を愚弄した不心得者達をしかと映した。

「よ...よお、グッドモーニング...」

『お、お目覚めの程はいかがかな...?』



吹き降ろされる、台風にも等しい羽風。

「キヤアアアアアツ!!」

『ぬおおおおおっ!!』

ヒータ達の身体が、紙屑の様に転がる。

ゴオアアアアアツ

それに向かつて、吹き付けられる黒炎。

何度も。

何度も。

何度も。

何度も。

吹き散らされる黒煙。

溶け落ちる岩。

沸騰する地面。

それはまさに、地獄絵図。

黒炎竜の怒りの嵐は、いつ果てるともなく続いた。

— 3 —

どれほどの時間が経っただろうか。

いつしか、ゴツゴツしていた岩場は艶々と滑らかな磨石の並ぶ平地へと姿を変えていた。

吐き散らされた黒炎が、岩を溶かし尽くしてしまったのだ。

バサアツ

シユウシユウと白煙を上げる地面に、大きな羽音を立てて舞い降りる黒炎竜。

金色の目が、グルリと周囲を見回す。

動くものは、何もない。

その事を確かめると、満足したのだろう。黒炎竜は一声鳴くと、空の彼方へと飛んでいってしまった。

それから数分後—

「も・・・もういいか・・・?」

『お……おそろく……。』

そんな声が聞こえると、残っていた岩の影からヒータと稲荷火が顔を出す。

「は……。はあ、やりやあ、出来るもんだな……。」

そう言うと、ヒータはヘナヘナとその場に崩れ落ちる。

その足元では、赤い魔法陣が役目を終えたかの様に消えていく。

——『ホーリーライフバリアー聖魂絶界』——

トランプ・スペル

高位の罨魔法で、敵からの攻撃を完全に無効化する事が出来る。しかし、その発動トリガーが複雑。

魔力基盤の構築のために、一度別の魔法を発動させそれをキャンセルする。もしくは、召喚したモンスターをリリースするという過程が必要となる。

そのため、これを成功させるには最低でも魔法の発動とキャンセル、バリアの展開とをほぼ同時にという事を行わなければならない。本来、術の並行励起を苦手とするヒータには非常に困難な事である。

けれど、火事場の馬鹿力とでも言おうか。この窮地においては、見事に成功させたのであった。

もつとも、その代償としてヒータは精神力を使い切り、疲労困憊の状態である。

『お見事でございました。しかし……。困りましたな……。』

主の苦労を労いながらも、稲荷火はそう言っ頭を悩ませる。

そう、このままでは肝心の「宿題」が達成出来ない。どうしても一頭、別のドラゴンを探してもべにしなければならぬ。しかし……

「……無理……。もー、無理……。」

肝心のヒータがこの有様である。さて、どうしたものか。稲荷火が再び頭を捻ろうとしたその時——

カランツカラン

『んっ。』

上から落ちてきたのは数個の岩の欠片。そして——

フツ

二人（？）の上に、落ちる影。

『へ？』

思わず上を見上げると、何かがちららに向かつて落ちてくる。

「え？え？」

『姫、危ない!!』

訳が分からず呆気に取られているヒータを、稲荷火が突き飛ばす。  
ズダアアアアアン

二人（？）がその場から転げ出ると、  
“それ”が盛大な音を立てて地面に激突するのはほぼ同時だった。

「な、何だあ!？」

『ん、これは!』

ヒータ達の目の前に横たわっていたもの。

それは、一見蛇の様な身体をしたモンスター。

体長は、十数メートルはあるだろうか。

その体表はゴツゴツした岩状の鱗に覆われ、その頭から尾にかけてメラメラと炎のたてがみが燃えている。紅蓮に彩られた顔は、その獰猛さを表すかの様に猛々しい。

しかし、それは起きていればの話。

今、その顔はすすに覆われ真っ黒。

薄く開いた目は、グルンと白目を向いている

横たわる身体は、ピクリとも動かない。

どうやら、完全に気絶しているらしい。

「こいつって確か・・・」

『『プロミネンス・ドラゴン』・・・ですな。』

「何で、伸びてんだ？」

『む、姫。あそこを。』

稲荷火の示す方向を仰ぎ見てみると、その岩場が大きくえぐれていた。

ヒータは、はたと思い当たる。

「あー。あそこって、最初に黒炎竜が炎弾吐きまくった時に・・・」  
『どうやら、流れ弾に当たった様ですな。』

「そうか。それでその気はなくても、結果的に黒炎竜がプロミネンス・ドラゴンを倒した事になって・・・」

『進化した訳ですな。』

「なるほど。」

『謎が解けましたな。』

「なあんだ。分かってみりやあ、どうってこたあないな。あはははは。」

『全くですな。カカカカカ。』

「はは・・・」

『カカ・・・』

「・・・」

『・・・』

しばしの沈黙。

やがて、ヒータがぼそりと言う。

「こいつ、『プロミネンス・ドラゴン』なんだよな・・・」

『そうですな・・・』

『『ドラゴン』、なんだよなあ・・・』

『そうついていますからなあ・・・』

「・・・」

『・・・』

二人(?)は黙って見つめ合う。  
やる事は、一つだった。

数分後。証印のついたプロミネンス・ドラゴンを前に、ヒータはほっと息をついていた。

「ふいー。何とかなったな。」

『そうですな、姫。・・・しかし・・・』

額の汗を拭い、清々しい笑顔を浮かべるヒータ。

けれど、稲荷火は今一つしっくりこないという顔をしている。

「何だよ?」

『某、何か重大な失念をしている様な気がするのですが・・・』

「何が？」

『いや、それが今一つ……。』  
「？」

考え込む相方を前に、ヒータも首を傾げる。

しかし、それも束の間。

すぐに糸が切れた様に喚きだす。

「だーっ!!ゴチャゴチャ考えたって仕方ねえ!!さっさと帰るぞ!!」

『し、しかし姫!!』

「いいからさっさと来い!!もし黒炎竜アイツが戻ってきたりしたら、目も当てらんねーぞ!!」

『ぎよ、御意!!』

多少の違和感を抱えながら、それでも二人(?)は家路につく。

その違和感の正体を彼女達が知るのには、これからしばらく後の話。

今考えるのは、美味しい食事と柔らかいベッド。それだけで良かった。

低い呻きをあげる巨峰を後に、二人(?)の姿は見る見る小さくなっていく。

―黒い煙天の下、遠くで黒炎竜の鳴く声が響いていた―

「水の場合」に続く



## 水の場合

— 1 —

この世には、縁えにしと言うものがある。  
天地の巡りに。  
生命の繰くる輪わに。  
そして、人の辿る運命に。  
離れる事なく。  
分かつ事なく。  
それは絡まり続ける。  
いつまでも。  
何処までも。  
延々と。  
延々と。  
絡み続ける。  
拒むも。  
受け入れるも。  
それは自由。  
けれど、その選択に意味はない。  
何故なら。  
その意思など関係なく。  
その嘆きなど意にも介さず。  
永々と。  
遠々と。  
それは。  
絡まり続けるのだから。  
逃げても無駄。  
泣いても無駄。

だから。  
だから。

向き合うしかないのだ。

只。

只。

真つ直ぐに。

例え終わりが。

見えなくとも――

ガタン・・・ゴトン・・・

冷たく住んだ空気の中に、重苦しい音が響き渡る。

音の主は大きな大八車を引く鎧の男、物資調達員。

重い荷台を引きながら、物資調達員は酷くゲンナリとしていた。

まったく、今回の旅はついてない。

せめてもの気晴らしにと横を見ると、そこには広く美しい水面が広がっている。

ウォーターワールドと呼ばれる塩水湖で、その美しさから世界有数の絶景として広く知られている。

しかし、それにも関わらずこの地を訪れる者は酷く少ない。

理由は簡単。

危険だからである。

長年の間、この地ではある争乱が続いていた。

それは、終わりの見えない争い。

その果てに、何を生み出す事もない戦い。

けれど、決して終わらせてはならない戦いくさ

ただただ、命と資源を消費し続けるだけの場。

そんな所に、好き好んで訪れる者などいる筈もない。

いるとすれば、彼の様な戦場を生業の場とする者。

あるいは、よほどの物好きに限られる。

そして、今日に限って彼の荷台にはその物好きが乗っていた。

溜息をつきながら、後方から聞こえてくる“それ”に耳を澄ます。

「あくもう嫌、この潮風!!髪がベトベトじゃない!!どうしてくれるのよ!!」

「それにガタゴト揺れ過ぎ!!何なの、この道?あたしの事、酔わせた訳!」

「大体寒いし!!この季節に何でこんなに寒いのか!?風邪ひいたらどうしてくれるのよ!!」

荷台の音に混じって飛んでくる、不平不満の機銃掃射。

チラツと後ろを見ると、長い水色の髪にローブを纏った少女が喚きながら足をバタバタさせている。

(・・・見た目はいいんだがなあ・・・)

些かゲンナリしながら、彼女との出会いを思い出す。

彼女を見つけたのは、ここより少し手前にある山の中。

彼女はブツブツ言いながら、トコトコ山道を歩いていた。

こんな所で行き会ったのも何かの縁。旅は道連れと拾ったのが運の尽き。

乗った端から、この調子である。

とにかく五月蠅い。

そして我儘。

恐らく、かなりの大人物か馬鹿のどちらかでない限り、百人が百人、辟易するであろう。

よっぼど途中で放り出そうと思ったが、それをしなかった理由はただ一つ。

『すいません・・・。いつもこんな調子で・・・。本人に悪気はないんですけど・・・』

その声をかけてきたのは、件の少女の付き添いらしき緑色のモンスター。

『ガガギゴ』というモンスターの幼体で、世間では『ギゴバイト』と呼ばれている。

その彼(?)がこうしてちよくちよくフォローを入れてくるため、捨てるに捨てられないのである。

まあ、悪気がないというのも本当なのだろう。

実際、吐き出される罵詈雑言は風や寒さ等、周りの環境に関するものばかり。

調達員自身に向けられたものは一つもない。

「……お前さんも、苦労してるみたいだなあ……。」

『ええ……まあ……。』

彼がそう呟いた途端、

「ギゴ!!なんか言った!?!」

そんな声が飛んでくる。

『い、いやいや!!何も言っていないですよ!?!エリア!!』

慌てて弁解するギゴバイトを、エリアと呼ばれた少女はジロリと睨む。

その視線に怯える様に、口から「プシ〜」と溜息を漏らすギゴバイト。

そんな彼らの様子に、苦笑いするばかりの調達員だった。

カラコロ カラコロ

ゴトン ゴトン

車輪が回り、荷物が揺れる。

言う事もなくなったのだろう。

いつしか、エリアの愚痴も止んでいる。

淡々と流れては、寒空の中に消えていく無機質な音のBGM。

そうして、どれほど進んだだろうか。

ピタリ。

不意に、そのBGMが止んだ。

進まなくなった大八車。

荷台のエリアが、怪訝そうな視線を向ける。

「……何で止まるのよ?」

「ここまでだ。」

少女の問いに、調達員は懐からパイプを取り出しながら言う。

「何が?」

もう一度の、問い。

その響きに、既知の気配を聞き取りながら、あえて彼は続ける。

「お前さんを乗せるのはここまでだ。降りてくれ。」

「“氷結界”まで乗せていつてくれるって約束じゃない？」

不満そうな声。

けれど、取り合わない。

「ここは、もう“氷結界”だけ。もつとも、端の端だけだな。」

用意していた言葉を並べながら、パイプに葉を詰める。

「気温もここならそこそこだし、景観もいい。少ないが、宿屋もある。観光なら、この辺りで十分だろう？」

「観光？」

エリアの声に、険がこもる。

「そんなもの目当てに、こんなトコまで来た訳じゃないわ!!」  
投げつけられる言葉。

少なからずの憤慨と、少しの抗議が混じっている。

気にもとめない。

「じゃあ、何しに来たんだ？」

「……」

返って来たのは、しばしの間。

言葉に詰まったのではない。

言葉を探しているのだと、直感する。

「……あたしは、魔法専門学校の生徒。ここには……」

「研究のために来ましたってのは、なしだぜ。」

「！」

用意していた答えを、先取りされたのだろう。

今度こそ、答えに詰まったのだと分かる。

「前にも、何人かいたんだよ……」

研究員。

導師。

戦士。

魔法使い。

様々な肩書きを持つ者が、それぞれの目的を持ってかの地へと踏み

入って行った。

しかし、そのほとんどは……。

「……知ってんだろ？」

答えの知れた問いを、調達員は問う。

「知らない訳、ねえよな。この先には……」

そう。

ここからもう半日ほど行った場所。

“氷結界”の中心地。

そこは、今……。

「……知ってるわ。」

低い声が答える。

「ちゃんと、知ってるわよ……。」

眩く様に、エリアは言った。

「……。」

調達員は何も答えず、くわえていたパイプに火を入れた。

……ここは、世界の北の果て。

名を、『氷結界』。

ただし、『氷結界』とは地名ではない。

曰く、この地には古から三頭の“氷龍”が住まっていたと言う。

三頭は非常に凶暴かつ強力であり、一度荒ぶればかの地のみならず他の地にまでその災禍を及ぼせた。

そのもはや天災とさえ言える存在に、当時の人々は成す術なく怯えるのみだった。

しかし、そんな龍達の暴虐にも終わりが来る。

ある時、一人の旅の伝道師がこの地を訪れた。

人々の嘆きを憂えた彼は、単身かの氷龍達へと立ち向かった。

七日夜に及ぶ戦いの末、伝道師の命をかけた秘術によって氷の三龍は封印された。

その後、伝道師はこの地に居を構え、自分の血を継いだ者達に封印を守るよう伝えた。

時は流れる。

その懐に三頭の氷龍を眠らせた結界はいつしか『氷結界』の名を得、それを守る者達は『氷結界の一族』と呼ばれる様になった。

それが、この地に伝わる歴史。

そう。言い伝えではなく、歴史である。

『氷結界』の存在も、そしてそれを守る一族の血が今に受け継がれている事も、明確に確認されている。

そして、それを証明する事案がもう一つ。

・・・かの龍達は、もはや眠ってはいなかった。

「知ってる・・・ね。」

そう言つて、調達は火を消したマッチを放る。

大八車は止まったまま。

少女も、ギゴバイトも何も言わない。

ただ、動かない荷台の上で彼を見つめる。

そんな彼女達を一瞥すると、調達はパイプを一息吸う。

苦い煙を胸にため、そして吐き出す。

白い煙が一条フワリと登り、青い空に溶けて消えた。

「耳、すましてみな。」

ポツリと言う。

エリア達は、言われるままに耳を澄ます。

冷たく静寂に満たされた空気。

と――

クウオオオオオオオオオオン・・・

大気を震わせる様に、彼方からそれは聞こえた。

その瞬間、例えようもない怖気がエリア達の内にこみ上げる。

まるで、魂を鷲掴みにされる様な。

精神を、その根底から凍てつかせられる様な。

そんな、感覚。

『・・・!!・・・』

しばしの間。

やがて、エリアがハアツと息を吐く。  
それに従う様に、ギゴバイトも息をつく。

その呼吸がハアハアと荒くなっているのを聞きながら、調達員はまたプカリと煙を吐く。

「聞いたかい？」

問いかける。

返事は、ない。

構わずに続ける。

「今のが、”トリシューラの咆哮”ってヤツさ。戦場までまだ大分あつて、戦士団の時の声も聞こえねえつてのに。”アイツ”の声だけは、こんな所まで響いてきやがる。」

忌々しそうにそう言い捨てると、調達員はポンと灰を落とした。

「”アイツら”のせいで、ここらの住民はほとんど逃げ出しちまつた。残ってるのは、そんな財力のない貧しい連中ばかりさ。」

クウオオオオオオン・・・

あの咆哮が、また聞こえた。

彼は、虚しげに空を見上げる。

「その連中も、日々恐々としてるよ。いつ防衛線が破られて、”アイツら”が自由を得ちまうかってな・・・。」

調達員の言葉を聞きながら、エリア達はまだ見えない”その地”を見つめた。

事の起こりは、数十年ほど前になる。

現代まで血脈をつないできた氷結界の一族は、かの龍達の封印を守りながら厳格でありつつも平穏な時を過ごしていた。

外界もそんな彼らの存在の必要性を認識し、いかなる国もこの地に手を出す事はなかった。

しかし――

異変は、突然に起こった。

始まりは、ある日天から下った一つの流星。

大気を破り、地へと突き刺さったそれからは、得体の知れない生命



体が這い出した。後に『ワーム』と呼称されるその生物は、『ワーム・コール』と呼ばれる現象を起こし、瞬く間に大量の仲間を召喚。猛烈な侵略活動を始めた。

突然の暴虐に、人々は成す術も蹂躪された。

この地を統べ、正義と平和を尊ぶ氷結界の一族がそれを良しとする筈もない。

隠遁としていた彼らは、其が地と人々を守るために立ち上がった。かくして、この世界の片隅で世界の全てを震撼させる大戦は始まった。

戦いは瞬く間に拡大し、隣接する地域をも巻き込む大混戦と化した。

そしてその混乱の中、世の淀みに潜む混沌が扉を開ける。

この世界とは別の位相にある世界。

その扉を開け、這い出した者達がいた。

名を、『魔轟神』。

異界の悪神たる彼らは、貪欲だった。

己が征服欲の赴くまま、この地を喰らい尽くさんと戦への介入を始めた。

それにより、戦乱はさらに拡大。

幾多の部族が滅び、地は不毛と化していった。

終わりの見えない戦いの日々。

満ちる悪意と恐怖。そして焦燥は、ゆっくりと人々の心を毒していった。

あの、氷結界の一族の心でさえも。

やがて、彼らの中である考えを持つ者達が出始める。

それはかの三龍の封印を解き、戦における戦力にしようと言う、あまりにも危うい考え。

その考えを支持する者と、諫める者。

一族の意見は二つに割れ、一枚岩だった筈の彼らの中に軋轢を生んだ。

両者の間に生じる、引きつる様な均衡。

しかし、それは唐突に終わりを迎えた。

攻勢を強めるワームや魔轟神の暴挙に耐えかねた者達が、反対派の制止を振り切って三龍が一柱、『ブリューナク』の封印を解いたのだ。

その力は凄まじく、領地半ばまで侵攻を進めていたワームの一軍を一昼夜で壊滅させた。

そして、その戦果が支持派達を勢いづかせた。

大義を得た彼らは、続いて第二の龍、『グングニール』を解き放った。

二頭の猛勢によって、彼らはいよいよワームを駆逐する事に成功する。

残る災源は魔轟神。

伝説の氷龍達の驚異をしかし、戦乱と混沌を愛する彼らは嬉々として受け入れた。

下僕である魔轟神獣を駆り、最後の攻勢へと打って出る魔轟神。

その猛攻に、氷結界の民達は最後の禁忌に手をかけた。

最古にして最凶の龍。『トリシューラ』。

永代の束縛から解放された凶龍は、狂喜の雄叫びと共に魔轟神達へと襲いかかった。

激闘の果て、ついに魔轟神の王は吹き荒ぶ氷嵐の中に碎け散った。

かくて、忌まわしき大乱は終わりを告げる。

告げる筈、だった。

「・・・でも、本当の災いはそれからだった・・・。」

「ああ。その通りだよ。」

眩く様なエリアの言葉に、調達員は億劫そうに頷く。

「氷結界の連中は、解放した龍どもを制御出来なかった。もともと戦で疲弊してた奴らに、あんな化け物達を止めるなんて土台無理な話だったんだよ。結局、あの土地はそのまま暴走する龍どもの箱庭になっちまった。ワームや魔轟神の連中に好き勝手させてた方が、なんぼかマシだったかもな。」

くつくつと笑う調達員。その口調には、皮肉の色が濃い。

「それ以来よね。周辺の国々が連盟を組んだのは。選りすぐりの精

銃で討伐隊を組んで、あの龍達が外界に出るのを防ぎ続けている。」

「詳しいな。」

「伊達や酔狂でこんな所まで来た訳じゃ、ないわ。」

「揶揄する様な調達員の言葉に、エリアは淡々と答える。」

その調子に、先刻までの我儘娘の面影はない。

「……。」

それを見た調達員の顔からも、からかいの色が消える。

「……じゃあ、これは知ってるかい？龍達の暴走の後、氷結界の連

中は……」

「二つに分かれたんでしよう。」

「……。」

「追放されたって言った方が、正しいかしら。龍達の解放を支持した一派が切り離されて、放逐された。彼らはその後さらに分断して、それぞれ行き着いた場所で隠れる様に暮らしてる。そして、この地に残った反対派達は討伐隊に協力して今も戦っている。」

「……。」

「笑える話よね。そんな事で、はじめになるとでも思ったのかしら。」

あの龍達が残した災禍の傷は、どうやったって消えやしないのに。」

流れる様に話すエリア。

その声に、何処か自嘲の様な響きが混じるのは気のせいか。

「……お前さん……」

調達員は尋ねる。

「何でそんな事まで知ってたんだ……？」

「調べたのよ。」

かけられた問いを鼻で笑って、エリアはサラリと答える。

「言っただでしょ。伊達や酔狂でこんな所まで来た訳じゃないって。」

「……。」

エリアを見つめる調達員。

その視線を、黙って受け止めるエリア。

沈黙が流れる。

しばしの間。

やがて、調達員はパイプをしまうと引き棒を手に取った。

「時間を食ったな。行くか。」

「あら？あたし達の事、置いてくんじゃなかったの？」

「さてな？何の事だ？」

素知らぬ顔でそう言うのと、調達員はエリア達を乗せたままガラゴロと車を引き始める。

『・・・何か、察してくれたみたいだね。』

ギゴバイトが、声を潜めて言う。

「女の気持ちを汲むなんて、なかなか良い男じゃない。見た目はともかくね。」

『またそんな憎まれ口きいて。ホントに降ろされちゃうよ？』

荷台で寝っ転がる少女をたしなめるギゴバイト。

しかし、ふと声の調子を落とすと、さらに囁く様な調子で問いかける。

『エリア、本当にいいの・・・？』

「何が？」

『だって、ここはキミの・・・んぎゅ!』

伸びてきた手が、ギゴバイトの口を握って閉じる。

「あんたは余計な事、考えなくていいわ。」

『れ・・・れも・・・』

「下僕は、黙ってついてくればいいのよ。」

『・・・・・・・・・・』

自分に向けられる青い瞳。

そこに込められた意思を読み、ギゴバイトは言葉を呑んだ。

それからしばらく、先刻と同じ単調な行路が続いた。

どこまでも続くその道は、まるで彼らがかの地へ辿り着く事を憂え、拒んでいるかの様に思えた。

それでも、その旅は程なく終わりを迎える。

湖と草原に囲まれた風景が終わりを告げ、キラキラと光る氷柱が幾つも生えた岩場へと変わっていく。

涼しかった気温はさらに下がり、息が白く染まり始める。  
空気が凍てつき、白い靄が立ち込める。

いつしかそこは、氷と白霧の支配する世界へと変わっていた。

『氷結界』の深域へと入ったのである。

大八車はそのまま進み、とある山の麓にある洞窟へと入っていく。  
氷柱と鍾乳石の垂れ下がる空間に、車輪の転がる音がクワンクワン  
と反響する。

やがて、車は洞窟の中ほどで進むのを止めた。

調達員は「寒い」と喚き散らす彼女を無視して、首に下げた笛を  
吹く。

ピィ~~~~~

甲高い音が氷柱に反響し、辺りに響き渡る。

やがて、それに答える様にパタパタと足音が近づいてきた。

現れたのは東洋風の衣装に身を包み、髪をツインテールに結った一  
人の少女。

「ああ、物資の補給ですね。ご苦労様です。」

彼女はそう言うと、礼儀正しく頭を下げた。

「おう。風水師の姉ちゃん、生きてたかあ?」

「はい。お蔭様で。これ、今回のご報酬です。」

そう言つて、少女は金貨の詰まった袋を調達員に渡す。

調達員はチャリチャリと音をさせて袋の重さを確かめると、「毎度」  
と言つてそれを懐に入れた。

「いつもすいません。こんな危険地帯にまで足を運んでいただき  
て……。」

「なあに。こちらら商売でやってんだ。そう感謝されるこつちや  
ねえよ。それよか……。」

そう言つて、調達員は親指を立てては後ろを指す。

「引き取ってもらいたい。もん」があるんだけどよ。」

「ちよつと、もん」とは何よ!? 「もん」とは!!」

間髪入れず飛んできたその声に首を竦めながら、調達員は少女に  
「彼女」を見せる。

訝しげに細まる、少女の目。

「・・・どちら様ですか？」

「ちよいとそこらで拾ってきたんだけどよ。どうも氷結界あんたらに用があるらしいのよ。そら、あんたもこっち来て挨拶しな。」

そう言われた本人は「人を猫の子みたいに言うな」とかブツブツ言いながら、それでも素直に荷台から降りる。そして、ローブの端を掴んで優雅にお辞儀。

「エリア。水霊使いよ、よろしく。」

すると、後について荷台から降りてきたギゴバイトもそれに倣ってお辞儀をする。

『ギゴバイトの『ギゴ』です。どうぞよしなに。』

そんな彼女達に向かつて、少女もお辞儀を返す。

「・・・『氷結界の風水師』です。」

そう名乗って、頭を起こす。

氷結界。

その言葉に、エリアがピクリと身を震わせるが気づく者はいない。

「何よそれ。名前じゃないじゃない。ちやんと名乗りなさいよ。ちやんと。」

「名とは魂と同義です。何処の誰とも知れない者に、容易く教える訳にはいきません。」

凜とした声で突っぱねる。

エリアの顔が、微かに強張る。

少し、癩かさに触つたらしい。

「・・・で、エリアさんは氷結界こちらにはどの様な用向きで？」

しかし、そんな彼女に構うことなく、風水師は問うてくる。

その目には、エリア達を探る色がありありと浮かんでいる。

「・・・別に。ちよつと、学校の宿題で『ドラゴン』の観察にね。」

用意していた様な答えを返すエリア。

しかし、それが風水師の警戒感呼び起こした。

「観察？ あれをですか？」

ハハッと笑い声を漏らす風水師。

「あれ」をそこらの雑魚竜と勘違いしていませんか？ドラゴン・ウオッチングなら、他の場所をお勧めしますよ。」  
ピクリ

あからさまな嘲りの混じった声音に、エリアの眉根が動く。

「どういたしまして。けど、生憎こっちには縁があつてね。並のドラゴンなんて見慣れてんのよ。余計な心配してないで、さっさと案内してくれない？」

これでもかと言うくらい、居丈高な調子で迫る。

ムカツ

今度は、風水師の頬がヒクリと揺れる。

「：：困るんですよ。ただでさえ持て余してるのに、餌をくれてやって余計な滋養をつけさせる様な真似をされては。」

声に混じる不愉快さを隠す事なく、言い放つ。

「あら、餌って何の事かしら？」

「私の目の前にいるものです。」

平然と言い放つ。

しかし、間を置く事なくエリアが返す。

「あゝ。そうかもね。あたし、肉付きスタイル良いし、美味しくいただけられちゃうかも。」

そして、ほら見ろと言わんばかりにシャナリとポーズを取る。

長い髪がしなやかな曲線の上を滑り、シャラリと軽やかな音で鳴いた。

「氷龍、いつもあんたみたいな貧相なのばつか食べてんでしよう？」  
言いながら、ポンポンと風水師の胸を叩く。

「トリガラばつかじゃ、フラストレーションも貯まるわよね。」

「んな・・・!!」

思わず胸を押さえて飛びずさる風水師。

プルプルと震える顔は真っ赤に染まり、その目には涙まで浮いている。

「あらあゝ？ひよつとして気にしてたく？ごめんねえ。あたし正直だからあゝ。」

勝ち誇った様にカラカラと笑うエリア。

風水師の顔が、今度は別な意味で赤くなる。

「無礼な!!」

ジャツ

その手が素早く腰に回り、何かを引き抜く。

そこに握られていたのは、数本の小さな刃物。

形状から察するに、相手に投げつけて殺傷するものだろう。

極東の辺りで使われる、苦無という武器に近いかもしれない。

「あら。やる気?」

驚きもせず、杖を構えるエリア。

それに向かつて、風水師が苦無を振りかぶる。

「己の言動、あの世で後悔しなさい!!」

「どつちが!!」

『ちよ、ちよつと!!エリア!!』

ギゴバイトが慌てて制止するが、二人の耳には届かない。

エリアの杖が水流を纏い、風水師の苦無が放たれようとしたその時

ポーン

何かが、二人の間に放り込まれた。

途端――

ポウン

丸い玉の様なものが弾け、そこから大量の煙が吹き出した。

「わぷっ!!」

「な、何よ!!これ!?!」

目にしみる煙。二人はたまらずむせこむ。

『『盗人の煙玉』・・・』

ポカンとしながら呟くギゴバイト。

「あくあ、大切な護身虎の子用を使っちゃったぜ。」

後方から響く、そんな声。

荷台に背もたれた調達員が、呆れ顔でこちらを見ていた。

その顔に焦りの色はなく、呑気にパイプなど燻らせている。



「な、何するんですか!？」

「ちよつと、おっさん!!これキツイって!!」

「ちつたあ、頭冷えたかあ?」

涙目で咳き込む少女二人に向かって、調達員はのんびりした調子で言う。

「風水師の姉ちゃんよお。こんな場において気が立つのは分かるが、もう少し鷹揚に行きな。短気は戦場いくさばじゃ命取りになんぜ。上方のじいさん達にも、言われてんだろ?」

「う……。」

言葉に詰まる風水師。

「あんたもあんただぜ、嬢ちゃん。」

自分に振られた言葉に、ジト目で返すエリア。

「何か知らねえが、意味のねえ喧嘩腰は止めな。ここは氷結界そいつらの地なんだ。それに噛み付いてたら、とてもじゃねえがやっていけねえぞ。」

「……。」

「それでも文句があるってんなら、荷台に縛り付けて持って帰るけどな。」

不満げに黙りこくるエリア。

しかし、やがて涙に濡れた目をグイツと拭くと、目の前の風水師に頭を下げた。

「……悪かったわ。ごめん。」

そんな彼女に対して、風水師は無然とした顔を崩さない。

「そんな顔しなさんな。些か性格に難はあるが、そう悪い連中じゃあねえよ。」

調達員が、プカリプカリと煙を吐きながら助け舟を入れる。

「どうだい?俺の顔を立てて、預かってやってくんねえか?」  
しばしの間。

そして、風水師がボソリと呟いた。

「……身の安全は、保証出来ませんよ。」

「そいつあ、重々承知の上みたいだぜ。」

頷くエリア達を見て、調達員はニカリと笑った。

「じゃ、せいぜい仲良くやれよ。」

持つて来た物資を下ろし、軽くなった荷台を担ぎながら調達員は少女達に言う。

「……ご希望に添えるかは、難しい所ですが。」

「まあ、せいぜい殺し合いにはならない様にするわ。」

一定の距離を保って立った二人が、口々にそんな台詞を口にする。

調達員は苦笑しながら、傍らに立つギゴバイトに囁く。

「……まあ、大変だろうが、頑張れや。」

『はい……。』

多少ならずの疲労が浮かぶ顔で、弱々しく頷くギゴバイトなのだ。た。

「じゃあな。」

そう言つて、調達員は洞窟の出口に向かう。

「お気を付けて。」

『色々と、ありがとうございました。』

「死なないようにね。」

「おう。お前らもせいぜい気をつけな。」

皆の声にそう答えながら、彼は氷結界を後にする。

湖のほとりを、カラコロと進む空の大八車。行きが賑やかだった分、静けさが妙に身にしみる。

調達員は、ふと後ろを振り返った。

「何企んでるか知らねえが、無茶するんじゃないやねえぞ。嬢ちゃん……。」

誰ともなくそう呟くと、またカラコロと歩を進め出す。

クオオオオオオオオオオン……

その後を追う様に、またトリシューラの咆哮が響き渡る。

けれど、もう振り返る事はない。

程なく、その姿は地平線の果てへと消えていった。

「……………」

「……………」

調達員が去った後。

氷の洞窟に残された、少女二人。

二人共、互いに目を逸らしたまま一言も口をきかない。

辺りに漂う、気まずい沈黙。

ただでさえ冷たい空気が、なおさら冷える。

『…あ、あのさ…。そろそろ何かしら動かない？何ていうか

その、ただ突っ立っているとボク、寒くて冬眠しそうんだけど…。』

沈黙に耐えかねたギゴバイトが、おずおずと口を開く。

途端―

ギロリ

猛禽の様な視線が二人分、彼に向けられる。

『ヒイイ!!』

思わずすくみ上がる、ギゴバイト。

しかし、エリアはすぐにその視線を外すと言った。

「そうね。こんな所でジツとしても、寒さでお肌が痛むだけだ

わ。」

そして、クルリと隣で突っ立っている風水師に向き直る。

「さ、案内してちょうだい。」

涼やかな声が、冷ややかに言い放つ。

「氷<sup>貴女達</sup>結界の、〃罪〃のもとへ。」

ヒュンツ

瞬間、彼女の喉元に突きつけられる苦無の切っ先。

『エリア!!』

思わず悲鳴を上げるギゴバイト。

その目に剣呑な光を宿した風水師が、低い声で言う。

「口に気をつけてください……………」

氷の様に輝く刃が、ツツ…白い肌を滑る。

「今度氷<sup>我</sup>結界を侮蔑する様な言を吐けば、その首かき切ります。」

満ちる殺気を、隠しもしない。

けれど、エリアは腰に手を当てたまま身動きもしない。ただその目を細め、風水師を見下すだけ。

「はいはい。分かったからさっさと動きましょ。ギゴじゃないけど、このままじゃ本当に冬眠ものだわ。」

あくまで平然とした態度。

いくら威嚇しても、糠に釘と悟ったのだろう。

風水師は忌々しげに刃を引くと、クルリと踵を返した。

「来なさい。」

そのままカツカツと、洞窟の奥へと歩を進め始める。

「先にも言いましたが、身の保証はしませんよ。こちらにも、そんな余裕はありませんから。」

「耳タコね。聞き飽きた。」

そっけなく返して、エリアも歩き出す。

『ま、待ってよお!!』

慌てて後を追うギゴバイト。

カツカツと響く足音を残し、三人の姿は洞窟の奥へと消えていった。

ズズウ・・・ン

狭い空間の中に、鈍い音が響き渡る。

オオオオオオオオ

それに被さる様に聞こえる、大勢の人の声。

『・・・あれは、戦士団?』

「みたいね。」

不安げに辺りを見回すギゴバイトに、エリアは素っ気ない態度で返す。

「近隣諸国の連合軍です。かの龍達を封じるため、我らの大義のために助力してくださいっているのです。」

そう言う風水師に、エリアはふんと鼻を鳴らす。

「助力?尻拭いの間違いじゃないの?」

その言葉に、鋭い眼差しを向ける風水師。  
手の中の苦無が、冷たい光を放つ。

「……二度目はないと、言った筈ですよ……。」

『エ、エリア!!』

慌ててギゴバイトが間に入る。

けれど、エリアの口は止まらない。

「はん。カビの生えたパン屑を、極上のブリオツシュって言ったって本質は変わらないわよ。 “大義” だつてさ。自分達がやらかした大ハマのクセに、よくそんな良い様に言えるわよね。」

「……貴様……!!」

憤怒の形相で得物を構える風水師に向かって、エリアは言う。

「あんた、一族の悪口にやたら反応するわよね。」

「え……?」

風水師の動きが、ピタリと止まる。

その様を見たエリアが、その目を細める。

「ホントは分かかってんじゃないの?」

言いながら、詰め寄る。

「氷結界あんた達が犯した罪の意味を……。」

「……!!」

真つ直ぐに突き刺さる、エリアの視線。

それに気押される様に、風水師が後ずさる。

追う様に迫るエリア。

「氷結界あんた達が、あの時何をしたかを……。」

「貴女……一体……?」

風水師が、怯えを孕んだ声で問うたその瞬間――

キシヤアアアアアアツ

突然、天地をつんざく様な咆哮が響き渡った。

洞窟の外で放たれたのであろうそれは、しかし耳元で響いたかの様に皆の鼓膜を揺らした。

『な……何!?!今の……』

ギゴバイトが、耳を押さえながら宙を仰ぐ。

途端、

グワシヤアアアアアッ

轟音とともに洞窟の壁が砕け、何かが転がり込んできた。

『な……何事!?!』

「ガ……グウ……」

驚くギゴバイトの前で、転がり込んできた“それ”が呻きながら身を起こす。

それは鎧を纏い、猛々しい鬣を振り乱した獣人。

両腕に装備された手甲からは、長く鋭い鉤爪が伸びている。

「エアベルンさん!?!大丈夫ですか!!」

風水師が慌てた様子で駆け寄り、声をかける。

「ガウ……。大丈夫。大事、ナイ。」

エアベルンと呼ばれた獣人の男は、頭を振りながらそう答える。

『だ……誰?』

「……戦士団の一員みたいね。『X―セイバー』とか言ったかしら……」

ギゴバイトの問いに、サラリと答えるエリア。

『何で、あんな勢いで飛び込んできて平気なの?』

「頑丈なんですよ?伊達や酔狂で精銳に選ばれた訳じゃないだろうし。」

あくまで淡々とした調子を崩さない彼女。ギゴバイトが、不安げな視線を向ける。

「何よ?」

『エリア……。君、大丈夫?』

「何が?」

『いつもの君じゃない。やっぱり、ここは……』

「ギゴ!!」

突然、エリアが叫んだ。

『ご、ごめんなさい!!』

思わず、首を竦める。

しかし――

「ボサツとしないで!!」

『!?!』

訳が分からず狼狽するギゴバイト。そんな彼を、抱きしめて飛び退くエリア。

途端――

ゴシャアアアアアツ

轟音と共に、洞窟の天井が崩れ落ちてきた。

「キヤアアアアアツ!!」

「グオアアアアアツ!!」

『ワアアアアアアツ!!』

皆の悲鳴が響く中、エリアだけはしかと目を開きそこを見る。

もうもうと立ち込める土煙。

その向こうに、蠢く巨大な影。

フシュー……

低い呼吸音が、大気を震わせる。

肌を刺す様な冷気が満ちて、土煙を吹き払う。

その先に現れたのは、巨大な雪の結晶。

否。

それは、雪晶の様に六本の角に飾られた顔。

その中心には爛々と輝く双眼と、鋭い牙が軋む裂けた口。

連なる身体は巨蛇の様に長く伸び、氷色ひいろに輝く鱗に覆われている。

背から伸びる翼は空を覆わん程に大きく、羽ばたく度に冷たい氷霧

を散らした。

見る者全ての本能を萎縮させるであろう威容。

見上げるエリアが、囁く様に呟く。

「……『ブリューナク』……」

その声が届いたのだろうか。伝説の神槍の名を冠した氷龍は、ゆっくりと己が視線を落とす。

昏い金色を湛える瞳。

そこに映る自分の姿を、エリアは真っ直ぐに見つめた。

「ブ、ブリューナク!!何故、こんな所に!?!」

その姿を見とめた風水師が叫ぶ。

「スマナイ。防衛線、破ラレタ……。」

エアベルンの言葉に、青ざめる風水師。

「そんな……!!今まで抑えられていたのに、何故……!?!」

「今日ノコイツラ、何カオカシイ……。妙ニ、猛ツテイル。」

両手の刃を構えながら、エアベルンは言う。

「と、とにかく、ここで止めなければ!!外界に出られては大変な事に……!!」

風水師が、懐から何かを取り出す。氷色ひいろに輝く、八角形の鏡。

フシユウウウウ……

それを見咎める様に、ブリューナクがゆつくりと口を開く。

幾重にも並んだ牙列の奥が、青白い光を放ったと思われた瞬間――

ゴブウアアアアアッ

その口から猛烈な氷風が吹き出した。

「くっ!!」

迫る氷雪の嵐に向けて、風水師が手にした鏡を突き付ける。

「禁!!」

光る鏡。

途端、氷嵐がグニヤリと軌道を変える。

ズガアアアアアン

曲がった氷嵐が、皆の脇の岩場へと当たる。

氷の嵐に挟られた地肌は一瞬で砕け、凍りついた。

『何て破壊力……。』

呆然とするギゴバイト。その耳に、つんざく様な雄叫びが突き刺さる。

「ウウラアアアアアアアッ!!」

叫びと共に飛び上がったエアベルンが、その爪を振りかざしてブリューナクに襲いかかった。

閃く剣閃。

Xの軌跡を描いた刃が、次を放とうと開いていたブリューナクの口



を払う。

バシユウツ

今まさに噴き出そうとしていた氷嵐が切り裂かれ、霧散する。

「えあべるん、皆ノ仇!!討ツ!!」

流れる様に繰り出される、次の一閃。

ガキイツ

硬いもの同士がぶつかり合う音が響き、ブリユーナクの頭が微かに傾いだ。

『この人達・・・強い・・・。』

「そりやそうよ。ロクな切り札も無しに氷龍と渡り合ってるのよ。折り紙つきに決まってるじゃない。」

呆然と呟くギゴバイトを腕に抱いたまま、エリアが言う。

『この人達みたいなのが、沢山いるの? だったら、氷龍も倒せるんじゃない・・・』

些か高揚しながら言うギゴバイト。

しかし、エリアは冷めた声でそれを否定する。

「無理ね。」

『ど、どうして?』

「忘れたの? 彼らはこの数十年間、氷龍をこの地に押さえ込むだけで精一杯だったのよ。」

『あ・・・』

「こんな程度で倒せるほど、安くないのよ。氷龍は・・・」

エリアが言い終わるや否や―

グガアアアアアンツ

「グウアアアアアアアツ!!」

衝撃音と共に上がる絶叫。

見れば、ブリユーナクの巨大な前足がエアベルンを掴み、岩壁に叩きつけていた。

「グ・・・ウ・・・」

エアベルンの手が動き、爪剣をブリユーナクの前足に叩きつける。しかし、強靱な鱗に覆われたそれには傷一つつかない。

「ミ、皆・・・スマナイ・・・。」  
ガクリと崩れ落ちるエアベルン。

「エ、エアベルンさん!？」  
悲鳴の様な声を上げる風水師。

それが、隙になる。

パア・・・

青白い光が、彼女を照らす。

「!？」

気づいた時には、すでに遅い。

ゴウンツ

「キヤアアアアアッ!？」

氷雪を纏った爆発が、風水師を吹き飛ばす。

小柄な身体が宙を舞い、硬い氷土の上で跳ねる。

「あ・・・ぐう・・・。」

地べたに転がる風水師。

強い衝撃に全身を貫かれ、身動きが取れない。

フシユルルルル・・・

抵抗する者がいなくなったのを見て取ったブリユーナクは、低く唸りながらゆっくりとその首を巡らせる。

外へ出る気だと、直感する。

「だ・・・駄目・・・!!」

霞む視界の中、すぐる様に手を伸ばす。

「行かせない・・・。行かせる訳にはいかない・・・。」

震える指が、掻き毟る様に宙を掴む。

「あなたは・・・。あなた達は・・・私の・・・氷結界私達の、罪・・・。

これ以上・・・これ以上は・・・!!」

必死の叫び。

しかし、災厄の氷龍は歯牙にもかけない。

その翼が、ゆっくりと広がる。

「お願い・・・。行かないで・・・!!」

涙を浮かべ、懇願する。

嘲笑うかの様に、天を仰ぐブリューナク。  
そして――

ピタリ

今にも飛び立たんとしていた氷龍。

その動きが、止まった。

「……え……？」

当惑する風水師。

ともすれば、闇に落ちそうになる意識を必死につなぎ止める。  
その目の前で、ブリューナクが戸惑う様にこちらを見ていた。  
否。

見ているのは、自分ではない。

かの龍が見ているもの。それは――

「何よ。やっぱり、分かってるんじゃない。」

澄んだ声が、半壊した洞窟に響く。

視界の中で、涼やかに流れる水色の髪。

エリアが、立っていた。

その身に、淡く光る羽衣を纏い。

傍らには、筋骨隆々とした一匹のモンスターを従え。

まるで、彼女達を守るかの様に。

凜とした姿で。

エリアは、立っていた。

フシユウウウウウツ

ブリューナクが、威嚇する様に呼気を吹く。

吹き付ける冷気に、長い髪が舞う。

けれど、水の少女の身体は揺るがない。

しかと立ったまま、右手をブリューナクに向かってかざす。

キラリ

かざした手の中で、何かが光った。

「かが……み……？」

それを見た風水師が呟く。

「戻りなさい。」

静かな声で、エリアが告げる。

彼女の言葉に呼応するかの様に、手の中の鏡が輝きを増す。

ギョルルルルル・・・

その輝きに照らされたブリューナクが、いやいやをする様に身をよじる。

「戻りなさい。ここから先は、お前達の世界ではないわ。」

ルウルルルルル・・・

「戻りなさい!!」

叱りつける様に、声を張り上げる。

グウル・・・

ついに、ブリューナクが首を逸らした。

ズズズズズ・・・

低い地鳴りと共に、動く巨体。

光から逃げる様に、渓谷の奥へと戻っていく。

ズズ・・・

やがて、その姿は皆の視界の届かぬ場へと消えて行つた。

「ふう・・・。」

ブリューナクの姿が渓谷の奥に消えたのを確認すると、エリアは息をついて手を下ろした。

『大丈夫か？エリア。』

傍らに控えていたモンスターが、労わる様に声をかける。

「平気よ。どうって事なかったわ。もつとも、アイツの鼻息で髪が傷んじやつたのは腹が立つけど。」

そう言いながら髪についた氷片を払い落とすと、エリアはニコリと笑って見せた。

「そんな・・・そんな馬鹿な・・・!!」

背後から聞こえてきた声に、エリアとモンスターが振り返る。

見れば、岩壁にもたれかかった風水師が荒い息を付きながらこちらを凝視していた。

「・・・貴女は・・・貴女は一体・・・」

と、その視線がエリアの右手へと落ちる。

「・・・!!」

その顔が、驚愕に凍った。

エリアの手の中にあつた物。

それは、縁に三つ頭の龍を飾った一枚の鏡。

「・・・氷結界の・・・鏡・・・!!」

戦慄く口が、*“それ”*の名を紡ぐ。

「馬鹿な・・・。それは・・・90年前の混乱の時に失われた筈・・・

!!」

動かない身に力を込め、身を乗り出す。

「何故、何故貴女が!!」

手を伸ばし、掴みかかろうとしたその瞬間―

ピッ

眼前に突きつけられる、指。

そして―

「―鳥乙女の歌声 人魚の囁き 荒びし世界に帳を落とし 猛し者

らに安なる眠りを―」

詠唱される呪文。目の前に展開する、緑色の魔法陣。

「―『ヒュプノス・シンドローム催眠術』―」

結ばれる言葉。

そして、世界は闇に落ちる―

トサツ

眠り込んだ風水師を、たくましい腕が床に横たえる。

『エリア、そっちはどうだ?』

静かに手を離しながら、緑色のモンスター―『ガガギゴ』が尋ねる。

「大丈夫。生きてるわ。ホント、頑丈ね。」

言いながら、エリアは気絶しているエアベルンの口に『ブルーポー

ション』を注ぎ込んでいた。

「これでよし・・・っと。」

エアベルンの喉が液体を飲み下すのを見届けると、エリアはうくん

と背を伸ばした。

「あく、やれやれ。やっと静かになったわ。」

そんな彼女に歩み寄りながら、ガガギゴが問う。

『やはり、氷結界この娘達に返す訳にはいかないのか？『氷結界の鏡』』

「返すも何も、もともとあたしんちの家宝なんだってば。」

言いながら、手の中の鏡を見せるエリア。

「大体、これ手放しちやったら宿題どうすんのよ。『宿題』。手ぶ

らで氷龍あいつらをのすなんて、流石のあたしでも出来っこないわよ。」

『宿題……か。』

その言葉を聞いたガガギゴが、眉をひそめる。

「何よ？」

『本当に、『宿題』が目的か？』

「!!」

エリアの顔が、微かに強張る。

『宿題の条件は、『自分と同属性のドラゴン』だろ。それなら、何も

『氷結界の龍』なんて厄介なモノに手を出さなくていい。もつと

易い相手が、他にもいる。』

「………。」

『本当は、別の目的があるんじゃないのか？』

「………。」

エリアは何も言わない。

気まずい沈黙だけが、辺りに流れる。

と、

ガヤガヤ……ガヤガヤ……

洞窟の奥から、大勢の人間の気配が近づいてきた。

「いたか?」、「そつちを探せ」などと言った話し声も聞こえてくる。

「やっば。他の連中が来たわ。行くわよ。『ギゴ』!!」

これ幸いと走り出すエリア。

『あ、お、おい!!エリア!!』

「早く来なさい!!見つかると面倒よ!!」

ガガギゴの追求をかわしながら、脇の小道に走り込んでいく。

『全く……。』

溜息を一つつくと、ガガギゴはその後を追った。

コツ……コツ……コツ……

昏い氷洞に、硬い足音が響き渡る。

ヒユウ……

か細い呼吸音と共に、白い吐息が宙に舞う。

氷霧の様に濃いそれは、薄闇の中でも妙にはつきりと見えた。

「……ここまで来れば、大丈夫そうね。」

立ち止まり、後ろを振り返ったエリアが、両手に息を吹きかけながらそう言った。

『そうだな。追ってくる足音もしないし……』

エリアの後ろを守る様についてきていたガガギゴも、同意の言葉を口にして立ち止まる。

『……で、これからどうする気だ？エリア。』

「……“あいつ”の所に行くわ……。」

『“あいつ”……？“あいつ”って……まさか!?』

『『トリシューラ』よ。』

主が口にしたその名に、今度こそガガギゴの顔が強張る。

『馬鹿な!!三龍の中でも最凶と呼ばれるヤツじゃないか!!そんな奴の所に行くなんて、どうかしてる!!』

相方の言葉に、しかしエリアはフンと笑ってみせる。

「だからよ。」

『……え?』

クルリ

向こうを向いていたエリアが、ターンする様にこちらを向いた。

その顔には、不敵な笑みが浮いている。

「伝説の凶龍!!最凶の破壊者!!こんなに素敵な響きが他にある?」

涼やかな声で、叫ぶ様にエリアは言う。

「トリシューラの姿を知ってる?綺麗なのよ!!本当に、本当に綺麗なの!!書物に描かれた絵でさえそうなのよ!!本物は、もっと綺麗に決

まってるわ!!」

熱に浮かされた様にまくし立てる主人を、ガガギゴは黙って見つめる。

「ずっと思ってたわ!!他の雑魚なんていらない!!あたしは、あいつが欲しいの!!あの力が、美しさが欲しいの!!あいつこそ、あたしの下僕にふさわしい!!」

『……エリア……。』

「焦がれてた!!想ってた!!ずっと、ずっと!!あいつはあたしのもの!!あたしのもことになるの!!そうすれば……」

『エリア!!』

ガガギゴが、怒鳴る様に叫んだ。

その怒声に、エリアはビクリと竦み上がる。

その口が閉じたのを確認すると、ガガギゴはゆっくりと彼女に近づいて行く。

『それも、嘘だろう?』

近づきながら、言う。

『君は、そんな力に魅せられる様な娘じゃない。』

たくましい腕が上がり、大きな手がエリアの頬に当てられる。

『どんな嘘や強がりも言ったっていい。それが、君が君であるために必要ならば。けど……。』

自分の顔を、エリアの顔へと近づける。

蒼い瞳の中に、己の姿が見える。

『僕の前でだけはやめてくれ。君のどんな事だって、僕は受け止める。受け止めて見せる。だから、僕の前でだけは本当の君でいてくれ。』

『……。』

沈黙したまま、彼を見つめるエリア。

やがてその手がおずおずと上がり、自分の頬を包む手に重ねられる。

「トリシューラは、氷龍達の王……」

か細い声が、ポツポツと語り始める。



「他の二頭は、あいつの凶気に呼応しているだけ……。あいつを役して鎮めれば、やつらも大人しくなる筈……。この地の混乱も、収まるわ……。」

『それを、君がやる気かい……。?』

かけられた問いに、エリアは小さく頷く。

『どうして君が、やらなきゃならない?』

「それは……。」

『“君”の罪じゃない。』

「……。」

『それは、君が負うべき罪じゃない。過去の罪は、過去の者達が負うべきもの。』

「……。」

『過去の血なんか縛られちゃいけない。君は、今に生きるべきだ。』

ガガギゴの、金色の瞳が見つめる。

それから微かに視線を外すと、エリアは呟く様に言った。

「それでも、あたしは……。」

『……。』

しばしの沈黙。

やがて、ガガギゴはハアと溜息をつく。

『全く、困ったお姫様だなあ……。』

「ギゴ……。」

不安気な眼差しを向けるエリア。

それに対して、ガガギゴはニコリと微笑みを浮かべる。

『付き合うよ。それが君の望みなら。』

「いいの……?」

『言つたら?どんな事でも受け止めるって。』

エリアの顔が、華の様にほころぶ。

それを愛しげに見つめながら、ガガギゴは言う。

『さあ、行こう。宿題の期限まで、間がないよ。』

「……うん。」

頷くエリア。

頬を包んでいた手が、ソッと離れる。

その跡を、エリアは名残惜しげに撫でる。

まるで、そこがほんのりと染まっている事を隠すかの様に。

「来てくれる？」

水の姫が聞く。

『何処までも。』

答えるは、異形の騎士。

二人は頷き合い、洞窟の奥へと消えていった。

— 3 —

ギシャアアアアアアアッ

天を裂く様な咆哮が響き渡る。

其を上げるのは、一頭の巨大な龍。

太い首に連なる頭は禍々しい眼光を灯し、巨木の様な四肢は踏み出す度に地割れの如き爪痕を残す。

巨体を覆うは氷色の甲殻。

巨翼を形どるは輝く氷膜。

その内側には七色の光が揺らめき、辺りをオーロラのように照らし出す。

世への災意を形にした様な威容と、神をも魅了する様な極彩の輝き。

相反する存在を身に収め、その氷龍は雄叫びを上げる。

『・・・あれが・・・』

「ええ。第二の龍、『グングニール』よ。」

龍の頭より高い位置にある岩壁。そこに開いた氷洞の口から、エリアとガガゴはその「戦場」を見下ろしていた。

そう。そこはまさに戦場だった。

七色の光を散らしながら猛るグングニール。

その周りを、多数の人影が囲んでいる。

出で立ちを見る所、彼らが周辺の国々から選りすぐられた戦士達だろう。

彼らは吹き付けられる氷嵐や襲いかかる爪を掻い潜り、矢や投石で応戦する。

それらが氷の殻に当たる甲高い音が、谷全体に響き渡る。

閃く緑や赤の光は、魔法攻撃だろうか。

時折弾ける、小さな爆発。

絶え間なく続く攻撃。

しかし、それもかの龍には幾ばくの疼痛も与えられないらしい。

グングニールは消耗の兆しなど微塵も見せず、ただ煩わしげに唸り上げる。

ピシッ ピシシッ

その巨体の表面を、光が走ったと思われた瞬間、

ズバアッ

七色の光が四方八方に降り注いだ。

ズガアアアアアンツ

途端、巻き起こる無数の爆発。

谷が崩壊するのではないかと思われる揺らぎの中、多数の人影が爆炎や崩れた瓦礫に吞まれて行く。

「——っ!!」

思わず懐に手を入れるエリア。

しかし、その手をガガギゴが抑える。

「ギョ!?!」

『落ち着け!!エリア!!』

「でも・・・!!」

『でもない!!その鏡、力に限りがあるだろ!?!』

「!!」

その指摘に、エリアの動きが止まる。

「どうして・・・」

『さっきブリューナクを退けた時から、感じる力が減ってる。分からないでも思ったのか!?!』

「う……。」

答えに詰まるエリア。

ガガギゴは、諭す様に言う。

『君の相手はグングニールじゃない。もっと、厄介で危険な奴だ。その時のために、手札を減らしちゃいけない。辛いだろうけど、ここは耐えろ!!』

「……く……!!」

苦しげに唇を噛むエリア。

その心の痛みは、使い魔であるガガギゴにも伝わる。

それを少しでも和らげようと、震える肩に手を伸ばす。

しかし――

「あ!!」

急にそう叫んだかと思うと、エリアが身を乗り出した。

瞬間――

ズバアツ

立ち込めていた土煙を切り裂き、一つの人影が躍り出る。

全身を重層な鎧で包んだ戦士。真紅のマントがひるがえり、胸に刻まれたXの刻印が煌く。

戦士は一瞬でグングニールに肉薄すると、手にした双刃の剣を一閃する。

ズガアアアアアツ

強烈な斬撃が炸裂し、グングニールの動きが一瞬止まる。

ビュツ

ビュンツ

その隙をつく様に、幾つもの影が土煙の中から飛び出してくる。

短剣。連鎖刃。大鎌。手にした武器は異なれど、皆一様に真紅のマントを羽織り、その身にはXの紋章が刻まれている。

ヒュヒュンツ

ガスツ ガスツ

幾重にも閃く剣閃。

叩きつけられる斬撃。

削り散る氷の殻。

決め手にこそならないものの、彼らの攻撃は確実にグングニールに届いていた。

ジリ・・・

ほんの一步。

だが確かに、グングニールが後ずさる。

その様に、英気を煽られたのだろう。

浮き足立っていた他の兵達も、体制を立て直す。

再び始まる一斉攻撃。

弾ける弓矢。

轟く轟音。

卑小な筈の者達の、力。

それに押され、グングニールは怒りと苛立ちの咆哮を上げた。

「X―セイバーの、本隊・・・」

次第を見ていたエリアが、呟く様に言う。

『セイバー<sup>救世主</sup>の称号は、伊達じゃないな・・・』

同様に見ていたガガギゴも、感嘆の言葉を漏らす。

『行こう。エリア。ここは彼らに任せておけば、大丈夫だ。』

佇む姫の肩に手を置き、そう告げる。

エリアは無言のまま頷くと、踵を返して走り出す。

すかさず後を追うガガギゴ。

身体が交差する瞬間、彼女が小さく「頑張つて。」と呟いた事を、彼

は聞き逃してはいなかった。

それから、どれほど進んだだろう。

いつしか、あれほど響いていた龍の咆哮も、戦士達の時の声も聞こえなくなっていた。

シンと静まり返った氷洞の中に、二人の足音ばかりが響き渡る。

『まるで迷路だな・・・』

周囲を見回しながらガガギゴが言うが、エリアの足は止まらない。

「大丈夫。道は分かるわ。」

『何故?』

その問いに、エリアは懐から『氷結界の鏡』を取り出す。

「これが、教えてくれるわ。」

見れば、磨かれた鏡面が淡い光を放っている。

「一族の記憶が、導いてくれるわ。」

そう言つて、再び歩き出すエリア

その眼差しが自分とは違うものを見ている様に思え、ガガギゴは微かな不安を覚えた。

それから、もうしばしの事。

道は、唐突に開けた。

ずっと続いていた氷洞が途切れ、広い空間が広がった。

見上げる天井は高く、氷柱とも鍾乳石ともつかないものが無数にぶら下がっている。

あちこちに張り出した氷岩は、ヒカリゴケの類でも付着しているのだろうか。それ自体が淡く光り、昏い空間をほの明るく照らし出していた。

『……ここが、〃巢〃か?』

「……違う。ここにトリシユーラはいない。」

鏡を見ながら、エリアが言う。

『そうか……。けど……。』

「……。ええ……。』

『〃何か〃、居るな……。』

二人が顔を合わせ、頷き合つた瞬間――

『……。懐かしいな……。』

厳かな声が、頭上から降りかかった。

『!!』

思わず振り仰ぐと、岩の上に横たわる大きな影が目に入った。

青白く輝く剛毛。

身を包む鎧。

それらを彩る、氷の装飾。

大きな口からは猛々しい牙が覗き、青い双眸が物憂げにエリア達を見つめている。

—虎—

そう。それは、全身を氷の色に飾った一頭の虎だった。

『・・・随分と、懐かしいものを連れてきたものだ・・・』

再び、〃それ〃が言葉を発する。

ひどく、感慨深げな声で。

『・・・エリア。』

彼女を守る様に、ガガギゴが前に出る。

『クク・・・』

それを見た氷虎が、愉快そうに喉を鳴らす。

『そう殺気立つ事はない。別に、獲って喰おうなどは思っておらぬ。』

蒼い瞳でエリア達を見下ろしながら、それは言う。

確かに、その身からは殺気の類は感じられない。

しかし、ガガギゴが警戒を解く事はない。

身構えたまま、逆に問う。

『・・・お前こそ誰だ？こんな所で、何をしてる？』

『・・・』

『戦士団の縁か？それとも氷結界か？』

その問いに、氷虎の目が妖しく光る。

『・・・その、いずれかと言ったら？』

鋭さを増す、ガガギゴの眼差し。

『・・・どちらも、敵じゃない。だけど、味方でもない。もし、お前がどちらかに通じてると言うのなら・・・』

ガガギゴの声に、険が込める。

しかし、氷虎はその敵意を柳の様に受け流す。

『若いな・・・』

『何？』

『見た所、己と相手の力差を察せぬ程愚かではなさそうだが？それを知って尚立つは、その娘のためか？』

『……………』

言いながら、氷虎はクツクと笑う。

『そう怖い顔をするな。その様な想いに触れるは久方ぶりだな。些かからかつてみたくなっただけよ。』

『お前、一体……』

『言うまでもない。我の事は、その娘が知っている様だが?』

『……え?』

思わず振り返る。

その視線の先で、エリアが氷虎を凝視していた。

「ドウローレン……」

彼女の唇が、小さく呟く。

「あんた、『氷結界の虎王・ドウローレン』ね!？」

『「虎王」か。その名で呼ばれるも久方ぶりだ……。』

そう言うのと、氷虎―ドウローレンは何かを思う様に目を細めた。

ズシヤツ

ドウローレンが、伏していた岩から飛び降りた。

重い音と共に、太い四肢が地を掴む。

大きい。

近くで見ると、小山の様だ。

流星にかの氷龍達には及ばないが、身にかかるプレッシャーは並ではない。

その身に宿る力が、並ではない事の証だった。

「あんた達、先の大戦で滅んだんじゃないの……?」

『確かに。』

エリアの問いに、ドウローレンはゆっくりとした口調で答える。

『我が一族は先の大戦で尽く絶え果てた。残るはこの老いぼれのみ。誠、無様な生き残りよ。』

クツクと笑うドウローレン。

その声には、自嘲の色が濃い。

「無様……?」



それを聞いたエリアの目が、険しくなる。

「・・・それなら、何でこんな所にいるのよ?」

『ふむ?』

エリアはガガギゴの背後から出ると、ドウローレンに向かって歩いていく。

『エリア!!』

ガガギゴが声をかけるが、彼女は「大丈夫」と手で制する。

「氷虎あんた達は、氷龍達が暴走した時にそれを抑える役目を負っていた筈。それが、何でこんな所で寝腐ってるのよ?」

詰め寄る様に、エリアはドウローレンに近づく。

「今もああして、氷龍あいつらは暴れまわってる。それなのに、あんた何してるのよ!!」

憤りを隠さず、まくし立てるエリア。

しかし、ドウローレンはクツクと笑うだけ。

「何がおかしいの!?!」

『歳の割に、詳しい事だ・・・。』

「え・・・?」

『その鏡が教えたか? 哀れなる血の娘よ。』

『!!』

その言葉に、エリアの顔が目に見えて強張る。

『・・・懐かしい事よ。この地を追われた後、何処を彷徨った? 如何に暮らした?』

「・・・。。。」

『どうした? その事は教えられなかったか? 伝えられなかったか? やむを得ぬ事か。なにせ、汝の血族にとってこの事は・・・。』

ズガアンツ

突然、ドウローレンの背後の氷壁が弾けた。

“それ”がかすめた彼の頬から、青白色の毛が飛び散る。

しかしドウローレンは微塵も動じず、ただ物憂げな眼差しを “それが飛んできた方向に向ける。

その視線の先には、怒りに肩をいからせるガガギゴの姿。

『……次は外さない……。』

明確な敵意のこもった声で言う、ガガギゴ。

放った水撃の残滓がポトポトと落ちる爪をギリりと握り込み、燃える眼差しでドウローレンを睨みつける。

「ギゴ……。」

『知った様な事を言えた義理か!?この臆病者!!』

向けられる言葉に、ドウローレンは何の反応も見せず、ただ目を細めるだけ。

そんな彼に向かって、ガガギゴは吠える。

『恐怖に負けて!!役目を放棄して!!こんな穴ぐらに引き籠っているクセに!!』

荒ぶる想いを、隠しもしない。

次の攻撃に備えるように、緑の拳にギリギリと力が込められる。

『けど、エリアは違う!!エリアは……エリアは、顔も知らない先祖の罪を贖うために!!』

「ギゴ……。もういいわ。」

『エリア、でも!!』

猛るガガギゴをなだめる様に、エリアは言う。

「こいつ、全部分かってる……。」

『え……?』

そして、エリアは静かに座しているドウローレンに問いかける。

「あなた、わざとね……?」

『……』

「あたし達を挑発すれば、殺してもらえなくても思った訳?」

ドウローレンは何も言わない。

ただ、その蒼い瞳をエリアに向けるだけ。

「冗談じゃないわ。死にたいなら、勝手に死んでちょうだい。そんなどうでもいい事してる暇、あたし達にはないんだから。」

そう言っつて、エリアはクルリと踵を返す。

「行きましよう。ギゴ。余計な時間食っちゃった。」

『エリア……。』

「こんな老いぼれ、相手する意味なんてないわ。自分で自分にけじめもつけられない、本当の死にぞこないよ。この世の終わりまで、そうやって一人でしょぼくればいい。」

そのまま、ツカツカと歩き始めるエリア。

ガガギゴが慌てて後を追おうとしたその時、

『クツクツク・・・』

後ろから響く笑い声。

振り返ると、ドウローレンが笑っていた。

肩を揺らし、酷く愉快そうに。

『クク・・・。やれやれ、全とお見通しとはな。思いの外賢いのか。』

それとも、私の頭が鈍ったか。』

「両方よ。」

間髪入れずに、エリアが言う。

『クク・・・。違う。』

笑いながら、ゆっくりと地に腰を落とすドウローレン。

『不快な思いをさせてすまなかった。懐かしき血の娘よ。』

発せられる言葉に込める、先刻までとは違った響き。

それを察したエリアが、歩みを止める。

「謝るなら、最初からしない事ね。」

『言ってくれるな。下手に霊格を得てしまうと、自死すらもままな』

らん。性も歪むと言うものよ。』

「あら、そう。伝説の霊獣って言っても大した事ないのね。」

どこまでも素っ気ないその態度に、苦笑するドウローレン。

『故に、汝に討たれてみるも一興かと思っただがな。かの血を継』

ぎし者に討たれてみるのもな。』

「何よ？それ。」

エリアが、冷ややかな眼差しを向ける。

「ひよっとして、“罪滅し”のつもりなんて言わないでしょうね？」

『気に入らぬか？』

「全くね。」

にべもなく、言い捨てる。

「顔も知らない様なご先祖連中のゴタゴタに、勝手に混ぜ込まないで欲しいわ。あたしには、関係ない事よ。」

『関係なき事・・・か。』

その言葉に、ドウローレンが目を細める。

『ならば、汝は何故この地に来た？』

「・・・・・・・・!!」

『何故、忌まわしきこの地に来た？其が鏡を持ちて。』

「それは・・・」

『“宿題”などとと言う戯言なら、聞く耳は持たぬぞ。』

言葉を先取りされ、エリアはチツと舌打ちをする。

「本当に性が歪んでるわね。“読める”なら、勝手に自己完結してればいいじゃない。」

むくれるエリア。

それを見ていたドウローレンの顔に、ふと穏やかな色が浮かぶ。

『・・・懐かしいな。』

「はっ。」

突然の言葉に、当惑するエリア。

構わずに続ける。

『その気性。振る舞い。容姿。かの娘によく似ておる。』

何かを思い起こすかの様に、蒼い目の中でエリアの姿が揺れる。

『誠、汝の一族には非道なる仕打ちを成してしまった。その罪は、いかな償いをしても晴れるものではあるまい。』

「・・・・・・・・。」

『今思えば、氷結界がここまで衰退したも当然の報いなのであろう。かの氷龍達に喰い尽くされるが、氷結界が宿命我と言うものか・・・。』

沈黙するエリア。

両者の様子に、傍観していたガガゴゴが耐えかねた様に口を挟む。

『・・・どういう事だ？エリアの先祖は、氷龍解放の責を負って氷結界から放逐された筈。なのに、氷結界の方に罪が・・・!?』

その言葉に、ドウローレンが目を向ける。

「ちよつと・・・」

彼の様子に気づいたエリアが、声を上げた。

「ギゴに、余計な事言わないで!!」

しかし、ドウローレンは言う。

『この者は、汝の連れ合いであろう?』

「・・・んな?」

頬を赤らめ、絶句するエリア。

何かを言いたそうに口を動かすが、酸素不足の金魚の様にパクパクするだけ。

その様を微笑ましそうに見つめ、ドウローレンは言葉を続ける。

『ならば、知っておくべきであろう。汝が背負うものの、真の意味をな。』

『・・・どういう事だ?』

怪訝そうな顔をするガガギゴ。

彼に向かって、ドウローレンは語り出す。

『若者よ。先に言ったな。かの娘の祖は氷龍解放の責を負ったと・・・。』

『ああ、そう聞いている。』

『違うのだ。』

『・・・え?』

『違うのだよ。』

訳が分からないと言った体のガガギゴ。

そんな彼に向かって、ゆっくりと噛み締める様にドウローレンは言った。

『氷龍達の封印を解いたのは、放逐された者達ではない。氷結界に残った者達なのだ。』

『——っ!?!』

与えられた真実に、ガガギゴは目を見開く。  
その横で、エリアは俯いたまま唇を噛んだ。

「・・・・・・・・・・。」

『・・・・・・・・・・。』

『・・・・・・・・・・。』

沈黙が、辺りを支配していた。

エリアも。

ドウローレンも。

そして、ガガギゴも。

誰も言葉を発しない。

沈黙。

沈黙。

ただ、沈黙。

やがて、それに耐えかねたのか、それとも激情が限界を超えたのか、ガガギゴが口を開く。

『何だ・・・・・・・・？それは・・・・・・・・？』

戦慄く様な声。

震える口が、紡ぐ。

『氷龍達の封印を解いたのは、氷結界の方・・・・・・・・？それじゃあ、何でエリアの一族が・・・・・・・・？』

『原因の一端は、その鏡にある。』

ドウローレンが、エリアの手の中の鏡を示す。

『かの鏡が、氷龍達を御し、封じる力がある事は知っていよう。』

『・・・・・・・・ああ・・・・・・・・。』

頷くガガギゴ。

ドウローレンは続ける。

『その娘の血統は、巫女だったのだ。』

『巫女・・・・・・・・？』

『そう。鏡の管理を任せられるとともに、いざと言う時には鏡を使い、事を収める事を義務とされていた。』

曰く。

時は先の大戦中。

氷結界の中で氷龍解放の主張が出た際、かの巫女とその血族は反対に回った。

その立场上、件の龍達の危険さを誰よりも知っていたであろう彼女

達は、解放派の要求を頑として跳ね除けた。

しかし、ワームと魔轟神の攻勢が強まるに連れ、氷結界の中では徐々に解放派がその数を増していった。

長い時の流れが、氷龍に対する皆の畏怖を薄まらせていたのかもしれない。

そしてついに、その時は来た。

多勢を占めた解放派達が、数の力にものを言わせて強引にブリユーナクの封印を解いてしまった。

それは想定以上の戦果を上げ、解放派を勢いづかせた。

後は、ドミノ倒し。

同盟を組んでいた他の部族の要請も、その流れに拍車をかけた。

それに抗うだけの力は、もう巫女の血族を始めとする反対派にはなかった。

立て続けに解放されていく氷龍達。

しかし、最後の封印を解いた時、全ては変わった。

自由を得たトリシューラは氷結界の抑制を易々と撥ね退け、我欲のままに破壊を謳歌しはじめた。

やがて、それに呼応する様にブリユーナクとグングニールも暴走を始める。

それまで氷龍達のコントロールを担っていた交霊師の力さえもが弾かれた時、解放派の面々は己達の愚行に今更の様に気がついた。

叫ばれ始める、龍達の再封印。

すると、皆の声は当然の様に巫女の血族へと向けられた。

有事において、鏡の力をもって事を収めるは巫女の役目。

傍から見れば不条理この上ない流れに、巫女とその一族は望まれるままに従った。

全ては己の使命と受け入れ、彼女達は氷龍達の元へと向かった。

しかし――

長きの時が、その力を弱めたのか。それとも、歪み軋んだ者達の願いを拒んだのか。

鏡は、氷龍達を縛る事はしなかった。

その戦いで巫女は命を落とし、その血族達も多くの犠牲を出すに終わった。

けれど、そんな彼らの帰還を出迎えたのは、同胞たる氷結界の人々の冷たい視線だった。

自分達の絶望と苛立ちを、彼らは使命を果たせなかった巫女の血族達へと向けた。

暗い憤りの赴くままに、罵倒し、糾弾した。

その時点で、解放派の面々が氷結界の大半を占めていた事も追い打ちとなった。

彼らは数をもって自分達を正当化し、己らの愚行の結果をかの血族の不甲斐なさのせいと転嫁した。

そして全ての責を負わされ、巫女の血族は氷結界から放逐された。吹き荒ぶ雪嵐の中、追い立てられる彼ら。それに添うは、あまりの理不尽さに心を痛めた幾ばくかの民人と、もはや用済みと打ち捨てられたかの鏡のみだった。

『・・・そして、残った解放派の者共は氷結界の末裔として、今もかの災禍と戦う道を強いられていると言う訳よ・・・』

語り終わると、ドウローレンは疲れた様に瞳を閉じ、大きく息をついた。

一方、全てを聞いた筈のガガギゴ。

彼は一言も発する事なく、その場に佇んでいた。

立ち竦んでいた。

メシツ・・・

微かに響く、低い音。

それが彼の腕に力が込められる音だと気づいた者は、果たしていただろうか。

次の瞬間――

グワツ

血管の浮いた腕が伸び上がり、彼女――否、“それ”に掴みかかった。しかし、すんでの所で身をかわされ空を切る。



昏く光る眼差しが彼女に向けられ、低くくぐもった声が呼びかける。

『エリア……。』

「……何……?」

彼の腕から飛び去った少女は、胸にかの鏡を抱きながら訊く。

『その鏡をよこせ……。』

「どうする気……?」

『壊す。そして君を氷結界から連れて帰る。』

その言葉に、エリアの目に一瞬悲しげな影がさす。

「……駄目……。」

そう言って、首を振る。

途端――

『何でだ!?!』

氷洞に響く、激高の声。

エリアが、ビクリと首を竦める。

しかし、ガガギゴは構わない。

『何で君は、そんな腐れた血にこだわる!?!』

高ぶる想いのままに、ガガギゴは吠える。

『こんな馬鹿げた話があるか!?!そんな、そんな道理の通らない理由で、エリアの一族は辛酸を舐めさせられたって言うのか!?!』

彼の怒りは氷結界、その名を冠するもの全てに向けられていた。

『知るか!!もう、知るものか!!氷結界なんて、あの化物達に残さず滅ぼされてしまえばいい!!』

「ギョ!!」

呼びかけるエリア。

しかし、その声も彼を鎮めるには至らない。

『鏡だろう!?!その鏡が、君を縛るんだらう!?!それなら、僕がそれを壊す!!壊して、君をその呪縛から解き放つ!!』

ガッ

たくましい両腕がエリアの肩を掴む。

「!!」

ガガギゴの顔が、エリアのそれに寄せられる。

思わず身を固くする、エリア。

『帰ろう!!帰って、皆との暮らしに戻ろう!!君がこんな事で、こんな所で命をかける必要なんてないんだ!!』

「……………」

『断ち切ろう!!そんなくだらしない因果、ここで切り捨ててしまおう!!そして、自由に!!本当の意味で自由になるんだ!!エリア!!』

なおも言い迫ろうとした、その時、

「…………痛いよ。ギゴ……………」

エリアの口が、か細い声で呟いた。

『!!』

気づけば、ガガギゴの指がか細い腕にギリギリと食い込んでいた。

『す、すまない!!』

慌てて、手を離す。

はつきりと跡のついた腕を撫でながら、エリアは寂しげに笑う。

「ハハ…………。やっぱり、怒った。」

『…………つ!!当たり前だ!!こんな…………こんな事…………!!』

今だ収まらない怒りを抑える様に、牙を食いしぼるガガギゴ。

そんな彼に向かって、エリアは言う。

「ごめん……………」

『…………え?』

「こんな理不尽に巻き込んで、ホントにごめん……………」

そのあまりと言えばあまりにもらしくない態度に、今度はガガギゴが困惑する。

「言われたのにね。嘘だけはやめろって、言われたのにね……………」

寂しげで、悲しげな声が響く。

『いや、それは…………』

「いいよ。」

『え…………?』

「帰って、いいよ。」

突然の言葉。

当惑する。

「今なら間に合う……。あんたとの契約、ここで解くから。帰って。あんたまで、危ない思いする事ない。」

『エリア……。!?』

「嘘ついちゃったの、あたしだもんね……。ありがとう、いままで。」

「ち、違う!!僕が言ってるのは、そんなんじゃない……。』

『……。無駄だ。』

『!!』

突然割り込んできた声に、二人の言い合いが止まる。

『ドウローレン……。』

青氷の虎王が、憂いを孕んだ眼差しで彼女達を見ていた。

『無駄だ、若者よ。其が娘の心は変わらぬ。』

『何……。?』

何かを懐かしむ様な声で、ドウローレンは言う。

『血は争えぬな……。その娘の目、かの巫女の目と同じ光を宿しておる。』

『同じ……。光……。?』

『弱き者を捨てられぬ目。力なき者を慈愛する目だ。』

『!!』

目を見開くガガギゴを憐れむ様に見ながら、ドウローレンは淡々と語る。

『かの氷龍どもが氷結界から出れば、外界の者達が多く犠牲になる。その娘は、それが許せぬのよ。』

『……。それは……。』

『それだけではない。いま氷結界で戦っている者達にも、家族はある。その者達の嘆きまで、聞こえているのだろう。』

何処か愛しげな眼差しが、エリアを映す。

まるで、そこにかの時間が留まっているかの様に。

『誠、かの娘と同じよ……。』

『……。エリア……。』

自分を見下ろすガガギゴから顔を逸らす様に、エリアは俯く。

『わかるであろう？若者よ。その娘を駆り立てるは、くだらぬ血縛などではない。もつと大きく、尊いものだ。』

『・・・っ!!分かった様な事を言うな!!』

諭す氷虎に、それでもガガギゴは噛み付く。

『大体、お前は何なんだ!?そこまで分かっていたなら、何故氷結界の連中を止めなかった!?その娘を、守ってやらなかった!』

『・・・全くだ。』

答えは、酷くあっさりと返ってきた。

『先にその娘が言った通り、氷虎には氷龍どもに対しての抑止力と言う役目があった。当時の我らは、その役目を優先してしまったのだ。奢りがあったのだろうな。霊獣として崇められるうち、人を下等な存在と見下す様になっていた。件の時も、愚物の愚行と箸にもかけなかった。自分らの崇高な役目の前には、取るに足らぬ事とな。しかし、その結果が”これ”よ。』

そう言つて、ドウローレンは自嘲の笑いを漏らす。

『結局、我らの力もトリシューラには通じなかった。仲間は尽く討ち尽くされ、王たる我だけが生き残った。その我も深手を負い、力を失い、こうして生き恥を晒すだけの存在と成り果てている。全く、因果は巡るとはよく言ったものよ。』

ドウローレンはクツクと笑うと、その目を再びガガギゴに向ける。

『さて、若者よ。汝はどうする？確かに、汝はこの縁に関係無き者だ。この先に待ち受けるは真の地獄よ。戻るなら、これが最後の好機となろう。』

『・・・その言葉を、エリアには向けないのか?』

冷ややかな声で問うガガギゴ。

しかし、ドウローレンは首を振る。

『言った所で、聞きはしまい。それほど、この娘の思いは強い。』

『そんな事・・・』

『分かるのよ。その娘の眼を見ればな。』

『・・・』

エリアを見るガガギゴ。

彼の顔を、彼女は見ようとしな  
けれど、その目には確かに強い光が宿っていた。  
しばしの間。

やがて、ガガギゴは大きく息をついた。

『……全く、仕方のないお姫様だ。』

『……行くか?』

『ああ。』

ドウローレンの問いに、頭をかきながら頷くガガギゴ。

『約束したんだよ。何処までもついて行くって。』

「ギゴ……!!」

驚いた様に彼の顔を見るエリア。

そんな彼女に向かって、ガガギゴは言う。

『ただし、これが最後だ。今度隠し事をしてたら、許さない。』

「うん……。」

エリアは頷き、その手を差し出す。

それを優しく取るガガギゴ。

そして、二人の手は再び繋がった。

二人が去った後を、ドウローレンは何かを思う様な眼差しで見つめていた。

『……血縛よりも強く、大きなもの、か……』

誰ともなしに呟く。

『……これが、誠の縁えにしというものかもしれんな……。』

そう独りごちる彼の目には、それまではなかった光が確かに灯っていた。

……目に入るのは、“白”だけだった。

辺りには肌を刺す様な冷気が漂い、岩も大地も、大気ですえも白く凍てついている。

氷禍に侵され尽くした空間。

そこに、大きな氷塊が幾つも転がっている。

十個？

百個？

否。

もつと。

もつと、もつと。

もつともつともつともつともつと。

数え切れない程に転がる、凍てついた結晶。

そのうちの、一つに近づく。

透麗な輝きのその奥に、何かが見える。

目を凝らす。

冷たい壁の向こうに見えたもの。

それは――

「――っ!!」

ンギユツ

思わず叫びかけた口を、大きな手が塞いだ。

『エリア・・・落ち着いて。』

手の主が、耳元でそつと囁く。

『気持ちは分かるけど、今騒いじゃ不味い・・・。』

優しい声が、ざわめいた心を冷ましていく。

口内まで登ってきた声を、エリアは何とか呑み込んだ。

ドウローレンと分かれた後、エリアとガガギゴは鏡の導きに従って

氷洞を進んでいった。

長く長く続く洞道。

終焉などないのではと思いはじめた矢先に、終わりは訪れた。

外に出た途端、鋭い北国の日差しが二人の目を刺す。

堪らず立ち止まり、視界を覆う。

目が光に慣れるのを待つ事、数分。

改めて開いた視界の前に、かの光景は広がっていた。

『しかし・・・酷いな・・・。』

周りを見回しながら、ガガギゴは極力小さな声で言う。

不安を覚える程に立ち並ぶ、無数の氷塊。

その一つ一つの中に収められたものが、彼の眉を潜めさせる。

それは、人。

否。

人だけではない。

動物。

モンスター。

ありとあらゆる生物が、生きていた時そのままの姿で凍てついていた。

『戦士団の人達に、その騎馬達か・・・。』

“彼ら”の出で立ちを見たガガギゴが呟く。

透き通った結晶の中に眠るその表情は、しかし決して安らかなものではなかった。

恐怖。

絶望。

苦悶。

悲哀。

全ての負の想いを貼り付けたまま、彼らの時は凍りついていた。

それを痛ましげに見つめながら、感覚を研ぎ澄ます。

辺りの冷気に混じって流れる、異様な“力”の気配。

恐らくは、この惨状を作り出した者の残滓。

それを感覚が捕える度、氷の刃に脊柱を貫かれた様な悪寒が走る。

先に見た二頭の氷龍。

ブリューナクにグングニール。

漂う力の形は、彼らのものによく似ている。

しかし、圧倒的に違うのはその密度。

先の二頭のそれを大地を凍てつかせる吹雪に例えるなら、今ここに漂うものは世界そのものを枯らす冷禍に等しい。

知らずのうちに、冷えた息を漏らすガガギゴ。

恐れを成した訳ではない。

しかし、本能が忌避していた。

そのあまりにも強大な力を。

そして、それが孕む邪悪さを。

顔を上げ、視界を凝らす。

乱れ並ぶ氷墓の群れの先。

漂う純白の氷霧の向こう。

その先から、力の波動は流れてきていた。

遠くはない。

この先。

そう。

この先に。

いるのだ。

“あれ”が。

心臓が、早鐘の様に打つ。

体中の筋肉が、萎縮する。

ゴクリ

粘ついた唾液が、冷気で乾いた喉を下った。

と、

「んーっ!!んっんっ!!んうーっ!!」

手元から聞こえる声と、伝わる振動が彼を我に返させた。

見れば、自分の手で口を覆われたエリアが、真っ赤な顔をして手足

をジタバタさせている。

・・・息が、出来ないらしい。

『ぐ、ぐめん!!エリア!!』

慌てて手を離す。

エリアはプハツと大きく一吸いすると、続いてゼイゼイと息をつい

た。

「もう!!何すんのよ!?!トリシューラに会う前に死ぬかと思ったじゃない!!」



小声で怒鳴りながら、エリアはガガギゴを睨む。

『い、いや。つい……。』

畏まるガガギゴに、彼女はハアと息をつく。

「……。まあ、いいわ。お陰で気づかれなかったみたいだし。」

言いながら、目の前にある氷塊に目を向ける。

その中には、変わらぬ姿のまま凍てついた戦士の姿。

名も知れぬ彼の頬にそつと手を寄せながら、呟く。

「駄目ね、あたし。この位の事、覚悟してきた筈なのに……。」

『エリア……。』

しばし、祈る様に目を閉じていたエリア。

やがて、目を開けるとその顔を氷霧の向こうへと向ける。

「待つてなさい!!トリシューラ!!」

視線の先にいるであろうその存在に、彼女は凜と言葉を叩きつけた。

「……。この辺りでいいかしら?」

『いいんじゃないか?』

相方とそう言葉を交わすと、エリアは地面に杖を突いた。

目を閉じ、念を込める。

ポウ……

杖を中心に広がる、朱い円陣。

トランプ・スベル  
罨魔法の魔法陣。

『……。アウスさんからか?』これ。』

地面に描かれていくそれを見ながら、ガガギゴは問う。

「ええ。本来地属性の魔法だから、あまりしっくりこないのよね。

術式の構築に手間取るったら……。」

うんうん言いながら、魔法式を構築するエリア。

その様を見ながら、ガガギゴは複雑な表情を浮かべる。

『アウスさんは、この事を分かった上で……?』

「……。言っていないわ。ただ、〃貸して〃って言っただけ。」

『……。分かってたんじゃないのか?あの人の事だから……。』

言葉の意を察したエリアが、咎める様に言う。

「そうだとしても、あの娘に責任はないわよ。あくまで言い出しっぺはあたしなんだから。それに……」

エリアの瞳が、地面を走る光を見つめる。

まるで、その中にかの盟友の顔を見るかの様に。

「何か思う所があれば、ハッキリ言うわよ。あの娘ならね。」

『……それもそうか。』

苦笑いしながら、頷くガガギゴ。

「本当なら、〃これ〃が働いてくれれば一番いいんだけど……。」  
そう言って、懐の鏡に手を当てるエリア。

『仕方ない。前の大戦じゃあ、その鏡はトリシューラを縛らなかつたんだろう？重要な手札ではあるけれど、頼り切るのはマズイ。』

「そうね……。」

話す二人の眼下で形を成す、朱い魔法陣。

「出来た。」

フウ、と息をつきながらエリアが顔を上げる。

『フォール・ホール落とし穴……。』

地面に染み込む様に消えていく魔法陣を見ながら、ガガギゴが呟く。

『上手く嵌ってくれば、トリシューラと言えども無力化出来る……か。』

「そう。そこに契約の証印を押せば、万事丸く収まるわ。」

フンツと胸を張るエリア。

その様を見ながら、ガガギゴは言う。

『過剰な自身は持つなよ。相手は伝説の凶龍だ。一筋縄で行くとは……』

「いかせるの!!」

エリアが語気を強める。

「いかせなきや駄目!!今度こそ……今度こそ、終わりにしなくちや!!」

その目が、周りを囲む氷墓を見回す。

「こんな事は・・・こんな事は、もう・・・!!」  
『エリア・・・。』

ガガギゴの目が、エリアの肩に止まる。  
震えていた。

伸し掛る重圧によるものか。

それとも、抑えきれない恐怖によるものか。

細い肩が、カタカタ、カタカタと戦慄く様に震えていた。

『・・・。』

たくましい腕が、震える肩に回される。

『分かった。やろう。』

『ギゴ・・・。』

『大丈夫、上手くいくさ。いつも横着な君が、こんなに頑張ってるんだ。上手くいかない筈がない。それに・・・』

「それに・・・?」

『君は、必ず僕が守るから。』

クスリ・・・

少女の口元が、微かに微笑む。

『横着だけ余計よ。馬鹿・・・。』

抱きしめる様に回された腕に、小さな手が添えられる。

震えはもう、なかった。

ザシヤツ

踏み出された足が、白い凍土を踏みしめる。

行くな、と喚く本能。

二の足が、一瞬止まる。

けれど。

ザシユツ

力を込めて、纏わる忌避を踏み潰す。

一歩。

また一歩。

近づく。

近づいている。  
確実に。

“それ”の元へ。  
氷霧に覆われた、視界。  
姿は、まだ見えない。

けれど、感じる。  
感じるのだ。

白い世界の向こうに。  
凍てついた大気の向こうに。

“それ”が、いる。  
『・・・近いぞ。』

「ええ・・・。」

領き合い、ささやきあう二人。  
一歩。

また一歩。  
そして—  
ピタリ。

エリアが、歩を止めた。  
それに倣って、ガガギゴも止まる。

彼女達の前には、他のものに比べて遥かに巨大な氷塊。

『デカイな・・・。何だい？これは。』

氷塊をコンコンと叩きながら、ガガギゴが訊く。

「多分、『エンシエント・ゴツド・フレムベル』ね・・・。」

『ゴツド・・・？』

エリアの言葉に、首を傾げるガガギゴ。

「前の大戦の時に、炎の種族が滅びた際に目覚めた太古の焰神よ。  
魔轟神に大打撃を与えたけど、その後トリシューラに倒されたらしいわ。」

『倒されたって・・・神まで滅ぼしたのか!?トリシューラは!!』

「そうよ。何を驚いてるの?」

何を今更と言った体で、エリアは言う。

「エンシエント・ゴッド・フレムベルが伝説なら、トリシューラも伝説の龍よ。何も、不自然な事はないでしょう?」

『いや、そうは言ってもなあ……。』

「どうしたの? 怖くなった?」

言葉を濁すガガギゴを、エリアが横目で見る。

『馬鹿言え。』

「なら、いいわね。」

その答えを予想していた様に言うと、エリアは杖をガガギゴに向ける。

「それよりもギゴ、憑依装着を解くわ。」

『……大丈夫か?』

「大丈夫。少しでも警戒されない様な格好で行かないと。もつとも」

エリアの顔が、ニツと笑う。

緊張を奥に押し込めた様な、強ばった笑顔。

「憑依装着してようがしてまいが、“あいつ”には大して関係ないでしょうけどね……。」

『……笑えない冗談だな……。』

「全くね……。」

アハハ、ウフフと乾いた笑いを交わし合う二人。

その笑いを収め、真顔に戻ってエリアは言う。

「じゃ、作戦通り行くわよ……。」

『ああ……。』

頷き合う二人。

そして、最後の一步は踏み出された。

そこは、それまでの道程とは比べ物にならない程の氷墓に覆われていた。

無数の氷墓がうず高く重なる、その光景。

数え切れない程の命を閉じ込めた、氷獄の宝山。

それを、エリアと憑依装着を解いたギゴバイトは息を飲んで見つめ

ていた。

否。

見つめていたのは、もっと別のもの。

輝く銀氷の山。

その頂きにうづくまる、影。

他の二頭に比べ、一回り程も巨大な身体。

身を覆うのは、氷の結晶を思わせる分厚い外殻。

背から生じる、鋭利な刃の様に湾曲する翼。

何より異様たるは、無脊椎動物の触手の様に伸びた三本の首。

それぞれそれに連なるは、仮面の様に無機質な頭部。

眠っているのだろう。

六つの目は全て閉じられ、口の辺りからは白い吐息が定期的に漏れ  
ている。

『氷結界の龍・トリシユーラ』。

正しく、伝説と詠われた凶龍が、そこにいた。

「……………」

『……………』

エリアとギゴバイト。二人共が、声も出せずに立ち尽くす。

かの存在が放つ邪氣、重圧、そしてその美しさ。

その全てが、圧倒的な存在感となつて二人を絶句たらしめていた。

『これが……………トリシユーラ……………』

「綺麗……………」

忘我のままに、呟くギゴバイトとエリア。

そのまま、どれほどの時が経つただろう。

カランツ

転げ落ちた小石が、小さな音を立てた。

『……………つ!?』

思わず、大声を上げて飛び上がりそうになる二人。

慌ててお互いに口を塞ぐ。

そのまま、チラリと上を見る。

トリシユーラに動きはない。

変わらず、氷墓の山の上で眠りこけている。

それを確認すると、二人はようやくやくお互いの口から手を離す。

心の底からホッと息をつく、二人。

「ちよつと、気をつけてよね!! 気づかれちゃうじゃない!!」

『何言ってるんだい!! 君だって・・・!! 大体、どっちにしろ起こすんだろ!?!』

「心の準備つてもんがあるでしょ!! 準備つてもんが!!」

小声でギャアギャア言い合い、ゼエゼエと息をつく。

「ま・・・まあいいわ。いい? 作戦通りに行くわよ?」

『わ・・・分かった。』

大きく一度、深呼吸するエリア。

そしてトリシューラに向き直ると、大声を張り上げた。

「起きなさい!! トリシューラ!!」

クワン クワン

クワン クワン

発せられた声が、周りの氷壁に反響して鳴り響く。

カランツ ガラガラツ

伝わった振動で、氷墓の山から氷塊が転げ落ちる。いくつもいくつも。

も。大きな音を立てて。

クワン クワン クワン・・・

谷いっばいに響いた声が、尾を引きながら消えていく。

息を呑んで“それ”を見つめる、エリアとギゴバイト。

そして―

ピク　　リ

横たわる巨体が動いた。

三本のうちの、中心に座する頭部。

その目に、ピツと光が走る。

キシシ・・・

氷が軋む様な音を立てて、開いていく目。

昏く落ちくぼんだ、奈落の様な瞳孔。

その闇の奥に、ポウと金色の光が灯る。

光は見る見る周りの虚ろを埋め、爛々と輝く眼となった。  
ググ・・・

真ん中の首が動き、己の玉座の下を見下ろす。  
そこに蠢く二匹の小虫。

それを見とめ、氷龍の王はその目を細めた。

『起きた・・・。』

トリシューラの首が見下ろしてくるのを見て、ギゴバイトが小さく  
眩く。

上から氷の塊で押しつぶされる様な、強烈なプレッシャー。  
先に出会った二頭のそれが、そよ風のようにすら感じられる。

気温は酷く低い筈なのに、気持ちの悪い汗が後から後から吹き出し  
て来て止まらない。

それをローブの裾で拭いながら、エリアは言う。

「上等じゃない・・・。やってやるわよ・・・。」

顔を上げ、自分達を見下ろす金眼をギツと見返す。

そして―

クニヤリ

突然品を作る、細い身体。

白い指が唇をなぞり、艶かしい声が“それ”の名を呼ぶ。

「ねえ。貴方、トリシューラでしょう？あたしは、エリアっていう  
の。」

・・・。  
「噂には聞いてたけど、それ以上ね。凄く、綺麗でカッコイイ。」

・・・。

「あのね、貴方を見込んで、お願いがあるんだけど・・・。」

「お願い。あたしのしもべになって♡」

「・・・。」

しばし流れる、冷たい静寂。



と、

ピキ・・・

トリシューラの仮面の様な顔に、一筋の亀裂が走る。  
ピキピキピキ

それは見る見る広がる、白磁の顔に歪んだ笑みを貼り付ける。  
笑み。

そう。

トリシューラは笑っていた。

新たな獲物を見つけた、歡喜の笑みか。

新たな宝珠を手にする、愉悦の笑みか。

それは、分からない。

ただ、トリシューラは笑んでいた。

その顔を、歪な凶気に歪ませて。

「——っ!!」

冷水を浴びるかのように、身体中を駆け巡る悪寒。

雪崩落ちる邪気が、絡む蛇の様にエリアの動きを止める。

竦み上がる身体。

止まった視界の中で、トリシューラがその顎あぎとを開くのが見える。

ピシピシ・・・ピシピシ・・・

氷がひび割れる様な音を立て、死の亀裂が広がっていく。

ひび割れの間から覗く、無数の牙。その奥で、青白い光が閃く。

エリアはまだ、動けない。

光が、強さを増していく。

そして—

『エリア!!』

ギゴバイトがエリアに体当たりすると、トリシューラの口から光が溢れ出すのは同時だった。

ピシヤアアアアッ

つんざく様な轟音とともに迸る、蒼白い電光。

グガアンツ

光が着弾した場所が瞬時にして凍りつき、次の瞬間爆音とともに

粉々に弾け跳ぶ。

「つ……あ……」

『エリア、大丈夫!?』

「う、うん……!!」

抱き合ったままゴロゴロと転がり、かろうじて電撃と爆発を避けた二人。

体制を立て直しながら、トリシユーラを見上げる。

ガラガラ ガシャンツ

氷墓の玉座を崩しながら、その巨体が動き始めていた。

先まで眠っていた残り左右の首も、昏い光の宿る目を開き、長虫の様に蠢き始めている。

刃の様に鋭い翼が大きく開き、氷霧の果てに微かに見えていた空を覆い尽くす。

氷の剣の様な尾が一凧し、分厚い氷壁を易々と粉碎した。

キシヤアアアアアアツ

咆哮。

周囲のものが、怯える様にビリビリと震える。

世の森羅万象を睥睨し、氷龍の凶王は玉座の上でもう一度雄叫びを上げた。

「——っ!!なんつー馬鹿でかい声……」

ジンジンと悲鳴を上げる鼓膜を抑えながら、エリアは言う。

『それどころじゃない!!来るよ!!』

墓山の上からこちらを見下ろすトリシユーラを見て、ギゴバイトが叫ぶ。

「分かってる!!気合い入れて!!」

『うん!!』

力強く頷き合う二人。

そんな二人に向かって、雪崩落ちてくるトリシユーラ。

三度響き渡る咆哮。

キシヤアアアアアツ

『ま、待て!!話し合おう!!僕達は、きつと、分かり合える!!』

「何馬鹿な事やってんの!?!早く逃げないと殺られるわよ!!」

『何でよりにもよってこんな奴選んだんだよ!?!』

「どうせなら、派手な方がいいじゃない!!でも、アタシの魅力が通じないなんて・・・!!とんだ朴念仁だわ!!」

『あ・・・アンタはアホじゃー!!』

「んな・・・!?!あんた、主人に向かってー!!」

『アホにアホ言って何が悪いー!?!』

「な、何ですってー!?!」

『何だよー!?!』

キツシヤアアアアアツ

『『あつ————!!!』』

迸る氷雷をすんででかわし、わざとらしくバカ騒ぎをしながら走る二人。

その後を、トリシューラが地響きを立てて追う。

しかし、その距離は付かず離れずと保たれる。

『・・・あいつ、何で一気に襲ってこないんだ?』

後ろをチラチラと見ながら、ギゴバイトが怪訝そうな声を出す。

「・・・わざとよ。」

吐き捨てる様に答えるエリア。

『わざと?』

「ええ。」

地を走って来た雷氷が、二人のスレスレを掠めていく。

それを横目で見ながら、エリアは言う。

「わざと間を伸ばして、遊ぶ時間を長くしてるのよ。猫が獲物を玩具にするみたいにね。」

『・・・趣味悪いな。』

青ざめながら、青息を吐くギゴバイト。

「全くね。」

間髪入れず、同意するエリア

「こちらも青ざめながら、それでも不敵な笑みを浮かべる。」

「でも、その悪趣味が命取りよ。今に見てなさい!!」  
そう。

エリア達が走りゆく先。

そこには先刻、彼女が構築した『フォール・ホール落とし穴』が仕掛けてある。

「あそこ誘い込めれば、こつちのもの!!」

その場所まで、あと10m。  
5m。

会心の笑みを浮かべるエリア。

しかし、

ズン!!

重い足音と共に、地響きが止まった。

「え?」

『何?!』

思わず振り返る二人。

トリシューラが、その足を止めていた。

「な、何よ!!何で止まるの!?!」

エリアが叫んだその瞬間、トリシューラの真ん中の首が口を開いた。

クウオオオオオオオオオオンツ

響き渡る咆哮。

途端、爆風のような吐息と共に“何”かがエリア達を襲う。

「キャアツ!!」

『うわああつ!!』

吹き付ける波動の中で、エリアはそれが何かを悟る。

「・・・これは・・・魔力!?!」

彼女がそう理解した瞬間―

ピシ・・・ピシシ・・・

耳に入る、嫌な音。

振り返ったエリアは見た。

“その場所”に浮かび上がる、朱い魔法陣。

先刻、自分が構築した『フォール・ホール落とし穴』の構築式。

吹き荒ぶ魔力の嵐の中、それが悲鳴の様な軋みを上げる。  
凍てつき。

砕け。

崩壊していく。

呆然とするエリアの目の前で、彼女の“切り札”は塵と化して消えた。

「しまった・・・!!」

『危ない!!』

一瞬忘我に至った彼女が、その声を聞くのと強い衝撃を感じたのは  
ほぼ同時だった。

「——っ!!」

細い身体が宙を舞う。

視界の端に、巨蛇の様にうねる尾が見えた。

そのまま—

グワシヤアツ

身体が、地面に叩きつけられた。

「カハツ・・・」

肺の中の酸素が押し出され、鈍い痛みが全身を襲う。

ズル・・・

無意識に、腹部に手を伸ばす。

ヒヤリ

触れたのは熱い臓物ではなく、冷たい鱗の肌だった。

「!!」

思わず顔を上げる。

目に入ったのは、自分の身を守る様にしがみつくギゴバイトの姿。

「ギゴ!!」

痛みを忘れて飛び起き、その身を抱き取る。

「ギゴ!!ギゴ!!しっかりして!!」

恐らくは彼女を庇い、トリシューラの一撃をその身に受けたのだらう。

その背中には、クツキリと尾の跡が残っていた。

「ギゴ!!しっかりして!!しっかりしてったら!!」  
半狂乱でその身を揺する。

反応はない。

「そんな・・・そんな・・・」

もう一度揺すろうとしたその時――

フツ

突然、落ちる影。

「!!」

咄嗟に振り仰げば、今まさに頭上に落ちんとする尾の威形。

「くっ!!」

ギゴバイトを抱いたまま、咄嗟に横に転がる。

ゴガアンツ

打ちつけられた尾が、地を砕く。

バラバラツ

弾ける瓦礫が、身に当たる。

小さな破片が頭部を掠め、朱いものが散るが気にする間はない。

流れ落ちる血を拭い、相方の身体を抱えたまま近くに開いた岩の隙

間に潜り込む。

「ハッ、ハアツ!!」

上ずる呼吸を強引に鎮め、再びギゴバイトの身体を揺する。

「ギゴ!!ギゴ!!」

こみ上げてくるものが抑えきれなくなった時、小さな身体がピクリ

と動いた。

「ギゴ!!」

声をことさら大きくして、呼びかける。

『う、ううん・・・』

小さな呻きとともに、目を開けるギゴバイト。

「ギゴ・・・。よかった・・・。」

力いっぱい、抱き締める。

『エ、エリア!!痛い痛い!!』

ギゴバイトが、悲鳴を上げる。

「ご、ごめんなさい!!」  
思わず、手を離す。

「あつつ……そんなに心配しないで。見た目ほど酷い傷じゃないから。」

背中 of 痣をさすりながら言うギゴバイト。

「でも……」

なおも氣遣うエリアに向かって、苦笑いを向ける。

「大丈夫だって。骨も折れてないし、内臓も無事みたい。戦えるよ。でも……」

怪訝そうに、頭を捻る。

「むしろ、何で無事だったんだろ？ミンチになるくらい、覚悟してたのに……。」

ミンチ。

その言葉に背筋を震わせながら、エリアは言う。

「……わざとよ。」

『へ?』

「言ったでしょ。トリシューラは少しでも遊びたいのよ。だから、わざと手を抜いたの。」

『はは……なるほど。じゃ、その悪趣味のお陰で命拾いした訳か……。』

苦笑しながら、身を起こすギゴバイト。

『痛っ……!!』

全身に走る痛みにも、顔をしかめる。

「ギゴ……無理しないで。」

ギゴバイトの頭に、そつと手が添えられる。

「ごめんなさい。あたしのせいで……。」

『……エリア?』

「もう十分よ。貴方はここで休んでて。」

『え……?』

「後は、あたしがやるわ……。」

それを聞いたギゴバイトが仰天する。

『何言ってるのさ!! たった一人で、あんな化物相手に出来る筈ないだろ!!』

その言葉に、フンと鼻を鳴らすエリア。

「そっちこそ何言ってるのよ。そんなボロボロで、何が出来るの?」

『・・・・・・・・!!』

「足手纏いよ。ここで、あたしの力つてやつを見てなさい!!」

そのまま、外に向かおうとするエリア。しかし―

「!!」

そのローブの裾を、ギゴバイトの手が掴んでいた。

『エリア、もう嘘はつかないって言う約束だよ。』

「ギゴ……。」

『ほら、足が震えてる。』

金色の眼差しが、エリアを見つめてニコリと微笑む。

『一緒に行こう。僕達は、パートナーだろ?』

「・・・・・・・・。」

滲む視界をゴシゴシと拭い、少女はコクリと頷いた。

その頃、トリシューラは岩の亀裂の外でジツと“そこ”を見つめていた。

岩壁を砕く事もせず。

亀裂を抉る事もせず。

ただ、ジツと待っていた。

目の前の壁を壊して、中の獲物を引きずり出すのは造作もない事。

しかし、彼はあえてそれをしなかった。

そんな事をして、事を早く終わらせる気は毛頭なかった。

三つの頭が、六つの目で亀裂を見つめる。

昏い光を宿す眼差しが、キュウと細まる。

・・・気に入らない気配だった。

忌々しい香りだった。

今より昔。

ずっと前。



永代の時を生きてきた自分ですらも、長いと思うそんな昔。

自分をあの封印に縛った、あの人間。

今より少し前。

僅かの間。

長世を経て来た自分にとっては、またたき一つにも足りない時間。

自分を再び縛ろうとした、あの女。

それと同じ気配が。

それと同じ香りが。

あの獲物からしていた。

またか。

また自分を縛ろうというのか。

結構な事だ。

忌々しい封印から解放された、僅かな時間。

この地から出る事自体は、簡単だった。

残った理由は、ただ一つ。

ここで待てば、必ずこの気配を持つ者が現れると確信していた。

そして。

そして、確かに。

その者はやって来た。

あの頃と同じ、気配をたたえて。

あの時と同じ、香りをまとって。

砕いてやろう。

其が身体を。

二度と、そんな不遜を抱けぬ様に。

刻んでやろう。

其が魂に。

二度と、そんな愚行を計れぬ様に。

さあ。

さあ。

早く。

早く。

出てくるがいい。

我が牙の前に。

我が爪の下に。

はやる。

猛る。

凶気が、飢える。

のたうつ本能を抑えながら、トリシューラはただその時を待った。

「・・・なんて事を、考えてるんでしょうね。小憎たらしい。」

亀裂の隙間から外を覗き見るエリアに、ギゴバイトが問う。

『でも、キツイのは確かだろ。さっきの「アレ」、何?』

『デスペラード・ハウル虚壊咆哮』』

『デスペラード・ハウルデスペラード・ハウル?』

「トリシューラの咆哮には、魔力があるの。その圧倒的な波動で魔力磁場を崩壊させて、召喚式や魔法、果ては構築中の術式まで消し飛ばしてしまうのよ。」

その言葉に、目を丸くするギゴバイト。

『なんだいそれ!?まんまインチキじゃないか!!』

「だから、悟られない様に構築式の見えない罫トランプ・スペル魔法を使ったんだけど・・・。思ったより鼻が効くみたい。すっかり予定が狂っちゃった。」

やれやれと言った体で首を振るエリア。

『じゃあ、どうするのさ。他に手はあるの?』

相方の問いに、しかし彼女は胸を張って答える。

『あるわよ。』

『その心は?』

「力押し。」

ズゴッ

ずっこけるギゴバイト。

『ちよ、ちよっと、エリア!!そんないい加減な!!』

「いい加減じゃないわよ。いくらあいつだって、あんな大技連発出来るはずないわ。絶対次までに間が空く筈だから、そこを手数で畳み

込む!!」

『大雑把だなあ……。』

呆れ顔のギゴバイト。

けれど、エリアはめげない。

「いいのよ。やつぱり、策を弄するなんてエレガントじゃなかったわ。横っ面張って傅かせてこそその下僕よね。」

『うわあ、怖い。ヒータさんが伝染ったかな?』

「何よ。それ。」

肩を竦める相方に笑いかけると、ふと思いついた様に唇に指を当てる。

「ヒータか……。そういや、あの娘に香水借りたまんまだったわね。」

『借りた?勝手に使ったの間違いじゃないの?』

「返すんだからいいのよ。」

『そんなお金あるの?ウインさんにも新しい甘味屋さんに誘われてるんでしょ?』

「あれはあの娘の奢りよ。そういや、ダルクにも誕生日プレゼントのお返しもらってないわね。」

『メモ帳一冊渡しただけじゃない。それ言うなら、コーヒーこぼしちゃったライナさんのアドレス帳の修復もしなくちゃ。泣いてたよ。ライナさん。』

「うわ、めんどくさ!!あの娘の”ともだち”って何人いるのよ?気が遠くなるわ。」

『アウスさんに、修復魔法の構築式教えてもらわないとね。対価が安く済めばいいけど。』

「……。そう言えば、『フォール・ホール落とし穴』の対価がまだだったわ……。」

『マジ!?じゃあ、ちゃんと返さなきゃ!!でないと、一生……。いや、死んでからも、スピリット霊体召喚されて下僕にされちゃうかも!!』

「……。やりそうだわ……。」

青ざめた顔で頭を抱えるエリア。

そんな彼女を見ながら、ギゴバイトが笑う。

『つまり……』

「こんな所で、死んでられないって事ね!!」

『そう言う事!!』

顔を合わせ、笑い合う。

そして――

「行くわよ!!」

『うん。』

重なり合う、二人の影。

眩い光が、昏い空間を照らした。

ピシリ

閉ざされていた眼差しが、軋む様な音を立てて開いていく。

昏い眼孔を彩る暗金色の光が、その焦点を眼前の亀裂に合わせていく。

暗かった岩壁の亀裂に、蒼い光が満ちていた。

感じる、魔力の波動。

ピキキキキ・・・

無表情だった三つの顔。

それに、ひび入る様に広がっていく笑み。

氷色ひいろの身体が、重い音を立てて動き出す。

来る。

来る。

さあ。

おいで。

おいで。

おいで。

氷刃の爪を軋らせて。

薄氷の牙を軋ませて。

仮面の顔を歪ませて。

ゆっくりと腰を落とし、光の満ちる亀裂を覗き込む。

その瞬間――

ギョーンッ

閃く、蒼い閃光。

それが、真っ直ぐに彼の目へと向かう。

慌てる必要はない。

ほんの少しだけ、視線をずらす。

ギャガガガガンツ

目標を逸らされた蒼閃は、目の横の鱗を滑りながら後方へと流れていく。

ズガガアンツ

それが反対側の岩壁に着弾するのを見届けると、彼はゆつくりとその身を起こした。

『ゲホ……。だ、大丈夫か!? エリア!!』

勢い余って岩壁に突っ込んだ彼女に向かって、クツション替わりになつたガガギゴが訊く。

「あつつ……。何よ、あいつ!! デカイわりに反応良すぎ!!」

頭の石屑を払い落としながら、エリアが毒づく。

『言ってる場合じゃない!! 横!!』

相手の声に、咄嗟に頭を下げる。

グオンツ

瞬間、その上を轟音と共に通り過ぎる巨木の様な尾。

逃げ遅れた髪が数本、ハラハラと悲しげに散る。

「こんの!! 乙女の髪をよくも!!」

憤慨するエリア。

その目の前で、身を起こしたトリシューラがゆつくりとこちらを向く。

エリア達の姿を視界に収めたそれは、白い顔に亀裂の様な笑みを浮かべた。

「涼しい顔で余裕かましてんじやないわよ!!」

手にした杖が光を放ち、鋭い水流を纏う。

「これでどう!? 『蒼の麗槍』!!」

声とともに、槍の様な水流が飛ぶ。

狙いはまた、トリシューラの目。

しかし、今度も軽く首を揺らすだけでかわされる。

狙いのそれた水槍は硬い氷の鱗に弾かれ、散った。

「ちいっ!!素早い!!」

舌打ちをするエリア。

憑依装着したエリアの特殊攻撃、『蒼アジュール・ソヴァジヌの麗槍』。

相手の防御を貫通してダメージを与える効果を持っているが、トリシューラの防御は固く、それもままならない。

『厄介だな。「大男、総身に知恵が回りかね。」とはいかないみたいだ。』

言いながら、水撃を放つガガギゴ。しかしそれも氷の鱗に弾かれ、ダメージを与えるに至らない。

トリシューラの三つ首が、嘲笑う様に口を開く。

それぞれの口腔に灯る、青白い光。

『エリア!!来るぞ!!』

「分かってる!!」

ガオオンツ

空気をつんざく轟音。

乱れ飛ぶ雷光が、周囲を爆砕し、凍てつかせていく。

飛び交う冷光と氷塊の嵐をかくぐりながら、エリアとガガギゴは攻撃を放つ。

しかし、当たりはすれど効果はない。

一方、トリシューラの放つ雷撃は凄まじい威力なれども、それ自体はエリア達の身をかすりもしない。

目測が甘い訳ではない。

事実、電光の幾筋かは、からかう様にストレスを通り抜けていく。わざと。

遊んでいるのは、明白だった。

忌々しげに顔を歪めるエリア。

「つとに性格悪いわね。絶対、女の子にもてないわ!!」  
言いながら、クルリとトリシューラに向き直る。

『エリア!?!』

「罅があかないわ!!<sup>スベル</sup>術を使う!!」

―術―<sup>スベル</sup>

その言葉に、トリシューラがピクリと目を細める。

初めて見せる、警戒の気配。

そんな彼に向かって、エリアは杖を突き出す。

先端に灯る、螢緑の光。

(さあ、来なさい!!)

心の中で呟く。

トリシューラの中首が、口を開ける。

その中から、溢れてくる膨大な魔力の波動。

そして―

クウオオオオオオオオオオオ

響き渡る、破術の咆哮。

杖に収束していた光が凍てつき、消し飛ばされる。

(かかった!!)

吹き付ける魔力の嵐の中、エリアはほくそ笑むと杖を持つ手とは反

対の手を開いた。

そこに展開する、新たな魔法陣。

術の並行励起。

先に灯した魔光は囿。

今、この手にある術式こそ本命。

術の名は、<sup>エターナル・スベル</sup>永続魔法『<sup>ウオーター・ハザード</sup>災厄の水面』。

それは起動に伴い、術者の代わりに水属性の下僕一体を召喚する魔法。

エリアはこれと自身による召喚で手駒を増やし、能力使用後の“間”に陥っているトリシューラを数で畳み込むつもりだった。

事実、先の咆哮の余韻はまだトリシューラを縛っている。向こうが体制を立て直すよりも、こちらの戦線構築の方が確実に早い。

(行ける!!)

彼女が確信したその時―

『エリア!!』

ガガギゴの、切羽詰まった声が耳に突き刺さった。

「!?」

ハツと視線を動かすと、こちらを見つめる昏い輝きと目が合った。

それは、トリシューラの三つ首のうちの別の一本。

カツと開いた歯牙の奥に渦巻く、魔力の気配。

それが何かを察したエリアの身体から、急激に血が引いていく。

「そんな—」

—早すぎる—

彼女が言葉を形にする前に、それが放たれる。

クウオオオオオオオオオオオオオオオ

三度響き渡る、魔性の咆哮。

凍てつき、砕け散る魔法陣。

「———っ!!」

愕然とするエリア。

途端—

ゾクリ

更なる悪寒が、彼女を襲う。

振り返る。

反対側の首が、こちらを見つめていた。

昏く光る眼差しが言う。

『もう、飽いた。』と—

ギチチ・・・

軋みを上げて、顎あぎとが開く。

その中に収束する、青い光。

それが、先までの雷光とは違うと察した時にはもう遅い。

ゴバアツ

暗い口腔から吹き出す、青白く輝く氷の竜巻。

瞬間、全てが暗転した。



ギャガガアガガガッ

圧倒的な力の奔流が、全てを飲み込む。

大気は引き裂かれ、霧氷と変わる。

大地は抉り砕かれ、氷塵と化す。

あらゆる存在を凍て壊し、暴君の氷嵐は踊り狂う。

ヒウウウウウウ・・・

やがて、すすり泣きの様な余韻を残し狂える嵐は消えていく。

後に残されるは、見る影もなく破壊された氷獄の光景。

そして――

『あ・・・くう・・・』

身に被さった氷礫を押し付け、何とか這い出す。

氷片が張り付き、強張る身体がパキパキと悲鳴を上げる。

荒い息をつきながら己の身を見た時、“彼”は目を見開いた。

身体が、『ガガギゴ』から『ギゴバイト』に戻っていた。

『憑依装着』が解けている。

それは、術者からの魔力供給が途切れた事を意味する。

『――っ!!』

最悪の事態が脳裏を過ぎる。

『エリア・・・エリアーッ!!』

喉に満ちる冷気にむせ込みながら、必死にその姿を探す。

と、その目に見慣れた色が飛び込んで来た。

涼やかな清流の様な、水色の髪。

見間違える筈もない、その姿。

『エリア!!』

彼女は下半身を瓦礫に埋め、うつ伏せに倒れていた。

ボロボロのその身は、ピクリとも動かない。

気絶しているのか。それとも――

『エリア・・・待ってて・・・今、行くから・・・』

全身にまわりつく痛みを押し、彼女に向かって必死に這いずる。

と――

フツ

彼らの上に落ちる、昏い影。

思わず見上げる。

そこにあつたのは、こちらを見つめる六つの目。

トリシューラが、覆いかぶさる様にして彼らを見下ろしていた。

ググツ

三つの頭のうち、中の首がゆっくりと降りてくる。

それが向かうのは――

『な、何を……!?!』

呻く様な声を上げる、ギゴバイト。

薄く開いた亀裂の様な口が、エリアの身体をつまみ上げた。

ガララ……

されるがままのエリア。

その身に被さっていた瓦礫が、音を立てて崩れていく。

彼女を持ち上げたトリシューラは、舌を器用に動かすとその身体を

牙の上に乗せた。

『あ……ああ……』

その意図を察したギゴバイトが、戦慄く様な声を上げる。

『や……やめろ……』

震える声が、訴える。

けれど、トリシューラの動きは止まらない。

『頼む……やめてくれ……』

鋭い牙が並んだ顎あぎとが、見せびらかす様に大きく開く。

死の断頭台に乗せられたエリアの姿が、酷くか細く見えた。

やがて、顎あぎとが閉まり始める。

すぐにではない。

別れを惜しませるためか。

それとも、少しでも苦しみを長引かせるためか。

ゆっくりと。

酷く、ゆっくりと。

『駄目だ……。駄目だ……。』

少しでもそれに近づこうと、ギゴバイトは這いずる。けれど、何も出来ない。

出来る筈もない。

顎あごが閉じる。

鋭い歯牙が、エリアの身体に喰い込む。

小さな口が、苦悶するかの様にカハリと息を漏らす。

あと数秒で、牙の群れがその身体を噛み潰すだろう。

『やめろおおおお——っ!!』

ギゴバイトの口から迸る、血を吐く様な叫び。

それが、絶望の慟哭に変わろうとしたその時、

『—受け止めよ。若者—』

そんな声が、耳に届いた。

一瞬、唾然とするギゴバイト。

そして—

ゴオアアアアアツ

突如、響き渡る轟音。

谷全体が、怯える様に振動する。

それが、何者かの咆哮だと気がついた瞬間、

ゴウンツ

突如押し寄せる、猛烈な力の波動。

薙ぎ払う様に、トリシユーラを打つ。

ギシヤアアアアアアツ

不意をつかれたトリシユーラ。

その身が傾ぐ。

開いた口から落ちる、エリアの身体。

『エリア!!』

渾身の力を振り絞る。

凍てつきかけた四肢が、砕けるかと思うほどに悲鳴を上げる。

けれど、構わない。

無我夢中で飛び出す。

落ちてくる身体。

全身で抱き止める。

ガラツ ガラガラッ

その勢いのまま、氷礫の山を転げ落ちる。  
けれど、その手は離さない。

絶対に。

絶対に。

離さない。

やがて、転がっていた身体が止まる。

『ハアッ!!ハアッ!!』

息をつくのももどかしく、腕の中の少女を見やる。

『エリア!!エリア!!』

呼びかけながら、その身を揺する。

すると――

「う……あ……?」

か細い声と共に、閉じていた瞳が薄く開く。

『――っ!!エリア!!しっかりして、エリア!!』

微かに灯った種火に息を吹きかける様に、たゆたう意識に呼びかける。  
る。

「あ……ギゴ……?」

反応が返る。

虚ろだった瞳に光が戻り、その中にしかとギゴバイトの姿を映す。

『エリア……。良かった……。!!』

半泣きの表情で、エリアを抱き締める。

「どうしたの?ギゴ……。あれ……。何だろ……。?さつきと、ぎゃ、く……。!？」

意識が明確になるにつれ、エリアの顔に血が上がっていく。そして

「きゃああああああつ!!」

絶叫とともに、突き飛ばした。

『んぎゃっ!!』

不意をつかれたギゴバイト。

そのままコロコロと転がり、後ろの氷壁に後頭部を打ち付ける。

『な、何すんだよ?!』

頭の周りに星を飛び回らせながら、抗議するギゴバイト。

対するエリアは自分の身をかき抱き、真つ赤な顔で涙目になりながら抗議する。

「何じゃない!!どさくさに紛れて何してんのよ!?!このエツチ!!ドスケベ!!」

『んな・・・!?!そんなつもりじゃ・・・ってか、そんな事言ってる場合じゃないだろ!!』

エリアの言わんとしている事に気がついたギゴバイト。

こちらにも真つ赤になりながら、弁解する。

「うるさいうるさいうるさい!!大体、もつとシチュエーションってもんを考えなさいよ!!何だって、こんな所で・・・!?!」

言いかけて、ハツと口を抑える。

『・・・は?』

「あ・・・」

目を丸くするギゴバイト。

エリアも口を覆ったまま、固まる。

流れる、気まずい時間。

双方が、それに耐え切れなくなったその時―

『クク・・・。誠、若いいう。』

上方からそんな声が響き、同時に大きな影が降ってきた。

ドズウウン

重い音とともに、エリア達の前に降り立った者。

それは、蒼白の剛毛に包まれた一頭の巨虎だった。

『無事・・・とは言い難いが、とりあえず生きてはいる様だな。娘よ。』

「ドウローレン・・・。どうして・・・?」

状況が飲み込めないと叫んだ体のエリア達に向かって、氷虎の王は笑いかける。

『なに。久方ぶりの若い気にあてられてな。あのまま時に流されて朽ちゆくよりも、一つ死に花でも咲かせてみようかと思っただまでよ。』

「ドウローレン……。」

そんな彼に向かって、身を起こそうとするエリア。  
その視界の向こうで、巨大な影が蠢く。

ズズズ……

ゆつくりと身を起こす、トリシユーラ。

ウネウネとうねる三つ首が、忌々しそうに皆を見据える。

折角の享樂を邪魔されたせいだろうか。

その眼差しは、明確な怒りに燃えていた。

ピシリ

三つの頭が同時に口を開く。

それぞれの口中に灯る、青白い光。

『まずい!!くる!!』

ギガアアアアアツ

一斉に放たれる、三つの雷閃。

しかし――

ゴオオアアアアアツ

再び、ドウローレンが吠える。

その波動が一本の雷撃とぶつかり、相殺する。

残るは二本。

それを迎え撃つため、身構えるエリアとギゴバイト。

けれど、氷壊の雷光が二人に達しようとしたその時――

ザツ

二人の前に、二つの人影が立つ。

ドウローレンが言う。

『おう、言い忘れていたが……』

キラリ

エリアの瞳に映る、鏡の輝き。

「禁!!」

凜と響く声。

それとともに光が眩き、雷光が弾かれた様に軌道を変える。  
一方、ギゴバイトの視界を塞いだもの。

それは、目に痛くひるがえる真紅のマント。

「嘖っ!!」

気合いの声とともに双身の刃が閃き、迫り来る雷光を弾き飛ばした。

グガッ

ゴガアッ

軌道を外された雷撃は、それぞれが岩壁や地面をえぐる。

それを横目で見ながら、ドウローレンはトリシューラに向かってにやりと笑みを浮かべる。

『此度の戦、名乗りを挙げるは我ばかりではないぞ。』

その言葉を聞きながら、エリアとギゴバイトは目の前の二人を唾然と見つめる。

「・・・身の安全は保証しないと云った筈ですが?」

“彼女”はそう言いながら、エリアに向かって振り返る。

「あんた・・・。」

「話はドウローレン様から聞きました。全く、かの血筋の者が何をノコノコ戻つて来たのかと思えば・・・。」

手に下げた鏡がシャラリと鳴って、目を丸くしているエリアの顔を映す。

「今になってまだ、そんなカビの生えた血縛に囚われていたとは・・・。いいですか?」

細い指が、ビシリとトリシューラを指す。

「あれは、氷結界氷々の罪なのです!!放逐された貴女方には、もう一切関係のないもの!!だから、」

そのまま、今度はビシリとエリアを指差して、

「貴女はとつと帰って、外界でのほほんと暮らしてればいいんです!!」

氷結界の風水師は、ピシャリと言い渡した。

ピクリ

その言い様に、エリアの米神がヒクつく。

「何偉そうな事言ってるのよ!!大体、氷結界あんた達がいつまでももたつい

てるから・・・!!」

「それが余計な事だと言うんです!!」

「何ですってー!!」

「何ですかー!?!」

ぎゃあぎゃあと言い合う、少女二人。

それを見た、赤マントの武人が笑う。

「随分と、姦しいな。まあ、あの様子なら心配はないか。」

『あ・・・あんたは、さつきグングニールと戦ってた・・・?』

問いかけるギゴバイトに、武人は「応。」と言って己の身体の鎧を見せる。

そこに刻まれるは、Xの紋章。

『X・・・セイバー・・・』

『『ガトムズ』だ。戦士団の指令を担っている。先だつては、部下が世話になつたらしいな。』

『あ・・・』

ギゴバイトの脳裏に、先刻助けた獣人戦士の姿が浮かぶ。

「氷龍の巫女の血筋の者が見届け人となるか。これも因縁というものだろう。」

鎧の中の双眼が、トリシューラを見据える。

「この戦、今日で終わらせよう!! 散つていった同胞の魂と、この剣にかけて!!」

ガトムズが吠えた、その途端――

オオオオオオオオオオ

周囲から一斉に上がる、時の声。

いつの間集まったのだろう。

幾人もの軍勢が、トリシューラを取り囲んでいた。

その中には、Xの紋章の入った装備を身につけている者も何人か見受けられる。

『凄・・・』

啞然としながら呟くギゴバイト。

エリアの目は、戦士団とは反対側に現れた者達に注がれている。



東洋風の衣装に、氷の結晶を模した装備。

「・・・氷結界・・・。」

その姿に、妙な懐かしさを感じたのは気の迷いだらうか。

「ブリューナクとグングニールは別働隊が抑えている!!皆はトリシューラに全力を尽くせ!!」

響き渡る、ガトムズの指令。

「了解!!」、「承知!!」と言った声が飛び交う。

それとともに始まる、トリシューラへの総攻撃。

戦士団からは、矢や投石、爆弾の類や鋭い剣閃。

氷結界の陣営からは次々に魔法陣が展開し、氷弾や雷弾が飛ぶ。

瞬く間に爆炎に覆われて行く、トリシューラ。

ギシャアアアアアアアッ

響き渡る、怒りの咆哮。

爆煙の中から伸びてきた首が、氷雷を放とうと口を開ける。

しかし、

『させぬ!!』

ドウローレンが吠える。

相殺され、氷塵と散る氷雷。

その背後から、双刃を構えたガトムズが跳躍する。

『身剣一体!!』

眩い光を帯びる身体。

『セイバー・スラッシュ!!』

閃く剣閃。

光の刃が炸裂し、トリシューラの首を揺らした。

「・・・始まりましたね。」

風水師がエリアとの言い合いを止め、戦場を見やる。

「ちよつと、あんた・・・」

「言ったでしょう。この事はもう、貴女が負うものではないのです。大体、その様でどうやって戦いますか? 足手纏いです。ここで大人しくしててください。」

「むう……。」

慌てて立ち上がるうとしたエリアに向かって、そう言い捨てる風水師。

反論出来ず、黙り込むエリア。

と、そんな彼女を見下ろしていた風水師が呟く様に言葉を漏らした。

「……困るんですよ。もう、間違いを重ねる訳にはいかないのに。」

「……は？」

訳が分からないと言った顔をするエリア。

そんな彼女に、風水師は腰を屈め視線を合わせる。

「前の大戦で、貴女の血族が放逐されるきっかけを作ったのは私の祖父です。」

「……え？」

言葉を失うエリアに、風水師は続ける。

「当時、祖父は大僧正として氷結界の中核の一角を担っていました。そしてその役目故、一族に人一倍強い誇りと親愛を抱いていました。」  
視線の向こうで、白い爆発が起こった。

巻き込まれた人々の、悲鳴が響く。

「故に、許せなかったのでしょうか。ワームや魔轟神達の暴虐を。だから……。」

風水師は一瞬目を伏せ、そしてもう一度視線をエリアの瞳に合わせてた。

「彼はその権限を使って、三龍の封印を解きました。」

「……!!」

目を見開くエリア。

響く爆音が、酷く遠くに聞こえる。

「その結果はご存知の通り。三龍は暴走し、氷結界は瓦解の瀬戸際に立たされました。」

立て続けに起こる爆発。

一撃で、放たれた矢の幾倍にも値する数の人々が倒れていく。

「祖父は一族の崩壊を防ぐため、巫女を失い力を失った貴女達の血

族に全ての罪を負わせたのです。」

「……………」

「許してくれとは言いません。ただ、祖父が間違っていたとも思いません。」

次々と炸裂する氷雷。

いくらドウローレンやガトムズ、X―セイバーの面々が善戦しても、彼らの域に立てる者はひと握りに足らず。

多くの者は、トリシューラの反撃に術なく倒れていく。

増えていく負傷者。そして、骸。

大勢は決しつつかあった。

「統治者の一人であった祖父を失えば、ガタの来ていた氷結界は文字通り崩壊したでしょう。そうなれば、知識のない外界の軍勢だけで三龍を抑える事は不可能。あれは、先を見越した上での判断だったのです。」

グウガアアアアアンツ

突如、右手の山壁が崩れ落ちた。

巻き立つ土煙の中から現れる、巨大な長虫の如き姿。

ギシャアアアアアアアッ

響き渡る咆哮。

「ブリューナクダー!!」

誰かが叫んだ。

その姿を見とめたガトムズが、齒噛みをする。

「く……、突破されたか!!」

兵達の間には、目に見えて動揺が広がっていく。

「うろたえるな!!向こうの軍と合流して、陣営を立て直せ!!そして……………」

ピシ……ピシシ……

ガトムズの声を遮る様に、不気味な音が響く。

振り向けば、反対方向の山壁を貫く七色の光。

次の瞬間、木っ端微塵に砕け散る山壁。

ズシリ

フシユウウウウウウウ・・・  
重い足音と奮起音ともに、ユラリと歩み出てくる巨体。

「・・・グングニールまでもか・・・。」  
トリシューラを囲んでいた筈の軍勢。

しかし、今は逆に三頭の氷龍に包囲される形となっていた。

「こやつら、今まで共同戦線など張った事はなかるうに・・・。」  
剣を構えつつ、三頭を見回すガトムズ。

彼の背を守る様に立ったドウローレンが、苦笑いしながら言う。

『大方、懐かしく忌まわしい気配に釣られて来おつたのだろう。昔年の借りを返そうとな。』

「それはそれは。随分と義理堅い事だ。」

『全くよ。』

豪快に笑い合う二人。

そして、氷虎の王は言い渡す。

『さて、これまでの助力、感謝する。』

「はて。何の事か？」

とぼけるガトムズ。

ドウローレンは構わない。

『この戦、元来貴殿達には関係なき事。後は我が防ぐ。残った者を連れて、逃れられよ。』

「何を馬鹿な事を。背の傷は、戦士の恥。」

『ガトムズ殿・・・。』

「言うな。この戦、もはや氷結界<sup>貴方方</sup>だけの問題ではない。外にいる民家族。そして、散っていった同胞達のための戦いでもある。そこから逃げる臆病者など、我が部下には一人もいはしない。」

その言葉に、彼らを中心に陣営を組んでいた戦士達が頷く。

それを見たドウローレンが、わざとらしく溜息をつく。

『誠、不器用な事よ。』

「その言葉、そっくりお返ししよう。」

そして、二人はまた豪快に笑いあった。

「・・・ここまでの様ですね。」

ブリューナクとグングニールの姿を見た風水師は、そう言って腰を上げる。

「待って!!これを・・・!!」

エリアは懐に手を入れ、氷結界の鏡を取り出す。

「これを使えば、ひよつとしたら・・・」

しかし、風水師はそれを見下ろすと鼻で笑う。

「今更、そんなものが何になると?前の大戦の時にも役に立たなかった、ガラクタじゃないですか?」

「う・・・」

確かに、この後に及んでも鏡は沈黙を保ったままだった。

悔しげに唇を噛むエリアを見ながら、彼女は言う。

「それは、貴女が持っていてください。後に氷結界と言う一族がいたという、証になります。」

「証って・・・」

エリアに向けられた風水師の顔が、ふと寂しげに微笑む。

「どの道、私達にそれを使う資格はもうないのです。あの日、全ての罪をその鏡と貴女達に被せたその時から・・・」

「え・・・?」

「祖父は、今際の際まで悔やんでいたそうです。己の愚かさど、貴女達に成した仕打ちの事を。」

「・・・」

「罪は、あるべき場所に帰って来ました。〃これ〃は、全て私達が持っていていきます。」

「あなた・・・」

「貴女には感謝します。血族が犯した過ちを、償う機会をくれたのですから。祖父も、浮かばれる事でしよう。」

そして、風水師は戦の場へとその身を向ける。

「貴女は生きてください。祖父のために・・・そして、私達のために!!」

「待って!!」

エリアの声を振り切る様に、トリシューラに向かって走り出す風水

師。

その向こうで、氷龍達の口に光が灯る。

「——っ!!」

エリアの声は届かない。

次の瞬間、氷白の爆発が視界を覆った。

—6—

「ドウローレン様!!ガトムズ様!!私の後ろへ!!」

「風水師殿?」

『馬鹿な!!逃げよ!!』

その声を無視して、風水師は陣営の前に出る。

目の前に迫る、純白の氷嵐。

それに向かって、手にした法鏡を構える。

ズウンツ

「くうっ!!」

両手にかかる、凄まじい圧力。

細い腕がミシリと悲鳴を上げ、鏡にピシリとひびが入る。

否。

そう感じる間がある事こそが、一つの奇跡だったのかもしれない。

氷結界の龍。

伝説の魔龍。

その三頭の攻撃を同時に受けてその身を保つなど、本来有り得る事ではないのだから。

けれど、その奇跡を風水師は起こし続けた。

鏡が砕けゆくのを知りながら。

己が身の組織が崩壊していくのを感じながら。

それでも彼女は、そこに立ち続けた。

霞む目が、氷嵐の向こうの姿を見つめる。

「氷龍<sup>あなた達</sup>は、氷結界<sup>私達</sup>の罪……。」

この血の呪縛も。

「だから、あなた達は私が贖う……。」  
その血が犯した罪も。

「終わりにします……!!」  
それらに抗い続けた日々も。

「逝きましよう……!!罪私と共に……!!」  
鏡を支える手に、力を込める。

白い嵐が、歪む。

「さあ……。」  
死の嵐が、逆巻く。

「さあ!!」  
手の中の法鏡が、最後の力を振り絞る様に光を放つ。

そして—  
クウオオオオオオオオオオオ

叫びが響いた。

デスベラードハウル  
『虚壊咆哮』

全てを無に帰す、滅びの咆哮。

「あ……」  
手の中の鏡から、急激に力が消えてゆく。

パキンツ  
力を失ったそれは、あつけなく凍てつき、砕けて散った。  
ゴウツ

抵抗が消えた氷嵐が、鬱憤を晴らす様に襲いかかる。

雪崩くる、純白の死。  
それを、風水師は酷く覚めた思いで見つめていた。

恐怖もない。  
後悔もない。

ただ、かの災禍を自分達の手で絶てない事が悔しかった。  
この戦で、自分の血族は生き残れるのだろうか。

この縁は、これからも皆を縛り続けるのだろうか。  
いつの日か、この災禍を絶つ者は現れるのだろうか。

分からない。

分かる術など、ありはしない。  
分かる事は、ただ一つ。

自分はもう、終わりと言う事。

全ての思考が、白く霞む。

途切れ途切れになる意識の中で、微かに思う。

どうか。

どうか。

貴女は。

貴女だけは生きて、と。

「あんた、バカア!？」

突然の叱咤が、手放しかけた意識を蹴り返した。

夢から覚めた様に、明白になる視界。

そこに映ったのは、吹雪になびく水色の髪。

そして、皆を守る様に展開する巨大な魔法陣。

それを両手で支えながら、彼女は怒鳴る。

「勝手に自己完結して、勝手に死のうとか思っ  
てんじやないわよ!!」

回る魔法陣。

全てを呑み込もうとしていた氷嵐が、逆にそれに飲み込まれる様に

収束していく。

消えゆく嵐の向こうに見え始める、氷龍達の姿。

その顔は、皆一様に驚きに彩られている様に見えた。

額に汗を浮かべながら、エリアは不敵に笑う。

「どう!?!サブライズ・スベル速攻魔法『我が身を盾に』!!サクリフ・アイス・ガード・ディアンモンスターパーソナル・エフェクトの固有能力

じゃ、追いつけないでしょう!?!」

やがて、全ての氷嵐は魔法陣に吸い込まれ、消えた。

「はは．．．。出し抜いてやったわ．．．。ザマーミロ．．．!!」

「あ、貴女、いつの間．．．」

風水師が言いかけたその時――

バズンツ

エリアの前で展開していた魔法陣が、光る球体となって彼女の身体に突き刺さった。



「カフツ!!」

途端、エリアの口から真つ赤な血が迸る。

「なっ!?!」

驚いた風水師に向かって、倒れ込んでくるエリア。

とつさに抱きとめる。

「はは．．．．。サンキュ．．．．」

風水師の腕の中で、力なく笑う。

「一体、一体何をしたんですか!?!」

サクリファイブ・ガーディアン

『我が身を盾に』だよ．．．．。』

動転する風水師に、傍らから声がかけられる。

こちらもいつ来たのか、片腕を押さえたギゴバイトが彼女達を見上げていた。

『味方に対する攻撃を無効にする代わりに、自分が一定量のダメージを受ける魔法．．．．。』

「な．．．．!?!」

『その前に、『ボジション・チェンジ在地転送』も使ったから．．．．。魔力残量は、もうゼロかも．．．．。』

「馬鹿な．．．．なぜそんな真似を．．．．」

戦慄く様に呟く風水師。

そんな彼女に、ギゴバイトが言う。

『そうしなくちゃ、間に合わなかったからね．．．．。』

「そんな事を聞いているんじゃないやありません!!何故、来たのかと言っているんです!!私は．．．．私は．．．．」

「．．．．罪を贖うために、死ぬつもりだったってか．．．．?」

膝下から響いてきた声に、視線を落とす。

エリアが、強い視線で彼女を見上げていた。

「バツカじゃないの．．．?血に縛られてんのは、どっちだって話．．．。そんなしみつたれた性根で助けられたって、気が滅入るだけだわ．．．．。」

口元にごびり付く血を拭いながら、言い捨てる。

「何言ってるんですか!!私達が、氷結界が消えれば、貴女達を貶めた

罪は……」

「それがくだんないって言ってるのよ……。」  
酷く冷めた声で、エリアが言った。

「……くだらない？」

「そう。くだんない……。」

血の気が失せた顔が、薄笑みを浮かべる。

「……まあ、似たようなもんだけどね……。あたしも……。」  
うわごとの様に、途切れ途切れに流れる言葉。

けれどそれは、確かな意味を持って風水師に届く。

「……血に縛られて、罪を背負って……。でも……。」  
青い瞳が、見下ろす瞳を見つめ返す。

「……それでもあたしは、世界を見る事が出来たから……。」

「世界……？」

「……そう。世界……。」

思い起こす様に、目を閉じる。

「……知ってる？世界って、広いのよ……。あたし達の罪なんて、  
ゴミっ屑に思えるくらい……。」

「……。」

エリアの言葉に、いつしか聞き入る風水師。

フシユウウウウ……

そんな二人の間を、遮る様に響く呼気。

三頭の氷龍が、ユラリと動く。

その目には、自分達を愚弄した不逞の輩への怒りが燃えている。  
ゆつくりと、少女達に近づく三龍。

しかし、その前に三つの影が立ち塞がる。

「無粋な真似をしてもらっては困るな。氷龍共。」

剣を構えながら、ガトムズが言う。

『あの二人は、切れた時を埋めてるんだ。邪魔はさせない……。』  
傷ついた身体に闘志を滾らせながら、ギゴバイトは立つ。

『過ちは二度と繰り返さぬ。虎王の名において、かの者達は護って  
見せよう。』

凍土を掴む四肢に不退の意思を込めて、ドウローレンは吠える。  
否。

彼らだけではない。

他の戦士や氷結界の民たちも、一人、また一人と立ち上がっていく。  
動ける者。

気力のある者。

皆が皆、二人の少女を護る様に立ち上がっていく。

ボロボロになった彼らの、その身から立ち上る覇気。

それに圧される様に、伝説の氷龍達は微かに後ずさった。

「皆……。」

「カツコつけちゃって……。まあ……。」

彼らの姿を見ながら、エリアは微笑む。

そして、その視線は再び風水師に戻る。

「世界にはね、“あんなの”が沢山いるの。眩しいものが、いっぱいあるの。そりゃ、汚いものとか、暗い部分とかもあるわ。けど、それと釣り合って余るくらい、いっぱい光がある……。」

「光……。」

「あたしは、それを見る事が出来た……。触る事が出来た……。感じる事が出来た……。だからあたしは、血の束縛から抜け出る事が出来た……。」

その瞳の奥に、何を映しているのだろう。

エリアは優しく、とても優しく笑う。

そんな彼女に、風水師は問う。

「……それなら……。」

「ん?。」

「何故戻ってきたんですか?開放されたのに、何故戻ってきたんですか……?。」

その問いを聞いたエリアは、大げさに溜息をつく。

「それ、訊くかなあ……。」

困った様な顔をして、頭をポリポリと掻く。

「宿題のためって事に、しといてくんない……?。」

「駄目です。」

ピシヤリと言う風水師。

エリアはもう一度、溜息をつく。

「・・・カツコつけた事言うわよ。」

「・・・?」

「・・・あんた達を、解き放ちたかった。」

「・・・え・・・?」

虚をつかれた様な顔をする風水師。

頬を染めながら、エリアは続ける。

「氷結界あんた達をね、ここから解き放ちたかったのよ。あたしが、そうして  
もらったみたいにな。あたしに、そうしてくれた連中みたいにな。」

「貴女・・・。」

「真似して、カツコつけてみたかったのよね・・・。アイツら”  
みたいにな・・・。」

青い瞳が、何かを追う。

その先に、“彼ら”がいるとでも言うかの様に。

「ぶっ・・・ぶくく・・・」

「?」

突然聞こえてきた笑い声に、エリアは眉をひそめる。

風水師が、笑っていた。

その身を震わせて。

その目に、涙を浮かべて。

「あは、あはははははは!!」

こらえきれぬ様に、吹き出した。

「カツコつけたかったって、それだけですか!?それだけのために?」

「・・・笑ったわね?」

「笑いますよ!!ああ、可笑しい!!」

込み上げる笑いを収めようとするかの様に、風水師はエリアの胸に  
顔を埋める。

「あはは、バツカみたい!!ほんと、バカ!!」

「・・・悪かったわね・・・。」

無然とした表情で、むくれるエリア。  
そんな彼女の手が、キュツと握られる。

「?」

見れば、風水師の手がエリアの手を握りしめていた。

エリアの胸に顔を埋めたまま、風水師は問う。

「・・・私も、見れますか・・・?」

「ん?」

「貴女が見た世界を、私も見れますか?」

一拍の間。

ゆっくりと息をためて、エリアは口を開いた。

「見れるわよ。当たり前じゃない!!」

二人の手が、強く、強く握り合った。

グウガアアアアンツ

「グアアアアツ!!」

白い閃光が弾け、重い鎧をつけた身体が宙を舞った。

『無事か!?ガトムズ殿!!』

「何の・・・。これしき!!」

鎧を侵す氷をふるい落としながら、ガトムズは剣で支え、身を起こす。

「そちらこそ大丈夫か!?ご老体!!大分堪えておられる様だが!」

『何を言う!?若造が!!老いぼれと舐めるでないぞ!!』

傷ついた身体を奮い起こす虎王の傍らで、ギゴバイトも吠える。

『僕だって、まだまだだ!!』

「おう!!その調子だ!!坊主!!」

他の者も、傷ついたり立ち上がり、また氷竜達へと立ち向かっていく。

ギシャアアアアアアツ

ゴオガアアアアアアツ

ブリューナクとグングニールが咆哮を上げる。

その声には、怒りと共に確かな戸惑いが混じっていた。

ギチリ・・・

トリシューラの口が、苛立たしげな軋みを上げる。

ギチチ・・・

開いてゆく、三つの顎<sup>あご</sup>。

それぞれの牙列の奥で、魔力が渦巻く。

「!!、『虚<sup>デスベラード・ハウル</sup>壊咆哮』か!？」

気づいたガトムズが呻く。

『手足の出ないダルマにして、けりをつけるつもりなのだろう・・・。』

『えげつないな・・・。』

ドウローレンとギゴバイトが歯噛みをするが、限界を超えて傷ついた身体は動かない。

成す術なく立ち尽くす皆の前で、滅びの咆哮が放たれようとしたその瞬間。

トリシューラの、否。三頭の氷龍全ての動きが止まった。

『ぬ・・・!?!』

「何が・・・?」

『あ・・・!!』

気づいたギゴバイトが、背後を振り返る。

その視線の先には、風水師に支えられて身を起こしたエリアの姿。そして、その手の中には――

『氷結界の鏡!!』

『何!?!』

その声に振り返ったドウローレンが叫ぶ。

『いかん!!その鏡はトリシューラには・・・。』

キシヤアアアアアアアアアアツ

彼の言葉が終わる前に、憎悪に彩られた叫びが響いた。

「・・・さて、文字通り最後の奥の手だけど・・・。」

手の中の鏡を掲げたエリアが、ニヤリと笑う。

「吉と出るか、凶と出るか・・・。」

そう言って、自分を支える風水師を見やる。

「ほら、あんたは逃げなさい。正直、どうなるか分かんないだから。しかし、風水師は黙って首を横に振る。」

「何言ってるの？食べられちゃうかもしれないのよ？」

「私の命運、貴女に預けます。」

「はあ？」

その言葉に、目を丸くするエリア。

「貴女は、己で道を作りました。ならば、私はそれを導にします。鏡を持つ手に、風水師の手が重ねられる。」

「貴女は私の導。ならば、貴女の命運が尽きる時は、私の命運尽きる時です。」

真顔で言う風水師。

エリアはポカンとした後、あからさまに嫌々な顔をする。

「・・・あんた、そっちの気がある訳じゃないでしょうね？言っとくけど、あたしノーマルだからね？」

「大丈夫です。一線を超えてしまえば、後は慣れですから。」

「んな・・・!？」

硬直するエリアを見て、風水師はペロリと舌を出す。

「冗談です。」

「・・・あんた、そんなキャラだっけ・・・？」

「さて、どうでしょう？」

見つめ合う二人。

一瞬の間。

そして――

「あは、あはははははは。」

「うふ、ふふふふふ。」

同時に、笑い出す。

「何よ？融通の効かない堅物だと思ってたのに。結構面白いじゃない。」

「誰のせいだと、思ってますか？」

わざとらしく膨れる風水師。

エリアは目尻の涙を拭きながら言う。

「分かった分かった。怒るな。後でマドルチェ堂のお菓子、奢ってあげるから。」

「まどるちえどう?」

「町で評判のお菓子屋。すつごく、美味しいんだから。」

「へえ……。」

「他にも、色んな事があるわ。楽しい事。面白い事。怖い事、驚く事!!」

鏡を支える、二人の手。そこに、もう片方の手も添えられる。

「教えてあげる!!何でも、みんな、教えてあげる!!」

まくし立てるエリアに、満面の笑みで頷く風水師。

「だから、だから今は!!」

キシヤアアアアアアアアアアア

響き渡る咆哮。

何かが弾かれる感覚。

互いの手を握り、支え合う。

倒れない様に。

離れない様に。

視界の向こうには、こちらを見つめる憎々しげな凶眼が六つ。

翼を広げたトリシューラが、地を滑る様に襲いかかってくる。

視界の端で、止めようとしたドウローレン達が弾き飛ばされるのが見えた。

見る見る迫り来る、凶気と狂気。

仮面の様な顔を歪に歪め、氷龍の王が顎を開く。

その驚異を前に、一步も引かずにエリアは叫ぶ。

「死なないわよ!!絶対に!!」

「はい!!」

一瞬の躊躇もなく、答える声。

鏡を掴む手に、力がこもる。

叫ぶギゴバイトの声が、酷く遠くに聞こえた。

そして、死の影が二人を覆って――

シャーン……



澄んだ音色が、辺りに響いた。

その時、何が起こったかを理解出来る者はいなかった。

気がついた時には、トリシューラの巨体が宙を舞っていた。

誰も傷つける事の叶わなかった災禍が。

誰も止める事など叶わなかった凶王が。

木の葉の様に宙を舞い、無様な音を立てて地面に這った。

けれど皆の目は、もうその姿を見てはいなかった。

皆が、見ていたもの。

それは、呆然と佇む二人の少女の手の中。

煌々と、月の様に輝く氷結界の鏡。

その光の中に立つ者。

氷華の中で、神々しくはためく法衣。

氷の結晶の様に透麗な姿。

白雪に抱かれる様に、優しく広大な気配。

そこにいたのは、一人の老爺。

けれど、それは人ではない。

人が、この様な気配を発せられる筈もない。

場の誰もが、穏やかな安らぎに包まれる。

まるで、力強い父の腕に抱かれる様に。

老爺が、ふと後ろを振り返る。

訳が分からないと言った体で、自分を見つめる少女二人。

白髪と白髭の間から覗く眼差しが、優しく微笑む。

・・・伝道師様・・・。

そう呟いたのは、風水師か、ドウローレンか、それとも、氷結界の

誰かか。

しばし、二人の少女を愛しげに見つめると、“彼”はゆっくりと視線を戻す。

その先にいるのは、三頭の氷龍。

怯えていた。

かの凶龍達が。

何者をも恐れず。  
万物を睥睨した、伝説の王達が。  
全身の筋肉を強ばらせ。  
全身の鱗を逆立たせ。  
怯えていた。  
突如、ブリューナクが冷閃を吐いた。  
まるで、身を縛る恐怖を散らそうとするかの様に。  
しかし、届かない。  
冷極の閃光は、老爺の放つ光の中で掻き消える。  
グングニールが、虹色の光を放つ。  
届かない。  
最後に、トリシューラが吠えた。  
届かない。  
それすらも。  
老爺が、ゆつくりと右手を上げる。  
煌ッ  
地面に、光が走った。  
氷龍達の、氷霧に濁った光とは違う。  
澄んだ。  
どこまでも澄んだ、氷色ひいろの光。  
それが、何かを地面に象っていく。  
瞬く間に、描き出される文様。  
雪の結晶。  
氷結界の、紋章。  
そして、地が落ちた。  
まるで、型を抜くように。  
深く。  
深く。  
底も見えない。  
奈落。  
その奥が。

滾っていた。

朱い。

朱い。

炎の色に。

誰もが目を瞑る。

無くなった足場。

当然の様に。

その朱の中に。

落ち行く事を覚悟する。

けれど、落ちない。

エリアも。

風水師も。

ギゴバイトも。

ガトムズも。

ドウローレンも。

そして、他の人々も。

無くなった地の上に。

そのままの姿で。

立っていた。

何も無い空間に、立つ感覚。

理解出来ない、感覚。

ただ、佇む。

その目の前で、“彼ら”が悲鳴を上げた。

三頭の氷龍。

その足が、沈んでいく。

落ちていく。

そう。

彼らが。

彼らだけが。

落ちていた。

消えた大地に。

朱い奈落に。

グウオオオオオオオオオオ

ひりつく様な咆哮が響く。

三頭が、翼を開いた。

奈落の誘いから逃れようと、宙を目指す。

しかし――

老爺が、差し伸べる様に手を伸ばした。

少女達の手の中で、氷結界の鏡が輝く。

途端、鏡は光となり、三つに散る。

光は流星となり、足掻く龍達へと突き刺さる。

一つ。

ブリューナクの胸に。

一つ。

グングニールの背に。

一つ。

トリシューラの尾に。

ガクンツ

龍達の身体から、力が抜けた。

羽ばたく翼は虚しく宙をかき。

もがく爪は悲しく空をかく。

・・・戻るがいい・・・

声が、聞こえた。

・・・今一度、煉獄の牢獄へ・・・

その声に従う様に、氷龍達は墜ちていく。

深く。

遠く。

朱い奈落の中へ。

叫びが響く。

悲しみか。

絶望か。

長く。長く尾を引くそれが。

地の底へと消えていく。

そして――

いつしか、全てが消えていた。

奈落も。

氷龍も。

鏡も。

全てが跡形もなく消えていた。

呆然と佇む、エリアと風水師。

老爺が、ゆつくりと振り返る。

優しく、優しく微笑む。

・・・生きよ・・・

声が、響く。

・・・我が・・・

やがて、その姿が陽炎の様に揺れ始める。

揺れる姿は光となり。

・・・子らよ・・・

光は輝く塵となって、空に流れる。

皆がそれを追い、宙を仰ぐ。

いつしか天を覆っていた雲は晴れ、明るい日差しが降りてきていた。

—7—

「本当に、行かれるのですか？」

旅支度を済ませたエリアとギゴバイトに向かって、風水師が確かめる様に尋ねる。

「あー、用も済んだしね。もうここにいてもしょうがないし。」

「傷が癒えるまで、居てくださいって構いませんのに・・・。」

そう言って、包帯だらけの二人を見やる風水師。

けれど、エリアはそっぽを向いて鼻を鳴らす。

「やーよ。こんな辛気臭い所。いつまでもいたら、こっちの身体まで抹香臭くなっちゃうわ。」

『ちよつと。またそんな事言つて。あんなに良くしてもらったんだから、ちゃんとお礼しないと。』

困った様な顔をするギゴバイト。

しかし、エリアはツンと澄ましたまま。

『ご、ごめんなさい。ホントに、元気になったらこの調子で……』

「はは。構いませんよ。もう、慣れましたから。」

申し訳なさそうに畏まるギゴバイトに笑いかけながら、風水師は言う。

その顔に、かつてあった険しきはもうない。

「……で、あんたはいつこっちに来るの?」

そんな彼女に向かって、エリアがそんな事を問う。

「そうですね……。亡くなった方の鎮魂の儀や、その後始末などありますから……。多分、半年ほど後になるかと。」

「ふくん。まあ、せいぜい心残りのない様にしてきなさい。」学校

“は、逃げやしないから。”

「はい。」

エリアの言葉に、笑顔で答える風水師。

『でも、外に出る事をよく氷結界の人達が許してくれたね。血を外に出す事は好まないって言ってたけど。』

「ええ。氷龍達が封印された以上、もうここに縛られる意味はないからと。むしろ若者は外に出て、新しい風を取り込んできて欲しいとの事です。」

そう言つて、風水師はふと空を見上げる。

「恐らくは、神精霊様もそれを願っているだろうと……。」

「……『神精霊』……ね。」

風で乱れる髪を鬱陶しそうに整えながら、エリアは訊く。

「あれ”って、結局そういう事になった訳?」

「ええ。ドウローレン様が仰ってました。あのお顔は、紛う事なく伝道師様のそれだったと……。」

エリアは「フーン」と気のない返事を返す。

「何だって、そんなものの幽霊が今になって出しゃばってきたのかしらね?」

「幽霊じゃなくて、神精霊様ですよ。」

そう訂正しながら、風水師は話を続ける。

「恐らく、先の大戦の時に氷結界に亀裂が生じた事を憂えていたのでしょう。それが、巫女<sup>貴女</sup>の血族と解放派<sup>私</sup>の溝が埋まった事で心を開き、力を貸してくださいだったのでは……。」

「は。随分と自分勝手な守り神なこと。その気があるなら、最初っから手を貸せっつての。」

『ちよつと、エリア……!!』

慌てて諫めるギゴバイト。

しかし、風水師は可笑しそうに笑う。

「そうですね。私も、そう思います。」

その言葉にギゴバイトは『ありや?』とズツコケ、エリアは「あら?」と意外そうな顔をする。

「長い閉塞の末に、神精霊様も含めて氷結界<sup>私達</sup>は歪んでしまっていたのかもしれない。自分達でも、そうと気づかぬ程に……。」

そして、風水師はもう一度空を仰ぐ。

「だから、神精霊様は私達若者に託したのでしょうか。暗闇の中で凝り固まった血を、光の元で解放しろと。」

「……その“若者”って、あたしも入ってる?」

間髪入れず、「はい。」と答える風水師。

エリアは、露骨に嫌な顔をする。

「やめてよね。そんな面倒くさい役目、お断りよ。」

『何だかんだ言っつて、無視出来ないしねー。』

そう言っつて、ウケケと笑うギゴバイト。

「うっさい。」

踏まれた。

ムンギユツと、轢かれたガマガエルみたいな声を出して伸びる。

「ああ、大丈夫ですか?」

慌ててかがみ込む風水師。

伸びたギゴバイトを抱え上げながら、その耳元に口を寄せる。  
何やら、ボソボソと吹き込まれる囁き。

「・・・!?!」

みるみる丸くなる、ギゴバイトの目。

「?、何してんのよ? あんた達」

『い、いや、何でもないですよ!?!』

「ええ。何でもありません。」

不審げなエリアに、ギゴバイトは慌てた様子で、風水師はクスクスと笑いながら答える。

「何よ。二人して、気持ち悪い。」

さらに突つ込もうとしたその時、

「エリア殿。ギゴ殿。そろそろ、よろしいか?」

背後から飛んでくる声。

振り向けば、そこにはやはり旅支度を終えたガトムズと戦士団の姿。

「あー。いいわよ。」

そう答えると、エリアはクルリと踵を返して用意された馬車へと向かう。

『ああ、待つてよ。エリア。』

慌てて後を追うギゴバイト。

それを見送りながら、風水師はガトムズに向かって頭を下げる。

「ガトムズ様、大義の方、ご苦労様でした。つきましては、エリア様の事、よろしくお願いいたします。」

その言葉に頷くガトムズ。

「任された。エリア殿は責を持って送り届けよう。」

そして、ガトムズも一礼して隊の列へと向かう。

そんな三人の背に向かって、風水師は声を上げる。

「エリア様。マドルチェ堂の件、忘れちゃダメですよ。」

ブンブンと手を振る彼女に向かって、エリアは軽く右手を上げて答えた。



それから、しばし後――  
ガタゴトと揺れる馬車の中で、エリアはうくと背伸びをして  
いた。

「あく、疲れた。早く柔らかいベッドで横になりたいわ。」

『ホントに、今回は頑張ったよね。ご苦労様。』

そう言うギゴバイト。

そんな彼に、エリアがクルリと顔を向けた。

「ギゴ。」

『何?』

「さつき、あの娘に何言われてたの?」

『!?!』

その問いに、みるみる赤くなるギゴバイト。

それを見たエリアが、怪訝そうな顔をする。

「何よ?その反応。一体、何言われたの?」

ズスイツと迫って来る。

『いや、あの、その・・・』

しどろもどろになるギゴバイト。

言える訳がない。

(負けませんからね。ライバルさん。)

などと言われたなど。

真意は分からないが、教えたら教えたで大層面倒な事になりそうな  
気がする。

黙っているに越した事はない。

「コラ!!何黙ってんのよ!!教えなさい!!」

口を噤むギゴバイトの両頬を掴んで、グイーンと伸ばす。

『ムギヤムゴ・・・』

「言わないか!!この!!この!!」

じゃれあう二人。

と、

ガタンッ

「キヤツ!?!」

『うわっ!?!』

悪路にでもあたってたのか。

馬車が大きく跳ねた。

エリアの身体が、ギゴバイトの上ののしかかる。

『ちよ!!エリア、重い重い!!早くどいて!!』

しかし、エリアが動く様子はない。

『エ、エリア?』

気が付くと、間近で自分を見つめる青い瞳と目があった。

頬に感じる、心地よい体温。

エリアの手が、優しくギゴバイトの頬を包んでいた。

「ねえ、ギゴ……。」

囁く様な、声。

『な、何さ……?』

「ありがとう……。」

『へ?』

「色々と、助けてくれたよね……。」

どこか潤んだように、熱っぽい目が見つめる。

心臓が、壊れた様にトカトカと鳴り始める。

「嬉しかったよ……。」

寄せられる、顔。

甘い香りが、鼻をくすぐる。

『あ、あれは、その……使い魔として当然と言うか……。』

「使い魔だから?」

『え?あ、いや、その……』

ドギマギして、言葉が上手く体を成さない。

そんな彼に、エリアはさらに迫る。

「ねえ。ギゴ……。」

『ちよ、ちよつと……!!エリア!』

近づいてくる唇。

可憐な、桜色の花卉を思わせる。

「あたしね・・・」

『~~~~~っ!!』

思わず、目を閉じる。

そして――

「あ。」

急に響いた声が、全ての空気をぶち壊した。

『?』

目を開けると、エリアが間の抜けた顔で固まっている。

『ど、どうしたの・・・?』

「・・・“宿題”・・・。」

『・・・あ・・・。』

二人して、阿呆の様に見つめ合う。

「ど、どうしよう!! すっかり忘れてた!!」

『ど、どうするっただって、期限は明日だよ!』

これでもかと言うくらい、テンパる二人。

しかし、どんなに慌てた所でどうにかなる問題ではない。

「――っ!!」

突然杖を引つつかみ、外に飛び出ようとするエリア。

『ちよっ!?! 何処いくの!?!』

慌ててローブの裾を掴むギゴバイトに、エリアは真顔で言う。

「氷結界に戻って、トリシューラの封印解いてくる!!」

『な、何言ってるの!?!』

「何? じゃないわよ!! なんとかしないと、お仕置き食らっちゃう

じゃない!!」

『ダメだっけ!! あんなに苦労したじゃない!! っけ言うか、あんな化

物、もう会いたくない!!』

「トリシューラも怖いけど、先生はもっと怖いのだ!!」

『駄目だったらっ!!』

「お願い!! トリシユが駄目なら、グングニールでもブリューナクで

もいいから!!」

『いやいや!! ブリュはドラゴンじゃなくて海竜族!!』

「そんなメタ発言いいから!!放して!!武士の情け——っ!!」

『駄目——っ!!』

「先生怖い——っ!!」

・・・二人の騒ぎを他所に、隊列はタカタカと進む。

氷結界はもう、遙か彼方。

「お仕置きは、いやあ——っ!!」

哀れな少女の叫びが、蒼い空に響いて溶けた。

「地の場合」に続く

## 地の場合

— 1 —

「ふむ．．．。ドラゴンかあ．．．。」

—ここは魔法族の里、ミナコ魔法専門学校の寮の一室。

そこのベッドに、一人の少女が仰向けに寝っ転がっていた。

茶色のショートヘアに、眼鏡がワンポイント。

名を、地霊使いのアウスと言う。

彼女は気だるげにベッドの上で転がると、手にしたプリントをピンと指で弾く。

「相変わらず面倒な宿題を出してくれるね。先生は。」

『．．．あんなあ、お嬢．．．』

—と、ベッドの上でゴロゴロするばかりのアウスに向かって、声をかける者がいる。

大きなモルモットの様な姿に、蝙蝠の羽と一本の角。短い腕で抱えるのは巨大なドングリ。

アウスの使い魔、『デーモン・ビーバー』である。

「なんだい？デヴィ。」

『いいんでつか？こげにのんびりしとって。他の皆さんはとっくに出かけられたとですよ？』

「皆は皆。ボクはボク。」

使い魔の心配げな問いに対して、アウスはそっけなく答える。

「まあ、ボチボチやるさ。」

そう言いながら、ポイトプリントを放る。

主の手から離れた紙切れが、ヒラヒラと悲しげに宙を舞う。

『あーあ。』

溜息をつきながら、それを拾うデーモン・ビーバー。

振り向けば、当の主はベッドに身を埋めてスヤスヤと寝息を立てて

いた。

『大丈夫なんかなあ……。』

この娘と主従の契りを結んでから随分経つが、その思考の不可解さにはなかなか慣れる事が出来ない。

まあ、いつもの事と言えればいつもの事ではある。今回も、何か考えがあつての事だろう。詮索した所で、自分の考えが及ばないのもいつもの事だ。

デーモン・ビーバーはまた溜息を一つつくと、アウスの横で自分も丸くなった。

それから数時間。夜が更け、月が空の頂にかかる頃――

「デヴィ、起きて。出かけるよ。」

急にかけられた声に、飛び起きるデーモン・ビーバー。

『ふ、ふえ？こげな時間にでつか？』

寝ぼけ眼をこすりながら問う。

「こんな時間だからだよ。」

言いながら、チャツチャとローブを羽織って準備を整えるアウス。

しばし後、出支度をした彼女はデーモン・ビーバーを伴って寮を出た。

『こげな急に出かけるなんて、ターゲットが決まったとですか？』

欠伸をしながら問う、デーモン・ビーバー。

「ターゲット？とづくに決めてたよ。」

『ふえ？』

さざりりと出た言葉に、呆気にとられる。

『ほなら何で、あんなにのんびりしてたのですか？相手はドラゴンでっせ。時間は幾らでもあった方が……。』

訝しむ相方に、アウスは笑って答えない。

「急がば回れ。急いで事は仕損じるってね……。』

『??？』

釈然としない思いを抱いたまま、ただ主に従うデーモン・ビーバーだった。

それから数十分後、アウスとデーモン・ビーバーは里の外れにある一軒の建物の前に来ていた。

その建物には、この夜更けにも関わらず煌々と灯りが点り、中からは大勢の笑い声や怒声が響いていた。

『ちよっ!!ここって・・・!!』

建物を見たデーモン・ビーバーが、驚きの声を上げる。

『ギャンブルバーじゃないでつか!!』

そう。ここは魔法族の里で唯一つ、週末に開かれるギャンブルバー賭博酒場である。

当然、倫理的観点から学校では生徒の出入りは禁止されている。

「そうだよ。道程で気付かなかったのかい?」

当然の様に、入口の扉に手をかけるアウス。

デーモン・ビーバーは、慌てながら制止する。

『あ、あきまへんって!!学校にばれたら、停学じゃすみませんがな!!』

しかし、当の本人はあくまで涼しい顔。

「ばれるって、学校の関係者が今時分こんな所にいると思う?」

『んなわけありませんがな。』

「じゃあ、君が告げ口する?」

『いやいや!』

「じゃあ、ばれる訳ないね。」

いくら言っても、糠に釘。

それでも、デーモン・ビーバーは食い下がる。

『待ちなはれっちゆうに!!大体、こんな所に何の用があるんでつか!?!』

「君は実に馬鹿だなあ。賭博場に用っていったら、”これ”に決まってるだろ?」

そう言うと、アウスは右手の親指と人差し指で輪を作る。

『そんなん、先生はんから実習費もろうとるやん。手持ちで済みますやろ!?!』

「んー、そうでもないんだよね。目当ての場所は、ちよつと遠いんだ。」

『・・・一体何処に行く気ですのや?』

『『古の森』。』

『い、古の森い!?!』

魔法族の里から、南へ、ざつと1000キロ（北海道から東京）くらい離れている場所である。

「だからね、今の手持ちじゃちよつと心許ないんだ。どうせ行くなら、観光もしてきたいだろ?」

『そ、そんな所まで何を探しに行きますのや!?!』

『それは行つてのお楽しみ。』

そしてアウスは、ギャンブルバーの扉を開けた。

—2—

そこは、アルコールの香りとタバコの煙、そして人々の喧騒に溢れていた。

部屋のあちらこちらでコインの跳ねる音がし、その度に歓声や怒号が飛び交う。

そんな中に、アウスが扉を閉める音が大きく響いた。

カタン

途端、周囲の視線がアウスに集中する。

そして入つて来たのが場にそぐわない可憐な少女だと知れると、その視線は直ぐに好奇と色欲の混じつたものへと変わる。

「へい、お嬢さん。」

人込みを潜り抜け、アウスの前に進み出たのは、バーテンダーの格好をした若い男性。このギャンブルバーの管理人、『サンド・ギャンブラー』である。

「いけないね。ここはキミの様な子供が来る所じゃないよ。」

「ここに年齢制限はなかったと思うけど?」

「それはそうだけどね。常識と言うものがあるだろう。それに、そ



の格好。魔法学校の生徒らしいけど、これが学校に知れたら……」彼の言葉が終わらない内に、アウスは袖の中から数枚の紙切れを取り出した。

「これで、どうかな？」

そう言つて、サンド・ギャンブラーに渡す。

「何だい？こんな物で僕が……ぬうわにいいいいっ!？」

突然大声を上げて固まるサンド・ギャンブラー。

渡された物は、数枚の写真。

「おう……うおおおおお……!!こ、これは、ドリアードさんこんなあられもない……!？」

鼻息も荒く、わなわなと震えるサンド・ギャンブラー。

目は、もう写真に釘付けである。

そんな彼に向かって、アウスはニコリと微笑む。

「他にもあるけど？もつと『きわどい』のが。」

「な……なん、だど……!？」

「入つても、いいよね？」

もはや、サンド・ギャンブラーに選択の余地はなかった。

『……あないな写真、いつ撮ったんでつか？』

呆れた様に尋ねるデーモン・ビーバーに、アウスはしやあしやあと答える。

「備えあれば憂いなしってね……。彼が先生に首つ丈つて情報は入つてたから。」

『先生はんにばれたら、えらいこつてつせ？』

「君、ばらす？」

『いやいや!!』

「なら、大丈夫。」

どこまでも手玉に取られるデーモン・ビーバーなのだった。

「よう、ねーちゃん、一緒に飲まねーか？」

「ラム酒は嫌いなんだ。遠慮しとくよ。」

「嬢ちゃん、ちよいと上まで来いよ。遊ぼうぜ。」

「おじさんが、あと10年ばかり男を磨いたらね。」

絡んでくる男達を軽くあしらいながら、アウスは店の客を物色していく。

やがて、その目が店の中心の席に座っている男に止まった。

筋骨隆々とした身体に青銅色の鎧をつけた、大柄な男。

傍らに大降りの剣が置いてある辺りを見ると、流れの戦士だろうか。

彼はもう一人の傭兵風の男とテーブルを挟んで向かい合い、カードゲームに興じていた。見れば、その席には金貨が山と積まれている。大分勝っているらしい。

「おら、どうした？早く次の手を出しな!？」

鎧の男が、相手を威嚇する様に大声を出す。

対して、相手の男の手は完全に止まっている。周りで観戦していた男の仲間らしい傭兵達が「どうした!？」とか「気張れや!!」などと激を飛ばしているが、そんな事でどうにかなるものでもない。

傭兵の男は悔しそうに歯噛みすると、自分の席に置いてあったカードの束に手を置いた。

『降参』のサインである。

周りの男達が「あゝ」と声を上げる。

鎧の男は大笑いすると、相手の席に積み重ねていた金貨をかき寄せ

る。

「ガハハハハ、何だ!?!他愛もねえ!!さあ次はどいつが相手だ!？」

そう言つて周りを見回すが、誰も進み出る者はいない。

「何だ何だ、この腰抜けども!!誰もいねえのか!?!この、ダイ・グレ  
ファー様の相手をする奴はよ!!」

黙りこくる男達。と、その時――

「ボクがするよ。」

そんな声が響き、男達の隙間を抜けて一人の少女が進み出た。

「ああん?お前があ?」

自分の前に進み出た少女――アウスを嘗め回す様に見た後、ダイ・グ

レファアーはふんと鼻を鳴らした。

「止めとけ止めとけ!! オメエみたいな小便臭え小娘、相手に出来るかよ!!」

「『この手』のゲームには自信があるんだけど?」

そう言つて、アウスは袖の中からカードの束を出す。

「大体、オメエ賭け金なんざ持つてんのかよ?」

「うくん。お金は、持ってないなあ。」

その言葉に、周囲からどつと笑い声が起こる。

「はっ!! 話にならねえな。帰れ帰れ。オメエなんぞの相手をしてる

暇は・・・!!?」

ダイ・グレファアーの言葉がそこで途切れた。

彼の膝の上に、アウスがチョンと腰を下ろしたのだ。

「ボクは、小娘じゃないよ・・・?」

そう言つて、ダイ・グレファアーの耳に唇を寄せる。

「お金はないけど、代わりに賭けるものはある・・・。」

息のかかる距離で囁かれ、ダイ・グレファアーの背筋にゾクゾクした感覚が走る。

「もし、ボクが負けたら、今夜一晩・・・。」

そして襟に指をかけると、クイツと前に引いて見せる。

タートルネックの奥に、形の良い膨らみがチラリと見えた。

「・・・どう?」

「謹んで、お相手しよう (キリツ)。」

急に紳士的な振る舞いになるダイ・グレファアー。

アウスはクスリと小悪魔の様な笑みを浮かべた。

その横で、デーモン・ビーバーはひきつけを起こして引っくり返っていた。

それから数刻後—

「毎度ありー♪」

金貨やその他諸々が入った布袋を背負い、アウスはニコニコと店を出て行った。

その後姿を見送った傭兵達が、口々に言う。

「恐ろしい女だ……。」

「こいつは敵わねえ……。」

「鬼だな、ありやあ……。」

「相手しなくて良かったぜ……。」

言いながら、全員が傍らに目を落とす。

そこには、金貨どころか身包み剥がされたダイ・グレファアーが身を小さくして椅子に座っていた。

傭兵の一人が、その肩にポンと手を置く。

「アンタも災難だったな……。」

「今夜は飲もうや。」

「俺達の奢りだ。」

次々とかけられる心からの労わりの言葉に、ダイ・グレファアーはワツとテーブルに泣き伏した。

—その頃—

『いやあ、正直肝冷えましたで。ホンマ。』

夜更けの道をアウスと歩きながら、デーモン・ビーバーはやれやれと額の汗を拭う。

『勝てたから良い様なもんですけどな、あきまへんて。あんな危ない橋渡り。自分の身は、もっと大事にせえへんと。』

そんな相方の言葉に、アウスはあっけらかんと答える。

「別に渡つてないよ。危ない橋なんか。」

『へ?』

アウスは怪しく微笑むと、背負っていた袋をポスンと地面に下ろした。

両手を前に出し、フルフルと振る。

パラ パラ パラ

それに合わせて袖の中から振ってくる、無数のカード。

『……………』

「……………」

二人の間を、ピューと涼しい風が通り抜けていく。

『イカサマかいいいいいいっ!!』

思わず大声で突っ込む、デーモン・ビーバー。

『あ、あんたなあ、こんなんしてバレたらどないしますのや!! 下手したら捕まってピーされた挙句にピーされまっせ!?!』

テンパるあまり、常時使用するにははばかられる様な単語が飛び出るが、それを気にする余裕はない。

一方、当の主人は余裕しゃくしゃく。

「君は実に馬鹿だなあ。ボクがばれるイカサマなんか、仕組むと思うかい。」

そう言って、ケタケタと笑う。

・・・どうやら今度の旅にも、胃薬の用意は必須らしい。

デーモン・ビーバーは、胃をさすりながらそう思った。

ピリリリリリリ

駅のホームに、発車を知らせるシグナルが響く。

それが鳴り終わると同時に、白い車体がガタンゴトンと重い音を立てて動き出した。

「うん。まずまず快適な旅だったね。」

たった今、降りたばかりの『エクスプレスロイド』が再び走り出すのを横目で見ながら、アウスはそう言って伸びをした。

『いやー、流石に都会こっちは違いますなあ。わて、こないにギョーサン人がおる駅なんて初めて見ましたわ。』

ここは、『魔法都市エンディミオン』。

魔法族の里から南に約900キロの位置にある、世界の中心とも言える大都市である。

絶大なカリスマ性を誇る『神聖魔導王エンディミオン』によって統治され、治安も良く、大手テーマパーク『トウーン・ワールド』がある事も手伝って観光地としても人気があった。

ちなみに、名物は老舗名店「モウヤン」のカレーである。

『さ、次の乗り継ぎはどの列車でつしやる?』

そう言つて、時刻表を探すデーモン・ビーバー。

彼らの目的地は南の果て、『古の森』である。

世界で最も古いと認定されている樹、『世界樹』が座する森。

地脈の関係から『ガイアパワー』が集中している土地であり、強力なパワースポットとして有名だった。

その土地管理はここ、エンデイミオンが管轄しており、件の土地へと向かう鉄道も唯一ここからのみ発着していた。

『おっ!ありましたで。何々、次の古の森行きの列車は12:30発のデコイチ4番線……。もう5分くらいしかありません。急ぎまへん、と……。お嬢?』

デーモン・ビーバーが向いた先には、肝心のアウスの姿がない。

「おーい、何してるんだい?早く来ないと、置いてくよ。」

声のする方を見てみると、アウスは駅の出口に向かっていた。

『ちよつ、何処行きまんのや!?!はよせんと間に合わんでつせ!!』

「君は実に馬鹿だなあ。せつかくここまで来て、モウヤンのカレーも食べていけない気かい?」

慌てて飛び寄ってくる相方を笑い飛ばしながら、アウスはしやあしやあとそんな事を言う。

『な、何言うてまんねん!?宿題はどうしますのや!?!』

「宿題の提出日はいつだっけ?」

『4日後ですけど……。?』

「じゃあ、今日と明日、遊んでも充分時間はあるね。」

そう言つて、スタスタと出口に向かうアウス。

『ちよつ、それじゃドラゴン探す時間、半日位しかありませんやん!!里に帰るまで丸1日かかるんでつせ!?!』

「半日あれば充分だよ。」

取り付く島もないとはこの事だ。

「明日はトゥーン・ワールドに行こうか?評判聞いて、一度行って見たいと思つてたんだ。」

『お、お嬢。』

「大丈夫。入場料はちゃんと君の分も用意してあるから。」

『そ……そうじゃなくてですなあ……』

デーモン・ビーバーの情けない呼びかけは、都会の人混みの中に空しく消えて行く。

「こちら、魔界ビル前停留所発現世街行きバスでございませう。お乗りの方はお急ぎくだささい。」

駅の前に停まったバスの前で、紅い髪ガイドがそう告げる。

「ああ、乗ります。」

そう言つて、バスに乗り込むアウス。

渋々それに従う、デーモン・ビーバー。

「それでは、発車いたします。」

そして、二人を乗せたバスは街の中へと消えていった。

— 4 —

「うくん、時間か……。」

ホテルのベッドで身を起こしたアウスは、そう言つて欠伸をした。枕元で丸くなっている相方を起こさない様に、そつとベッドを降りる。

寝癖でボサボサになった頭をポリポリかきながら、バスルームに向かう。パタンと戸を閉め、スルスルと寝間着を脱ぐ。糸纏わない姿になり、シャワーの栓を開く。シャワーから迸る、冷たい水。それを浴びながら大きく一息つくつと、アウスは「よしっ」と拳を握つた。

『うくん、ムニヤムニヤ。御主人、美味しいでんなー、このカレー……。』  
そんな寝言を言っているデーモン・ビーバー。

幸せそうである。

『そうでつか……そこまで言うんなら、もう一杯……』

その鼻先に、スーツと手が伸びる。

ピンツ

『アヒヤアツ!?!』

鼻先を指で弾かれ、デーモン・ビーバーは思わず飛び上がった。  
『な、何しますんのや!?!せつかく今から三杯目を……って、ありや?』

見れば、そこには霊使いのローブを羽織ったアウスが杖を片手に立っていた。

昨日までと違い、完全に戦闘態勢である。

『デヴィ、寝ぼけてないで。出かけるよ。』

『へ……何処へでつか?』

ピンツ

『ヒギイツ!?!』

再び鼻先を弾かれ、また飛び上がる。

「宿題。」

呆れた様に言うアウス。

『そ、そうでした……。』

涙目で鼻を押さえながら、デーモン・ビーバーは頷いた。

それから数時間後――

ガタンゴトンガタンゴトン……

アウス達は、エンデイミオンから古の森に向かうデコイチの中にいた。

『あー、やっぱりエクスプレスのロイドに比べっと、乗り心地は今一つでんなー。』

ガタゴトと揺れる座席にチョココンと座りながら、デーモン・ビーバーは誰ともなく呟く。

「料金が違うからね。比べる方が酷ってもんだよ。」

手にした本に目を落としたまま、アウスはそう答える。

『酔いまへんか?こげな揺れる中で本なぞ読んで。』

「慣れてるからね。」

『さいでつか……。』

しばしの間。

やがてその沈黙に耐えかねた様に、デーモンビーバーがおずおずと



話しかける。

『あのですな、お嬢……。』

「何?」

本のページをめくりながら、アウスは答える。

『そろそろ教えてもらえまへんか? いったいターゲットは何々です?』

その問いに、アウスは読んでいた本のページを相方に向けた。

そのページを見たデーモン・ビーバーは、その目を丸くする。

『ち……。』地を這うドラゴン』く!?!』

「そうだよ。何驚いてるの?」

『何って……。これ、絶滅危惧種やないですか!?!』

「知ってるよ。だからほら、捕獲許可証。」

そう言つて、アウスは荷物の中から引つ張り出した紙切れをピラリと見せる。

『い……。いつの間に……。つてそうやなくて!! こんなん、半日やそこから見つかるわけあらへんやろ!?!』

— 『地を這うドラゴン』 —

デーモン・ビーバーの言うとおり、古の森固有の種で、その希少性から絶滅危惧種に指定されているドラゴンである。

翼を持ちながらあえてそれを退化させ、地上生活への道を選んだ特異な種であり、その性質から翼を持つ飛翔性ドラゴンと翼を持たない地這性ドラゴンとの間を繋ぐミッシングリンクとして研究者達の注目を浴びている貴重なドラゴンでもある。

「レベルもそれなりに高いし、先生もこれなら文句ないと思うよ。」  
そう言いながら許可証をクルクルと丸めて片付けるアウスに、デーモン・ビーバーはブンブンと首を振る。

『いやいやいやいや!! 見つからへん!! 見つかるわけあらへん!!』  
その危惧は当たり前で、そもそもが個体数の少ない希少種である上に、隠棲の強い性質であるため、専門家であっても発見は困難を極めるという。

『だから言いましたやろ!?! こんなんしてる場合やあらへん、時間が

あらへんって!!それなのにあんたときたら・・・』

「モウヤンのカレー、美味しかったよね?」

『う・・・!?!』

アウスの放った一言に、デーモン・ビーバーの喚きがピタリと止まる。

「君、おかわりしてたよね?それも5杯も。」

『う、うう・・・』

だらだらと脂汗を流しながら、デーモン・ビーバーはアウスの顔を見る。

・・・笑っていた。それも、賭博酒場でダイ・グレファーを嵌めた時の、あの小悪魔の笑みである。

「トウーン・ワールドも面白かったよね。君、遊びまくって、疲れて寝ちやったよね。おんぶしてくるの、結構大変だったんだけどなー?」

『う、ううううう・・・』

ぐうの音もでない。

アウスはますます、笑みを深める。

『は・・・嵌めおったな・・・!?!』

「ん?何の事?」

そして――

『え、えーい!!もう勝手にせんかーいつ!!』

「うん。勝手にする。」

満面の笑みでそう答えると、アウスは本をパタンと閉じて身体を背もたれに委ねる。

「今朝、早起きしたから少し眠いんだ。着いたら、起こしてね。」

言うが早いのか、スウスウと寝息を立て始める主の前に、デーモン・ビーバーはガサゴソと荷物をあさると、そこから持ってきた胃薬を取り出した。

『ほんま、大丈夫なんかなあ・・・?!』

そう一人ごちながら、白い錠剤を飲み下す。

喉を通るそれは、いつにも増して苦く感じられた。

ピリリリリリリ

駅に響き渡る、発車のシグナル。

自分達を下ろしたデコイチが走り去るのを見送ると、アウス達は駅の外へと出た。

古の森の入り口に作られた無人駅。

降りたのはアウスとデーモン・ビーバーだけである。当たり前かもしれない。

この駅と路線は、基本的にこの森を研究する者達のために作られたもの。一般人の利用は、ほとんどない。

駅の窓から外を見てみると、そこはもう鬱蒼とした森だった。

『なんや、気味の悪い森でんなあ……。』

周囲を見回したデーモン・ビーバーが、そう感想を漏らす。

ひっそりと静まり返って薄暗い森。鳥の鳴き声すら、ほとんどしない。

「この森に住む生き物は、皆隠棲が強いか夜行性のが多いんだよ。昼間は大体、こんなもんだらうね。」

そう言いながら、駅の外に出るアウス達。

地面に足を着けた瞬間、何やらフワツとした温もりが立ち昇る。

『おお、何ですか？この感じ。』

「この森は中心にある世界樹を要に、ガイアパワーが集中してるからね。世界有数のパワースポットと言われる所以だよ。」

『なるほど。そー言う事ですか。』

一歩、足を踏み出す。

それは、落ち葉の厚く積もった地面にザクリと思いの外深く埋まった。

『それにしても、何ぞあてはあるんでつか？ただ闇雲に歩きまわったとしても、見つかるとは思えまへんけど。』

デーモン・ビーバーは、キョロキョロしながらそう問う。

「それなら心配しなくていいよ。ちゃんと考えてるから。．．．それより．．．」

アウスが自分の足元を見る。一步踏み出す度に、落ち葉の積もった地面がサクサクと鳴る。静まり返った森の中には、それが思いの外大きく響いていた。

「うん。ちよつと面倒な事になりそうだ。」

『何がでつか?』

「これ。」

そう言つて、自分の足元を指差す。

「この足音、森の中に“ここに居る”って宣伝してる様なもんだよ。小動物やレベルの低いモンスターなら逃げちゃうだろうけど、大型の肉食動物なんかだと逆に．．．」

アウスが、その言葉を結ぼうとしたその途端――

バキバキツメキツ

アウス達の横に生えていた大木が、まるで薙ぎ倒されたかのように倒れてきた。

ズズーン

重い音を立てて、大木が地面に横たわる。

『お嬢、大丈夫でつか!?!』

辛うじてかわしたデーモン・ビーバーが叫ぶ。

「大丈夫。でも．．．」

こちらも直前かわしたアウスがそう返すが、その瞳はもう自分を労わる相方を見てはいない。

その視線が向けられるのは、大木が倒れてきた方向。

ガラリと空いたその空間には、今はただ薄闇だけが広がっている。

――と、その薄闇の向こうから、

コフー、コフー．．．

響いてくる、何者かの息遣い。

それと同時にムツと漂ってくる、強い獣臭。

『．．．お嬢．．．』

「うん．．．」

デーモン・ビーバーが全身の毛を逆立てて臨戦態勢をとる。  
アウスが見つめる薄闇のその奥で、何かの影がユラリと蠢く。  
ザス・・・  
響く、重い足音。  
足元に転がる大木を踏み潰し、薄闇を裂いて現れた者。  
それは全身を剛毛に覆われた、見上げる程に巨大な猿人だった。

— 6 —

「ふうふるるう・・・」

森の奥から姿を現した猿人は、呼気とも唸り声とも知れない音を発しながら一歩、また一歩とアウスの方へと近づいてくる。

その目は昏い敵意に満ちた光に彩られ、口元からはギリギリと軋る牙の音が不気味に漏れていた。

『グ・・・グリーン・バブーン』や!!』

迫る巨体を前に、デーモン・ビーバーが焦った様に喚いた。

— 『グリーン・バブーン』 —

深い森に生息する、獣族モンスター的一种。

巨大な体躯と怪力を誇る上、縄張り意識が非常に強い。

目に入る動物全てに対して排除行動を起こすその様から、「森の番人」とも呼ばれる。

『お、お嬢!!あかんで!!コイツ、完全にワイらの事敵やと思つとる!!』

焦るデーモン・ビーバー。

しかし、当のアウスに焦燥の色はない。

涼しい顔で、目の前の怪物を見つめている。

「丁度いいや。」

『は?』

アウスが杖を取り出すのを見て、デーモン・ビーバーはポカんとする。

「デヴィ、彼に用心棒ガードマンをしてもらおう。」

『は？何言つて・・・って、アヒヤア!!』  
ブウンツ

振り下ろされてきた棍棒を、既の所で避ける。  
ガゴオンツ

的を失った棍棒は後ろの大木に当たり、その幹を大きく抉る。

グリーン・バブーンの攻撃。『ハンマークラブ・デス』。

棍棒を振り下ろすだけの単純な攻撃だが、持ち前の怪力と相まって凶悪な破壊力を誇る。

直撃はもちろん、かすただけで肉は削げ、骨は砕けるだろう。

「なるほど。文献で読んではいたけど、実際に見るとなおの事・・・と。」

返す勢いで向かって来る棍棒を、身を屈めてかわすアウス。

「うゝん。ちよつと攻撃力が高すぎるかな？属性は適合してるけど、下僕にするまで無力化するのとは手間がかかり過ぎか・・・。」

眉一つ動かさず、淡々と状況を分析する。

そして、

「よし。」

何かを決めたかのか、ポンと手を打つ。

「デヴィ、＼あれ＼をやるよ。準備して。」

それを聞いたデーモン・ビーバーが、目を丸くする。

『あれって・・・まさか、＼あれ＼をする気でつか!』

「そうだよ。」

何でもない事のように答えるアウスに、思わず声を荒げる。

『あきまへんって!!＼あれ＼は身体に悪・・・ウヒョワツ!!』

慌てて身を逸らす横を、太い棍棒が唸りを上げて通り過ぎる。

軽くステップを踏んで距離をとったアウスが、全身を総毛立ててビツている相方に声を投げた。

「ほらほら。早くしないとボクと君、まとめてミンチだよ?。」

『あー、もう!!分かりましたわい!!』

半ばやけっぱちでそう叫ぶと、デーモン・ビーバーは翼を開いてポーンとグリーン・バブーンの頭上を飛び越える。

そしてそのままアウスの前へ舞い降りると、バブーンに向かって向き直った。

「ぐふううううっ!!」

翻弄されたグリーン・バブーン。苛立たしげに唸ると、再びアウス達に向かって突進する。

『お嬢、来おったでえ!!』

「大丈夫。彼の足なら、5秒余裕があるよ。」

いつもの調子を崩す事もなくそう答えると、アウスは杖を構え、目を閉じた。

「魔性の誘惑、魔王の洗礼。我が御せし魔の御名よ。奈落に誘うかつら蔦と生りて、彼なる者の御魂を絡めよ!!」

朗々と、しかし素早く唱えられる呪文。

それと同時に、デーモン・ビーバーの身体から黒い陽炎の様なもの  
が湧き上がる。

アウス達を射程に納めたグリーン・バブーンが棍棒を振り上げた瞬

間―

『フオーリン・ダウン  
「墮落」!!』

それが振り下ろされるよりも早く、アウスの口が呪文を結び上げる。

途端、デーモン・ビーバーの身体から立ち昇っていた黒い陽炎が、まるで蛇の様にグリーン・バブーンに襲い掛かった。

「ヴフウアアアアッ!!」

漆黒の蛇に巻きつかれ、苦悶の声を上げるバブーン。

自分の頭を掻き耖り、何かに抵抗する様に棍棒を闇雲に振り回す。  
しかし、その抵抗もほんの数分。

振り回す棍棒はだんだんと勢いを失い、やがて脱力した様になつくと膝が落ちた。

『・・・お嬢、嵌りましたで。』

一拍離れた場所で、様子を見ていたデーモン・ビーバーが言う。

「みたいだね。」

そんな言葉と共に、アウスはスタスタとグリーン・バブーンに近づ

いていく。

呆けた様に空を仰いでいたバブーンが、ゆつくりと首を傾げて彼女を見る。

「おいで。」

命ずる言葉。

それに応じる様に、グリーン・バブーンはその巨体を屈め―

アウスの靴へと、口付けをした。

「良い子だね。」

妖しく微笑みながら、アウスは彼の頭を撫でた。

—7—

—クロス・スベル 装備魔法・『フォーリン・ダウン 墮落』—

装備させた相手の自意識を奪い、意のままに操る洗脳系の魔法。

禁呪とされている『マインド・チェンジ 心変わり』や『ロベリー 強奪』、『ブレイク・コントロール 洗脳』と同等の

効果を持つ高位魔法だが、発動に『デーモン』の名を冠する“存在”を媒体にしなければならぬという制約がある上、ちよつとしたリスクも存在する。

その為、使用する者は極端に少ない。

もつとも、『デーモン』という邪悪な存在と関係を持つ事自体が忌み事とされる風潮があるのも、この魔法が浸透しない理由でもあるのだが。

『なあ、お嬢。たまに思うんやけど・・・』

自分達の後を守るようについてくるグリーン・バブーンを気味悪そうに見ながら、デーモン・ビーバーがアウスに問う。

「何だい?」

『自分、これ 墮落のためだけに使役されてる訳じゃあらへんよな・・・?』

「あはは、そんな訳ないだろ? 愛してるよ。デヴィ。」

『はあ・・・(ほんまかなあ・・・?)』

いつもの事とは言え、心根が読めない主である。

デーモン・ビーバーがこの世に生まれて幾度目かも知れない溜息を



ついた時、

グラリ

不意に、目の前でアウスの身体が傾いだ。

『うわつと!!』

慌ててそれを支える、デーモン・ビーバー。

「あはは・・・ごめん・・・。」

『言わんこっちゃない!!だから墮落こはあかん言うとりんや!!』

いささか顔色の悪くなったアウスに向かって、デーモン・ビーバーが怒鳴る。

これが、『墮フオーリン・ダウン落』が一般の術師達の間で敬遠されるもう一つの理由。

かの術はその効果が持続している間、絶える事無く術者の精気を消費し続けるのである。

『ほれ、しっかりしいな。もう!!こんな体たらくでどうやってドラゴンなんぞ相手しよるんでつか!?!』

「大丈夫・・・。ちゃんと手は考えてるから・・・。」  
体勢を立て直しながら、アウスはそう言って微笑む。

この主がそう言うのなら、実際そうなのだろう。

その点においては、絶対的な信頼を持っている。なら、今はただ、主の身体にだけ配慮していればいい。

デーモン・ビーバーは、黙ってふらつく主の横へと寄り添った。

実際、グリーン・バブーンのガードは非常に役に立った。その後の数時間の道程、どんなモンスターもアウス達の前に立ちはだかる事はなかった。

そして――

『おお。こりやまた、大きな樹でんなあ。』

「ああ。これがこの古の森の中心部、『世界樹』さ。」

そう言いながら、アウスは世界樹の幹に持たれる様にして座り込む。

「はあ、くたびれた。」

その有様に、流石に心配になってくる。

「ホンマに大丈夫なんでつか？まだ肝心のドラゴンのドの字も見つかってないんでっせ。」

しかし、アウスは微笑むと黙って目の前の茂みを指差す。

『あん？何でつか？』

見てみると、その下草が薙ぎ倒されて一筋の道の様になっている。

『・・・何や、これ？』

注意深く見てみると、その道の所々に光るものがある。拾ってみるとそれは・・・

『鱗や・・・!!』

「ほら。」

アウスが、荷物の中から引っぱり出した本を投げってくる。

急いで『地を這うドラゴン』のページを開く。

そこに載っていた、標本の写真と手の中の鱗を見比べてみると――

『——っ!!』

目を丸くして自分を見るデーモン・ビーバーに、アウスはニツとVサインをした。

「別に闇雲に歩いて来た訳じゃないよ。」

水筒の水を飲みながら、アウスは話す。

「*「ゴゴゴ」*に住んでる地属性モンスター達はね、多かれ少なかれ、この地に流れるガイア・パワーを糧にしてる。そして、そのガイア・パワーが一番集約されているのがここ。」

そう言つて、世界樹の根元をトントンと指でつつく。

『『地を這うドラゴン』も地属性である以上、絶対ここに来てると踏んでただけで、ビンゴだったね。』

『はあー、流石ですわ。』

心底感心したという態で、デーモン・ビーバーが頷く。

「感心する様な事じゃないよ。大体、このくらいの事は前にここに來てた研究者の皆さんも気付いてたと思うよ?」

『へ？それじゃあ・・・』

「道を見つけただけじゃあ、そうそう姿は拝ませてくれないって事さ。」

言いながら、アウスはよっと立ち上がる。

その足取りはさつきまでと違ってしつかりとしており、顔にも大分血の気が戻ってきていた。

「ん、流石は世界屈指のパワースポット。消費分は、取り戻せたかな。」

そう言つて右腕をグルグルと回す。

(・・・計算の内ですかい・・・。)

いい加減、感心するのを通り越して呆れてしまう。

『せやけど、それならどうしますのや？また奴さんがここに来るまで、張るんでつか？』

そんな相方の質問に、アウスは笑つて答える。

「君は実に馬鹿だなあ。そんな事してたら、幾ら時間があつても足りないだろう？」

そして、また荷物の中をガサゴソと弄る。

取り出されたものを見て、デーモン・ビーバーは首を傾げた。

「は？何です？こんな所・・・で・・・？」

そこまで言つて、デーモン・ビーバーは凍りついた。

・・・アウスが、微笑んでいた。

その微笑に、デーモン・ビーバーの顔からはみるみる血の気が引いていく。

「どうしたんだい？顔色が悪いよ？疲れた？だったら君もここでガイア・パワーを浴びたらどうだい？」

そう。アウスは微笑んでいたのだ。

「君にはまだ、やって欲しい事があるから・・・。」

それは紛う事なく、あの小悪魔の微笑み。

思わず逃げ出そうとしたデーモン・ビーバーの首根っこを、グリーン・バブーンの太い指がしつかと押さえた。

暗い穴倉の中で、「彼」はふと目を開いた。  
まだ眠気の残る瞳で、ゆっくりと周りを見回す。  
住み慣れた巣穴の中。何ら変わった様子はない。  
けれど、「彼」の六感の一つは確かな違和感を感じ取っていた。  
無造作に地べたに転がしていた頭をもたげると、鼻をヒクヒクと動  
かして空気を探る。

「彼」の鋭い嗅覚が、鼻腔に満ちた空気の中からその違和感を探り  
出す。

それは、香りだった。

少し刺激的で、それでいて酷く蠱惑的な香り。

「彼」の腹が、低い音を立てる。

空腹だった。

ここしばらく、狩りが上手くいつていない。

最後に食事をしたのは、いつの事だっただろう。

下位種とはいえ、時に神格すら有する種族の端くれ。

そんな「彼」に、飢え死にというものはない。

しかし、それと空腹とはまた別の話。

それに耐えるために、しばしの間休眠に入る事にしたというのに。

すつかりこの香りに邪魔をされてしまった。

迷惑な話である。

しかし、覚めてしまったからには仕方ない。

こうなったからには、この香りの元凶に責任をとってもらおう。

件の香りが、いままで生きてきた中で嗅いだ事のない物である事が  
少し引つかかる。

しかし、そんな疑念などどうでも良くなってしまうほど、その香り  
は蠱惑的だった。

「彼」は四肢に力を込めると、己の身体を引きずり始める。

ズルリ

重い身体が、地面に独特の後をつける。硬い鱗に覆われた表皮が地  
に摩れ、所々にキラキラと光る欠片を残していく。

ズルリ　ズルリ



『んあ!?何や、臭ってきましたで!』

(・・・この臭い、多湿棲の動物独特の臭い……。これは、来たかな?)

『ひいつ!!』

(どうしたの?)

『今、その茂みが動いた!!動きましたで!!』

(しっ!!来た!!)

突然、デーモン・ビーバーの目の前の茂みが割れた。

折れた枝をメシメシと踏み砕きながら現れたのは、体長7〜8メートルはあろう怪物。

腹を地面につけて這いずる様は、まるで大きな蜥蜴を彷彿とさせる。

しかし“それ”の背中には、申し訳程度ではあるが確かな翼がついており、“それ”が立派なかの種族の一端である事を如実に示していた。

―『地を這うドラゴン』―

悠久の進化の果てに大空を捨て、地を這う事に生きる術を見出した異端のドラゴン族。

その目の焦点が、ゆつくりとデーモン・ビーバーに合わせられる。

獲物を見つけた喜びを表す様に、その巨大な口が歪に歪む。

その隙間から見え隠れする太い牙が、逃げる術のないデーモン・ビーバーをさらに震え上がらせた。

『ひ・・・ひいいいい!!』

ズル・・・ズル・・・

一歩、また一歩。地を這いながら、ドラゴンがデーモン・ビーバーに近づいて行く。

やがてデーモン・ビーバーの真下まで来ると、“彼”は上を見上げ、その巨大な口をガパリと開いた。

太い漆喰の様な牙がズラリと並ぶ口が、デーモン・ビーバーを一呑みにする。

・・・と思われたその瞬間、

パア・・・

突然ドラゴンの真下の地面が輝き、朱色の魔方陣が浮かび上がる。

『!!』

驚いたドラゴンが身を翻そうとするが、もう遅い。

ボコツ

そんな音とともに、地面に広がる大穴。

ゴガアアアアアツ

響く悲鳴。

“彼”は為す術もなく、昏い奈落の中へと堕ちていった。

— 9 —

— トラップ・スベル 罫魔法 『フォール・ホール 落とし穴』 —

効果はそのまんまなので割愛する。

『ガ、ガゴ、ゴ…!!? (お、落とし穴…だと!?)』

深い穴にはまり、身動きのとれない“彼”。その耳に、この森では聞き慣れない声が響いた。

「上手くいったみたいだね。」

そんな言葉とともに、世界樹の影から二つの影が現れる。

片方は良く知っている。この森に住むグリーン・バブーンだ。もう

一人は見知らぬ人間。若いメスの様に見える。

どういう事か。あの凶暴な森の番人が、まるで飼い犬の様に人間の

メスなどに付き従っているとは。

まるで、悪い夢でも見ているようだ。

混乱する“彼”に向かって、スタスタと近づいてくるかの人間。

フシユーツ

威嚇の噴気音を上げるが、その人間は微塵も臆する事無く近づいてくる。

“彼”の頭の上にぶら下がっているデーモン・ビーバーが何事かを喚くが、それも気にする様子はない。

お互いの吐息を感じるくらいまでの距離まで近づくと、人間は手に

していた杖の先を「彼」の鼻面に押し付けた。

途端、杖の先端の水晶が淡く輝いたかと思うと、何かの力が「彼」の中に流れ込んでくる。それを感じた瞬間、「彼」は自分の身に起こった事を理解した。

「はい。これでキミはボクのもの。」

そう言つて、その人間は怪しく微笑む。

『ガグ、ゴガゴゴ…!! (ひ、卑怯な…!!)』

思わず「彼」が呟くと、

「卑怯？ 最高の褒め言葉だね。ありがとう。」

思わぬ返答が返ってきて、肝を潰す。

「グゲガゴ!? (何で竜語わかるし!?)」

「ウフフ。」

その問いにも、人間は笑うだけで答えない。

(な、何かこの人、怖い… (汗))

怯える「彼」の頭の上で、紐でぶら下げられたデーモン・ビーバーが心底気の毒そうに溜息をついた。

『ペロペロ…冗談やないで…ペロ…ホンマ…ペロペロ…  
毎度毎度、人(?)の事…ペロ…何やと…ペロペロ…思うと  
るんでつか…ペロ…』

「愚痴を言うか、食べるか、どっちかにしたらどうだい? だいたい、近くに沢があるんだから、そこで洗ってくればいいじゃないか。」

傍らにバブーンを傳かせ、平伏させたドラゴンの背にチョンと座つたアウス。

彼女は、カレー塗れになった身体を嘗め回している相方に向かって、呆れた様にそう言つた。

『ペロペロ…そんな…勿体ない…ペロ…』

「それにしても、さすがは老舗名店自慢のカレー。この香りには、警戒心の強い君でも抗えなかつたみたいだね。」

そう言いながら、ドラゴンの目の前で空になったパッケージをピラピラとさせる。そのパッケージには「モウヤン特製!! 絶品シーフード



カレー（お持ち帰り用）」の文字。

それを一瞥したドラゴンは、心底嫌そうな顔をして目を逸らした。「強いスパイスの香りがボク達の匂いも隠してくれるし、まさに一石二鳥だったよ。」

『……せやけどなあ、お嬢……』

身体に付いたルーを舐めながら、デーモン・ビーバーがアウスに声をかけた。

「何だい？」

『それやったら、何でわざわざワイがぶつかぶって困んなる必要があつたんでつか？ただ皿にでもあけて置いとときや良かった様な気がするんやけど……』

それを聞いたアウスが、実に心外だといった態で答える。

「君は本当に馬鹿だなあ。そんなの、ちゃんとした理由があるに決まってるじゃないか。」

『その心は？』

訊かれたアウスは、ニツコリと微笑んで答えた。

「面白いから。」

『……………』

「……………」

一人と二匹の間に流れる、切ない沈黙。

そして――

『もう、君とはやっとなんわー!!』

デーモン・ビーバーの魂の叫びが、森の中に空しく木霊して消えていった。

場合」に続く

「闇の

## 闇の場合

— 1 —

その地に訪れる月夜は、いつも酷く静かだった。

月光に満たされる空気は、風一つ分の身動きすらせず、ただ淡々と虚空を漂う。

月影の中に落ちる大地は、その身に草一本生やす事無く、ただ肅々と時だけを刻む。

そこには、安らかな眠りに身をゆだねる者はいない。

ただ沈黙に沈む数多の影が、累々と積み重なっているだけ。

ここは、セメタリ墓地。

顕界における役目を果たした存在。

亡骸。

残骸。

残滓。

そんなものが、彷徨う果てに辿りつく場所。

世界の、裏側。

ここでしばしの間眠り、表の世へと戻り行く道を得るものもあれば、かの世における力の行使の糧として、永遠に消えるものもある。

有と無の狭間に在る世界。

そんな、生者の世とは隔てられた場所。

そこに、今夜に限っては動く人影があった。

夜風に揺れる、カーキ色のローブ。

周りの夜闇よりなお濃い、漆黒の髪。

不気味な頭骨を模した杖を携えた、細身の少年。

名を、闇霊使いのダルクと言う。

ダルクは、その物憂げな瞳を周囲に廻らしながらボソリと呟く。

「切ないなあ・・・。」

気だるげなその言葉に、彼の周囲を飛び回っていた黒い翼の付いた目玉が怪訝そうに声を返す。

『何がデスカ？ますたー。』

ダルクの使い魔、『D・ナポレオン』である。

「墓地こぼちの風景さ。現世うつしよで馬車馬の様に使われて、その挙句に捨てられた骸達の山。見る度に切なくなるよ。」

言いながら、ハアと溜息をつく。

「僕もいつかは誰かに捨てられて、ここに来るんだろうね……。」

『相変ワラズ、ねがていぶデスネエ。』

D・ナポレオンは呆れた様に言う。

『物事ハモウ少シ、ぼじていぶニ考エタ方ガイデスヨ？』

「この世に、本当に明るい話なんてあると思うかい？」

そう言つてまた溜息をつく主に、D・ナポレオンはやれやれと首(？)を振る。

『全ク、少シハ姉上サマヲ見習ツタラドウデスカ？キット世ノ中変ワツテ見エマスヨ？』

その言葉に、怖気が走るように身を震わせるダルク。

「ライナあいつみたいに？お前、僕にあんな電波を受信しろっていうの？ぞつとしないね。」

『……マア、姉上サマハ姉上サマデ、特別ナ所ハアリマスカラネエ……』

「特別過ぎるんだよ……。あいつは……。」

そんな会話を交わしながら、ダルク達は夜の墓地セメタリをウロウロとろつく。

しかし辺りに動く影はなく、相変わらず静まり返ったまま。

「いないな……。」

『イマセンネエ……』

「ここに来れば、闇属性のドラゴンの一匹くらいいるかと思ったんだけどなあ……。」

『当テガ外レマシタカネエ……』

ダルクがまた溜息をついた。ここに来てからもう何度目だろうか。

「やっぱり、僕はついてないんだなあ……。きつと、今回も僕だけ課題こなせなくてお仕置き食らうのさ……。」

『マタ、ソナナ……』

こちらももう、何度目かも分からないフォローをD・ナポレオンが入れようとしたその時、

ガサ……

ダルクの背後で、そんな音が静寂の中に微かに響く。次の瞬間――ガバツ

積み重なったガラクタの中から何かが飛び出し、ダルクへと飛び掛った。

「……D。」<sup>デー</sup>

『了解。』

途端、黒い光がダルク達を包む。そして――

バキイツ

その光の中から突き出された杖が一閃、飛び掛ってきた影を叩き落した。

ガシヤアツ

金属音とともに地面に落ちる影。それは虫の様に蠢くと、慌てた様にガラクタの中へと這い戻っていった。

「何だ。あいつか。」

そう言いながら光の中から出てきたのは、憑依装着状態へとチェンジしたダルクと禍々しく巨大化したD・ナポレオン。

ガラクタ山に潜り込む『スクラップ・ワーム』を一瞥すると、ダルクはまた溜息をついた。

「やっと何か出てきたかと思えば、あんな外道かい？ 全く、ついちやいないよ。」

ぶつくさ言うダルクの横で、大きな一つ目をギョロギョロさせながらD・ナポレオンが辺りを伺う。

『墓地ハ、すくらつぶやあんでつとの巢デモアリマスカラネエ。』

努々、油断ナサラヌ様ニ。』

「分かってるよ。それにしても、面倒な話だなあ。こっちは余裕が

ないってのに……。」

頭をワシヤワシヤとかきむしりながら、ダルクは悪態をついた。

その後も、何度かモンスターには遭遇した。

しかし、それは皆低レベルのスクラップモンスターや、アンデットモンスターばかり。

「ああ、もう。いい加減にして欲しいなあ。」

ダルクはたった今叩き落した『骨ネズミ』が逃げ去るのを見送りながら、心底ウンザリしたと言った体でガラクタの山に腰を落とした。

「もういつそ、ここに骨を埋めてしまおうかな？先生のお仕置きよりは、よほどマシなんじゃなかるか？」

『ソウ腐ラナイデ下サイヨ。マダ時間ハアルンデスカラ、頑張りマシヨウヨ。』

「そうは言うけどね、お前……。」

言いかけたダルクが、その言葉を止める。

「……何か聞こえなかったか？」

『確カニ……。』

D・ナポレオンも、相槌を打つとギョロリと辺りを見回す。

耳を澄ます。すると……。

パイ……パイ……

確かに何か聞こえる。

パイ……パイ……

か細い、小鳥の雛の様な声。この場には、非常にそぐわない。

「確かこつちから……。」

声をたどり行って見ると、ガラクタ山の陰に何やら箱が置いてある。

それを覗いてみると……

「おっ？」

『アー！』

中にいたのは、子猫ほどの小さな生き物。ただし猫とは違い、その身は黒い甲殻に覆われ、背には小さいが羽が生えている。その生き物

はダルクをルビーの様な赤眼で見上げると、小鳥の様な声で弱々しく、パイ、と鳴いた。

「確かコイツは……」

『『黒竜の雛』デスネ。』

――『黒竜の雛』――

下位の、闇属性ドラゴンの一種。

レベル・ステータスともに最低ランクではあるが、その正体は高位のドラゴン種、『真紅眼レッドアイズ・ブラックドラゴンの黒竜』の幼生であるとされている。

『何デ、コンナ所にイルンデシヨウ？』

弱々しく泣き続ける雛を前に、D・ナポレオンが呟く。

「決まってるだろ。コイツの固有能力パーソナル・エフェクトを思い出せよ。」

『ア……』

ダルクの言葉が、ある事を思い起こさせる。

モンスターの中には、その身に魔法の様な異能の力を内蔵する種類があり、それは固有能力パーソナル・エフェクトと呼ばれている。

文字通り魔法の様に様々な超常の現象を引き起こすが、その中には能力発動のトリガーとして己の身を引き換えにするパターンがまれに見られる。

自身の身を引き換えにする事にどの様な利点があるのか、研究者達の間では様々な仮説が立てられているが、多くの場合、発動した際に起こる現象が魔法や攻撃の無効化であったり、同族及びその上位種の召喚であるため、仲間を守るための利他的行動であるという見方が有力である。

「黒竜の雛こいつらも、巣が襲われた時には雛の内の一匹が、自分を呼び水にして成体の真紅眼レッドアイズの黒竜を呼び寄せるんだ。大方、コイツもそれをやったんだろうさ。」

『ナルホド……』

納得した様に頷く、D・ナポレオン。

しばし、何かを考え込む様に雛を見つめていたが、ふと思いついた様に手(?)を叩いた。

『ソウダ。コノ子ヲシモベニシマシヨウ!!真紅眼ノ系統ハ闇属性デ

スシ、丁度イイジヤナイデスカ。』

「はあ？」

しかし、ダルクはまるで乗り気ではないと言わんばかりに嫌な顔をする。

「コイツを？ 冗談じゃない。見ろよ。こんなに弱ってる。もう死にかけだよ。大体、自己犠牲系の能力を使って墓地送りになった時点で、生きてる事事態が珍しいんだ。」

確かに、件の雛は箱のそこにグツタリと横たわり、か細い鳴き声を上げるばかりである。

「こんな奴、しもべにしたってしょうがない。直ぐに死んじまうのがオチさ。」

『デモ、可愛ソウデスヨ。』

全く乗り気ではないダルクに、D・ナポレオンが食い下がる。

『ネエ、何トカシテ上ゲマシヨウヨ。ますたー。』

巨大な目をウルウルさせて、迫る。

ちよつと、怖い。

その迫力に、タジタジとなるダルク。

『ま・す・た・ー!!』

ダメ押しの一言。

「ああ、もう、分かったよ!!」

そう言うと、ダルクは雛に向かって屈み込む。

「全く、お前は悪魔族のくせにらしくないんだから……。」

ブツブツ言いながら、持っていた杖を箱の中で震えている雛に当てる。

ポウ……

杖から溢れた光が、雛の身体に契約の証印を刻み付ける。

瀕死の雛の身体は、素直にそれを受け入れた。

「さて、後は……」

ダルクは指でパパツと宙に円陣を描いた。

空中に灯る、緑色の魔法陣。

「魔力磁場、構成……」

大きく一息。

そして、

その円陣に重なる様に、ダルクの指がもう一つ円陣を描いた。

「来たれ創世 導きの光 来たれ鳳神 救いの羽風はかせ 彼方の世にて  
迷いし御魂 彼の光に導かれ 彼の風に乗りて此方の世へ舞い戻れ」  
呪文が結ばれると共に二つの円陣は溶け合い、新たな魔法陣を作り出す。

「・・・まったく、面倒なんだよな。この術・・・」

ぶつくさ言いながらも、ダルクは術式の構築を続ける。かなり集中しているらしく、その額には汗が浮き始める。

やがて輝く魔法陣の中から翼を模した十字架クロスが現れ始めた。

「だいたい、僕のカラーじゃないし。」

完全に具現化した十字架クロスがダルクの手の中で回転を始める。

そこで一呼吸置くと、ダルクはそれを箱の中の雛へと突き立てた。

『死者転生』・・・」

言葉が結ばれるとともに、雛の身体に突き立てられた十字架クロスが溶け込む様に消えていく。

同時に、雛の身体を包む様に広がる緑の魔法陣。

その中に溶け込んでいく、雛の姿。

雛の姿が魔法陣の中に消えると、ダルクは「よし。」と言って杖を構える。

「来い!!」

言葉と共に、杖の先が地面を突く。

舞い上がる、闇色の光。

その中から、再び黒竜の雛が姿を現した。

「ほら、もう大丈夫だろ。」

汗びっしりになったダルクが抱き上げると、その腕の中で雛は「ピィ」と元気に鳴いた。

——『死者転生』——

高位の通常魔法ノーマル・スペルの一種で、死者や瀕死者の存在をキャンセルし、新たな存在として再構築する術。



その効果範囲が、術者がしもべ契約をしたモンスターに限られる。発動コストとして、事前に別の魔力磁場の構成が必要となるといった制約があるものの、さらなる上位魔法であり、限られた権利者でしか使えない『死者蘇生』<sup>リライブ</sup>に比べて習得が容易、制限なく使用出来るといった利点がある。

「これで良いんだろ？」

ハア、と息をつきながら言うダルク。

『ダカラ、ますたー、好キデスヨ♡』

「誉めても、何も出やしないよ。」

ニコニコと笑う相方に向かってそう言うと、ダルクはよっこらしよつと腰を上げた。

「用も済んだし、そろそろ帰ろうか。まあ、こいつじゃ赤点ストレスがいい所だろうけど。」

『点数ガ全テジャアリマセン。』

「相変わらず甘いなあ、お前。」

『甘サガナケレバ、コノ世ハ真ツ暗デス。』

「はいはい。」

そんなやり取りをしながら、ダルク達がその場を立ち去ろうとした時――

サア・・・

それまで周囲を照らしていた月明かりが消え、辺りが文字通り漆黒の闇に包まれる。

そして――

ゾワア

『!?!』

突然に襲う悪寒。

ダルクとD・ナポレオンが、一斉に振り返る。  
その視線の先で――

ズルリ

闇が、蠢いた。

「D!!」<sup>デー</sup>

『ハイ!!』

ダルクの呼びかけに即座に応じ、D・ナポレオンが憑依装着を行う。身構えるダルク達の前で、グバツと闇が弾けた。

ゾゾゾゾツ

蠢く闇が互いに絡み合い、何かの形を作り出していく。

見上げる程に巨大な体躯。手の様になった部分から伸びる鋭い爪。頭からは長い角とも触角ともつかないものが生え、顔の両端まで裂けた口にはズラリと鋭い牙が並ぶ。

「ヤ・・・『闇ヨリ出デシ絶望』・・・!!」

目の前に立ちはだかつたその姿に、D・ナポレオンが呆然と呟いた。

— 『闇ヨリ出でし絶望』 —

墓地に堕ちたモンスターへの憎念や魔法の残滓が寄り集まって生まれたと言われる、高位のアンデットモンスター。

その攻撃力は、並のドラゴン族すら凌駕すると言われている。

「まずいな・・・。」

『・・・デスネ・・・。』

憑依装着はしたものの、到底ダルク達に太刀打ち出来る相手ではない。い。

手は、逃げの一択しかない。

シャアアアア・・・

死臭のする呼気を吐きながら、絶望がゆつくりと迫る。

対してダルク達はジリジリと距離をとりながら、逃走のタイミングを伺う。

しかし—

グバアツ

「うわっ!?!」

『ますたー!?!』

突然死角から闇色の触手が伸び、ダルクを襲う。

辛うじて直撃はかわすものの、刃の様に鋭い先端がダルクの左肩をザツクリと切り裂いた。

『コノツ!!』

D・ナポレオンが、その腕に向かって目から光線を放つ。

しかし、それは霧の様に漂う闇に巻き込まれ、吸収されてしまう。

ギヤツギヤツギヤツギヤツギヤツ

響く絶望の哄笑。

そう。絶望は憎念という闇の集合体。

闇に堕ちるこの時間、この場所はそれ全てが絶望の手の中。

逃げ場はない。

「まいったな……。」

体勢を立て直しながらも、ダルクは苦痛に息を漏らす。

『ますたー!!大丈夫デスカ!?!』

「大丈夫……とは言いかねる……。」

肩から溢れる血をローブで拭いながら、ダルクは血の気の失せた顔で答える。

「どうにも……見逃してくれそうにない……。」

『……ハイ。』

ギヤツギヤツギヤツギヤツギヤツ

笑う絶望。

それに合わせる様に、周囲に満ちる闇の中から何本もの触手が生えてくる。

無数の刃が、獲物に手をかけようと蠢き回る。

「……こりや、年貢の納め時かな?」

『……ますたー……』

「何、心配するなよ。出来る限り足掻いてみるからさ……。」  
そう言うと、ダルクは腕に抱いていた雛に話しかける。

「おい、お前は逃げろ。」

ピィ……

雛が短く鳴いて、ダルクを見上げる。

真紅の瞳が、彼の顔を映す。

「せつかく人が拾ってやった命だ。無駄にするなよ。」  
優しく微笑むダルク。

そして、もがく雛を近くのガラクタ山の中に押し込んだ。

「さて、D<sup>デイ</sup>。お前も逃げていいぞ？」

杖で身を支えながら、傍らに寄り添うD・ナポレオンに言う。  
けれど、ナポレオンはかぶりを振って答える。

『御側ニ……。』

その言葉に、苦笑いするダルク。

「物好きだなあ……。お前も。」

肩からの血が止まらない。

ふらつく身を杖で辛うじて支える。

その様を見た絶望の顔に、残酷な笑みが浮かぶ。

無数の触手が、獲物を甦る喜びに踊る様に蠢く。

「つたく……。ホント、ついてないなあ……。」

ギヤツギヤツギヤツギヤツ……

響く哄笑。そしてー

グワツ

無数の闇が、ダルクを八つ裂きにせんと伸びる。

せめて、少しでも主の盾にならんと飛び出すD・ナポレオン。

しかし、さらにその前に小さな影が飛び出す。

『!?!』

それは先刻、ガラクタ山に押し込んだ筈の小さな身体。

「ぼっ……。!?!」

叫びかけたダルクが、その声を呑み込む。

―雛の目が、一層深い真紅に輝いていた。

その意味を察するダルク。

制止の声を上げようとした、その瞬間―

カッ

雛の身体が、真っ赤な光を放つ。

地から天を貫く、真紅の光。

ピイイイイイイイッ

高く鳴り響く、雛の鳴き声。

否。

それは、己の全てを賭した命の咆哮。

同時に巻き起こる、凄まじい暴風。

その場にいた全ての者が、その視界と自由を奪われる。

そして光と暴風の両者が消えた時、そこにはもう、小さな雛の姿はなかった。

視覚を取り戻したダルク達が見たもの。

それは、黒。

周りの闇よりもなお深く輝く、漆黒の巨体。

硬い攻殻に覆われた身体が、満ちる絶望を風ぐ様にうねる。

響く咆哮が、沈黙に沈む墓地セメタリを地鳴りの様に揺らした。

— 3 —

— 黒竜こいつらの雛も、巢が襲われた時には雛の内の一匹が、自分呼び水にして成体の真紅眼レッドアイズを呼び寄せるんだ—

先刻、自分が言った言葉を、ダルクは悔しさと共に噛み締めていた。

今彼らの前に立つのは、あの弱々しい雛とは全く別の姿。

鳥の濡れ羽の様に輝く甲殻に覆われた巨体。

天を覆わんばかりに広げられた、漆黒の翼。

炎の様に、深い真紅に輝く瞳。

— 『真紅眼の黒竜』レッドアイズ・ブラックドラゴン —

かの『青眼ブルーアイズの白龍』ホワイトドラゴンと対を成す、伝説の竜が一柱。

“彼”は今、ダルク達を護る様に、闇から出でし絶望の前に立ちはだかつている。

そう。

“彼”は護っていた。

己にとって塵芥に等しい、人間と言う存在を。

何故か。

答えは、一つ。

それは、己が一族の雛の願いを叶うため。

幼き雛が、己が命を賭して託した願いを叶うため。

それだけのために、かの竜はこの地へと降り立った。

グオオオオオオオツ

怒りに猛る咆哮が、周囲に落ちる闇を振るわせた。

『コレガ、レッドアイズ真紅眼。』

目の前の竜を見上げながら、D・ナポレオンが呆然と呟く。

「ああ……。」

忘我した様な声で、ダルクが呟く。

しかし、D・ナポレオンの驚きは直ぐに焦燥へと変わる。

『ダ、駄目デスヨ!! ますたー!! 闇ヨリ出デシ絶望ノ攻撃力ハ、確力  
レッドアイズ真紅眼ヨリ上ノ筈デス!!』

「……ああ……。」

けれどそんな相方の叫びにも、ダルクは変わらないトーンで返すだけ。

実際、闇より出でし絶望は焦ってはいなかった。

確かに、突然現れた竜には驚いた。

しかし、その力が自分に及ばない事は即座に本能で分かった。

ただ、甦る獲物が増えただけ。

そう結論に至り、絶望はゲラゲラと哄笑を上げた。

D・ナポレオンは知らない。

自分の主人が、まったく焦りの色を見せないその理由を。

絶望は気付かない。

その余裕が、油断という、戦場において最も持つてはならない感情の一つだという事を。

周囲の闇がまたうねる。

そこから伸びた無数の触手が、獲物を引き裂こうと牙をむく。

しかし、それが黒い甲殻にかかる寸前、レッドアイズ真紅眼がカツと口を開いた。

鋭い歯牙が並ぶその奥で、炎が滾っていた。  
それは紅い、紅い、黒いまでに紅い炎。  
その様はまるで、奈落に燃える黒き炎獄。  
ガオンツ

渦を巻いた黒炎は、巨大な火球となって放たれる。

周囲に満ちていた闇はその輝きに散らされ、それに触れた触手が瞬時に蒸散する。

“いかな光でも、いかな攻撃でも呑み込む”筈の、闇の腕が。

——っ!?

絶望は驚愕したが、時はすでに遅かった。

ズガアアアアアアアアア

ギヤアアアアアアアアアアアアア

つんざく様な炸裂音と、絶望の悲鳴が交錯する。

身体のと真ん中に大穴を開けられた絶望が、為す術なく崩れ落ちた。

『ナ……何デ……!?!』

周囲の闇が薄らぎ、月明かりが戻る中で、D・ナポレオンが啞然と呟く。

『ダーク・メガ・フレア黒炎弾』……』

まるで全てを察していたかの様に冷めた声で、ダルクが言う。

『レッドアイズ真紅眼パーソナル・エフェクトの固有能力。どんな物理法則も概念法則も無視して、自身の攻撃力を直接相手に叩き込む。攻撃力の差なんて、何の意味もない。』

ブツブツと呟きながら、ダルクはレッドアイズ真紅眼の足元を潜り、“それ”の元へ向かった。

闇より出でし絶望は、その力の大半を黒炎弾によってこそぎ取ら

れ、地べたでビチビチと無様にもがいていた。

ダルクが、それを冷ややかな目で見下ろす。

絶望が、命乞いをする様に彼を見上げる。

しかし、見下す目はどこまでも冷たかった。

白い手が、握り締めた黒杖を振り上げる。

「……消えろ……!!」

ただの残滓と成り果てていた絶望は、その一撃であっさりと霧散した。

—4—

役目を果たした真紅眼レッドアイズは、その翼を広げ、夜空の果てへと去っていった。

それを見送る、ダルクとD・ナポレオン。

その姿が見えなくなると、ダルクは近場のガラクタ山に背を持たれ、そのまま座り込んでしまった。

『シ、シツカリシテクダサイ!!ますたー!!』

D・ナポレオンは慌てて近寄ると、肩の傷を引き裂いたローブでしっかりと結んだ。

『コレデ血ハ止マルト思イマスケド、モットチャントシタ手当テヲシナイト……。早く寮ニ戻リマショウ。』

けれど、そんな相方にダルクはそっけなく答えた。

「戻るよ。用が済んだらな。」

『エ……。?』

訳が分からないと言った体の相方に、薄く微笑みながらダルクは言う。

「あいつ雛だよ。能力を使ったんだ。また墓地ここのどっかで死にかけてるに決まってる。」

『ア……。』

傷口をもう一度強く締めると、ダルクはよっこらせ、と立ち上がる。

「疲れたろ?お前は先にもどってていいぞ?」

D・ナポレオンはしかし、首(?)を振って拒絶する。

『御側ニ……。』

予想済みのその言葉に、それでもダルクは苦笑する。

「全くお前、物好きだなあ。」

言いながら、ダルクは墓地セメタリの奥に向かって歩き出す。



それに、ピッタリと付き従うD・ナポレオン。

「ああ、それにしても、この身でまた死者<sup>あ</sup>転生<sup>れ</sup>をやらなきやいけないのか。全く、ついてないよ。」

『ふふ、ソウデスネ・・・。』

いつもの調子に戻った会話を交わしながら、二つの影は薄闇の向こうへと消えていく。

・・・夜はまだ、長かった。

「光の場合」に続く

## 光の場合

— 1 —

ハア・・・ハア・・・ハア・・・

“彼”は逃げていた。

必死に。

懸命に。

ただ、空の果てを目指して。

ハア・・・ハア・・・ハア・・・

呼吸が苦しい。

心臓が、早鐘の様に鳴っている。

羽ばたく翼の筋肉が、ギシギシと悲鳴を上げている。

しかし、ここで止まる事は出来ない。

それは、全ての終りを意味する。

ああ、何故こんな事になっているのだろう。

自分はただ、平穏な毎日をおくっていただけなのに。

それなのに、何故こんなにも恐ろしい目に会わなければならないのか。

怖い。

恐ろしい。

あんなものが、この世に存在するなんて。

神は、一体何を血迷ったのだろうか？

もし会う事が出来るなら、小一時間恨み言を言ってやりたい気分だ。

・・・はて、先から後ろに気配を感じない。

あの耳障りな、甲高い声も聞こえない。

ひよっとして、振り切ったのだろうか。

希望的観測。

でも、今はそれにすがりたい。

速度を緩め、後ろを振り向こうとしたその時――

「おいつきましたーっ!!!」

破滅の音が、*「頭上」*から響いた。

—2—

霊使い達がすむ魔法族の里から東に数十キロ。そこに一際華やかな都市がある。

この世界でも特に古い歴史を持ち、常に上空に鮮やかな虹のかかる都市。

そこは、畏敬と羨望の意を込めて、『虹の古代都市――レインボー・ルイン』と呼ばれていた。

その環境の穏やかさから住人は多く、また景観の美しさから観光客も絶えない。

必然的に土産物屋や宿屋等を経営する商売人達も多く集まり、その歴史の古さに反して、現在でも世界屈指の隆盛を我が物にしている稀有な都市でもあった。

しかし、その本来なら人々の喧騒に包まれている筈の都市の一角が、今日に限ってはシンと静まり返っていた。

人がいないわけではない。他の区画と同じく、ここも多くの観光客や住人であふれている。にも関わらず、その場所は静まり返っていた。

そこにいる人々は皆一様に顔を伏せ、何かから必死に視線を逸らしていた。それでも、時たまチラチラと視線を上げては*「それ」*の動向を確認する。その目にあるのは、明確な恐れと不安。「構ってくれるな。」「こつちくん。」明確にそう訴える視線であった。

さて、いったいどんな恐ろしい存在がいるのかと思いきや、そんな視線の先にいるのは、以外にも可憐な少女だった。

・・・もつとも、問題はその「可憐」の前に「見た目は」、という前置きが付く事だったのだが・・・。

「うゝん。ドラゴンさんですかあゝ。」

静まり返る町の中を、光霊使いのライナはそんな事を呟きながらポテポテと歩いていった。

「ごまりましたねゝ。ドラゴンさんはライナのともだちにはまだいけませんし、このまちはふあんないですし。どこにいけばあえるんでしょうゝ?」

彼女が歩く先から、町の人々がザザーッと引いていくのだが、そんな事はまるで気にせず、彼女はポテポテと歩いていく。

「だいたい、ダルクはつめたいですよねゝ。せつかくいつしよにこうっていったのに、だまってよるのあいだにいつちやうなんてゝ。」  
彼女はブツブツ言いながら、手にした杖をクルクルと回す。周囲から降り注ぐ恐怖と畏怖の視線も、当の本人には届かない。

「さてはて、みなさんはどうおもいますかあゝ?」

そんな言葉とともに、頭のとっぺんにピンと立った髪の毛もクルクルと回る。

『そうだねゝ。』

『もけつもけけつもけもけけゝ(そうっすねゝ)。』

『クリッククリッククリック(どうしたもんかねゝ)。』

『ほわゝほわほわほわゝ(ごまったねゝ)。』

『シュワツシュワツシュワツ(我、思案)。』

複数の声が、彼女の背後から答える。

一つは羽の生えた球体。

額に大きなハートマークがついている。

ライナの使い魔、ミニ天使の『ハッピー・ラヴァー』。

一つは羽の生えた立方体。

申し訳程度の手足が付いている。

名は『もけもけ』。

空飛ぶわらび餅にしか見えないが、何故か天使族。

一つはやっぱり羽の生えた毛玉。

クリクリした目が可愛い、かもしれない。

名は『ハネクリボー』。

兄弟分の『クリボー』は悪魔族なのに、こっちは何故か天使族。

一匹は獣。

羽の生えた毛むくじやらの身体に、大きな一つ目がギョロギョロと蠢いている。

名は『エンゼル・イヤーズ』。

不気味な姿な事この上ないが、何故か天使族。

一つは巨大な球体。

ボンヤリと輝くその周りに、玩具っぽい光線銃や箒がフヨフヨと漂っている。

名は『モイスチャー星人』。

“星人”と明らかに宇○人なのに、何故か天s (ry

そんな連中が、訳の分からない言葉で喋くり合いながら、ブツブツ独り言を言っている少女の後にゾロゾロと付き従っている。

・・・はつきり言って、異様な光景である。

町の住民達が必死で目を合わせない様になっているのも、致し方ないのかもしれない。

「うーん。どうしまししょう?」

『シユワ、シユワツチ (我、提案)。』

「なんですか? モイ君?」

『シユシユシユ、デイユワツ (町人多かりし。助言乞うべし)。』

「あゝ、なるほど、ここのみなさんのどなたかにきけばいいんですね?」

ビクウツ

その言葉が、民の間に緊張を走らせる。

「あのゝすいません、そのあなた?」

「うひいいいい!?!」

逃げ遅れた一人の民が、捕まった。

その回りを、少女を中心とした異形の団体さんが取り囲む。

もはや逃げ場はない。

他の民は安堵の息を漏らしながら、犠牲となった者に哀れみと感謝

の視線を送った。

「ひいひいひいひいっ!!間に合ってるっす!!間に合ってるっす!!」

ライナ達に囲まれた不運な「彼」——『バグマンZ』は、その爆弾の様な頭をブンブン振って泣き喚く。

「オレっちは善良な一般バグマンっす!!悩みなんて何も無いっす!!ふつーの毎日に満足してるっす!!不満ないっす!!だからそーゆーの間に合ってるっす!!ホントっす!!ホントっす!!ホントっす!!ホントっす!!ホントっす!!ホントっす!!ホントっす!!ホントっす!!ホントっす!!」

ベチンツ

「ゲフツ!?!」

はたかれた。

エンゼル・イヤーズの鞭みたいな手に。

結構、いやかなり痛い。

大きな一つ目が、赤く血走ってギョロギョロしている。

どうやら、イラっているらしい。

真剣に、怖い。

『ほわほわっほわほわほわ(うるさひ)!!』

「ああ、だめですよ、めーくん。らんぼうしちやあ。めっですよ?」  
ライナに諭され、エンゼル・イヤーズはポリポリと頭をかく。

『ほわほわ(ごめんなさい)』

「わかればいいのです。」

エンゼル・イヤーズの頭をなでなでしながら、ライナは改めてバグマンZに向き直る。

「だいじょうぶですよ。こわいこともいたいこともしないのであんしんしてください。」

(すでに痛い目に合わされてんすけど・・・)

バグマンZの抗議の視線には全く気付かない様子で、ライナは勝手に話を進める。

「あのですね、じつはライナたちはひかりぞくせいのだらゴンさんをさがしているのです。このみやこのちかくでよくみつかるってきいたんですけど、なにかござんじありませんか?」

「は？ド、ドラゴンすか？」

「はいです。」

ライナの問いに、バグマンZは懸命に頭を捻る。

今のこの状況から逃れられるかが掛かっているので、何しろ必死である。

ホルアクティ

sophia

創造神、創星神様。創世神様に三幻神様。も一つついでに三邪神様。どうぞオレっちめにお力を。

普段は口にもしない、知り得る限りの神の名に祈る。

そうして、自分の脳内を検索しまくる事数分。

—かくして、彼の脳裏に神の天啓は降りた。

「はっ、そ、そうっす!!確か・・・」

そう言つて、空の虹を指差す。

「あの虹の麓には、虹から降る光エネルギー、『シャインスパーク』の溜まり場があるんす。そこにはそれを目当てに光属性のモンスターが集まるって聞いた事があるっすから、ひよっとしたらそこに・・・」

「ドラゴンさんもいるかもしれないんですね?!!」

「は、はいっす・・・」

「ありがとうございます!!これはおれいです。」

そう言つて、ライナはバグマンZの手に何やら握らせる。

「それではみなさん、いきましょ!!」

『あいく。』

『もけく(はいなく)。』

『クリく(ゴーゴー)。』

『ほわくほわほわく(叩いてごめんねく)』

『シュシュワツチ、デユワツ(我、感謝)。』

口々に言い合い、ライナ達はその場を後にした。

後に残された人々は、ただ呆然。当然、バグマンZもただ呆然。

「な・・・何だったんすか・・・?」

そういつてライナに握らされた手を見てみると—

そこには飴玉が数個、転がっていたりするのだった。

「ほへへ、きれいなところですねえ。」

『だね。』

『もけもけけ（本当）。』

『クリクリ、クリリ（心が洗われる様だね）。』

『ほわほわわわ（いい所だ）。』

『シユシエア、シユワツチ（我、感動）。』

バグマンZに教えられた場所に来たライナ達一同は、その風景に感嘆の声を上げていた。

そこは正しく、光の楽園。

手が届くかと思える程、近くに見える虹からは絶えず七色の光が降り注ぎ、辺りの森や泉を優しく照らし出していた。

その光を求める様に、周囲には多くのモンスター達がたむろしていた。

大部分は降り注ぐ光エネルギー、『シャインスパーク』を糧とする光属性のモンスター達だが、それに混じって見慣れないモンスター達もいた。それらは一様に身体の一部に宝石の様な器官を持っている。

『何か、知らないモンスターがいるね。』

「ああ、ラヴくん。あれはほうぎよくじゆうさんたちですよ。」

ハッピー・ラヴァーの問いにライナが答える。

『ほわほわわわ（宝玉獣？）』

「はい。なんでも、このちいきのこゆうしゅで、とてもめずらしいかたがただと、まえにせんせいがいってました。」

『クリ（へえ）。』

皆が物珍しそうに見ている中で、ライナは一人周囲を見渡している。

「ん。でも、ドラゴンさんのすがたはみえないですね。」

『今日はまだ、来てないんじゃない？』

『シユワシユワ、シユワシユシユシユ（我、想う。家宝は寝て待て）。』

「そうですね。ライナたちもひかりぞくせいですし、ここのシャ



インスパークはきもちいいですもんね。すこし、おひるねでもしましようか？」

モイスチャー星人の提案にそう頷いて、ライナが柔らかな草の上にゴロンと寝転がろうとしたその時――

バサアツ

静かだった空間に羽音が響き、ライナ達の上に大きな影が落ちた。

一斉に空を見上げたライナたちは、これまた一斉に叫んだ。

「あ――っ!!」(×6)

――時は少しさかのぼる。

薄暗い巣穴の中で、『彼』は目を覚ました。

欠伸を一つし、軽く伸びをする。

まだ眠気の残る頭で、これからする事を考える。

が、今一つ考えがまとまらない。どうも昨夜、狩りに熱中するあまり

夜更かしをし過ぎたらしい。

こんな時はどうするか。

決まっている。

あの場所に行こう。

あそこで光を浴びれば、気分スッキリ体調万全となること請け合いである。

『彼』は巣穴を這い出ると、その大きな翼を広げ、空へと飛び立つた。

その場所は、彼の翼なら数分の距離だった。

ああ、今日もいい塩梅に光が射している。

いつもの事ながら、あそこでの光浴は格別なのだ。

タツプリと英気を養ったら、今日も狩りに出かけよう。

本当なら、いつもモンスターがたむろっているあそこで狩りが出来れば手間も省けていいのだが。

しかし、あそこはこの森における聖域。荒事が御法度なのは、森のモンスター達の間では暗黙の了解だ。

まあ、それはどうでもいい事。そもそも豊かなこの森では、獲物の

あてには事欠かない。

とにかく、今は――

「彼」はいそいそとその場所に舞い降りた。

異変は、その時起こった。

『あー、ドラゴンだーっ!!』

『もけ、もけけー（おー、間違いないー）。』

『クリクリリー（すごいー）』

『ほわ、ほわほわほわわー（ほう、これは見事な・・・）。』

『シユワ、シユワツチ（我、歓喜）。』

そんな事を口々に言いながら、見た事のない連中がかけ（？）寄ってきたのだ。

羽の生えた球体やら、わらび餅やら、毛むくじゃらの一つ目やら・・・。

正直、面するには一歩引いてお願いしたい様な面子である。

突然の事態に狼狽する「彼」の前に、件の連中の間をぬって一人の人間が進み出てきた。

「はじめまして。こんにちは。」

そう言つてペコリとお辞儀。

釣られてこつちも頭を下げしてしまう。

「あなたは、エレメント・ドラゴンさんですね?」

自分が、人間の間でそう呼ばれているのは知っている。とりあえず、頷く。

「エレメント・ドラゴンさんは、ひかりぞくせいですよね?」

んな事は、知らん。

しかし、黙っていると件の人間はしつこく「ひかりぞくせいですよね?ね?」と訊いてくる。

面倒くさくなつて、適当に頷いた。

これが、いけなかった。

それを聞いた人間が、ズウアアアツともの凄い勢いで迫ってきた。その勢いと迫力に、思わず引いてしまう。

「しもべになりませんか!?!」

『キユイ(はあ)!!?』

「ライナのしもべになりませんか!？」

『キユ、キユキユイ(ちよ、ちよっと)!!?』

「ああ、きゆうにしもべだなんてしつれいですね。それじゃあ、おともだちからはじめましょう!!」

『キユ、キユイ・・・(あ、あんた・・・)』

「おともだちになりましょう!!」

『キユ・・・(ちよ・・・)』

「おともだちになりましょう!!」

『キユ、キユア・・・(いや、あのね・・・)』

「おともだちになりましょう!!!」

『・・・(汗)』

・・・話が通じない。

いや、そもそも人間にドラゴンこちらの言葉は通じないのだが・・・。

それを差し引いても、この人間は何かが違う・・・。

というか、何か、怖い。

ああ、ほら。こつちを見つめる瞳の中で何かグルグル回っている。一体何を見てるんだ。

ほら、頭の上にピンと立った髪がクルクル回っている。まるで、何かを受信している様だ。

ほら、口がパクパクと動いて同じ事を繰り返している。

「おともだちになりましょう」「おともだちになりましょう」「おともだちになりましょう」「おともだちになりましょう」「おともだちになりましょう」「おともだちになりましょう」

・・・ああ、何だか目眩がしてくる。

ほら、何だか後ろの連中までブツブツ同じ事を言っている。ああ、こいつらの目、この人間と同じじゃないか。グルグルグルグル、だから、一体何を見てるんだ。一体何を聞いてるんだ。

「おともだちになりましょう」「おともだちになりましょう」「おともだちになりましょう」「おともだちになりましょう」「おともだちになりましょう」「おともだちになりましょう」

う」「おともだちになりました」「おともだちになりました」「おともだちになりました」「おともだちになりました」「おともだちになりました」「おともだちになりました」「おともだちになりました」「おともだちになりました」「おともだちになりました」「おともだちになりました」

ああ、何か・・・何か、もう・・・  
駄目だ・・・。

『キュ…キュイ…（よ、寄るな…）』

後ずさるエレメント・ドラゴンに、ライナがトコトコと寄ってくる。

「どうしました？わたしはおともだちになりたいだけですよ？」

焦点が何処にあつてるかも分からない目が、エレメント・ドラゴンを見据えている。

『キュ…ウ…（友達…だと…？）』

「たのしいですよ。いろんなものがみれたり、きけたりします。おともだちもたくさん、できますよ。」

『キュキュ、キュアーツ!?（友達つてのは、後ろの連中の事がーっ!?）』

その「後ろの連中」が、一斉に頷く。その動きは、申し合わせた様にピツタリだ。

「ああ、なにをいってるのかわかりませんね。でもだいじょうぶ。

おともだちになれば、みんな、なんでもわかるようになります。」

そう言つて、にっこりと微笑むライナ。

・・・限界だった。

『キ、キュアー!!（ひ、ひいー!!）』

「あれえ？どこいくんですかあ？まっつてくださいようー。」

『キュ、キュウアーツ!!（誰か、助けてくれーっ!!）』

気が付けばそんな魂の叫びを上げながら、エレメント・ドラゴンは大空へと逃げ出していた。

—そして話は冒頭に戻る。

「おいつきましたーっ!!」

上から降ってきたその声に気が付いた瞬間、首つ玉にしがみつかれた。

『キィ、キュウアアアアツ（ヒ、ヒイエエエエツ）!!』

「つつかまえました♪つつかまえましたー♪」

『つつかまえた♪つつかまえた♪』

ライナに組み付かれたエレメント・ドラゴンの周りを、ハッピー・ラヴァーがヒュンヒュンと飛び回る。

『キュウアアアア、アアアアアアーツ（落ちる、落ちるーっ）!!』

「わー、うろこがスベスベしてきもちいーですー♪」

『キュキュウ、キュアアアーツ（どっから来たんだ、オノレはーっ）!?!』

首にぶら下がる厄災とくんずほぐれつしながら上を見ると、例の“お友達”の内の一人（？）が浮いているのが見えた。周りに訳の分からない道具を浮かべた、でかい球体に目玉のついたやつだ。

「どうやら、“アイツ”が“コイツ”を乗っけて追って来たらしい。全速力の自分に追いつくとは、大したスピードだ。只者ではない。

“・・・”などと感じている場合ではない。早くしがみ付いている“コイツ”を振り払って、ここから離脱しなければ。

空で振り払えば、当然“コイツ”は落ちるだろうが、知った事か。どうせ、上の“アイツ”が助けるだろう。つてか、よしんばそのまま墜落して地面に激突したとしても、“コイツ”なら死なない様な気もする。

エレメント・ドラゴンがしがみつくライナを振り払うため、全身に力を込めたその時――

『クリ――――ッ!!!』

遠くから、そんな声が聞こえた。

エレメント・ドラゴンにしがみ付いてバタバタしていたライナと周りを飛び回っていたハッピー・ラヴァーがピタッとその動きを止める。

「マロ君!?!」

そう言って、声のした方を見つめるライナ。その目には、さつきま

でグルグル回っていた狂気の影がない。

『ライナ、今のは!!』

「はい!!今のはマロ君の非常警戒音です!!」

ハッピー・ラヴァーの言葉に、ライナが真剣な顔で答える。

「何かありました!!戻ってください!!」

『キュ、キュア（え、ええ）!?!』

「早く!!」

相手の突然の豹変に当惑する、エレメント・ドラゴン。

そんな彼を、それまでとは全く違う鋭さを持ったライナの声が叱咤する。

『キ、キュア（は、はい）!!』

迫力に押された。

ライナをその背に乗せると、彼はもといいた虹の泉の方向へと頭を向けて全力で空を駆け始めた。

—5—

は—  
—ハネクリボーの非常警戒音がライナ達に届いたその頃、虹の泉で

「クポポポポポ。いいのう、ここは。 “資源” の宝庫ではないか。」

愉快気に笑い声を響かせながら辺りを見回すのは、僧侶の様な姿をした男。

ただし、異様なのはその僧衣の中から覗く顔。

その顔は人間のそれではなく、4つの目を持つ奇怪な魚の顔だった。

グシヤリ

水掻きのついた足が、水辺に咲く花を踏み躪る。

「やーよ。あたし。こんなにキラキラ光が照ってたら、お肌が焼けちゃうじゃない。ほら、あんたたち!!ボサツとしてないで、さつさと “資源” を捕まえなさい!!」

僧侶の横でそう喚き散らしているのは、魔法使いの様な衣装に身を包んだ青い髪の少女。

苛立たしげに地団駄を踏みながら、泉の辺で逃げ惑うモンスター達を捕まえている部下らしき男達にがなり散らしている。

「へいへい。わかってますがな、御嬢。」

「そう、がならんでください。」

「あんまり騒がれると、折角の『資源』が逃げるでやんす。」

そう口々に言う男達は、これまた異様な風体をしている。

一人は蝟。

一人は鮫。

一人はヒレの付いた蜥蜴の様な姿をしている。

彼らはその触手や手にした鎖を使い、次々とモンスターを捕まえては網の中に放り込んでいく。

「全く、三匹そろって愚図なんだから。」

「まあそう言うなリアル。愚図は愚図なりに、働いてくれているではないか。」

「あんたがそう言っただけだから、あいつらも図に乗るのよ？ シヤドウ。」

そう言い合う二人はそろって、奇妙な形をした鏡を身につけている。否、彼らだけでない。部下らしき三人にも、それぞれの武器や衣装に同様の鏡がついていた。

と、部下達の触手や鎖をすり抜けた一匹のエレキタリスが、『シヤドウ』と呼ばれた僧侶の足元に逃げてくる。

しかしその足をすり抜けようとした所を、シヤドウに踏みつけられてしまう。

キキイッ

苦痛の声をあげながら、パチパチと放電をするエレキタリス。しかし、シヤドウはピクリともせずにはせせら笑う。

「クポポポ、活きのいいのは良い事よ。『資源』として、我ら『リチュア』の糧になれる事を誉れに思うがいい。」

「は、こんな雑魚チビどもなんか、幾らの足しにもならないわよ。」

『エリアル』と呼ばれた少女は、そう言って酷くつまらなそうに鼻を鳴らした。

「はー、シャドウはん、えろうすんまへん。こいつ、すばしっこくて・・・」

エレキタリスに逃げられた蛸頭の男が、触手で頭をかきながら近寄ってくる。

「ちよつと、マーカー。ただでさえ役立たずなのに、出来る仕事までし損ねる気？何だったら、あんたから“使つて”もいいのよ？」

暴れるエレキタリスのしつぽを掴んでぶら下げながら、エリアルが素晴らしい捨てる。

「うへえ、御嬢は相変わらずおキツイでんなあ。ちゃんとやりますけん、勘弁してください。」

蛸頭の男『リチュア・マーカー』は、そう言ってエリアルからエレキタリスを受け取ろうと触手を伸ばした。

と、その時――

『クリーツククリククリーツ!!』

飛び出してきたハネクリボーが、マーカーの触手に齧りつく。

「おお!!?何や、こいつ!?!」

驚くマーカーの後ろで、残り二人の声が響く。

「おいおい、こつちもだぜ!!」

「何でやんすか、オメエら!?!」

そう口々に言つて身構える二人の前には、他のモンスター達を守る様に立ち塞がるもけもけとエンゼル・イヤーズの姿。

双方、かなり怒っているらしく、もけもけは焼いた餅の様に膨れ、エンゼル・イヤーズはその目を真っ赤に充血させている。

「何や?コイツら。気味の悪い連中でんなあ。」

纏わりつくハネクリボーを鬱陶しげに振り払いながら、マーカーが言う。

「・・・この辺りの野生モンスターじゃなさそうね。何なのこいつら?」

「ふむ。『ハネクリボー』に『もけもけ』、『エンゼル・イヤーズ』か・・・」



皆、天使族の外れ者じゃ。」

エリアル問いに、シャドウが答える。

「天使族う？何でそんなもんがここにいるのよ？」

「さてな。まあよかろう。マーカー、アビス、チェイン、そいつらも捕まえてしまえ。いい儀式の足しじゃ。」

「「あらほらさっさー。」」

三人はそう言うと、相変わらず他のモンスター達を守ろうとしているハネクリボー達にじり寄っていく。

「によつによつによつ、さあ、大人しくしいな。」

「そうそう、痛い思いしたくなけりや、大人しくするでやんす。」

「おう、ジツとしてりや、直ぐ終わるからよう。」

マーカーの頭から伸びる触手がハネクリボーに触れようとしたその時――

フツ

彼らの上に落ちる、暗い影。

「ん？」

何事かとマーカーが上を向いた瞬間――

「チョワーツ!!」

グチャツ

「おべえつ!」

降って来た靴底に顔面を踏み抜かれ、マーカーは陸揚げされた蝟の様に伸び転がった。

「マ、マーカー!?!……ってウベア!?!」

「へブウツ!?!」

伸びたマーカーの心配をする間も無く、横殴りに振られた尾に尻払われ、アビスとチェインも地べたに転がる。

「マロ君、めー君、もけ君、大丈夫ですか!?!」

「ちよつと、今度は何なのよ!?!」

「ふむ、飛んどののはエレメント・ドラゴンじゃが、この降ってきた娘は何じゃ?」

訝しがるシャドウとエリアルに向かって、降ってきた娘――ライナは

ビシィツと指を突きつける。

「あなた達!! 一体何をしていますか!! 罪もないモンスターさん達を玩具の様に扱って!! 何様のつもりなのです!？」

それを聞いたシャドウは、愉快げに笑いを漏らす。

「クポポ、面白い事を言う娘じゃな。強い者が弱い者を糧とする。弱者が強者の踏み台となるは、まごう事無く天の理、地の自明というものじゃろうに。」

その言葉に、ライナはますますその眉根を吊り上げる。

「何を勝手な事を言ってるのですか!! 生きとし生けるもの、みんな等しくお友達なのです。」

それを聞いたエリアルが、大げさに溜息をつく。

「何か、随分天然オツムなヤツね? じゃあ、訊くけど、アンタ魚は食べないの? 肉は好きじゃない? 言っとくけど肉食主義者なんてオチは無しょ。植物族だって、“一応”生きてるんだから。」

「それは、生き物として仕方の無い事です!! だけど、それと貴方達のやってる事は全然別です!! 必要以上の搾取は、自然のバランスを崩します!! まして、力が弱いから虐げられていいなんて理屈、あっちゃ駄目なのです!!」

「うわ、面倒くさっ!!。あたしの一番嫌いなタイプだわ。」

「なんですってーって・・・エリアちゃん!？」

「は?」

お互いがお互いの顔を見て、ポカンとする。

やがて、エリアルの顔を見つめていたライナがワナワナと震えだす。

「な、何て事でしょう!! 確かにエリアちゃんはお馬鹿で自意識過剰の自信過剰で軽薄な単細胞の間抜けさんでしたが、こんな悪事に手を染める様な娘じゃなかった筈なのに・・・!!」

「・・・何言ってるの? あんた・・・」

「悲しい・・・ライナは悲しいのです・・・!!」

完全に自分の世界に入って嘆き出すライナに、エリアルは成す術なく呆然とする。

「何じゃ？お主の知り合いか？エリアル。」

「知らないわよ。こんな能天気博愛主義者なんて。」

「何ですって!？」

ピンツ

エリアルの言葉に、うつむいていたライナのアホ毛が立った。まるで何処ぞの妖怪少年の様である。

「いくらエリアちゃんがお馬鹿でも、毎日見ているライナの顔を忘れる筈がないのです!!という事は・・・」

ライナの指が再びビシツ、とエリアルに突きつけられる。

「あなたは、『偽エリア』ちゃんですね!!」

「・・・・・・」

注がれる二人の視線が冷たい。

しかし、非常に残念な事に当のライナには全く通じていない。

「危なかった・・・。危うく騙される所だったのです。しかし、そんな姑息な手段に惑わされるライナではないのです!!残念でしたー!!」

わー、パチパチパチ。と、拍手するハッピー・ラヴァー一同。

「残念なのは、あんたのオツムよ・・・。」

心底ウンザリしたという体で溜息をつくエリアル。その顔には、疲労の色が濃い。

「どうする？シャドウ。そーとーなッアレ」みたいだけど、一応見られちゃったわよ?」

指を頭の上でクルクルと回しながら、エリアルは魚顔の僧侶に向かって尋ねる。

「どうするもこうするも、こうして行き合ったのも何かの縁じやろう。『世の万物、これすべからく愛しき供物』・・・」

「『もって我らが糧となさん』・・・ってか?」

「うむ。それが我らの基本教念じゃ。」

少女と僧侶が、その顔に歪んだ笑みを浮かべる。

その笑みに少なからずの怖気を感じながら、ライナが問う。

「教念?その言い様。あなた達、何か危ない宗教団体さんかなんかですか?」

「・・・あんたに言われると、何だか無性に腹が立つわ・・・。」  
剣呑に呟くエリアルを制して、シャドウが前に出る。

「新興宗教扱いは心外じゃな。『リチュア』を知らんのか？」

『『リチュア』・・・？』

一瞬何かを考える様な素振りをしたライナが、「ああっ!!」と声を上げる。

「聞いた事があるです!!最近巷で噂になってる、世界征服を狙う悪の秘密組織!!」

「・・・今一つ表現に同意しかねる所があるが、まあ概ねそんな所じゃ。」

「てつきりただの都市伝説だと思っていたのです。まさか本当に存在するなんて・・・」

「事實は小説より奇なり、じゃよ。」

戦慄くライナにそう言つて、シャドウはクポポと笑う。

「く・・・その悪の秘密組織が、なんでこんな無力無実な小モンスターさん達を拉致しようとしているですか・・・？」

ライナの問いに、シャドウの目が怪しく光る。

「なに、大した事ではない。少しばかり、儀式の生贄になつてもらっただけじゃ・・・。」

「い・・・生贄ですつて!？」

「何せ、わしらはまだ少数勢力でのう・・・。その不足を補う肝が、ほれ。」

そう言つて、自分の胸に下げられた奇妙な鏡を晒す。

「この儀水鏡を使った邪悪古代儀式イビリチュアじゃ。これによつて、わしらは大いなる力を手に入れる事が出来る・・・。」

その言葉に合わせる様に、杖の儀水鏡が怪しげに光った。

「そ・・・そんな事の為に、罪も無いモンスターさん達を・・・!？」  
怒りに拳を震わせるライナを見て、シャドウはまた笑う。

「クポポ・・・確かに、こんな雑魚どもでは大した足しにはならん。おかげで数ばかり必要でのう・・・。しかし・・・」

ザワリ・・・

突然の寒気がライナを襲う。

次の瞬間―

ジュルルルルル

「きゃあっ!?!」

足元から伸びた八本の触手が、ライナの身体を絡め取った。

―6―

「にやーっ!!気持ち悪い!!な、何ですか!?!」

「何も蟹もあるかいっ!!」

ライナの足元からグバアツと起き上がった、リチュア・マーカーが怒鳴る。

「黙つとつたら、話の間中ずっと人の頭踏んどってからに!!頭骨折れたらどないするんや!!」

「オメエ、骨ねえだろ。」

「人でもないでやんす。」

そんな突っ込みを入れながら、『リチュア・チェイン』と『リチュア・アビス』が近づいて来る。

「シャドウさん。こっちも済みましたで。」

気付けば、エレメント・ドラゴンとエンゼル・イヤーズがチェインの鎖でグルグル巻きにされて地面に転がされている。ハッピー・ラヴァーやもけもけ達も、アビスの持つ網の中でもがいていた。

「みんな!!くっ、離すです!!」

「阿呆。そない言われて離すヤツが、何処におるんや?」  
もがくライナを、嘲るマーカー。

「いや、それにしても、今日は思わぬ大漁でしたな。」

エレメント・ドラゴンとエンゼル・イヤーズを引きずりながらチェインが言う。

「うむ。こやつらなら、ここの野生モンスターどもより、よほど良い糧となろう。」

「だから、前から言ってるじゃない。こんなちまちました事やんな

いで、小さな町なり村なり襲ってかき集めればいいのよ。」

満足気に頷くシャドウに向かって、エリアルが毒づく。

しかし、シャドウはただ笑うだけ。

「確かに、それをすれば上質の『資源』は手に入るじやろうな。しかし、それは同時にリチュア<sup>我</sup>の存在を公に晒す事となる。さすれば、必ずやライトロードやE・HEROと言った、「正義」などという戯言を旗印にする連中が我らを襲撃する事は必至。残念じゃが、今のリチュアには奴らに対抗するには足りぬものがある。」

「そんな事、やってみないや分らないじゃない。」

「クポポ、若いのう。エリアル。いいから、今は待て。いずれ、時は来る。」

「そうそう。『家宝は寝て待て』でっせ。御嬢。」

「俺たちも、まだあんな連中とは事起こしたくねえ。」

「右同、でやんす。」

口々にそう諭され、エリアルはプウと膨れてしまう。

「それでは、そろそろ戻ろうかのう。グズグズして、人に見られでもしたら面倒じゃ。」

「『あらほらさっさー!!』」

そして、リチュア達が帰路につこうとしたその時、

「待つのです!!」

「うむ?」

「『んあ?』」

見れば、マーカーに絡み取られたままのライナが、燃える様な目でリチュア達を見ていた。

「何よ?まだ何か言いたいのか?」

鬱陶しげなエリアルに向かって、ライナが叫ぶ。

「さつきから聞いていれば、勝手な事ばかり!!あなた達、絶対に許さないのです!!」

「ほほう、許さなかったら何やねん。そんな様で、どうしようってんでっかー?」

「……こうするです。もっくん!!」

次の瞬間、一筋の閃光が天を下った。

—7—

バリバリバリバリーツ

「アベアーツ!!」

落ちてきた閃光に焼かれ、リチュア・マーカーは盛大に引っくり返った。

触手の先がチリチリと焦げて、辺りに香ばしい匂いが漂う。

その隙に、ライナは触手の緊縛からスルリと抜け出る。

「な、何!」

慌てて見上げた先には、宙に浮かぶ巨大な球体。モイスチャー星人の姿。

見れば、彼(?)の傍らに浮いている光線銃から煙がたゆたつていく。

「もつくん、Gjなのです!!」

モイスチャー星人が、答える様に明滅する。

「何と。まだ仲間がいおったか。」

呆れるシャドウを尻目に、ライナは網の中のもけもけとハネクリボーに向かって叫ぶ。

「もけ君、マロ君、遠慮はいらないのです!! やっっちゃうです!!」

『もけつもけもけ!!』

それに答える様に、もけもけの身体が膨らみ始める。

「うおお!! な、何でやんす!」

慌てるリチュア・アビスの手の中で、どんどん膨らむもけもけ。終には網がその膨張に耐えかね、破けてしまう。しかし、それでもまだもけもけの膨張は止まらない。薄水色だった身体は真っ赤に染まり、頭の「?」が「!」に変わっている。

—もけもけの固有能力パワースキル・エフェクト、その名も『怒れるもけもけ』。

「あわ、あわ、あわ・・・」

すっかり腰を抜かしたアビスに、数十倍に膨らんだもけもけが迫

る。

「ま、待つでやんす!! 話せばわか・・・」

プチッ

虚空に響く、空しい音。

一拍の後、プシュ、と空気の抜ける様な音とともに、もけもけの身体が縮んでいく。その下から現れたのは、半分地面にめり込み、白目を剥いたアビスの姿。

「な、何じゃわりヤーっ!!」

慌てるチェインに突っ込んでいくのは、ハネクリボー。

投げ付けられる鎖をかくぐり、チェインに肉薄する。

次の瞬間、その身体が眩く輝き、中から朱く重厚な鎧に包まれたハネクリボーが飛び出してきた。

『クリクリクリッククリーツ（ハネクリボーLV9）!!』

「ん なっ・・・!?!」

驚く間もあらばこそ、巨大な爪に弾き飛ばされるチェイン。

「ンベラツ!!」

そのまま近くにあった岩に叩きつけられ、こっちもやつぱり白目を剥いて伸びてしまった。

あれよあれよという間に、三人のリチュアが地に転がる。あつという間に形勢逆転である。

「ちよ、ちよつと、何よこれーっ!!」

「いやはや・・・こりやまいったわい。ちと、甘く見とったのう・・・。流石に顔色をなくすエリアルを見て、ライナが思いつきり胸を張る。

「にやつはっはっはっ!! どうですか!? 正義は必ず勝つのです!!」

「あんた何もしてないだろーっ!!」

「結果論です。過程に意味はありませーん!!」

エアリアル之魂の突っ込みも、何処吹く風である。

「さあ、もう勝負はついたのです!! 捕まえたモンスターさん達を放しなさい!! そして、その三人担いでさっさと帰るです!!」

ライナを中心に、ハッピー・ラヴァー達が睨みをきかす。



「こ、この・・・!!」

「・・・エリアル、あの三人を連れて来い。」

歯噛みするエリアルに、シャドウが静かにそう告げる。

「シャドウ!! あんたこのまんま引き下がるつもり!?」

「いいから、連れて来いと言っておる!!」

「くっ・・・!!」

シャドウに一喝され、エリアルはしぶしぶ伸びている三人の元に行く。

「そうそう。聞き分けがいいのは良い事なのです。」

ニコニコしているライナを横目で睨みつけながら、エリアルは伸びている三人を叩き起こす。

「あんた達、いつまで寝くたばってるのよ!? さっさと起きなさい!!」

「ん・・・ああ?」

「痛、痛いでやんす!!」

「御嬢、堪忍、堪忍や!!」

エリアルに尻を蹴たぐられながら、三人はヨロヨロとシャドウの元に向かう。

「・・・まったく、愚図は愚図なりにも思っておったが・・・」

「すみません・・・。シャドウはん。」

ただでさえ骨のない頭をさらにグンニヤリとさせながら、マーカールがうなだれる。

他の二人も同様である。

しかし、シャドウは急に声音を和らげる。

「まあ良い。お前達にはまだ、役に立ってもらわねばならんからかう。」

その言葉に、三人の顔がパツと明るくなる。

「ほ、ホンマでつか!」

「ありがとうでやんす!!」

「オレら、がんばるっす!!」

「シャドウ!! あんたまだ・・・」

言いかけたエアリアルの手に、ポーンと何かが放られる。

「!?」

受け取ってみると、それは捕まえたモンスター達を詰め込んだ網袋。中に入っていたのは、『エレキツネザル』だった。

「エリアル、『足らぬ分』はそれでよかろう……。」

シャドウの言葉に、一瞬キョトンとするエリアル。しかし――

「ああ、なるほどね……。」

その意を察したのか、ニヤリと微笑むエリアル。それは、可愛らしい顔には酷く不釣り合いな禍々しい笑みだった。

「さあ、お前達、役に立ってもらおうかの……。」

「へ……シャドウはん……一体、何言って……?」

狼狽するマーカー達の顔が、シャドウの持つ儀水鏡に移り込む。

それに気付いたライナが叫ぶ。

「ーっ!! いけません!! 皆、アイツを止めて!!」

その声に応え、ハネクリボー達がシャドウに向かう。が――

ジャカカカカカッ

軋む音と共に降ってくる、無数の黒剣。

それが、皆の行く手を遮る。

『闇の護封剣』!! いつの間にも!」

驚くライナに向かって、シャドウが笑う。

「クポポポ、長く生きておると、色々な芸を覚えるものでなあ……。」

「……詠唱破棄……!! そんな真似……。」

歯噛みするライナ。しかし、どうする事も出来ない。

「さあ……これで邪魔は入らん。」

シャドウの顔が、邪悪な笑みに歪む。

「シャ……シャドウはん……ま、まさか、わいらの事……!」

「弱者が強者の糧になるは世の摂理、愚図は愚図なりに……じゃろ

?」

「駄目っ!! あなた達、逃げてーっ!!」

「ひ、ひいーっ!!」

「お、お助けー!!」

ライナの叫びに弾かれた様に、マーカー達が逃げ出す。

しかし、その行く手をエリアルが阻む。

「だーめ♪逃がさない♪」

「ひ、お、御嬢・・・!!」

「か、堪忍・・・堪忍や・・・。」

そんな彼らの懇願も、彼女には届かない。

「せいぜいあの世で精進することね。いつか“あっち”であつたら、また馬車馬程度には使つてあげるわ♪」

シャドウとエリアル。二人の儀水鏡が怪しい光を放ち始め、それと同時に二人の足元に巨大な魔法陣が展開する。

「イビル・イビリア・イビリチュア 時の澱みに沈みし混沌 古き水に眠りし邪神 我が求むは其が忌名 我が望むは其が恵み 愚なる現世は墮せし偽物 汝の夢こそ尊き真理 暗き水面に映せし御魂 其を導に此方に來たれ 深き淵に沈みし現身其を礎に穢土へと降れ 我が御魂は汝が盾 我が身体は汝が矛 其を持ち荒びて全てを呑み込め 其を持ち猛りて全てを喰らえ」

シャドウとエリアル、二人の声が唱和する様に呪文を紡ぎ上げる。

それに応える様に、光を放ち始める儀水鏡。

妖しく光る鏡面が、マーカー達の姿を映し出す。

途端、その姿がグニヤリと歪んだ。

「ひ、ひいひいっ!!」

「い、いややっ!!」

「お助けっ!!」

「キイイイーツ!!」

響き渡る悲鳴。

「・・・!!」

息を呑むライナ達の前で、彼らの身体がギョルツと儀水鏡に吸い込まれていく。

マーカーとアビスはシャドウの儀水鏡に。

チェインとエレキツネザルはエアリアルの儀水鏡に。

長い断末魔を響かせながら、マーカー達の姿が呑み尽くされる。しばしの間。

やがて、周囲にゴポリという奇妙な音が響いた。

ゴポリ・・・

ゴポリ・・・

・・・儀水鏡から、何か溢れ出していた。

鏡であつた筈のそこから溢れ出していたもの。

それは、真つ黒な水。闇の様に黒い、否、闇そのものの様に黒い水。

ゴポリ

それが、ボトボトと地に落ちていく。

ゴポリ

黒い水が、闇が、溢れる。流れる。

ゴポリ

止め処なく、絶え間なく。

ゴポリ

溢れる水が、闇が、地に広がる魔法陣を満たしていく。

ゴポリ

広がっていく。

ゴポリ

際限なく。

ゴポリ

どこまでも。

ゴポリ

どこまでも。

ゴポリ

広がっていく。

チャプン

足元を「闇」に浸したエアリアルが、チラリとライナの方を向いた。

微笑む。

綺麗に。

妖しく。

ライナの背筋に悪寒が走る。

途端、



で巨大な魚体。そして何よりおぞましきはその頭部。そこに生えるのは、まごうことなく、エリアルと呼ばれていたかの少女の上半身。異形と化したその身の上で、そこだけは変わらぬ少女の顔が酷く楽しげに叫んだ。

「きやはは、何シテンノ!?しやどう、早く出テキナサイヨ!!」  
ゴパアツ

その声に応える様に、再び闇の水面が弾ける。

そこから現れたのは、水掻きと鋭い爪を供え、青黒く光る鱗に覆われた巨腕。

その腕はグオンと曲がると地を掴み、その勢いのまま己が主の身体を引きずり出した。

ドパアンツ

三度弾ける水面。

降り注ぐ水飛沫の向こうから現れたのは、身の丈数メートルはある巨大な半人半魚の怪物。

闇の水面からその全身を現した怪物は、気だるげに首を回すと、その口を大きく開く。

ギョオオオオオオオオオツ

咆哮。

周囲の木々や地面が、怯える様に震える。

「きやははははっ!!良イワア、ヤツパリ、アンタソノ格好ノ方ガいかスワヨ!!しやどう、イエ、そうるおーが!!」

ソウルオーガと呼ばれた怪物は、その太い首をグキグキと鳴らしながら、微かにシャドウの面影の残る顔から低い声を放つ。

「ソウ気楽ニ言ウナ。コノ姿ニナルト、ドウニモ身体ガ疼イテイカシ。ヤリ過ギナケレバ良イガ。」

そんな言葉とともに、冷たい光を灯す四つの目がライナ達を見つめる。

「サテ、才前達、才陰<sub>テ</sub>ソウ多クモナイ『資源』ヲ消費シテシマッタ。ソノ埋メ合ワセ、存分ニシテ貰オウ。」

「……!!」

笑いを含んだその声音に、尋常ではない邪悪さを感じたライナは思わず後ずさる。

「モウ、コンナ無粋ナモノハイランナ。」  
ルオン

ソウルオーガの胸の儀水鏡が怪しく揺らめいた。水面に広がる波紋の様なその揺らぎが届いた途端、闇の護封剣が掻き消えた。

驚くライナ達の前で、エリアルだった怪物が、奇声とも哄笑ともつかない叫びを上げる。

「きやはははっ!! サア、楽シイ楽シイ、だんすぱーていーノ始マリヨオ!!」

そう言つて、怪物はまた楽しげな哄笑を上げた。

— 9 —

“彼”は戸惑っていた。

今、“彼”の目の前には、八体の生物がいる。

二体は怪物。

五体は天使。

そして、一人は人間。

怪物達はとても恐ろしい。その強大さと邪悪さが、本能を通じて見てとれる。

正直、逃げ出したかった。本能が、危険を告げている。逃げるべきである。いや、逃げなければならぬ。こいつらの前から。こいつらの手の届かぬ所へ。

それほどまでに、恐ろしい存在だった。

しかし、それなら。それなら何故？

“この人間は逃げないのだ？”

先ほどまでは、別の意味で恐怖を感じていた相手ではあるが、その実体は自分よりはるかに脆弱な、“ただ”の人間である。

なのに、何故逃げない？

自分と相手の力の差が分からないほど、愚かなのだろうか。





「ナアニイ？ソソナ奥ノ手持ツテタノオ？キャハハ、楽シマセテクレルジヤナアイ!!」

「く・・・!!」

光の杖と闇の爪が、ギシギシと軋み合う。

「そんな・・・そんな姿になつてまで、〃力〃が欲しいですか!!」  
ライナの叫びに、マインドオーガスはせせら笑う。

「〃力〃ア？ソウヨオ!!欲シイニ決マツテルジヤナアイ!! 〃力〃ガアレバア、何ダツテ出来ルシイ、何ダツテ手ニ入ルワア!!」

ケタケタと笑いながら、マインドオーガスはグオンと爪を振り抜いた。

「キャアツ!!」

それに弾かれたライナが、悲鳴を上げて地に転がる。

「ホラア、ドオシタノオ？アタシラノ事、否定シタイナラア、アンタノ〃力〃デエ捻ジ伏セテミナヨオ!!」

「・・・!!」

杖にすがつて辛うじて立ち上がるライナを守る様に、ハツピー・ラヴアーが額のハートマークから光線を放つが、マインドオーガスはそれを軽々と杖で弾き飛ばしてしまう。

「きゃはははは!!ドウヨオ、コノ〃力〃!!モオ、最ツ高オオオ!!」

怪物の哄笑は、どこまでも尽きる事なく響き渡った。

一方、ソウルオーガと対峙したモイスチャー星人達は――  
ゴガガガガツ

凄まじい音を立てて、大地が削れる。

突進してきたハネクリボールV9を、ソウルオーガその怪力で受け止める。その隙に、「怒れるもけもけ」を発動したもけもけがソウルオーガ押し潰そうと、上から押し掛かる。しかし――

ルオン

ソウルオーガの頭上の空間が、波紋の様に歪む。もけもけがその空間に触れた途端――

ガオンツ

その身体が何かに弾かれた様に宙に舞い、地へと落ちる。

「無駄じゃ。」

ソウルオーガはほくそ笑むと、ハネクリボーを投げ飛ばす。その影からモイスチャー星人が光線銃を撃つが、

「無駄じゃト言ウテオル。」

「!!」

やはり波紋の様に歪んだ空間がそれを阻み、光線を反射する。モイスチャー星人はその光線に自身を焼かれ、成す術なく地に落ちる。それを踏みつけ、嘲笑を浴びせながらソウルオーガは言う。

「ワシノ「力」ハ、相手ノ魔力磁場ヲソノママ相手ニ跳ネ返ス。幾ラ主等ノ力ガ強カロウト、其レハ全テ主等ニ返ルノヨ。」

『クリーツ!!』

立ち上がったハネクリボーが再度特攻を仕掛けるが、結果は同じ。自身の力に弾き飛ばされ、そのままライナとマインドオーガスの戦闘の只中に墜落する。

ズガアアアアアア

「マ、マロ君!!」

ライナは兵装が解け、元の姿に戻ってしまったハネクリボーを抱き上げる。

「チョットオ、折角人ガ楽シンデルノニイ、余計ナ茶々入レシナイデヨオ!!」

「スマンナ。ダカラ言ツタジャロウ。コノ身体ハ、加減ガキカンノジャ。」

ギアアギアアと喚き散らすマインドオーガスに、ソウルオーガは五月蠅くて敵わんと言った態で耳を塞ぐ。

「マア、イイワ。ドウセモウ、終リミタイダシイ。」

そう言つて見下す先には、憑依装着も解け、ボロボロになったライナの姿。

「ドウオ?コレデ良ク分カツタデシヨウ?ドンナ綺麗事言ツタツテ、コノ世ハ「力」ガ全テナノヨオ。」

しかし、それでもライナの瞳は揺るがない。

「違います・・・。あなた達は・・・間違っているのです!!」

その様子に、マインドオーガスは溜息をついて首を振る。

「フン。全く強情な娘ネ。マア、イイワ。ソレナラアンタニモ、コノ快感教エテアゲル。」

そして、手にした杖にはめられている儀水鏡をライナに向ける。

「見テゴラン。」

向けられた鏡は、ライナを映してはいなかった。

奈落に続く穴の様に、闇が満ちた鏡面。その中で、無数の何かが蠢いている。

オオオオオオオオオオオオ

“それら”は闇の中で蠢きながら、口々に苦しい呻きを上げていた。

『『怨念集合体』．．．!?!』

眩くライナに、マインドオーガスは妖しく微笑む。

「コイツラハネ、過去ニアタシノ儀式ノ生贄ニナツタ“資源”達ヨ。儀水鏡ノ中デ、未来永劫、アタシノ“力”ニナリ続ケルワ．．．。」

オオオオオオオオオオオオオオオオ

虚ろな鏡の中で、虚ろな魂達が呻き続ける。

その声に、ライナは肌が粟立つのを感じた。

「アンタモ、コノ仲間ニ入レテアゲル。」

「な．．．!?!』

オオオオオオオオオオオオオオオオ

その言葉に呼応するかの様に、呻き声が大きくなる。

「ホラア、コイツラモオ、早く来イッテ言ッテルワヨオ。」

マインドオーガスが、儀水鏡をライナに突きつける。

「サア、オイデ!!』

途端、鏡の中から“それら”が溢れ出した。

「マロ君、ラヴ君!!』

ライナが、抱いていたハネクリボーと傍らに転がっていたハッピー・ラヴァーを突き飛ばすのと、“それら”が彼女に絡みつくのと

は同時だった。

「キャアアアアアツ!!』

心臓を鷲掴みにされる様なおぞましい感覚に、ライナは悲鳴を上げる。

「きゃははははっ!!大丈夫ヨオ!!苦シイノハ最初ダケ!!墮チテシマエバ良クナルカラア!!」

耳朶を無数の呻き声が覆う。無数の冷たい手が精神を、魂を引き抜こうと、爪を立てる。

「ホラホラア!!何無理シテンノオ!!来チャイナヨオ!!早く早くウツ!!」

「あ・・・くあ・・・」

響く哄笑が、苦痛に耐える精神を容赦なく揺さぶる。

いつそ、このまま意識を手放してしまった方が楽かもしれない。

ライナがそう思いかけたその時――

「きゃあっ!?!」

不意に響いた悲鳴とともに、死霊達の束縛が緩んだ。そして次の瞬間、

グイツ

意識の外から伸びてきた暖かい感触が、ライナの肩を掴んで死霊の渦の中から引きずり出した。

「はっ、はあっ!!」

水の中から引きずりだされた魚の様に、口をパクパクしながら息を吸う。霞んだ視界の中に心配そうに見下ろす大きな一つ目。

「め・・・めー君・・・。ありがとうございます。」

絶え絶えの声で礼を言うと、エンゼル・イヤーズはかぶりを振って指差した。

その方向を見たライナの視界に入ってきたのは、彼女を守る様にマインドオーガスの前に立ちはだかる一匹の竜の姿。

「エレメント・ドラゴンさん・・・。」

眩くライナをチラリと横目で見ると、エレメント・ドラゴンは再びマインドオーガスに向かう。

ゴオツ

ドラゴンの口から放たれた炎がマインドオーガスを包むが、それは

杖の一振りでかき消される。

「ゴノ雑魚、邪魔スナナ!!」

怒りの声とともに爪が一閃し、エレメントドラゴンを叩き落した。

「ドラゴンさん!!」

地に落ちたドラゴンに駆け寄ると、ライナはその首をギュツと抱き締めた。

「ありがとです……。後はライナに任せてです……。」

そのライナの言葉を聞くと、エレメント・ドラゴンは分かったと言う様に尾を振った。

「きやつはははは!!何辛気臭イ茶番展開シテンノ!?ソナ塵屑相手二!!」

その言葉に、ライナの肩がピクリと震える。

「……塵屑、ですか……?」

「きゃは!!ダツテソウジヤナイ!!ソイツハちえいんニスラ勝テナイ。アタシニカスリ傷ノ一ツモ付ケラレナイ!!タダノ役立タズノ塵屑ヨオ!!」

キヤラキヤラとマインドオーガスは嘲笑う。

「ホラア、ソナノツ放つトイテエ、アタシト遊ビマシヨウヨオ!!」  
喚き散らしながら、マインドオーガスは再びその爪を振るう。

しかし――

ガキイイイイン

ライナの杖が、その爪を受け止めた。

「エ……!?!」

「やつぱり、貴女はエリアちゃんとは違うのですね……。」  
エレメント・ドラゴンの額に軽く口付けをすると、ライナは立ち上がりながら杖を振った。

ギキヤアアアアンツ

硬質の音が鳴り響き、光の杖が闇の爪を弾き返した。

「ナ……何?!」

啞然とするマインドオーガスに向かって、ライナは言う。

「貴女は言いましたね……。貴女達を否定したいなら、ライナ達の

“力”でねじ伏せてみると……。

喋る言葉は、先程までにはなかった力強さに満ち満ちている。

「分かりました。その言葉通り、ライナ “達” の力、見せてあげるです!!」

ヒュヒュヒュンツ

ライナの手中で杖が踊った。

—10—

「我が願うはかの誓い……」

華麗に杖を舞わせながら、ライナは呪文を紡ぐ。

「君が御魂は我が御魂 君の導は我が導 其が契り 永久とわに損なう事無き鎖 我ら其を剣つるぎとし 真理を開く力と成さん!!」

舞い踊る杖が、光の軌跡を描く。

「ヌウ!？」

「マ……眩シ……!!」

ソウルオーガとマインドオーガス。眩い光にたじろぐ二匹の前で、ライナを中心に広がる軌跡が彼女と仲間達を繋いでいく。

ハッピー・ラヴァー、ハネクリボー、もけもけ、エンゼル・イヤーズ、モイスチャー星人、そして、エレメント・ドラゴン。

彼らを繋いだ光は再びライナに集約し、その身を包む。

そして—

『フオース・オブ・コネクト 団結の力』!!』

光を纏ったライナが、凜と言葉を結んだ。

『……フオース・オブ・コネクト 団結ノ力』ダト!？」

その意味を知るソウルオーガが、驚愕の声を漏らす。

「ナ、何ヨ!!ソナナコケオドシ……!!」

「待テ!!」

ソウルオーガの制止を無視し、我が身に走る本能の戦慄を振り払うかの様に、マインドオーガスがライナに襲い掛かる。

しかし—

バキイツ

「―ナツ!?!」

振り下ろした爪が、杖の一撃で弾かれる。

「コッ、コノがきいいいい!!」

逆上し、次々とその爪を突き立てる。

しかし、それらはことごとくライナの杖に阻まれる。

完全に、力負けしている。

「ソ、ソッナー―」

馬鹿な、と言いかけた瞬間、ライナの姿が視界から消える。

気がついた時には、ライナはマインドオーガスの本体―エリアルへと肉迫していた。

「速・・・」

ガキヤアアツ

凄まじい衝撃が、エリアルを貫く。

横殴りに振るわれた杖の一撃が、エリアルの身体の直ぐ下―マインドオーガスの米神へと叩き込まれていた。

「キヤアアアアアツ!?!」

成す術なく弾き飛ばされ、地に転がるマインドオーガス。

「ゲ・・・ゲホ・・・ナ・・・何ナノ・・・!?コイツ、急二・・・!?」

身体の芯を貫いた衝撃にえげげながら、地にのたうつ。

相手の力の、あまりにも強大な変貌に戸惑いを隠せない。

打ちのめされた足が震える。

もはや、その身を支える事すらままならない。

そんなマインドオーガスを、光を纏ったライナが見下ろす。

「どうですか・・・?これがライナの、ライナ『達』の力です!!」

―『フオーズ・オブ・コネクト 団結の力』―

それは、クロス・スベル 装備魔法の中でも最上位に位置するもの。

己とその心を通わせた仲間の間でのみ、発動可能となる魔法。

その効果は術者自身の力と、その仲間達の力を束ね、一つとする。

そして今、五体の仲間と一体の竜の力を束ねたライナの力は、確かにマインドオーガスのそれを凌駕していた。

「さあ、勝負はついたのです!!もう、あきらめて大人しく帰るです!!」  
「ク……。」

エリアルが目が憎々しげに見上げるが、ライナの瞳は揺るがない。  
「……見下スナ!!コノがきいつ!!」

そう喚いて、エリアルが手にした儀水鏡をライナに向けた。

鏡の中の怨念集合体が蠢き、獲物を引きずり込もうと溢れ出す。

「アハハハハッ!!食ワレツチマエ!!」

会心の哄笑を上げるエリアル。しかし――

「エツ?」

エリアルの前に、もう一つの鏡が突きつけられていた。

それは、ライナの杖にはめ込まれていた鏡。

それが、目にも眩い光を放つ。

「鏡は何も、リチュアあなた達の専売特許じゃないです!!」

鏡を中心に、朱い魔法陣が展開する。

――罫魔法トランプ・スペルの発動――

「飲み込め!!『暗闇ダークを吸い込むマジック・ミラー』!!」

ライナの鏡が、全ての「闇」を飲み込む神鏡かみがねと化す。

オオオオオオオオオオオ!!

光に照らされた死霊達が、一斉に声を上げた。

それは、光に食われる苦痛の声か。

それとも、闇の呪縛から開放される歓喜の声か。

ライナの鏡が、エリアルの儀水鏡から無数の死霊達を吸い出していく。

「ア、アタシノ「力」ガ!!儀水鏡ガ!!」

悲鳴を上げるエリアル。

しかし、ライナの鏡は容赦なく死霊達を吸出し、飲み込んでいく。

「タ……助け……」

エリアルが目が、助けを求める様に宙を泳ぐ。

その視線が、数歩距離を開けた所で傍観していたソウルオーガを映す。

しかし、ソウルオーガはその顔に薄笑みを浮かべたまま、動かない。



絶望の表情を浮かべるエリアル。その前で、光の鏡が最後の闇を呑み尽くす。

ピシイッ

それと同時に、ひび入る儀水鏡。そして――

パライイイイイインッ

力の根源を失った魔鏡が、粉々に砕け散った。

「ア……………」

グラリ

マインドオーガスの巨体が揺らぐ。

ズズウン

地響きとともに、倒れ伏す。

マインドオーガスの身体は崩壊を始め、見る見る塵となつて散つていく。

やがて全てが消えた時、そこには気を失ったエリアルが元の姿のままで倒れ伏していた。

— 111 —

「ハア…………ハア、ハア」

「ぐぼぼぼぼ。随分ト、辛ソウジヤナ…………。」

荒い息をつくライナを、暗い影が覆う。

見上げると、ソウルオーガの四つの目が暗い光を灯してライナを見下ろしていた。

「大シタモノジヤ。ソノ年端デ『フオース・オブ・コネクト団結ノ力』ノミナラズ、

『ダーク・クワイター・ト・マー・キュリー暗闇ヲ吸イ込ムまじつく・みらー』マデ使エルトハナ…………。余程良

イ師に師事シテイルト見エル。」

「……………」

「ジャガ、ソレ程ノ高位魔法。何時マデモモツモノデモアルマイ。ドウジャ？今ノ戦イデ、粗方使イ果タシタノデハナイカ？」

その言葉が正しい事を示す様に、ライナを包んでいた光は確かに薄れつつあった。

「あなた・・・わざと・・・!!」

ライナの言葉に、ソウルオーガはグポポと笑い声を上げる。

それはそのまま、問いへの肯定。

「戦時二オイテ、敵ノ有り弾ガ尽キルノヲ待ツハ、常套手段ヨ。」

「彼女は・・・あの娘は仲間ではなかったのですか!?!」

「仲間? ソウジヤナ。中々良イ弾避けニナツテクレタ。イイ<sup>仲間</sup>道具

“ジャツタヨ。アレ”ハ。」

その嘲りの籠った言い様に、ライナは嫌悪と怒りの眼差しを向ける。

「何ジヤ? マサカコノ期二及ンデ、<sup>わ</sup>りちゆあガ<sup>ら</sup> “友情” 等ト言ウオタメゴカシヲ謳ウトデモ思ツタカ?」

ソウルオーガは、ただ笑う。

「ぐぽぽ、コノ世ハ所詮、食ウカ食ワレルカヨ。ソレ以外ノ事柄ナド、全テ弱者ノ言イ訳ニ過ギン。」

言いながら、ズシリと重い足音を立ててライナへと近づく。

「く・・・つつ・・・つつ!」

構えをとろうとしたライナ。

しかし、途端に凄まじい激痛が全身を走る。

崩れ落ちそうになる身体を辛うじて杖で支えるが、最早それが精一杯。

それを見たソウルオーガは、さらに嘲笑の笑みを深くする。

「ドウヤラ、術ノ “反動” ノ様ジヤナ。ソモソモ自力ノ何倍モノ膂力ヲ宿ラセル術。無理モアルマイ。」

笑いながら、ググツとライナに向かって屈み込む。そしてもはや動く事もままならない彼女の顎を、人差し指でクイツと上げた。

絡み合う、ライナとソウルオーガの視線。

「ドウジヤ、娘。『りちゆあ』ニ入ランカ?」

生温い親しみのこもった声で、ソウルオーガが言った。

「・・・何を・・・言ってる、ですか・・・?」

「先ニモ言ツタガ、ワシラハ少数勢力デナ、常日頃カラ人材不足ニハ悩マサレテオル。現ニ今モ四人失ツタバカリジヤ。」

ソウルオーガの指が、愛撫する様に顎を撫でる。

氷の様に冷たいその感触が、ライナの背筋に怖気を走らせた。

「才主ノ様ナ術者ナラ不足ハナイ。精進スレバ後ノ幹部候補モアリエヨウ。」

「……………」

返事をしないライナに、ソウルオーガは胸の儀水鏡を指し示す。

「コノ儀水鏡ノ力、見タデアロウ？才主ガソレホドノ代償ヲ払って得タノト同等の〃力〃ヲ、何ノ苦痛モナク手ニスル事ガ出来ル。」

「…………何の、苦痛もなく…………？」

痛みに引きつる喉を無理やりに歪ませ、ライナは皮肉めいた声を出す。

「…………仲間や…………罪もない命を代償に使う術の…………何が、〃苦痛もなく〃ですか…………!!」

「ヤレヤレ、マタソレカ…………」

そう言つて、ソウルオーガは大げさに溜息をつく。

「分カラヌ娘ジャ。弱者ガ強者ノ糧ニナルハ世ノ理。万物全テノ事象ニハ、ソレニ応ジタ対価ガ必要。才主ノ術トテ、ソウデハナイカ？」

「…………!?!」

「対価ニスルガ、他者ノ命カ己ノ命カ、ソノ違イダケ。ソウデアロク？」

「……………」

無言のライナの頬を、鋭い爪がツツ、となぞる。

「受け入レヨ。ドンナ綺麗事ヲホザコウト、ソレガ我等術者ノ真理。ナレバツマラヌ戯言ナド捨テ、共ニ真理ノ追究ニ興ジヨウデハナイカ。〃力〃トイウ真理ノナ。」

「……………」

ライナは何も言わない。ただ杖を握る手にギギユツと力がこもつていく。

「…………例え…………」

「ウン？」

「例えそれが真理だとしても、ライナは御免です!!」

叫びと共に、杖をソウルオーガの儀水鏡へ向かって突き出す。眩い光に包まれる杖。最後の力を凝縮した、正真正銘、最後の一撃。しかし――

ルオンツ  
杖と儀水鏡の間の空間が、波紋の様に揺らぐ。

パキインツ

「キャアツ!!」

反射した自身の力を受け、ライナは大きく弾け飛んだ。

「ソレガ答エカ……。」

ソウルオーガがゆつくりと立ち上がる。

「ナレバ仕方ナイ。汝モ我ガカノ糧トナルガイイ……。」

太い腕が、倒れ伏すライナにゆつくりと伸びる。

「愚カナ娘ヨ……。己ガ不明ヲ呪エ……。」

猛禽のその様にかいた爪が、ライナにかかろうとしたその時――

『ライナ!!』

その腕に、ハッピー・ラヴァーが飛びかかる。同時に他の面々も攻撃を仕掛けるが、尽く歪む空間に弾き返され、ライナ同様に地に転がる。

「グポポポポ。涙グマシイノオ。オ主ヲトテ、ソノ小娘二巻キ込マレ、利用サレタロデアロウニ。」

満身創痕になりながら、それでも齧りついてくるラヴァー達をカトンボの様に叩き落しながら、ソウルオーガは嘲る。

『違う!!』

ライナを守る様に、ボロボロの翼をいっぱい広げながらハッピー・ラヴァーが叫ぶ。

『ボク達は仲間だ!!友達だ!!使役されたからここにいるんじゃない!!皆、自分の意思でここにいるんだ!!リチュアお前達なんかと一緒にするな!!』

ラヴァーの言葉に呼応するかの様に、他の皆が集まりライナの周りにスクラムを組む。

「ラヴ君……みんな……」

「・・・フン。全ク持つテ鬱陶シイ連中ジヤ。マア良イ。ナラバソノ望ミ通り、仲良ク一緒ニ、我が糧ニナルガ良イワ。」

ソウルオーガの胸の儀水鏡が、ライナ達の姿を映す。

「コレデ、終リジヤ。」

儀水鏡が妖しい光を放つ。そして――

「――終わるのは、お前の方だ――」

「又?」

『ライナ・・・!?』

その場の全員の視線が、その少女に集まる。

「――ここは聖域。――」

「――全ての命が、等しく加護を受ける場所――」

「――お前達は、それを侵した。――」

「――それは、違う事なき罪――」

「――罪は、贖われなければならぬ――」

「・・・何ヲ言ツテオル・・・?」

訝しげに問うソウルオーガに、ライナは答える。

「・・・ライナの言葉じゃありません。彼」の言葉です。」

そう言つて示す方向にいたのは――

『エレメント・ドラゴン・・・?』

ポカンとする皆の前で、件の竜はゆつくりと頷いた。

『ライナ・・・アイツの言葉が・・・』

「はい。分かります。分かる様に、なりました。」

そう言つて、ライナは微笑むと改めてソウルオーガに向き直る。

「いいんですか?あなた、ここにいて何か怖い目に会うみたいで

すよ?」

「何ヲ訳ノ分カラヌ事ヲ・・・!?」

ライナの忠告を鼻で笑つたソウルオーガの背筋が凍つた。

不意に襲いかかってきたのは、それまで感じた事もない、強烈なプ

レツシャー。

「誰か」が見ている。

何か、とてつもない「存在」が。

慌てて振り返ったその視界に映ったのは、己を見つめる七頭のモンスターの姿。

七頭、それぞれの身体には美しく輝く宝玉が光っている。

『宝玉獣さん達・・・?』

ライナが驚いた様に呟く。ここにいたモンスター達は捕まった者以外、全て逃げてしまったものと思っていたのに。

「ナ・・・何ジャ。驚カセオツテ・・・。」

ソウルオーガが、上ずった声で言う。

「己等ノ様ナ雑魚ニ用ハナイ。サツサト去ネ!!」

言いながら、彼は気付いていた。あれほど「資源」にこだわっていた自分が、目の前のモンスター達にはその食指が全く動かない事に。それどころか、この自分より遥かに矮小な筈のモンスター達に、強烈な忌避感を覚えている事に。

「去ネト言ウテオル!!」

ギョオオオオオオオオ

吼える。精一杯の威嚇の意を込めて。

しかし、「彼ら」は微塵とも動じない。

ただジツと、彼を見つめるだけ。

「ウ・・・ウウ・・・!?!」

そのプレツシャーに、彼が思わず後ずさったその時――

『汝は、禁を侵した。』

胸に藍色の宝玉を持った白豹が言った。

人間の、高き智あるものの言葉だった。

『この地は聖域。』

甲羅を緑色の宝石で飾った亀が言った。

『全ての命が、変わらぬ庇護を得るべき場所。』

額に橙色の宝珠を頂いた象が言った。

『その地で、汝らは命を弄んだ。』

翼に、蒼色の宝玉を輝かせる天馬が言った。

『それは、罪である。』

首に、黄色の宝珠を持った白虎が言った。

『確かなる、罪である。』

翼と胸に、紺色の宝石を飾った鷲が言った。

そして――

『罪は、贖われるべきである。』

尾に朱色の宝玉を頂いた小獣が言った。

「ウ・・・ウオオオオオツ!!」

押し掛かるプレッシャーに耐えかね、ソウルオーガは宝玉獣達に襲い掛かる。

しかし――

カツ

宝玉獣達の姿が光を放つ。

「ぬあっ!?!」

「キヤアツ!!」

先のライナが放ったものより、何倍も眩い光。

その光の中で、ライナは見た。

宝玉獣達の姿が、光の柱となっていく。

藍色。

緑色。

橙色。

蒼色。

黄色。

紺色。

そして朱色。

七色の光の柱は一つとなり、虹色の竜巻となって天をうねる。

荒れ狂う、光の嵐。地に這う者、全てがなす術なく翻弄される。

天に踊る、白銀の帯。舞い散る、純白の翼。

クウオオオオオオオオオン

遙か彼方まで轟くのは、遠雷かそれとも咆哮か。

ゴオツ

稲妻の如く落ちる、虹色の光。それを阻まんと展開する、波紋。しかし、七色の奔流はそれすら飲み込み、その全てを押し潰す。響き渡

る、絶望の叫び。

・・・眩い光の中で、魔性の鏡が砕けて散った。

— 12 —

『ほわほわ、ほわわ〜（それじゃいくよ〜）』

「はい、お願いしますです。」

シユボツ

そんな音とともに、エンゼル・イヤーズの目から放たれた光が、座り込んだライナ達に降り注ぐ。

すると、光の当たった箇所<sup>の</sup>傷が見る見る癒え、血の気の失せていたライナの肌にも、赤みが戻っていく。

「あく、やっぱりめー君の『ヒーリング・レイ』は良いですね〜。魂が洗われます〜。」

『ところでさ、ライナ。』

すっかりリラックスしてるライナに向かって、その腕に抱かれたハッピー・ラヴァーが問う。

「何ですか？ラヴ君。」

『さっきの“あれ”、何だったの？』

“あれ”とはつい先ほど、ライナ達を救った“現象”の事である。

突然巻き起こった七色の光の竜巻は、ソウルオーガを一撃で叩き伏せるとまた忽然と消えてしまった。気がつけばたった今までいた筈の宝玉獣達の姿もなく、後には粉々に割れた儀水鏡と、ボロボロになったシャドウ・リチュアが転がっているだけだった。

「“あれ”ですか。多分、『虹彩龍』<sup>レインボー・ドラゴン</sup>じゃないでしょうか？」

『「レインボー・ドラゴン」？』

「はい。前に先生から習いました。昔からレインボー<sup>こ</sup>のルイン<sup>り</sup>でたまに目撃されるらしいんですけど、正体はよく分かってないそうです。ドラゴンって付いてますけど、見た目の便宜上そう呼ばれてるだけで、実際の所モンスターなのか、それとも何かの現象なのかもまだ判別されてないとか。」



『ふーん。』

ハッピー・ラヴァーが今一つ納得しかねるといった体で首を傾げかけた時、

『・・・キュ、キュイ（・・・あれは、神だ）。』

不意に飛んできた声に、皆の視線が集そちらを向く。

そこにいたのは、ライナ達と一緒に光を浴びているエレメント・ドラゴン。

集まる視線に、地に伸ばしていた首を鬱陶しげに上げると、言葉を続ける。

『キュイ、キュキュイキュイ。キュイキュイキュキュ、キュキュイ。キュイ（..あれ..）は、この世界からさらに高みに在る次元の存在。その相は確かに命あるものなれど、この世界の者ではその存在に干渉することすら叶わない。そういうものだ。』

それだけ言って、エレメント・ドラゴンはまたその首を地面に伸ばした。

「神様、ですか・・・。」

ライナは眩くと、..それ..が消えた空を見上げた。

『ほわ、ほわっほわー（はい、おしまい）。』

エンゼル・イヤーズはそう言うと、皆に当てていた光を切った。

「あ、ありがとうございます。やっぱり、めー君の『ヒーリング・レイ』は効きますねー。お陰で完全復活です。」

右手をグリグリと回しながら、ライナは晴々とした顔をする。

「じゃあ、ラヴ君、お願い出来ますか？」

『あいよ。』

そう言って、ハッピー・ラヴァーはライナと向き合う。

『キュイキュア（何をするのだ）？』

尋ねるエレメント・ドラゴンにハネクリボーが答える。

『クリッククリク（見てればわかるよ）。』

皆が見つめる中、ライナは杖を構え、瞳を閉じると呪文を紡ぎ出した。

「クリエル・クライス・クライスト 煌き来たれ 創世の使徒 輝き  
歌え 生命の唄 天に舞うは鳳凰の羽根 我が願うは光帝の慈悲  
巡りし輪転 転生の導 暗きに険路に光を落とし、迷えし御霊に新た  
な道を」

ライナとハッピー・ラヴァーを囲むように、魔法陣が浮かび上がる。  
ハッピー・ラヴァーの身体が淡い光に包まれ、その羽がフワリと舞つ  
て、魔法陣の中に円を描く。その円の中にライナが杖の鏡を合わせる  
と、鏡から溢れた光がその円の中を満たす。

「―光霊術、「聖」―」

言葉の結びとともに、光に満たされた円が彼方と此方を結ぶ門とな  
る。

やがて光の中に影が浮かび、それがスルリと抜け出してくる。

ライナの手に抱き止められたそれを見て、エレメント・ドラゴンは  
目を見張った。

それは、先ほど生贄として儀水鏡に呑まれたはずのエレキツネザ  
ル。闇の禁呪の媒体となった身体に寸分の欠損もなく、ライナの腕の  
中で安らかな寝息を立てている。

『キュキュア、キュアキュキュキュ（蘇生術・・・いや、転生術か）  
!?!』

エレメント・ドラゴンの驚きの声に、他の面子が応える。

『クリ、クリリ（まあ、そんなもん）。』

『もけ、もけけけ、もけもけ（あれはあれで、負担が大きいから、あ  
んまり使って欲しくないんだけどね）。』

『シユワシユワツシユワツチ、デユワツ（めー氏、アップを開始）。』  
『ほわっほわほわ（了解）。』

腕の中のエレキツネザルをそつと地面に置くと、ライナは首をコキ  
コキ鳴らしながらハッピー・ラヴァーに向き直る。

「ラヴ君、もう少し、お願い出来ますか?」

『リチュアの三馬鹿も戻すんでしょ? いいよ。いつもの事だし。』  
「ごめんです。」

それを聞いたエレメント・ドラゴンは驚きの声を上げる。

『キュキュア!? キュアキュアキュ・・・(あの三人も戻すだど!? 何を馬鹿な・・・)!?』

『ほわほわわーほわわ(あいつらだけじゃーないよ)。』

その一つ目を目蓋の上からグリグリと揉みしだきながら(これがアップらしい)、エンゼル・イヤーズが言う。

『ほわほわわーほわわ、ほわほわわわーほわわ、ほわほわわわ(ホントは、あの鏡に吸われてた魂全部を戻したいんじゃないかな? あの術で引つ張り戻せるのは、彼岸に流れて一兩日以内の魂だけだから無理だけど)。』

『キュキュアキュ、キュウア・・・(それが正義だとも言うつもりか? 甘い事を・・・)。』

『シユ、シユシユワツチ(甘さがなければ、この世は地獄)。』

吐き捨てるようなエレメント・ドラゴンの言葉に、モイスチャー星人が答える。

『!』

『シユシユワツチ、デイユワツシユワツシユワツチ(以前読んだ本に在りし言葉。以来、"あれ"の座右の銘)。』

視線を戻すと、丁度ライナが光の輪の中から気絶しているリチュア・マーカーを引つ張り出している所だった。

『クリクリツクリ〜クリ〜クリ、クリクリクリ(正義だとか、そういうんでもないよ。単純に、自分のしたい事をしてるだけで)。』

『もけ〜もけもけ、もけけもけけけ(まあそんなヤツだから、俺らも気に入った訳だけど)。』

『・・・・・・。』

もけもけ達のそんな言葉を聞きながら、エレメント・ドラゴンは汗びっしょりになって作業を続けるライナを見つめていた。

『で、こいつらはどうすんの?』

気を失っているリチュア達をそこらへんから採ってきた蔦で縛りながら、ハッピー・ラヴァーは地面に大の字になってヒーリング・レイを浴びているライナに訊く。

「鏡は全部割っちゃいましたからね。当面、悪い事は出来ないと思います。後で都の官憲さんにでも連れて行ってもらいましょう。」  
エンゼル・イヤーズにお礼を言いながら起き上がったライナは、そう言つて微笑んだ。

『……………』

そんな様子を一步引いた所で見ながら、エレメント・ドラゴンは考えていた。

それなりに長い時を生きてきたが、世の中にはまだまだ自分の理解の範疇を超える事があるものだ。

それら全てを理解しようなどとは思わないが、長い事抱いていた認識に固執するほど頑なな訳でもない。

目の前のこの人間が特別なのかどうかは知らないが、今後「人間」という種族に対する見方は、少し変えてみる事にしよう。

そんな事を思いながら、エレメント・ドラゴンは大空に向かって翼を広げた。

「……………どこへ行くのですか?」

ビクウツ

背後から聞こえた声に、エレメント・ドラゴンの身体が硬直する。  
ギギギ、と首を廻らすと、こちらに背を向けたライナの姿が目に入る。

向こうを向いていたその首が、カタカタとこつちを向いて微笑んだ。

何だか、首が180度くらい回っている気がするが、目の迷いという事にしよう。というか、したい。

「どこへ行くのですか?」

また、訊いて来た。

貼り付けた様な笑顔が怖い。

『キュ……キュウア……(いや……ちよつと急用が……)』

「御用ですか?それならライナ達も御一緒するです。」

『キュア……キュキュア……(いや……そんな……)』

「いけませんねえ。」

ライナが、抑揚のない声で言う。

「貴方は、もうともだちです。」

見れば、頭のアホ毛がクルクルと回り始めている。

ついでに、大きな瞳の中でも何かがグルグル回り出している。

「ともだちはいつもいつしよににいるものです。いなきやいけません。いるべきです。」

『そうそう』

頭のハートを明滅させながら、ハッピーラヴァーが言う。

『クリクリ、クリクリ（友達、友達）。』

大きな目をグリグリさせながら、ハネクリボーが言う。

『もけもけ、もけ、モケケ（一緒にいよう、いませう、いなきや）。』  
身体をプクプクと膨らませたり、萎ませたりしながら、もけもけが言う。

『ほわゝ、ほわほわほわゝ、ほわゝ（楽しいよ、愉快だよ、友達はゝ）』

真っ赤に充血した目（※疲れ目）をシパシパさせながら、エンゼル・イヤーズが言う。

『シユシユ、シユワツ、シユワツチ（君、僕、友達）。』

ピポポポ、と電子音なぞ響かせながら、モイスチャー星人が言う。

『キ、キキュア・・・（う、うう・・・）』

「さあ、いつしよに!!」

『キ、キキュアーツ（ヒ、ヒイイイーツ）!!』

恐怖の叫びを上げて飛び立つエレメント・ドラゴン。

「あれえ、どこいくんですかあー？もつくん、おってくださいー。」

『しゅわっち（了解）』

それを追って飛び立つライナ達。

「まってー。」

『キュキュアー（来るなー）!!』

その日、レインボールインの住民達は空に響くドラゴンの悲鳴と、

それに追いつがる少女の声に、一晩中悩まされたという。

「採点」に続く

## 採点

— 1 —

チチチ・・・ピリリ・・・

そこから聞こえる、小鳥達の声。豊かな森の木々の隙間から差し込む優しい朝日が、一棟の質素な建物を照らし出していた。

ここは魔法族の里。その中心にある魔法専門学校。

そこの、教員室の一席。

一人の女性が座り、お茶を嗜んでいた。

純白の法衣に、蒼い肩当て。頭には、若葉色の被り物。サラリと腰の辺りまで伸びた髪は、まるで上質の絹の如く。主人の人格を表す様に、柔らかい黄金（こがね）色に染まっている。

ジャスミンの香りのするお茶を口に運びながら、女性は時折その端正な顔に楽しげな微笑みを浮かべる。

と、その傍らに歩いてくる人影が一つ。

「何か、随分と楽しそうですね？ドリアード先生。」

女性に話しかけたのは、白い翼に白衣、ピンク色の巻き髪に眼鏡といった出で立ちの女性。

学校医の、メンタルカウンセラー・リリーである。

「あら、そうですか？」

ドリアードと呼ばれた女性は、そう言って自分の頬を撫でる。

「ええ、とつても楽しそう。今日は、何かあるんですか？」

そう訊かれ、クスリと笑う。

「今日は、”あの子達”が帰って来るんです。」

酷く、楽しげな声。

まるで、幼い少女のそれ。

「あの子達？」

リリーは少し首を傾げた後、ああ、と手を打つ。

「先生のクラスの、霊使い達。」

「はい。」

笑顔で頷く。

「そう言えば、ここしばらく姿が見えませんでしたね。何かあったんですか?」

「宿題を出してたんです。」

何か、やたらと楽しそうである。

「宿題?どんな?」

返ってきた答えは、酷くサラリとしたもの。

「ドラゴンです。」

「・・・はい?」

頭が一瞬、理解を拒む。

しかし、そんな事には委細構わずドリアードはニコニコと続ける。

「二人一頭、自分と同属性のドラゴンをしもべにしてくる様に言っ  
たんです。」

「・・・え?」

その口調の軽さと、内容の重さのギャップ。

思わず、顔が引きつる。

しかし、当のドリアードはただ楽しげにお茶をすすめるだけ。

「楽しみですねぇ。皆、どんな子連れてくるんでしょう?」

「そ・・・そうですね・・・は、はは・・・。」

・・・皆、五体無事で帰ってくればいいけど・・・。

そんな思いを抱えながら、ドリアードと笑い合うリリーなのだっ  
た。

その頃、学校の寮には宿題を終えた霊使い達が次々と戻ってきてい  
た。

「おう、帰ったぜー。」

「ただいま。」

「ただいまです。」

「ただいま・・・。」

「・・・。」

「やつふく。皆、遅かったね。」



一足早く帰って来ていたワインが、笑顔で出迎える。

『遅かったね』じゃねーよ。こちとら、死ぬ思いだったんだぜ？』  
ぼやきながら、ベッドにゴロンと大の字に寝っ転がるヒータ。

『そう言う君こそ、随分と早く戻ってた様だね。』

言いながら、アウスは大きな旅行バッグからお土産（古の森駅銘菓・パンピング饅頭）を出してワインに渡す。

ワインは「わー、ありがとう。」などと言いながら、さっそくビリビリと包装紙を破って箱を開けると、中身をパクつく。

「んむ、ふあふあふい、ふあふいとふいふあふあつたはら・・・」

「もの食いながら、喋んじやねーよ。」

ヒータに注意され、急いで口の中の物を飲み込む。

「プハッ!!うん。わたし、意外と近場だったから。四日目くらいには帰って来てお昼寝してた。」

それを聞いたアウスが、ハハッと笑う。

「君は実に馬鹿だなあ。せっかく先生公認で長期の休みがとれたのに、それを昼寝なんかで潰すなんて。人生は有限なんだよ？もつと有意義に使うべきだと思うけどね？」

「んな余裕あったの、オメーだけだよ・・・。」

ベッドに埋まりながら、ボソリともらすヒータ。

「んー、でも、一生の間に来れるお昼寝の数もきつと限られてるし、

それはそれで、有意義なんじゃないかなー？」

ワインはそう言って、また一つ饅頭をほうばる。

それを見て、苦笑するアウス。

「全く。ブレないね、君は。まあ、らしいと言えばらしいかな？」

呆れと感嘆の混じった言葉に、ワインはカボチャ餡のついた顔でニパリと笑った。

ーと、

「ダルクー!!いっしょにいこうっていったのにー!!おいていくとはどういうりょーけんですか〜!」

「・・・ああ、もう。朝っぱらからからむなよ・・・。・・・お前の声は甲高いんだ・・・。・・・中耳炎にでもなったら、どうしてくれ

る……。」

突然の金切り声に、皆の視線がそちらに向かう。

そこにいたのは、鬱陶しげに顔を逸らすダルク。そしてそんな彼に、“文字通り”絡み付くライナの姿。

「……離れろって……!!」

「ダメです〜!!」

心底イヤそうな顔で押し退けようとするダルク。

しかし、ライナは頑として離れない。

「何だようるせーな。こちとら夜通し歩いて来てクタクタなんだよ。少し静かにできねーのか?」

言いながら、ベッドから起き上がるヒータ。スタスタと二人に近づき、ベリツと引き剥がす。

「姉弟ゲンカなんぎ、オレの相方も食わねーぞ。一体、どうしたってんだよ?」

「ああ、ヒータちゃん!!」

瞳をグルグル回したライナが、ズスイツと迫る。

ヒータ、ちよつと引く。

「きいてくださいよー。ダルクだったらいっしょにいくってやくそくしたのにー。ライナのことおいてひとりだけでいっちゃったのです!!ひどいとおもいませんか?」

「……お前、あそこで断わったら、OKするまで張りついてきただろ……?ウザい事この上ないから、適当に茶を濁したんだよ……。」

はあ、と溜息をつくダルク。先にも増して、嫌そうな顔である。

それを聞いたライナ。再びつんぎくような大声を上げる。

「な、なんですとー!?つまりはなっからだますきでしたか!?かくしんはんですかー!?おかげでライナたちがどんなめにあったとー!!」

グルグル回る目。ついでにアホ毛も回る。

「……やっぱり、何かトラブルに巻き込まれてたのか……。」

ダルク、ますます嫌な顔をする。

「うそつきはじゆうざいですよー!!そんなわるいこはさうざんどにーどるまるのみのけいですー!!」

「・・・お前が黙ってくれるなら、針二千本でも針三千本でも呑んでやるよ・・・。この電波式トラブルメーカー・・・。」

途端、怪しい光を放つライナの目。

「・・・そのいいよう、はんせいしてないですね。しかたないです。こうなったら”あれ”をするしかないようです。」

「・・・え・・・!?!」

その言葉を聞いた途端、ダルクの顔が青ざめる。

「ちよ、ちよつと待て!!”あれ”って、”あれ”か!?!」

「ほかにないかありますか?”あれ”といったら、”あれ”にきまつてますー。」

ザザザツと後ずさるダルク。しかし、無情にも退路は壁に塞がれる。

「ま、待て待て待て!!分かった、謝る!!謝るから、”あれ”だけは止めろ!!」

そう言つて、両手をブンブン振る。顔色は青いを通り越して最早土色である。

しかし、そんな懇願が通じる道理もない。

ジリジリと迫るライナ。

「だめですー!!おねえさんをだますようなおとうとに、きよひけんはありませーん!!」

「いや、双子だし!!姉とか弟とか関係ないから・・・って、ちよ、おm・・・勘弁してくれ!!」

ダルクは助けを求める様に、ヒータの方を見やる。けれど、今しがたまでそこにあつた筈の姿がない。

いつの間に移動したのだろう。

安全圏まで退避したヒータが、苦笑いを浮かべてこつちを見ていた。

「・・・ま、身から出た錆つてやつだな。今日の所は諦めな。」

「・・・う、裏切り者・・・!?!」

せめてもの抵抗の様に漏らす、絶望と怨嗟の声。

しかし、それも虚しく虚空に溶けるだけ。

「にやはははは、ひごろのおこないがものをいうです!! さあ、かくご  
するです!!」

手をワキワキと動かしながら、迫るライナ。

無邪気な笑顔であった。

不気味なほどに。

そして―

ゴネツゴネゴネツゴネツ

メケケツメケメケメケツ

ゴニヨルゴニヨルツゴニヨツ

「ギャアアアアアアアアアアアツ!!」

怪音とともに、響き渡る悲鳴。

「うわー。相変わらず凄いな。ライナちゃんの『あれ』。」

「実に、天性の才能を感じるね。ぜひ一度、御教授承りたいものだけ  
ど。」

「・・・アウスは止めとけ・・・。」

などと言いつつ、事の次第を見守るその他三人。

待つ事、しばし―

「ふい〜。こんかいはこのくらいにしといてやるです。」

そう言いながら、身を起こすライナ。顔に清々しい笑顔を浮かべな  
がら、額の汗をグイツと拭う。

一方、床にうつ伏せに転がったダルク。

無言。

時々、ピクピクと痙攣する様が不安をさそう。

「やっぱり、『あれ』はいいですね〜。たましいがあらわれま  
す。・・・ん? たましいといえば・・・。」

何かを思い出したかの様に、キョロキョロと周囲を見回すライナ。

「どうしたの? ライナちゃん。」

饅頭をくわえたまま、ウインが尋ねる。

「エリアちゃんはどこでしょう? おはなししたいことがあるんです  
が・・・。」

「あれ? そういやあいつ、どこ行った? 確かいつしよに帰って来て



凄まじく挙動が不審である。

その様を見たアウスが、クスリと笑む。

「おや、違うのかい？」

「あ、あああ、当たり前でしょ!!こ、こ、このあたしに限って、そそ、そんなこと・・・つ、つつ、捕まえたわよ!!ド、ドラゴン!!そ、そりやーもう、す、すす、凄いのを!!凄いんだ、だから!!も、もう、皆、見たら、(ピー)を(ピー)して、(ピー)しちゃうんだから!!」

呂律の回らない舌で、怒涛の様にまくし立てるエリア。

一同、唾然。

そんな中、アウスは一人薄笑みを浮かべる。

「へえ、それは楽しみだ。」

「そ、そうよ!!期待してて、ちようだい!!」

「だよね。先生の『おしおき』の怖さは周知のことだし。宿題出来ませんでしたなんて言ったら、それこそどんな目に合うか・・・。」  
その言葉に、エリアの顔から一気に血の気が引いていく。

「どうしたんだい? 顔色が悪いよ? 大物捕まえて、疲れたのかい?」  
クスクス笑いながら訊くアウスに、エリアはブンブンと頷いた。  
と、その時――

コンコン

部屋に響く、ノックの音。

あからさまにビクツとするエリア。

「はい。どーぞー。」

ウインが、戸の方に向かって答える。

部屋の戸がキィ、と開く。

顔を出したのは、プチリユウ始めとする各使い魔たち。

帰還報告をしに、ドリアードの所に行っていたのだ。

『広場に集合だって。さっそく採点を始めるみたいだよ。』

皆の間に、走る緊張(一部除く)。

各々が準備をし、使い魔達をつれて部屋を出る。(ちなみにダルクは伸びたまま、ライナにズルズルと引きずられていった)。

皆がそれぞれの思いに浸りながら歩く中で、アウスはチラリとエリアを見る。

「ローブから除く足が、ガクガクと震えている。それを見て、彼女はポソツと眩いた。」

「本当に、楽しみだね♪」

かくして、運命の時はその幕を開けた。

—2—

「まずは皆さん、ご苦労様でした。全員、無事に戻ってこれた様で何よりです。成長しましたね。先生は嬉しいです。」

学校敷地内の広場に集合した霊使い達。

彼女達を前に、ドリアードは満面の笑みを浮かべる。

（・・・“無事に”って事は、危険性把握してたのか・・・。）

（ご苦労様じゃねっつーの!!死にかけてたっつーの!!）

（お腹減ったなー。）

メンバーの内の何人かが、腹の中でぶつくさ言う。

—と、

「何か言いましたかー？ダルクさん、ヒータさん。」

笑みを浮かべたまま、ドリアードがそんな事を言ってくる。

「——っっ!!?!」

半ば本当に飛び上がりながら、ブンブンと首を横に振る二人。

「おかしいですね？気のせいでしたか。」

小首を傾げるドリアード。

「あ、そうそう。この発表会が終わったら、お昼にしますからね。もうちょっと、我慢してください。ウィンさん。」

「はい。」

天然の様で、妙に鋭い。

『トウルース・アイ 真実の目』を常時展開しているという噂は、本当なのかもしれない。

冷や汗など拭いながら、そう思うダルクとヒータだったりする。

「さて、それでは誰から発表してもらいましょうか。」

ドリアードが、品定めでもするかのように皆を見渡す。

ワクワクと輝く瞳で応じる者。

平然と受け流す者。

目を合わせない様にする者。

反応は三者三様。

しばしの間の後――

「じゃあ、はいー！」

ドリアードの指が、メンバーの一人を指した。

若葉色のポニーテールが、ピョンと跳ねる。

「ウインさん、お願いします。」

「はい。」

元気良く手を上げ、ウインはそう返事を返した。

皆の列から一歩進み出たウイン。瞳を閉じて杖を構える。

大きく一つ、深呼吸。

そして――

「おいで!! 『まじっちー!!』」

呼び声と共に、杖の先端が地面を打つ。

途端、

ゴウウアアアツ

唸りを上げて巻き上がる烈風。

その場にいる全員が、一瞬視界を奪われる。

やがてその烈風が収まると同時に、

ジュラアアアアアアアツ!!

響き渡る咆吼。

風渦の中から現れた異形に、一同の間から「おおー」と感嘆の声がかかる。

大きな翼を羽ばたかせながら、地面に降りたつ竜。



彼は周りをグルリと見渡すと、その頭を甘える様にウインにすり寄せた。

「よーしよし、『まじっちー』、いい子いい子。」

自分の身体程もある竜の頭を撫でながら、ウインはドリアードに「先生、こんな感じだよ。」と笑いかけた。

その笑顔を同じ笑顔でもって受け止めると、ドリアードは「どれどれ」と件の竜に近づいて行く。

スルスルと進むその足取りには、怯えも警戒も見て取れない。

間近まで歩み寄ると、値踏みする様にしげしげと観察。

次に手を伸ばし、その身体を撫ぜる。

『魔頭を持つ邪竜』ですか。なかなか良い個体ですね。」

翼の傷や鱗の並びを確かめながら、そう言う。

「使役も<sup>しつけ</sup>しっかり出来ている様ですし、頑張りましたね。ウインさん。」

誉められたウインは、「でしょー」などと言いながら、えっへんと胸を張る。その心中を代弁するかの様に、トレードマークのポニーテールもピコピコと跳ねまぐる。

しかし、

「・・・ですが。」

「・・・ほえ？」

不意に、ドリアードの口をついて出てきた否定文。

跳ねていたポニーテールが、ピタリと止まる。

細められた蒼い目が、ウインを見つめていた。

「些か、レベルが低すぎますね。貴女なら、憑依装着すればもう少し上のレベルも狙えたのではありませんか？」

「え、えと・・・それは・・・」

確かに。

『魔頭を持つ邪竜』のレベルは3。それに対し、憑依装着時のウインの認定レベルは4である。

まあ、レベル3とは言っても大概化物である事に変わりはないのだが。

しかし、ドリアドの辞書に妥協と言う文字はない。

「淡々と、ウインを論ず。」

「確かに、慎重を期するのは大事な事です。けれど、自分の実力より下のラインをなぞるだけでは、更なる高みを目指す事は出来ません。度を過ぎた無茶をしろとは言いませんが、時にはもう少し大胆になつてみる事も必要なですよ。」

「はうう……。」

返す言葉もなく、シヨンボリするウイン。ポニーテールも、フニャリと下がる。

けれど、

クシヤクシヤ。

しよげた頭を、温かい手が撫でた。

「ふえ？」

見上げる視界に映る、優しい笑顔。

彼女の頭を撫でながら、ドリアドは言う。

「だけど、逆に言えば難点はそれだけです。その他の点では充分。」  
そして、手にした採点表にスラスラと点数を書き込む。

「はい。良く出来ました。」

そんな言葉とともに渡された表には、「90点」の文字。

それを見たウインの顔が、パアツと明るくなる。

ピコン

ポニーテール、復活。

次第を見ていた他のメンバーからは、パチパチと拍手が贈られる。

「今度のもっと、レベルの高い相手に挑戦してみましようね。」  
につぱりと笑む、ウインの顔。

「はーい!!」と言う声が、青い空に元気に響いた。

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

…広場は沈黙に包まれていた。  
これ以上ないほどの沈黙であった。

切ないほどの沈黙であった。

「な、何だよ!?みんなして、何黙りこくってんだよ?」

沈黙の中心に置かれた少女、ヒータは訳も分からずそう叫んだ。

ウインの後、ドリアードの指名を受けたヒータ。

待つてましたとばかり、数日前にしもべにしたばかりの”それ”を

召喚した。

したのであったが…………。

「あー、これって…………」

「…………やっちゃったな…………」

「期待を裏切らないねえ。ヒータ女史。」

「あっちゃー、ですねえ…………」

「な、何!?何だよ!!」

想定外の反応に、焦りまくる。

彼女の隣りにいるのは、十数mに及ぶ長大な体を持ったモンスター。

巨大な蛇を思わせるその身体の表面は、真っ赤に灼熱した岩の様な鱗に覆われ、獰猛そうなその顔からは、炎をまとった吐息が噴き出さ  
れている。

灼熱の身体はジリジリと焼け付く様な熱気が放ち、地面に生える草  
を焼き焦がしていた。

「…………これはまた、自然環境に優しくないモンスターを連れて来ま  
したねえ…………」

そう言つて、溜息をつくドリアード。

その様子に、ヒータの困惑はますます深まる。

「え、え？ホント、何なの？オレ、何かまずった？」

オロオロする彼女の肩を、トントンと叩く者がいる。

振り返ると、困った様な顔をしたウインが立っていた。

「な、何だよ？」

「ヒーちゃん、この子、『プロミネンス・ドラゴン』……。」

「お、おう！そうだぞ！！炎属性でドラゴンで……。」

「ヒーちゃん、違う……。」

ウインが、酷く気の毒そうに首を振る。

「な、何が……？」

もう何度目かも分からない“何”を口にする。

「この子、”ドラゴン族”じゃない。」

「……へ？」

「この子、”炎族”……。」

ヒータ、硬直。

ドリアードがまた溜息をつく。

「以前、生物分類学で教えましたよ？また、居眠りしてましたね？」

「え、ええー!?だ、だってプロミネンス……ドラゴン”””って……、

ドラゴンって……ドラゴンだから、ドラゴンだろ!？」

見てる方が気の毒になるほど、テンパるヒータ。アウスがクスクス

笑いながら言う。

「君は実に馬鹿だなあ。その理屈じゃあ、キンメダイも鯛になるし、

サンシヨウウオも魚になつちやうだろ？」

「え……違うのか？」

ポカンとするヒータ。

アウス、ただ苦笑。

と、傍らで様子を見ていたきつね火がポンと前足を打った。

『そうか……!!どうりである時何か引つかかって……』

「な……お前、知ってたのかよ!？」

『いや、あの時はいっぱいいっぱい頭回らなかった……』

食ってかかるヒータに、きつね火は慌てて弁解する。  
しかし、行き所のない怒りは収まらない。

「てめえ!!あんな苦勞したのにお陰で・・・!!」

『な、何だよ!?大体姫の方こそ、失念どころか知りもしなかったくせに!!』

「何だとー!?!」

『何だよー!!』

この上なく不毛な争いが始まろうとしたその時、

「お止めなさい!!」

鋭い声が割って入った。

『はひゅいひゅい!!』

今にも取っ組み合いになりそうだった一人と一匹。  
変な声を上げて竦み上がる。

「これは貴女に出した課題です。責任転嫁するんじゃないやありません!!」

「は・・・はい!!」

ドリアードの叱責に、気をつけるヒータ。

そんな彼女を前に、溜息をつく先生。三度目。

「全く、しようがないですね。とにかく、これでは採点対象にはならない訳ですが・・・」

「え、ちよ、ちよっと待ってよ!?先生!!」

その言葉に、ヒータは慌てる。

「大変だったんだよ!!いや、ホントに!!死ぬ思いだったんだって!!」

「それは、他の皆さんも同じ筈ですよ?」

「・・・う・・・」

もつともなお言葉。

ぐうの音も出ない。

「条件は皆同じです。そこで選択の間違いを犯すのはあなたの不知、不勉強が原因。違いますか?」

「・・・はい・・・」

返す言葉もなく、しよんぼりするヒータ。

釣られて、プロミネンス・ドラゴンときつね火も申し訳なさそうに頭を垂れる。

彼らに・・・特にプロミネンス・ドラゴンには何の責任もないのだが。

・・・と、うつむいていたヒータの頭を、ふわりとした感触が包む。見上げると、ヒータの頭をドリアードが撫でていた。優しい微笑みが咲く。

「でも、これで一つ勉強になりましたね。間違いを経て得た知識は忘れないものです。今回の間違いをどうか次の機会に生かしてください。」

「先生・・・。」

「それと、私は何も貴女の頑張りを全部否定するつもりはありませんよ。」

その言葉に、思わず「えっ!?!」と目を見開くヒータ。

「種族はともかく、その他の点においては文句はありません。その努力は認めます。」

それを聞いたヒータの顔が、パツと明るくなる。

「それじゃあ・・・。」

ドリアードは何やらサラサラと採点表に書き込むと、それを彼女に手渡した。

いそいそと覗き込む、ヒータとそのしもべ二匹。

しかし、目に飛び込んできたのは――

「ぎ・・・30点・・・?。」

へニヨリと萎れこむヒータ。

ついでに、プロミネンス・ドラゴンも脱力した様にへたりと地面に伸びる。

きつね火もガツクリ。尻尾の炎も、弱火。

「課題の主眼を外している事に、違いはありませんからね。その30点が努力点です。」

「そ、そんなく。」

ヒータ半泣き。

でも、聞く耳は持たれない。

「他の皆さんがちゃんとドラゴンを捕まえている以上、あなたにそれ以上の点数をあげる訳にはいきません。」

「うゝ．．．。」

不満そうなヒータ。そんな彼女の頭を撫でながら、ドリアードはウフフ、と笑いかける。

「そんな顔をしないでください。この次、もっと頑張りましょう。それと—」

撫でる手に、不意に力がこもる。

ミシリという、不気味な音。

「．．．次は、ありませんよ．．．。」

静かに響く、ドスの効いた声。

笑顔のドリアードから、”何か”が立ち昇る。

陽炎の様に揺らぐ、背後の風景。

それを見た皆が、一様に顔を青ざめさせて（一部除く）ぎつと下がる。

どつと瀧の様に汗を吹き出すヒータ。

恐怖に全身の毛を逆立てるきつね火。

プロミネンス・ドラゴンは、怯えて小さくとぐろを巻く。

「分・か・り・ま・し・た・か・？」

鈴音の如き声が、今は奈落から響く悪魔のそれに聞こえる。

「．．．．．はひ．．．．．」

油取りの蝦蟇の如く、脂汗塗れで答えるしかないヒータ。

「よろしく。」

笑顔のまま。

あくまで笑顔のまま、ドリアードはそう言った。

「では、次はアウスさん。お願いします。」  
そんなドリアードの声を背に受けながら、ヒータがトボトボと戻つてくる。

「うう……散々だあ……。」

「ヒーちゃん、ドンマイ!!」

「このつぎがんばらばいいのです。」

「……世の中、そんなもんだよ……。」

見ている方が切なくなるほど落ち込んでいるヒータに、皆が口々にフオローの言葉をかける。

しかし、そんな声も耳に入らないのか、ヒータはシヨボくれたまま。  
と――

「お疲れ様。おかげで愉快なものが見れたよ。」

唐突に飛んできた、そんな言葉。

皆の視線が、一斉に集まる。

その先にいたのは、眼鏡をかけた栗毛の少女。  
アウスである。

「久しぶりに心から笑ったよ。実に爽快だね。」

そのあまりの言い様に、ライナがギョツとする。

「……ちよ……そ、それはようしやない、さすがアウスちゃん、ようしやないです……(汗)」

関係ない、第三者すら焦る。

当事者であるヒータの癪に障らない訳がない。

「愉快なつて、アウスてめえ!!オレは見せもんじゃねーぞ!!」

痛い所をつつかれ、猛烈に食つてかかる。しかし、当のアウスは涼しい顔でクスクス笑うだけ。

「いやいや、謙遜を。なかなかの笑劇だったよ。」

「この……。」

憤怒の表情で、ヒータがアウスの胸倉を掴む。

「ちよー!!ちよつと、ちよつとですー!!」

今にも殴りかかりそうな勢いのヒータに、慌てて止めに入ろうとするライナ。と、そんな彼女の肩を誰かが掴む。



振り返ると、そこには自分の肩を掴むウイン。そして、気怠そうに腰を下ろしているダルクの姿。

「ウインちゃん、なにゆえとめるですか!? っていうか、ダルクはなにへいわそうにだべってやがるですか!? たったひとりのおとこで、ここでやくだたなくてどうするですか!? やくだつべきときにやくだたないおとこなんて、いてもいなくてもおんなじなのです!! ゲール・ドグラさんとこいって、すこしはよのなかへのほうしについてごせつきようたまわってくるといいのですー!!」

「・・・男女差別だろ、それ・・・。っていうか、聞いたら怒るぞ・・・。ゲール・ドグラが・・・。」

そう呟きながら、ダルクはポリポリと頭をかく。「かつたるい」というのを絵で描いた様な態度である。

「こ、こんのがきやーっ!!」

アホ毛と目玉をグルグル回しながら飛びかかろうとするライナ。

「ちよ、ちよつとライちゃんってば!!」

そんな彼女を羽交い締めにするウイン。

これ以上戦火を広めると面倒なので、彼女としては珍しく必死である。

「大丈夫!! 大丈夫だよ!!」

「はい!? どういうことですかー!?」

ライナ、訳が分からない。

「だいじょうぶって、あれをだいじょうぶっていうなら、このよにバトルフェイズなんてそんざいしないですー!! あ、ひよつとしてぶしなさけってやつなのですかー!? いけませんよー!! そのはてにあるのは、おかみによるおいえとりつぶしとかたきうちのうちいりのむげんるーぶなのですー!」

「・・・お前、何年何日、あいつらと一緒にいるんだよ・・・?」

テンパるライナに向かって、ダルクが心底面倒くさそうに言う。

「あいつ」のやり方は、とつくに分かっているだろう?」

ダルクの指が、気怠そうに件の「あいつ」を指差した。

その先―ヒータとアウスは正に一瞬即発の態にあった。

「てめえの言い様にやあ、常々辛抱してきたけどなあ!!今度という今度は・・・!!」

内に溜まっていた鬱憤を吐き散らす様に、ヒータは拳を振り上げる。

しかし、それでもアウスの表情は微塵も揺るがない。

眼鏡の奥に浮かぶのは、あくまで小悪魔の如き笑み。

「おや、殴るのかい?別に良いけど。それじゃあやっぱり、今回のが君の限界って事かな?」

「な、なににい?」

『その通り。だから余計に腹が立ち』ってね。自分にこれ以上の自信がないから、理屈抜きの腕力に打って出る。違うかい?」

「こ、この・・・!!」

「もし違うって言うなら、それをボクに示してごらん。そしたら、謝罪でも土下座でもしてあげるよ。」

そして、アウスはクスクスと笑う。

次の瞬間、ヒータが憤怒の表情で拳を握り締めた。

ギリギリッ

「——っ!!」

拳が握りこまれる音に、思わず目をつぶるライナ。

しかし—

ヒータはその拳をアウスに叩きつける事はなく、代わりに掴んでいた胸ぐら突き飛ばす様に離れた。

アウスはわざとらしく、「おととと」などとバランスをとる振りをする。

「上等だよ!!」

そんなアウスに向かって、ヒータは怒鳴る。

「じゃあ、見てやがれ!!この次は、これでもかかってくらいスゲー首尾上げて、その澄ました<sup>つら</sup>地面に擦りつかせてやっからな!!」

その言葉を聞いたアウスは、

「そうかい。じゃ、せいぜい楽しみにしてるよ。」

などと言ってパンパンとローブの埃をはらうと、余裕の態でクルリ

と踵を返す。

「おう!!今の内にせいぜい笑っていやがれ!!この眼鏡小悪魔!!」

米神をヒクつかせながら喚き散らすヒータを一瞥し、アウスは平然とドリアードの元へと向かった。

「あれ?はれ?」

「ほら、見ろ。」

ポカンとするライナに、ダルクはさもありませんといった顔をする。

二人の目の前には、アウスの後姿に向かってギヤアギヤアと悪態をつき続けるヒータ。その様子は、すっかりいつもの調子に戻っている。

そんな二人を眺めながら、ウインはただニコニコと微笑んでいた。

「お待ちせしました。すいません。」

あえて事態を静観していたドリアード。目の前に来たアウスに向かって、溜息混じりに言う。

「全く、相変わらずですね。貴女らしいと言えばその通りですが、もう少し他にやり方と言うものがあるでしょうに。」

「さて、何の事ですか?」

あくまで 澄ました表情のアウス。ドリアードは苦笑する。

「まあ、良いでしょう。では、お願いします。」

「はい。」

そう答えて、アウスは手にした杖で地面を軽く突く。

「おいで。」

途端――

ドバアアアアンツ

地面が爆発する様に弾ける。

もうもうと立ち込める土煙。

「ゲホツゲホツケホ・・・」

「うみやあああー、めが、めがあああー・・・です。」

「馬鹿野郎ー、もう少し大人しく出来ねえのかよ!?!」

「・・・服が土だらけ・・・。。。。洗ったばかりなのに・・・。」

「ああ、すまないね。”彼”、ちよつと不器用だから。」

皆のブーイングを軽く受け流すアウス。

ブウフウルルルル・・・

そんな彼女の言葉に、低い唸り声が重なる。

ズシリッ

重い足音を響かせながら、土煙の中から現れたもの。

それに、場にいる皆の視線が集中した。

「ええ!? ウソ、あれって・・・!?」

「な、なんとおー!? なのです。」

「マジかよ・・・!?」

「・・・へえ、こりや驚いた・・・。」

口々に飛び出る、驚嘆の声。

『『地を這うドラゴン』・・・ですか?』

さしものドリアードも、驚きを隠せない。

「どうですか? 先生。」

澄ました顔で言うアウス。

「攻撃力は基準の1500越え。レベルは、憑依装着の認定値を越えるレベル5。種族は純然たるドラゴン族。そして・・・」

アウスがそつと足を出すと、地を這うドラゴンは頭を垂れその靴を舐めた。

その光景に、皆は驚き半分呆れ半分の視線を注ぐ。

「使役もこの通り。さて、何か突っ込みは、ありますか?」

「そ、そうですねえ・・・? え、えーと・・・」

ドリアードはしばし考えると、ポンと手を打った。

「そ、そうそう。この子は確か絶滅危惧種で・・・」

「捕獲許可証ならここに。」

ドリアードの言葉を先どる様に、アウスがそれをペラリと見せる。

「使役許可証もありますよ。ほら。」

「あう・・・」

言葉に詰まるドリアード。

その様子を見たアウスはクスリと笑い、つ、と手を差し出した。

「それじゃあ評価、お願いします。」

「え・・・あ、はいはい。」

ドリアードは慌てて、手にした表に点数を書き込む。

「はい、大変良く出来ました。」

手渡された紙には、大きな花丸と100点の文字。

「ありがとうございます。」

アウスは一礼してそれを受け取ると、ステステと皆の元へと戻って行った。

その後ろ姿を見送りながら、ドリアードはボソリと呟く。

「出来すぎるのも考えものですねえ・・・。言う事なくて、ツマンネ・・・。」

その呟きを聞いてか聞かずか、アウスはチロリと舌を出した。

「凄いね。さすがアーちゃん!!」

「ううむ!!ぐうのねもでないとはこのことなのです。」

「・・・で、評価の基準が上がる訳か・・・。・・・ついてない・・・。」

「けっ・・・。」

「どうってことないよ。それより・・・。」

皆にかけられる賞賛の言葉（1名除く）を軽く受け流しながら、アウスは地べたに胡坐をかいて頬杖などついているダルクに言う。

「ダルク氏。今度は君らしいよ。」

そんな言葉ともに、親指で後ろを指す。

見れば、ドリアードがニコニコしながらおいでおいでをしている。

「・・・よりにもよって、お前の後か・・・。ついてない・・・せめてでも、『ゴイツ』の後なら良かったのに・・・。」

ダルクはよっこらせ、と立ち上がると傍らのライナの頭をポンポンと叩いた。

「ですよね。ライナのあとならきもらくで……ってどういういみですか!!」

「……お前が考えた通りの意味だよ……。」

「な、なんですとぅ?!」

ギヤーギヤー喚くライナを残し、ダルクはズルズルとドリアードの元へ向かう。

「……ああ、あの表情……。アウスで突つこめなかつた分、こつちでやる気満々だよ……。全く、ついてない……。」

ブツブツ言いながら前に立ったダルクを、ドリアードは苦笑いしながら迎える。

「相変わらずネガティブですね……。そんな私情の入った評価はしませんから、安心してください。」

「……はあ、そうですか……。?……。でも、口では皆そう言うんですよ……。分かってますよ……。」

どんよりと重くなる空気。

ドリアード、顔に縦線4本。ついでに、汗マーク1つ。

「ま、まあ、とりあえず、見せてもらいましょう。どうぞ。」

そう言つて、ダルクを促す。

しかし――

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

やっぱり、しゅしゅしゅん。

「……あ、あの……ダルクさん？」

唐突に割って入った沈黙。

いささか顔を引きつかせながら、ドリアードが言う。

「……はい……？」

「あの、早く召喚を……。」

「……もう、出しますよ……？」

かつたるそうに答えるダルク。

それぐらい察しろと言わんばかりである。

「……へ……？」

ポカンとするドリアード。

ついでに皆も、ポカン。

「……おいこら、出て来い……!!」

そう言つて、ダルクは頭の後ろに下がっているフードを叩いた。

途端――

ピイヤアアア!!

そんな声を上げながら飛び出す、黒いもの。

それは小さな翼をパタパタしながら、ダルクの頭にしがみ付いた。

「うわ、何?あれ!？」

「かわいいです!!」

「う……か、可愛い……♡」

「へえ。これはまた、珍しいものを……。」

自分に集中する視線に怯える様に、  
“それ”はまたフードの中に戻ろうとする。

「……こら、隠れるな。もう少し、我慢しろ……。」

半分フードに潜った“それ”を再び引つ張り出すと、  
ダルクは腕の中に抱いた。

「……と、言う事です……。」

『『黒竜の雛』、ですか……?』

むずがる子供の様に、ダルクにしがみつく「雛」。  
それを見るドリ

アードの目が、急に厳しさを増した。

『黒竜の雛』は文字通り、『レッドアイズ・ブラックドラゴン真紅眼の黒竜』の幼体。普通に考えれば、黒竜の巣から盗ってきたと思う所である。

「よく、成体と呼ばれませんでしたね? というか、生物保護法の第8条12項目、覚えていますか?」

ドリアードの言葉に、ダルクの身体がピクリと動く。

少しの間の後、彼の唇が言葉を紡ぎ始める。

『—希少たる竜族の繁殖行為、営巣地、利用状態にある巣、及び明確に親子関係にあたる個体群に対する過剰なる干渉、或いはそれに類似する行為の全てを禁止する。これに違反した場合、10年以下の懲役、500万以下の罰金、或いはその両方を課するものとする。尚、絶対たる必要に迫られし場合のみ、該当機関の許可を得た上において、その行為を前記原則の例外とする。—』

「……覚えていた様ですね。」

「……ええ、一応……。」

ドリアードの言葉に、しがみついてくる雛をあやししながら答えるダルク。

「ならば分かりますね? その子を盗ってくる事は、この条文にある『利用状態にある巣、及び明確に親子関係にあたる個体群に対する過剰なる干渉』に抵触します。次第によっては、法が……そこまで行かなくとも、学園があなたを罰しなければならぬ事になります。」

ザワツ

その言葉に、場にいる皆がざわめく。

「え? ちよ、ちよつと、どういう事だよ!?!」

「簡単な話さ。あの子竜を巣から盗ってきたって事になれば、ダルク氏は法律を犯した事になる。犯罪者、前科者になるんだよ。」

淡々と語るアウス。

それを聞いた皆が、一様に青ざめる。

「そ、そんな!! だってあたし達は先生に言われて……」

「先生は、ドドラゴンをしもべにしてこい」とは言ったけど、手段を選ぶな」とまでは言っていない。それに、生物保護法についてはボ



ク達はすでに授業で習ってる。この課題は、〃それ〃を知ってるという前提で出されてたんだ。だから、ボクだって正式な手続きを講じてこういうものをとってる。」

そう言つて、アウスは手にした許可証をペラペラと晒す。

「・・・もつとも、最高に危険な子連れ竜の巣を荒らしに行くなんて、先生自身、思っちゃいなかったらうけどね。」

クルクルと許可証を丸めるアウスに、助けを求める様にライナがすがる。

「で、でも、そんなの、ライナだってしらなかったですよ!!そ、そうだ!!しらなかったっていえば・・・」

「そんな理屈は通じない。罪は罪だ。それに、言つたら? 〃習ってる〃んだよ。ボク達は。知らなかったは通じない。」

「そ・・・そんなあ・・・。」

容赦ないその言葉に、ライナはヘナヘナと崩れ落ちる。

「それじゃあ、ダルクはあしたからけーむしよぐらですか? けーむしよでくさいメシですか? ライナはひとりぼっちですか? そんなの、そんなのイヤですく!!」

「ライちゃん・・・。」

「馬鹿野郎・・・。いくら〃お仕置き〃が怖いからって、法なんか犯しやがって・・・!!」

「皆、落ち着きなよ。」

今にも泣き出しそうな皆に向かって、アウスは言葉を続ける。

「何もそう決まった訳じゃない。この法律が規定してるのは、あくまで〃巣にいる〃か、〃親の庇護下〃にいる幼体。あの雛が巣から盗られたものじゃない、〃はぐれ〃だという事が証明されればこの法は適応されないで済む。」

「そんなの、どうやって証明すんだよ・・・?」

「それは、ダルク氏の説明如何だね。」

ヒータの問いにそう返し、アウスはドリアードとダルクの元へと視線を戻した。

「どうなのですか？ダルクさん……。」  
問い詰めるドリアド。

いつもの穏やかさが嘘の様に、厳しい顔。  
息を飲む皆。

5人の視線が集まる中、ダルクはしばし考え、そして――

「……ご想像にお任せします……。」

「……は……？」

「……なんて言うか、説明すんの、だるいんで……。」

一同、ズツコケ。

「そ、そこですらそう来るか……!？」

「さ、さすがダルク……。ゆがみねえです……。」

「で、でもさあ……。」

「ああ。あれじゃあ、有罪確定だね。」

一人ズツコケなかったアウスが、腕を組みながらそう言った。

ドリアドは少し悲しげな顔をしながら、もう一度問い直す。

「……どうしても、説明しませんか？」

「……さっき言ったとおりです……。」

そう言つて、黙り込むダルク。

ドリアドは溜息をつくとき、その手をダルクに伸ばす。

細い指が、ダルクの肩に触れようとしたその時――

『チヨオット待ツタアアアア――ツ!!』

そんな叫びとともに、ドリアドとダルクの間に黒い球体が飛び込んできた。

ダルクの使い魔、D・ナポレオンである。

『先生、聞イテクダサイ!!コレニハ事情ガ……』

「あ、こいら!!お前!!」

しもべの意図に気づいたダルクが止めようとするが――

『しゃあああらっふ!!』

物凄い剣幕で怒鳴られて、逆に黙らされてしまう。

『確カニ、己ノ手柄ヲペらペら喋ラナイノハ漢ノ美德デハアリマスガ、ソレモ時ト場合ニヨリマス!!コンナ時ニマデダンマリスルノハ、

タダノ馬鹿デス!!」

「いや、だけどな、お前……」

『しゃあああらっぷ!!』

二度目。

その剣幕にビビった雛が、またフードの中に潜り込む。

『またーガ言ワナイノナラ、私ガ言イマス!!』

そしてD・ナポレオンは事の一部始終をぶちまけた。

その結果――

「うう……え、偉いねええ……ダルくん……!!」

「よくやった!!さすがわがおとうと。よくやったのです!!」

「ちくしょう……泣かせるじゃねえか……」

「うーん。あんまりボク好みの話じゃないなあ……」

半泣きの皆（1名除く）に、揉みくちやにされるダルク。

「ウザイ……だから言いたくなかったんだよ……」

ライナにワシワシと頭をなでられながら、うんざりした顔で呟くダルク。

その傍らで、これまた半泣きのドリアードがD・ナポレオンに確認を取っていた。

「それで、間違いはないのですね?」

『ハイ。証拠デシタラ、またすー腕ヲ見テクダサイ。』闇ヨリ出デシ絶望』ノ爪痕ガアリマス。』

それを聞いたドリアードは、ツカツカとダルクに向かう。

群がっていた一同が引く中、ドリアードはダルクの左腕を手に取りとグイツと袖をめくった。

頭になる、痛々しい傷跡。

「……確かに……」

そう呟くと、ドリアードはギュウツとダルクを抱き締めた。

「ムギユウツ!」

顔を彼女の胸に埋められ、踏んづけられたカエルみたいな声を上げるダルク。

「良い子ですね!!さすが、私の教え子です!!」

「く、苦しい〜!!ウザイイ〜!!」

ドリアードの腕の中でもがく主を見ながら、D・ナポレオンはほと息をつくのだった。

「それでは、改めて評価の方を・・・」

皆に揉みくちやにされてボロボロになったダルクの前で、ドリアードは採点表を手にとった。

ハンカチで目尻の涙を拭きながら、採点表にサラサラと文字を書き込む。

「はい。」

「・・・どうも・・・。」

受け取ったダルクは、二体のしもべと共にそれを覗き込む。

「・・・へ・・・?」

『ハア?』

『ピイ?』

表に書いてあったのは、点数ではなく『プライスレス』の文字。

「・・・あの・・・何ですか・・・?これ・・・。」

訳がわからないといった態のダルクに、ドリアードは涙目で答える。

「残念ですが、貴方だけ採点の基準を変える訳にはいきません。

『雛』はレベルも低いですし、点数だけでみれば悪いと言わざるをえないでしょう。けれど、点数が全てではありません。今回の貴方の所業は、非常に素晴らしいものです。点数などで表すことなど出来ないものです。よって、この様な評価としました。」

「・・・はあ・・・。」

なんじゃそれ、と言った顔の皆。

「その子、大事にするのですよ。」

「・・・はい・・・。」

相変わらず、気だるげに答えるダルク。

その頭の上で、雛とD・ナポレオンは微笑んで(?)うなずき合うのだった。

「……………」

「……………」

沈黙である。

広場はこの日、二度目の沈黙に覆われていた。

沈黙の中心にいるのは、艶やかな銀髪の少女。光霊使いのライナ。ドリアードと向かい合っている彼女の横には、朱色の身体に亜麻色のたてがみをなびかせる竜、『エレメント・ドラゴン』が座している。エレメント・ドラゴンのレベルは4。攻撃力は1500とされている。

内容だけで見れば、アウス同様問題はないはずであるが……。

「あの一、ライナさん……?」

ドリアードが、困った様に訊ねる。

「はい。なんででしょう?」

笑顔で答えるライナ。

無邪気と言う言葉を、形にした様な顔である。

「何か、この方、ご機嫌が宜しくない様なんですが……。」

そう言っつてドリアードは、エレメント・ドラゴンを見る。

もともと赤いエレメント・ドラゴンだが、その顔が心なしかよみがかっている。亜麻色のたてがみはザワザワとざわめき、憤る様に噴き出す鼻息には、チロチロと小さな火の粉が混じっている。

……どう鼻屑目に見ても、心穏やかそうには見えない。

ドリアードは米神を抑えながら、訊く。

「……というか、貴女この方の事、召喚してないですよね? どう見ても携帯かけてあの方に連れてきていただいた様に見えたのですか……?」

言いながら上を見る。

そこにはヒポポポ、などと電子音を響かせながら浮いている巨大で半透明の球体。

・・・モイスチャー星人である。

「ああ、それはしかたないのです。」

手の中のスマートフォンをチャカチャカといじると、ライナはアドレス帳をドリアードに見せる。

「エドくんはけいたいもってないのです。だから、モイクんにでんわして、テレポーションでつれてきてもらったです。」

見れば、確かにモイスチャー星人の周りを光線銃やら箒やらと一緒にスマートフォン（尚、最新機種）が舞っている。

「はあ・・・。でも、しもべにしたのでしょう？なら、ちゃんと召喚権限を行使して”召喚”したほうがいいんじゃないですか？通話料金も浮きますし。」

「ていがくサービスに入ってるからへいきなのです。それと・・・」  
ライナはチツチツと指を振る。

「エドくんはしもべじゃありません。おともだちなのです。」

ドリアード、困惑。

「お友達、とは？」

小首をかしげる彼女に、ライナは胸を張って答える。

「おともだちはおともだちなのです。だいたい、いきなりしもべになつてくれなんてしつれいなのです。ぶれいなのです。なにさまなのかというやつなのです。さいしよは、まずおともだちから。すべてはそれからじまるのです。ぜったいのしゅじゅーかんけいも、あまゝいれんあいかんけいも、しゅくめいのライバルかんけいも、ちでちをあらうてきたいかんけいも、すべてはおともだちからはじまるのです!!」

言いながら、ズズイツと迫ってくるライナ。しかドリアードは動じず、眉をへの字にして言う。

「困りましたね。いくらそう言われても、一応宿題は”しもべ”にしてくる事ですからねえ・・・。友達では評価対象になりませんよ。」

「な、なんですとー!?!」

ドリアードの言葉に、仰け反るライナ。

「するとせんせいは、おともだちをしもべのかいごかんといちづけ  
るのですか!?おともだちはガイアナイトさんやサイバー・ジムナティク  
スさんとおなじあつかいですかー!?」

「聞いた本人達が怒る様な言動は、控えてください。ヒータさんの  
時にも言いましたが、宿題の本筋を外してしまつては、意味がないん  
ですよ?」

その言葉に、ライナはますますいきり立つ。

「いくらせんせいでもききずてなりませんー!!ともだちはこのよに  
おけるしこうのそんざいがいねんなのですよー!!」

溜息をつくドリアードに構わず、ライナは機銃掃射の様に喚きまく  
る。

「せかいはともだちからはじまつたのです!!ともだちはせかいのこ  
んげんなのです!!ことわりです!!このよのすべてのふこうはみんな  
がともだちでないがゆえにしようじるのです!!よのそんざいばんぶ  
つすべてはともだちになることによつてきゆうさいされるのです!!  
じんるいほかんけいかくもえんかんのことわりもばんぶつともだち  
かけいかくのまえにはいぬのふんほどのかちもないのです。ともだ  
ちはきゆうきよくにしてしこうのたいげんなのですー!!」

「ー『地割れ』。  
アース・クラック  
バカンツ

「ア〜レ〜!?!」

唐突に開いた地面の亀裂に飲み込まれるライナ。

「全く、話が進まないじゃないですか。」

平然とそう言いながら、ドリアードはその亀裂をまたいでスタスタ  
と歩いていく。

歩いていく先にいるのは、エレメント・ドラゴンである。

さつきまで怒りに紅潮しているように見えたその顔色は、今は何故  
か紫色に染まっている。

「どうやら、青ざめているらしい。」

その後ろの方では、10歩ほど後ずさつた一同が同じように顔を青

ざめさせながらヒソヒソと言いつつ合っている。

(・・・おい、『アース・クラック地割れ』無詠唱で発動したぞ・・・。)

(相変わらず、おつかねえ・・・。)

(ライちゃん、死んじゃったかな・・・。)

ヒソヒソと囁き合う一同をよそに、ドリアードは笑顔でエレメント・ドラゴンに向かう。

『すいません。いくつかお聞きしたいのですが・・・？ (竜語)』

『は、はひゅわいいい!! (竜語・以下略)』

あからさまにビビっているエレメント・ドラゴン。

・・・無理もないかもしれない。

『あなたがあの子と友達になったという経緯を、教えてくださいませんか?』

『は・・・はい・・・!!』

ビシツと姿勢を正してお座りをすると、エレメント・ドラゴンは事の次第を話し始めた。

そして、十数分後――

『なるほど・・・。あの娘はあの娘なりに、苦労はしたようですね。』

『は・・・はい、それはもうそれなりに・・・。』

コクコクと水飲み鳥の様に頷く、エレメント・ドラゴン。

『それで、貴方自身はどう思っているのですか?振り回されて、随分憤慨なさっていた様ですが?』

『そ・・・それは・・・』

答えに困る様に口ごもる、エレメント・ドラゴン。

その目を、何かを探る様に見つめるドリアード。

しばしの間。

やがてニツコリと微笑むと、エレメント・ドラゴンに手を伸ばす。赤い巨体が、一瞬すくみ上がる。

しかし、伸ばされたドリアードの手は、その喉を優しく撫でていた。思わずゴロゴロと喉を鳴らす。

『分かりました。今日はご苦労様でしたね。もう、御帰りいただいて結構ですよ。』



その言葉に、一瞬ポカンとするエレメント・ドラゴン。

やがて何かを察した様に頷くと、その翼を広げて飛び立つ。

去り際、ライナの落ちた亀裂をチラリと見る。

しかし、ドリアードが大丈夫とでも言う様に頷くと安心したように踵を返す。

大空の果てへと消えて行くその姿を見送ると、ドリアードは足元の亀裂を覗き込む。

その奥には、目を回して伸びているライナの姿。

それを微笑みを浮かべながら見つめると、ドリアードは取り出した採点表にさらさらと数字を書き込む。

書き込まれた点数は、0・5点。

「・・・あなたとは、まだ色々と話し合わねばならないようですね。そりやもう色々。」

楽しそうにそう言いながら、ドリアードは上を見上げる。

そこには、フヨフヨと浮いているモイスチャー星人の姿。

『貴方も、大変でしょうけどこの娘の事、これからもよしなに頼みますね。(宇宙語)』

『君ノ宇宙語ハ、解カリ難イ。(宇宙語)』

照れたように明滅しながらそう言うモイスチャー星人を見て、ドリアードはただ楽しそうに微笑むばかりだった。

—7—

ハア・・・ハア・・・ハア・・・

彼女は逃げていた。

必死に。

懸命に。

ただ地の果てを目指して。

ハア・・・ハア・・・ハア・・・

呼吸が苦しい。

心臓が早鐘の様に鳴っている。

細い足の筋肉が、ギシギシと悲鳴を上げている。  
しかし、ここで止まる事は出来ない。

それは、全ての終りを意味する。

ああ、何故こんな事になっているのだろうか？

走りながら、思考を巡らす。

全ての原因は、あの氷の地での因縁。

あそこにおける、騒動のせいだ。

自分に落ち度はなかった。

全ては、あの地の連中がいけないのだ。

連中とは？

決まっている。

三頭の氷龍及び氷結界の連中だ。

氷龍あいつらが、大人しく寝てなかったせいで。

氷結界あの連中が、事を迅速に収めなかったせいで。

自分が出張らなきゃならない事態になったのだ。

そりゃ、運命だとか使命だとか、色んなしがらみがあったのは確か  
だけ。

迷惑を被ったのは事実だ。

別れる時の風水師の顔が浮かんできて、非常に癪に障る。

あんなに晴々とした顔しやがって。

それで、こつちがどんな目にあってるか知りもしないで。

そもそも・・・

『エリア、何してんの?!早く足動かして!!』

「はひゅわあっ!!」

相棒のギゴバイトの声に、物思いにふけていたエリアは飛び上がる程に驚いた。

「な、何よ?!急に大きな声出さないで!!心臓飛び出るかと思った  
じゃない!」

『捕まったら、比喩どころかリアルで心臓えぐられるよ?!何考え込  
んでるのさ?!この非常時に!!』

ゼエゼエと息を切らしながら、それでも走るのを止めずにギゴバイトは怒鳴る。

「こんな事態に陥った理由を考えてたのよ!! いかにあの龍共が粘着質だったかとか、いかに氷結界の連中がノーターリンだったかとか…。うん。やっぱりあたし、悪くない!!」

『責任転嫁なぞしとる場合かい!? つたく、本当に馬鹿なんだから!!』  
息を切らしながら溜息をつくギゴバイト。なかなか器用である。

「な…。馬鹿とは何よ!! 大体あんた下僕でしょ!? だったら何か主人が怒られずに済む様な方法考えなさいよ!! それとも何!? アタシが先生にお仕置き食らってもいいっていうつもり!?」

息を切らしながら、息もつかずに怒鳴り散らすエリア。こっちも結構器用である。

『良くないからこうやって一緒に逃げてんだろ!! いいから黙って走れ!!』

「何よなになに!? 言うに事欠いて命令形!? ムキーツ、いったいアタシを誰だと思ってるのよ!? その無礼、いつかきっかり報いらせてやるんだからね!!」

「そんな時まで命があったらね!!」

息を切らしながらギャアギャア言い合う二人。結局、どっちも器用な二人なのだった。

その頃、他の霊使い達が課題の評価を受けていた広場。

大方は終わり、後は水霊使いのエリアを残すのみとなっていた。

「それでは、エリアさん、出てきて下さい。」

ドリアードが呼ぶ。

しかし、返事はない。

「?、エリアさん、どうしました? エリアさん?」

やっぱり、返事はない。

他の霊使い達も、ざわめき始める。

「あれえ? エーちゃん、どこ行ったんだろ。」

「さっきまでここにいただろ?」

「・・・確かに・・・」

「へんですねえ？」

と、皆がざわつく中、アウスが「おや？」と言って地面にあった何かを拾い上げた。

それを見て、彼女はクスツと笑う。

「皆、これを見てご覧よ。」

言われた一同が、「え？なにになに」と集まってくる。そして――

「・・・あーあ・・・」

「・・・あいつ・・・」

「・・・道理で様子がおかしいと思ったら・・・」

「エリアちゃん・・・ごしゅうしようさまです・・・」

「本当に、期待を裏切らない人ばかりで、ボクは嬉しいよ。」

皆がそう言いながら見つめるのは、アウスの手の中。そこに握られた、一枚の紙きれ。

それには――

「探さないでください。byエリア」

――の文字。

そして、当の本人はどこにもいない。

「・・・逃げましたか・・・」

静かに響いたその声に、場にいる全員（一部除く）が震え上がる。

いつの間にか、近くに来ていたドリアード。

す、と手を伸ばしてアウスの手から紙きれをとる。

そして、書かれた文字をチョンチョンと触ると小さく頷いた。

「このインクの乾き具合・・・。まだ遠くには行ってませんね・・・。」

そう言っただけで顔には、見た目にも穏やかな、しかしどこか無機質な笑顔。

ドリアードはその能面のような顔で皆を見回すと、厳かに口を開いた。

「皆さん・・・」

「は、はい（です）!!」×4

「どうやら、エリアさんは少し遅れている様ですね。皆さんで迎え

に行つてあげてください……。」

顔はあくまで笑顔。しかしその背後からは「何か」が陽炎の様に立ち昇り、心なしかドドドドドドドドという擬音まで見える様な気がする。

何処ぞの氷龍もかくやと言う程の、凄まじいプレッシャー。

「五体の無事は問いません。速やかに、エリアさんをここに連れてきてください。いいですね？」

あくまで崩れない、満面の笑顔。

それが、逆に怖い。

一同、ただブンブン頷くだけ。

「では、お願いします。」

「はい（です）!!」×4

一斉に答えて、シユバババツと散つて行く霊使い達。

それを見届けながら、ドリアードは呟く様に言った。

「……知りませんでしたか？ 精霊術師からは逃げられない……。」

周囲の風が、怯える様にピユ〜と鳴いた。

に続く

「逃亡」

## 逃亡

— —

「はぁ……はぁ……ここまですれば……」  
息を切らしながらそう言うと、エリアは手近な木陰にへなへなと座り込んだ。

『大丈夫？エリア。』

主を気遣うギゴバイトが、担いで来た荷物の中からブルー・ポーションを引っ張り出してエリアに渡す。

「あ、ありがと……」

息も絶え絶えになりながら受け取ると、栓を抜くのももどかしくゴキユゴキユと豪快に飲み干す。

「ぶはーっ!!うめーっ!!」

ドンツと地面に空になった瓶を置くエリア。

『ちよつとエリア、はしたないよ。女の子が。』

腰に手をやりながら、注意するギゴバイト。

「別に良いじゃない。アンタしかいないんだし。誰も見てないわよ。」

『そういう問題じゃないでしょ。そんなんだから彼氏も出来ないんだよ!』

その言葉に、エリアの動きがピタリと止まる。

「……彼氏なんていらわないわよ。つていうか、もういるし。」

『ええ!?初耳だよ!!いい、一体何処の誰さ!』

ギゴバイトが顔色を変えてそう言った途端、

ヒュンツ

バコツ

『アベシツ!』

突然飛んできたブルー・ポーションの空瓶が、その顔面を強打する。

『な、何すんのさ!?急に!!』

「……うっさい、馬鹿!!」

抗議するギゴバイトに向かつて、エリアは苛ついた調子で言い捨てる。

『馬鹿ってなんだよ!? 訳わかんないし!!』

「うっさいったらうっさい!! 馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿!! 朴念仁!!」  
機関銃の様にまくしたてるエリア。

その頬が薄く染まっているのは、怒りのためかそれとも別の理由か。

とかく、今も昔も複雑かつ面倒な乙女心なのであった。

と、その時―

『ファイヤー・ボール炎の飛礫』!!』

そんな声とともに、無数の火球がエリア達を襲う。

チユドーン

「ウツキヤーツ!!」

『ワキヤーツ!!』

派手な爆音とともに、盛大に吹っ飛ばされるエリアとギゴバイト。

「アチ、アチチ!! な、何よ何何!?!」

火の点いたローブをバタバタしながら、走り回るエリア。

『エリア、落ち着いて!!』

そう言つて、両手を組むギゴバイト。すると、手の隙間から、チャーツと水が出て火を消し止める。

「だ、誰よ!? こんな面白くもない冗談かますのはっ!?!」

憤怒の形相で喚きまくるエリア。

それに応える様に、飛火が上げる煙の向こうから現れる人影。

朱色の髪が、炎の起こす上昇気流にユラユラと揺れる。

「見つけたぜ。エリア。」

エリア、仰天。

「ヒ、ヒータ!! あんた、どういうつもり!?!」

「どうもこうもねえよ。先生がお前を連れて来いってさ!!」

そう言いながら、ヒータは紅蓮の炎が灯る杖を構える。

傍らには、燃えさかる尾を揺らす稲荷火の姿。

すでに憑依装着済み。

戦闘準備完了状態である。

「そういう事だから、覚悟しな!!」

言うや否や、杖を振りかざして踊り掛かるヒータ。  
ガキイイイツ!!

硬いもの同士がぶつかり合う、硬質な音が響き渡る。

振り下ろされてきた炎杖。それを、エリアは間一髪、自分の杖で受け止めていた。

ギリギリギリ……

二人の力は拮抗し、鏖迫り合いになる。

「観念しな。お上にもお慈悲はあるぜ……。」

ギリギリギリ……

「あ……あなた、あたしを売るつもり……?」

歯を食いしばりながら、恨めしげに睨むエリア。

ギリギリギリ……

対するヒータは、力みながらも不敵な笑みを浮かべる。

「心外だねえ……。なるべく軽にお仕置きで済む様にしてやろうつという友情じゃねえか……。」

「よっけいなお世話よ!!」

ガツキイイイイインツ

甲高い音と共に、二人の身体が弾かれる。

ズザザツと体制を立て直しながら、ヒータが呪文を唱える。

「愚者の嘆き 炎帝の裁き 天下てんげに律する不変の理 神が名下に紅

蓮となりて 不従の罪に灼熱の報いを!!」

呪文の詠唱に合わせる様に、ヒータの杖に灯る炎が渦を巻く。

『ギルテイ・フレイズ火あぶりの刑』!!』

ヒータの杖からあふれた炎が、紅蓮の巨蛇となってエリアに襲いかかる。

「きやー!!アチツ、アチチチツ!!」

炎の巨蛇に舐められ、悲鳴をあげるエリア。

「ちよっ、ヘルプヘルプ!!ギゴ、何とかしてー!!」

悲鳴混じりの声に、ギゴバイトは自分も泣きそうになりながら叫



ぶ。

『火力強くて僕じゃ無理!! イーズ呼んで!!』

その言葉に、エリアは慌てて杖を地面に打ち立てる。

「イーズ、来なさい!!」

杖の先から水がしぶき、その中から水瓶を持った緑色の肌の女性が現れる。

イーズこと、『泉の妖精』である。

「イーズ、早く早く!!」

泉の妖精はコクリと頷くと、手にした水瓶を逆さに返す。

ドバアアアアツ

大量の水が瓶から溢れ出し、炎の蛇を消し去った。

「ちっ!!」

舌打ちするヒータ。一方、エリアはゼエゼエと息を切らしながら怒鳴り立てる。

「ちよつと、あんた、ふりじやないでしょう!! 本気で殺る気だったわね!?!」

「何言ってたんだ。んなわけねーだろ? まあ・・・」

ニヤリと凶悪な笑みを浮かべるヒータ。

「先生は、五体の無事は問わねーとは言ってたけどな!!」

「にや、にやにおう!?!」

裏返った声で叫ぶエリア。

ついでに、自分もひっくり返りそうである。

「良い機会だと思わねえか!?! 全くよう!!」

ひどく嬉しげな声とともに、再び飛んでくる炎の飛礫。ファイヤー・ボール

『エリア、危ない!!』

ギゴバイトと泉の妖精が、それを慌てて消して回る。

「あ、あんた、あたしに何か恨みでもある訳!?!」

「テメーの胸に訊いてみな!!」

逃げ回りながらなりたてるエリアに、ヒータもがなり返す。

チョコチョコと逃げ回りながら、考えるエリア。

やがて、ポンと手を打つ。

「分かった!!あれね!?あんたがとつてたマドルチェ堂のナチュル・パンプキン・パイ勝手に食べた事でしょう!?!」

「・・・何・・・?」

ヒータの動きが、ピタリと止まる。

「意地汚いわね!!たかがお菓子の一つや二つでいつまでもネチネチと!!そんなに大事なら名前でも書いときなさいよ!!」

吐き捨てる様に言い放つエリア。しかし、ヒータの様子がおかしい。

「あれ・・・お前の仕業だったのか・・・」

「へ・・・?」

ポカンとするエリア。

その前で、拳を握り締めたヒータがワナワナと震え出す。

「お前なあ・・・ありやあ、一日百個限定なのを、開店五時間前から並んでやつと買ったんだぞ・・・。それをよくも・・・」

思わぬ反応。エリア、大いに焦る。

「あ、あれ?ひよつとして違った?じゃ、じゃああれかしら?あんたの秘蔵の香水を勝手に使った事?それとも、あんたが大事にしてたティーカップ落として割っちゃった事?あ、そうだ、あんたのよそ行きの服にご隠居の猛毒薬こぼしちゃった事とか・・・?」

それを聞く度、ヒータの米神の青筋は増えていく。

「・・・ああ、そうかい・・・。何もかも全部、お前の仕業だったって訳かい・・・!?!」

朱色の髪がザワザワとざわめき、その身から比喩ではなくメラメラと炎が立ち昇る。

「え、ええー!?!どれも違うの!?!じゃあ他には・・・ああん、もう、色々ありすぎて分かんないじゃない!!馬鹿!!」

「・・・コ・ロ・ス・・・!!」

低くドスのこもった声が呟く。

途端――

ゴウツ

ヒータの頭上に、ファイヤー・ボール炎の飛礫の何倍もある巨大な火球が現れた。

それを見たエリア達は、一様に仰天する。

『ちよ、あれって!?!』

『死デス・メテオ恒星』じゃない!!それも詠唱破棄!?!』

『死デス・メテオ恒星』。

焦点温度が千度に達する火の玉をぶつける、単純だが強力な魔法。普通の人間が食らえば、まあ大抵は死ぬ。

「な、何よ!!ヒータあんだ、詠唱破棄みたいな器用な真似、苦手なんじゃないかっただの!?!」

『火事場の馬鹿力ってやつじゃないのかなあ……。』

どこか遠い目で語るギゴバイト。

昏く沈んだ声で、ヒータが言う。

「吉……ちよいとアイツ抑えてろ。確実に、当てる。」

『ぎよ……御意……。』

どこか怯えた様な調子で、エリアに飛びかかってくる稲荷火。

『ちよ、まず……。』

慌てるギゴバイト。と、その手が突然引かれる。

『へ……んぐっ!?!』

抱き締められた顔が、形の良い胸に埋まる。

瞬間――

ドツバアアアアアッ

空高く立ち昇る水柱。

キラキラと輝く虹が、宙に架かる。

と、

バキィッ

『ぬあっ!?!』

唐突に襲う衝撃に、稲荷火が弾き飛ばされる。

『吉!?!』

驚くヒータの前で弾ける水玉。

「憑依装着、完了!!」

飛び散る水滴の中から現れたのは、憑依装着モードになったエリア。そしてランクアップして、『ガガギゴ』となったギゴバイトの姿

だった。

クルクルと杖を舞わせながら、エリアが言う。

「ギゴ!! 稲荷火抑えて!!」

『分かった!!』

そう言うのと、ガガギゴは稲荷火の前に立ちふさがる。

『……因果な立場ですな。お互い。』

『……全くだ。』

ジリジリと対峙しながら、溜息を付き合う二人(?) なのだった。

一方、ヒータとエリアは――

「しやらくせえ!! 憑依装着したって死恒星は防げねーぞ!!」

「そんな事、分かってるわよ!! 憑依装着これは……」

言うと同時に、エリアが杖を地面に突き立てる。

「これを使うためよ!!」

ガガガッ

突き立てられた杖が、弧を描く様に地面を削る。

途端――

ゴバアッ

杖が描いた軌跡から、大量の水が噴き出した。

「ぬなっ!?!」

驚くヒータ。

「詠唱破棄出来る呪文くらい、あたしだって持ってんだからね!!」

霊使いのレベルを上げる憑依装着。

その効果は術者の内蔵魔力量も上げ、より高位の術の使用も可能にする。

その事を証明するかの様に、際限なく湧き吹く烈水。

それは見る見る渦を巻き、大波となってヒータに襲いかかる。

「いっけえー!! 『大波小波』!!」

「なっ、なななっ!?!」

慌てるヒータ。

そんな彼女を、大波が死恒星ごと呑み込む。

ザザアアン……

一拍の後、大波は小波となつて引いて行つた。

あとに残つたのは、全身びしょ濡れで倒れ伏すヒータの姿。

「ブイ!!」

会心の笑顔でVサインをかますエリア。

一方――

「こ……こんのやろー……」

杖を支えに、ヨロヨロと起き上がるヒータ。

「舐めんじゃねーぞ……!!?こんくらいでオレは……」

その目には、今だメラメラと炎が燃えている。

しかし、エリアはあくまで余裕の体。

「倒せるなんて思つてないわよ。」

「へ?」

ポカンとするヒータ。

「あたしの方見て、何か気づかない?」

言われて、ヒータはエリアをマジマジと見る。

「あれ……?」

確かに。

さつきまでエリアに付き従っていた筈の、泉の妖精。

その姿がない。

何処にいったのだろうか?

訳が分からないヒータの前で、エリアが胸を張る。

『ノーマル・スペル通常魔法、『ツイン・ウェーブ大波小波』。その効果は……』

ザワリ

急に、異様な悪寒がヒータを襲つた。

「な、何だ!? って、う、うえ!?!」

ヒータが見たものは、自分の下半身を覆う半透明のゲル状の物質。

否。グニグニウネウネト動いてる所を見ると、どうやら生き

物らしい。よく見れば、その表面に顔の様なものも確認出来る。

「タイムごと、『リバイバルスライム(原作仕様)』よ。どーお?可

愛いでしよう?」

「こ、こんなもん、いつの間に……って、ひやつ!?ちよ、おま、どこ触って、う、うひゃひゃ、ちよ、やめ……!?!」

これが先程エリアが放った、ツイン・ウェーブ大波小波の効果。

最初の大波で水属性モンスターの召喚をキャンセルし、入れ替わりに引いていく小波で別の水属性モンスターを再召喚していく。

「消火と、あんたの目晦ましもかねてやったんだけど、ンフフ。上手くいっちゃったー♪」

嬉しそうにはしゃぐエリア。

その様を忌々しそうに睨むと、ヒータは自分の下半身を覆って色々しているリバイバルスライム(原作仕様)に向かって杖を振り上げる。

「何でえ!!こんなヤツ!!」

吐き捨てる言葉と一緒に、杖が一閃。

グチャアツ

その一撃で、リバイバルスライム(原作仕様)はバラバラに弾け飛ぶ。

「はあ……はあ……、どうだ!?ざまあみろ!!」

(色々な意味で)紅潮した顔で、荒い息をつくヒータ。しかし、

「無駄よ!!」

ギョルルルツ

エリアの声と共に、飛び散ったりリバイバルスライム(原作仕様)の破片が集まる。

「な、何だよ!?!こいつ!!」

驚くヒータ。

バラバラになったはずのリバイバルスライム(原作仕様)が、元通りになって再びヒータに絡みついていた。

エリアが、エヘンと胸を張る。

「どーお!?驚いたでしょう。スライム(原作仕様)は破壊されても、すぐに元通り自己再生するのよん!!ちなみに、戦闘破壊でも効果破壊でもOKだから♪」

「な、何い!?なんだそのインチキ能力……って、ひゃん!?ちよ、やめ、あひゃひゃ、へ、変なここはいんじやね……ひやつ!?そ、そこ、

だめだって、だ……らめえ!!」

顔を真っ赤に紅潮させて悶えるヒータ。

そんな彼女に向かって、エリアは手を振る。

「じゃ、悪いけど、しばらくその子と遊んでねー。ギゴ、行くわよー。」

「お、おう!!」

タツタカタと走り出すエリアと、慌てて後を追うガガギゴ。

「あ、てめ……ちよ、ま……あ、あん!!うひ、うひやひやひやつ!!待って、コイツなんか……ひゃあ!!き、吉、何とかしてえ!!」

「ぎ、御意!!」

エリア達の後を追おうとした稲荷火だが、主の悲鳴を聞いてそれを断念する。

慌ててとつて返し、主に絡み付いているリバイバルスライム（原作仕様）を食いちぎるが、千切るそばから再生してしまう。

「じゃ、せいぜい愉しんでねー。バイビー!!」

そう言つて、悠々と走り去るエリア達。

「て、てめー、まてつてーっあひっ!!キャハハハハッ!!く、くすぐつた……だ、だめ、そこはマジで駄目だって……やめ、やめて……ひああっ!!」

「ああ、こりやあ、手に終えませんな……。」

「エリアてめーっ、覚えてろー!」

青い空の下、ヒータの悲鳴混じりの怒声と稲荷火の溜息が響き渡つた。

良い日であった。

空は高く澄み渡り、遠く雲雀が鳴いている。

太陽はさんさんと降り注ぎ、吹き渡るそよ風が心地良い。

ピクニックなど洒落込んだら、さぞ気持ちの良い事だろう。

しかし、そんなご機嫌な陽気などどこ吹く風な様子の者達が二人。

そこだけドンヨリと重苦しい空気を纏いながら、彼女達はトボトボと歩を進めていた。

連れ合いの片割れ。青髪の少女がぼやく。

「・・・参ったわね・・・。まさかヒータが追っ手になるなんて・・・。ホントに友情も義理もあつたもんじゃないわ・・・。世知辛いつたらありやしない。」

肩を落としながら、プヒくと溜息をつくエリア。並んで歩くギゴバイトも、暗い顔で頷く。

『この調子だと、他の皆も敵に回つてると思つた方がいいかも。もしアウスさんあたりが本気できたら、ちよつと厄介だよ?』  
それを聞いたエリア。ブルル、と身震いする。

「アウスの本気ー? 不吉な想像させないですよ。考えるだけでゾクゾクする。先生のお仕置きと究極の選択だわ。それ。」  
疲労とは別の原因で、汗が流れる。

『ボクも考えたくないけど、想定は常に最悪を前提に構えておかないと。ダルク君じゃないけどさ。』

エリアと同じく、嫌な汗を拭いながら言うギゴバイト。

「じゃあどうしろつてのよ? 具体的に。」

『ええと・・・』

しばし頭を捻るギゴバイト。やがて、ポンと手を打つ。

『そうだ!! 取り敢えず、あれを装備してりやいいんじゃないかな?』

ほら、『ハート・オヴ・クリスタル明鏡止水の心』』

それを聞いたエリア、露骨に嫌そうな顔をする。

「ええ、嫌よ!! あれ術式の構築大変なんだもん!!」

『そんな事言ってる場合じゃないでしょ!! ほら、ボクが見張ってるから、早くして!!』

「わ、分かったわよ。そう急かさないでよ!!」

ブツブツ言いながら地面に腰を下ろすと、杖を正眼に構える。

「―我が望むは彼の守り 古の水霊 不変の輝き 其が理 天より落ち来る水珠となりて 我にかりそめの久遠をもたらせ―」  
言葉の紡ぎと共に、杖から一条の光が天に昇る。



天に描かれる、緑色の魔法陣。そして――

『ハイト・オラ・クリスタル明鏡止水の心』!!』

言葉の結びと共に、天に描かれていた魔法陣がギョルルツと収束する。

やがて、収束した魔法陣は一滴の雫となって天から落ちた。

ピチヨン

それが、下に座するエリアの上で弾ける。

ポウツ

青い光に包まれる、エリアの身体。

「はあ、これでいいんでしょ?」

大きく息をつくと、くたびれたと言わんばかりに背中から地面に寝転がる。

『まあ、これで当面は安心かな。』

ギゴバイトは腰に手を当てて、寝転がるエリアを見下ろす。

――『ハイト・オラ・クリスタル明鏡止水の心』――

装備した者を、戦闘による死傷や破壊魔法から守る術。

その効果に見合い、術式の構築はなかなか難しい。

複雑な術式構築が苦手なエリアとしては、あまり手を出したくない代物ではある。

『ほら、エリア。いつまでも寝つ転がっていないで、早く逃げないと。』

ギゴバイトが急かすが、エリアはグダグダとくだを巻く。

「もう。急かさないでっば!!大丈夫よ。これ、装備したんだから。」

ダレ切った声でそう言った瞬間――

「ところがギツチヨン!!」

ゴオツ

『ワアツ!』

「キャアツ!」

突如襲う、緑の旋風。

「な、何よ!?これえ!!」

『ユ、コレってまさか!?!』

ヒュオオオオオオ・・・

やがて風が収まると、

「え!?!ちよ、何!?!」

驚くエリア。

たった今まで身に纏っていた明鏡止水ハート・オブ・クリスタルの心の光が掻き消えていた。

『『破術サイクロンの旋風』!!』って事はやっぱり!!』

旋風が襲ってきた方向を仰ぎ見るギゴバイト。

そこにいたのは――

緑色のポニーテールが、しなやかに風になびく。

「見つけたよ!!エーちゃん!!」

憑依装着したウインが、ビシリと杖を突きつけてそう言った。

「ウ、ウイン!?!今度はあんた!?!」

「その通り!!さあ、エーちゃん!!大人しくお縄を頂戴!!」

そう言うとウインは手にした杖をクルクルと回し、ビシィツとポーズを決める。

結構、ノリノリである。

「あ、あんただけはと思つてたのに・・・。他称「霊使いの良心」はどうしたの!?!』っていうか、明鏡止水の心ハート・オブ・クリスタルどうしてくれんのよ!!せつかく人が苦勞して構築したのに!!」

嘆くエリア。しかし、ウインは涼しい顔。

「だって明鏡止水あの心そのまんまだと、エリアちゃん無敵状態ですよ?それじゃ、わたし困るんだもん。」

キャラキャラと笑うウイン。相変わらずの天真爛漫っぷりである。

「ど・・・毒気抜かれるわね・・・。つて言うか、あんたもアタシに恨みあるわけ?」

その問いに、ウインはキョトンとする。

「ん?..ないよ。そんなの。」

「じゃあ何ですよ!!そんなに先生が怖いわけ!?!あたし達の絆は!?!友情はどうしたの!?!」

エリアの叫びに、ウインは小指を頬に添えてウーンと唸る。

「確かに先生は怖いけど、それだけじゃないよ。絆？友情？それは大事だけど、今回ばかりはちよつと優先順位が下なんだよね。」  
その言葉に、今度はエリアがキョトンとする。

「へ・・・？じゃあ、一体何なのよ？」

「それはね・・・」

「それは・・・？」

しばしの間。

エリアの喉が、唾を飲み下す。

ゴクリという音が、やけに大きく響いた。

そして、ウインは高らかに言い放つ。

「エーちゃん捕まえてきたら、先生が「デビコック」のハングリーバーガー食べに連れて行ってくれるんだもーん!!」

ドシャアアアアッ

何の音か。エリアが盛大にずっこけた音である。

ちなみに、「デビコック」とは何か。

虹の古代都市、レインボー・ルインで評判のハンバーガーショップである。看板メニューはハングリーバーガー。一つ1800ゴブリン。結構、お高い。リピーター曰く、食うか食われるかのスリルが病みつきになるとか。シェフはデビルコック。オーナーは成金ゴブリン。只今店舗拡大につきパート、アルバイト募集中。時給850ゴブリンなり。深夜シフトは1000ゴブリン。この世界の深夜勤務はリスクが大きい。それはもう、追いはぎやら盗賊団やら。

などともうでもいい話をしている間に、凄まじい勢いでずっこけたエリアがようやく杖を支えにして起き上がってきた。その様は、まるで先ほど大波小波<sup>ツイン・ウェーブ</sup>を食らって倒れたヒータそっくりである。因果は巡るのだ。

「あ・・・あなた・・・!!友情と食いもん計りにかけて、食いもんたるってか!!この欠食児童!!」

「あり？エーちゃん、怒ってる？何で？」

本気で不思議そうな顔のウインに向かって、エリアは力いっぱい怒

鳴り散らす。

「自分とハンバーガー計りにかけられて、ハンバーガー取られた日にやあ大概の人間が怒るわ!!っーか、あんたはそれでいいんか!?人間として自分の在り方に疑問とか湧かないんか!?!」

しかし、非常に困った事にウインは何の躊躇いもなくこう言い放つのだった。

「駄目だよ。エーちゃん。人にとって食べ物さんはなくてはならないものなんだよ。食べ物さんなくして人は在らず。食べ物さんとの出会いは一期一会。その大事な機会を逃すなんて、あつてはならない事なんだよ。」

「あ、あんたつて奴あ・・・」

耐えられずorzるエリア。

頭の中で何か大事なものが、ガラガラと音を立てて崩れていく。それは人間観とか人生論とか、とにかくそういう大事なものである。

これではかのトモダチ至上主義者、ライナと相互互換ではないか。いや、同じ霊使いである以上、相互互換なのは当たり前なのだが、今はそんな他所の世界の話をしている場合ではない。ないつたららない。

「という訳で、エーちゃんお覚悟!!」

何が”という訳”なのかは分からないが、ビシイツとポーズを決めるウイン。

「あー、もう分かったわよ!!こうなったら、やってやろうじゃない!!」

半ばヤケクソでそう叫ぶと、エリアも杖を構える。

かくして、ここに霊使い対霊使い。仁義なき戦い二の巻の幕が切つて落とされたー

のだが・・・

『破術の旋風』!!」

「ウキヤーツ!!」

『砂塵の大竜巻』!!」

「アヒヤアーツ!!」

『一陣の風』!!」

「ヒギヤアーツ!!」

聞こえてくるのはウインの決め声と、エリアの悲鳴ばかり。

・・・無理もないかもしれない。

ウインの得意とする風系魔法は、クロス・スベル 装備魔法や エターナル・スベル 永続魔法、トラップ・スベル 罠魔法等の破壊に特化している。

対して、エリアの水系魔法にはずばりその クロス・スベル 装備魔法や エターナル・スベル 永続魔法、トラップ・スベル 罠魔法が多いのである。

先程の『ハート・オブ・クリスタル 明鏡止水の心』はもちろん、『ミスト・ボデー 霧幻装甲』も、『ウォーター！ハザード 災厄の水面』も、クロス・スベル 全て装備魔法や エターナル・スベル 永続魔法である。

相性が悪い事、この上もない。

付け加えて言えば、ウインは術式の平行励起が非常に得意で、矢継ぎばやに魔法が飛んでくる。なので、おちおち呪文の詠唱やしもべの召喚もままならない。

「ぜえ・・・ぜえ・・・こ、これは、まずいわ・・・!!」

無駄に体力を消耗し、息も絶え絶えになったエリアが杖にすがりながら呟く。

「へっへーん。エーちゃん、そろそろチェックメイトかなー?」

余裕のウインが、クルクルと杖を踊らせる。

何かしもべを召喚し、勝負を決めるつもりなのだろう。

焦ったエリアが叫ぶ。

「ちよっ!!ギゴ、何してんの!!早く憑依装着を・・・!!」

『あゝ、ちよつとゴメン。今、無理。』

「はあ!?何言つて・・・」

がなりながら振り返るエリア。

『ね?無理でしょ(泣)?』

風竜(プチリユウが憑依装着でランクアップした)に頭を啜えられたギゴバイトが、ブラ〜ンブラ〜ンと揺れながらバツが悪そうに笑って見せた。

「ギ・・・ギゴオオオオオ!!」

虚しく響くエリアの叫び。

「ふっふっふっ。もはや万事手詰まりだね!!」

ほくそ笑みながら、ウインが杖を振り上げる。

「さあ、諦めてハンバーガーの糧になれ!!」

ウインの杖が地を突こうとしたその瞬間――

「ちよつと待ったああああー!!」

そんな叫びとともに、エリアが右手を突き出していた。

その手の中には、小さな紙切れが1枚。

それを見たウインの顔が、驚愕に強張る。

「そ、それはまさか!?!」

ウインの反応に引きつった笑みを浮かべると、*“それ”*を持つ手を震わせながらエリアは言った。

「マドルチェ堂本舗の、時間無制限スイーツバイキング・ペア招待券（50ペア限定）よ……。お願い、これで手を打って……。」

チケットを凝視したまま、滝の様によだれを流すウイン。その前で、エリアはただただ悲しげに肩を震わせるのだった。

『良かったね。あれでウインさんが納得してくれて。んでなきや、万事休すだったよ。』

風竜にカポンチョコされてた頭をコキコキと鳴らしながら、そんな事を言うギゴバイト。

しかし、当のエリアに窮地を脱した喜びはない。

「ああ……。せっかく……。1年も前から手回しをして……。貯金はたいて、手に入れたチケットだったのに……。」

その細い肩が、プルプルと震えている。

どうやら、血涙の決断だったらしい。

『そんな事言ったって、仕方ないじゃないか。大体、さつきヒータさんが苦勞して手に入れたマドルチェ堂のお菓子食べちゃったって言ってたじゃない。こういうのを因果応報って言う……。ウベアツ!』  
皆まで言う前に後ろから踏まれ、ギゴバイトは派手に地面とキスをする。

『な・・・何すんのさ!!急に!?!』

「うるさいうるさいうるさい!!人の気も知らないで!!大体、何でわざわざ入手難易度高いペア券手に入れたと思ってるのよ!?!」

『えっ?どう言う事?』

何の事が分からないと言った体の彼を前に、エリアは顔を真っ赤に膨らませて黙ってしまふ。そのまなじりには涙まで浮かんで・・・

『え!?!何!?!どうしたの!?!そ、そんなに大事だったの!?!あのチケツト・・・』

「うるさい!!もういい!!」

慌てるギゴバイトに向かってそう言い捨てると、エリアは浮かんだ涙を乱暴に拭いてズンズンと歩き出す。

「ほら、さっさと行くわよ!!こうなったら、何が何でも逃げ切ってるんだから!!」

エリアがそうがなった瞬間――

「・・・そうは・・・」

「いかのスミブクロなのですー!!」

そんな声とともに、天からジャカカツと降り落ちる無数の光の剣。そのまま宙に突き刺さり、エリア達の行く手を阻む。

お馴染み、『光の護封剣』シャイン・ガーディアンである。

『あく、これって・・・』

「今度はあんた達く・・・?」

心底、かつたるそうに言う二人。

「ちよ、ちよつとなんですか!?!そのやるきのないリアクションは!?!もつとこう、あるでしょ!?!なにーとか、まさかーとか」

などと言いながら、道端の茂みの中から出てくるライナ。その後ろにはダルクが、ついでの様にくっついてる。

「あら、ダルクも一緒なの・・・?大変そうね。お互い・・・」

「・・・全くだよ・・・」。

ウンザリした様な顔で頷きあう、エリアとダルク。

「ちよー、ちよつとちよつと!!なにふたりでいきどうごうしてるんですか!?!ダルク、いまはエリアちゃんはてきなのですよ!?!」

「……って言ってるわよ？アンタの片割れ。」

「……ああ、まあ、そういう訳だから……」

「……やるの？」

「……まあ、やんなきゃやんないで、周りが五月蠅いし……」

『ですよー……』×2（ギゴバイトとD・ナポレオン）

その場にいる全員（二人（？）（除く）が溜息をつく。

空気が重い。実に、重い。

「まあ、そんならとつとやりましょうか……。二人一緒なら、手間が省けていいわ……。」

そう言つて、よっこいしよと杖を構えるエリア。

「な、なんですか!?そのワイトのむれをまとめてめんどうみるよみたいなたいどは!?ライナとダルクはそんなにやすくはないのですよー!!」

憤慨するライナの横で、ダルクもやれやれと杖を手取る。

こうして、霊使い対霊使い・仁義なき戦い、第三幕は幕を上げたのだった。

……先にも言ったが、その日はよく晴れた穏やかな日であった。降り注ぐ日の光は優しく大地を照らし、涼やかな風は新緑の梢をサワサワと揺らす。

とー

コポポポポ……

その中に響く、静やかな水音。

『ハイ、お茶入りマシタヨー。』

『はいはい。』

『お茶菓子はこれでいいのかなー?』

『ハイ、美味シインデスヨー。ソノ道明寺。』

甲斐甲斐しくお茶の準備をしているのは、D・ナポレオン。

彼女が用意したお茶やお茶菓子を、ハッピー・ラヴァーとギゴバイトが手際良く運んで行く。

その先では――



『はい。お茶ー。』

「あ、どうもなのですー。」

地面に敷いたブルーシートの上に座ったライナが、そう言ってハッピー・ラヴァーからお茶を受け取る。

「はい、エリアちゃん。それとダルクも。」

ライナは同じ様に座ったエリアとダルクにも、お茶を渡す。

「悪いわね。」

「・・・いただきます・・・。」

ズズー

三人は揃ってお茶をすする。

空は晴れ、日差し暖かく、鳥はさえずる。

実にのどかな風景である。

「・・・ということですねー」

お茶で喉を潤したライナが、茶碗を置きながらエリアに話しかける。

「しぬおもいをしたわけなのですよー。ライナは。」

それを聞いたエリアは、やれやれと言った体で頭を降る。

「何処行ったのかと思ったら・・・。エリアあの娘、そんな事やってたのね・・・。」

「やっぱり、ごしんせきでしたか。どうりで、よくにってるはずなのですー。」

「まあね。分家したのは、随分前だけど・・・。」

「とにかく、よくいっておいてほしいのです。たにんよりも、ごしんぞくのことばのほうがきくでしょうから。」

ライナの言葉に、神妙な顔で頷くエリア。

「分かったわ。あんまり親しい訳じゃないけど・・・。この次会ったなら・・・。」

「たのみますなのですよー。」

そして、エリアはまた黙って頷く。

「・・・色々難儀だな・・・。お前も・・・。」

モチモチと道明寺なぞ齧りながら、ダルクが心底気の毒そうに言

う。

「まあねー。でも・・・」

ふと、エリアの瞳が遠くを見る。

「いつまでも、放っておく訳にもいかないわよ。＼あいつら＼がしてる事考えたらね・・・。」

「・・・エリアちゃん・・・？」

級友の様子に戸惑ったライナが声をかけると、エリアははっとした様に相好を崩す。

「・・・んなーんてね！別に知りもしない何処ぞの誰かさん達のためじゃないわよ！！これ以上騒ぎ起こされて、こっちまでとぼっちり食うのは御免って事！！あんな精神虚弱者の寄せ集めみたいな新興宗教なんて、本当は知ったこっちゃやないんだけどね！！」

そう言っつてケタケタ笑うと、エリアはぐいーっとお茶をあおる。

そんなエリアの豹変に、ポカンとするライナ。

その横で、ズウ・・・とお茶をすすめるダルク。すすりながらちらりと横を見れば、口を真一文字に引き結んでエリアを見つめるギゴバイトの姿。

「・・・。。。」

そして、ダルクはぼそりと呟く。

「・・・本当、難儀なやつらだよ・・・。」

小さなその呟きに、気づく者は誰もいない。

タンツ

高らかな音とともに、空になった茶碗が置かれる。

「あー、美味しかった。ごちそうさま。」

茶碗を置いたエリアが、立ち上がりながら言う。

「いえいえ。おそまつさまなのです。」

自分で用意した訳でもないのに、お辞儀をするライナ。

「いえいえ。結構なお点前でした。じゃ、あたし達はこれで・・・」

そう言っつて、エリアとギゴバイトがしれーつとその場を去ろうとしたその瞬間――

ジャカカカカカッ

再び降って来た光剣の群が、二人の行手を阻む。

『えー、やっぱりやんのー?』

うんざりした様な顔で言う、エリアとギゴバイト。

「あたりまえです。ここでもにがしたら、こんどはライナたちがおしおきのたいしょーなのです!!」

「あんたの言う事、聞いてあげたじゃない!」

「それとこれとははなしがべつなのですよー。」

「ちよつと、ダルク。これ、あんたの片割れでしょ!?何とかしてよ!!」

話をふられたダルクだが、申し訳なきように首を振る。

「……どうにか出来るものなら、とうにしていると言う理屈がね……。つていうか、僕もお仕置きは勘弁なんだよ……。」

そう言つて、ライナと一緒に杖を構えるダルク。

「う……裏切り者……。」

ガツクリと肩を落とすエリア。いい加減げんなりとしながら、こちらも杖を構える。

「さあラヴくん、ひょういそうちやくです!!」

『アイアイさー!!』

「……D、こつちもだ。」

『了解デス。マスター。』

瞬間、白と黒の光が閃く。

そして――

「ひょーいそーちやく、かんりよー!!」

光の中から飛び出したライナが、ビシイツとポーズを決める。

「……だから、無駄にテンション高いんだよ……。」

その後から、スタスタと出てくる憑依装着姿のダルク。  
と、

パチパチ

そのダルクに向かってライナが何やら目で合図をする。

「……何だよ……?」

訳が分からないダルクに向かって、ライナはしきりに合図を送る。  
パチパチ

やっぱり、訳が分からない。

パチパチパチ

・・・だんだん、苛ついてくる。

パチパチパチパチパチ

「なんなんだよ!? 言いたい事あるなら口で言え!! 口で!!」  
ついに怒鳴るダルク。

「あーもう、なんでわかんないですか!! ライナのきもちがツーカー  
でわかんないなんて、それでもライナのおとうとですか!？」

ライナも怒鳴る。

「だから、いったい何なんだよ!？」

「ポーズです!! ポーズ!!」

「はあ?」

啞然とするダルクの前で、改めてポーズをとるライナ。

「ライナがこうやってポーズとってんですから、ダルクも合わせて  
ポーズとるです!! ほら、こうです!! こう!!」

「な、何馬鹿な事言ってるんだ!? そんなアホみたいな格好、出来る訳な  
いだろ!？」

当然の如く拒絶するダルク。しかし、ライナも譲らない。

「んな!? ライナがせっかくふたりようにかんがえたざんしんかつス  
タイリツシユなポーズをアホとのたまいやがりますか!?! なんとるふ  
とく!! それでもほまれたかきふたごのかたわれですか!?!」

「好きで双子に生まれたわけじゃないぞ!! 大体そのどこが斬新だ  
!? スタイリツシユだ!? そんな役に立たない目ん玉なら、くり抜いて代  
わりに『神聖なる球体』でもはめ込んどけ!!」

「なにいつてるですか!? そんなおつきなもんライナのおめめにはい  
るわけないです・・・ってか、んなことどうでもいいです!! いいです  
からおとなしくだまってポーズとるです!!」

「嫌だっつってんだろ!! 目だけじゃなくて耳まで悪いのかよ!？」

「なんですってー!？」

「なんだよー!!」

「あゝ、もしもし〜!!」

ギャアギャア喚き合う二人の間に、別の声が割って入る。

「なんですか!?!」

「何だよ!?!」

振り返る二人の前には、チョココンと座ったエリア(憑依装着済み)とガガギゴの姿。

「あー、ひょういそうちやくしてるですー!!いつのまにー!?!」

「いつの間にも何も……。まあいいわ……。」

溜息をつくエリアとガガギゴ。

「あのさ、結局やるのやらないの?あたし達、急いでるんだけど?」その言葉にはつと我に返る二人。

「はっ、そ、そうです!!ダルク、こんなことしてるばあいじゃないです。はやくエリアちゃんをこうそくくしない!!」

「……。誰のせいだよ……。全く……。」

ぶつぶつ言いながらも、今度はさすがに調子を合わせるダルク。

「ダルク、もうゆうよがないです!!いつきにきめるです!!」

「ん?ああ、あれやるのか?」

「はい!!」

二人の杖が、同時に地を突く。

「くるです!!『ホーリーフレーム』!!」

『『ダークフレーム』!!』

その呼びかけに応える様に、杖が突いた地面から2色の柱が伸びる。

一つは白。眩く輝く、白色の光。

一つは黒。暗き深淵を思わせる、黒色の光。

やがて、天に昇った二つの光柱は弾け、そこに二つの形を織り成す。白い光から現れたのは、軌跡を描いて飛び回る純白の光の玉。

黒い光から現れたのは、幾つもの方体が組み合わさった漆黒の物体。

―『ホーリーフレーム』と『ダークフレーム』―

術式の生贄のために造られた、意思なき擬似生命体。

自分達の前に浮かぶそれらに杖を突きつけると、ライナとダルクは声を合わせて呪文を紡ぐ。

「デミア・ルミナス・テンペスト 滅びの歌声 破滅の宣告 昏き奈落に座する玉座 これに在りし二つの御魂 其を導にその座を立ちて 此方に来たりてその意を示せ 汝は王 終焉終焉ヲワリの王 其が御名のもと 愚なる万物に永久とわの慈悲を!!」

二人の言葉が、微塵のズレもなく唱を結ぶ。

「エンド・オブ・ザ・ワールド フォワルセカイ!!」

ゴウンツ

途端、空に浮かぶ巨大な魔法陣。

黒雲と稲光を帯びて廻るその中心に、ホーリーフレイムとダークフレイムが吸い込まれる。

そして―

ドンツ

入れ替わる様に、天から降る光の柱。

黒と白。

目まぐるしく廻り、絡み合う二色の混沌。

やがてその中に、何か巨大な影が浮かび上がる。

ズシリ

鳴り響く、重い足音。

沈む光の中から現れた者。

髑髏を思わせる頭部。

そこに頂く、牡牛の様に巨大な角。

筋骨隆々とした身体を包むは、重厚な鎧。

世界を睥睨する、紺色の炎を灯した瞳。

噴き出す呼気に、大気が恐怖に震える。

手にした戦斧で打たれた大地は、それだけで畏怖する様に揺れ動いた。

かの者は、世に名を轟かせる魔神が一柱。

―『終焉の王・デミス』―

『エンド・オブ・ワールド  
『ラウルセカイ』』

それは、遠き深淵の彼方から破壊の神々を呼び寄せ魔法。  
ライナとダルクがお互いの力を交わらせる事によって初めて使え  
る、文字通りの切り札。

「にやっはっはっはっ。どうです!!だいせいこうなのですー。」

勝利を確信し、汗びっしよりで高笑いするライナ。

その横では、やっぱり汗びっしりになったダルクがへたりこんで  
いる。

「・・・疲れた・・・。だりい・・・。」

そんな弟には構わず、ライナはビシッとエリアに杖を突きつけ  
る。

「さあ、エリアちゃん!!これでしようぶはついたです。いたいおも  
いするまえにこうふくするでーえ?」

驚くライナの前で、紅い魔法陣が展開していた。

その向こうで、エリアがにっこりと笑う。

「そうね。終りだわ♪」

ゴバアツ

そんな言葉とともに、魔法陣から凄まじい量の水が、これまた凄ま  
じい勢いで溢れ出した。

「にや、にやんですとうー!!?」

「・・・あ、そうきたか・・・。」

ドドドドドドドドドド

「あゝれれれ!!?」

「・・・ついてないな・・・。まったく・・・。」

ライナの叫びも、ダルクの諦観の声も、ついでにデミスも、渦巻く  
激流は容赦なく飲み込んでいく。

『フューネオル・フラッド  
『激流 葬』』

モンスターの『召喚』をトリガーに発動する罫魔法<sup>トランプ・スペル</sup>。

その効果は、見ての通り。

その場にいるモンスターのレベルも攻撃力も関係なく、一切の存在  
を押し流す。

水系魔法の最上位に位置する魔法で、エリアの文字通り奥の手である。

もちろん憑依装着状態でのランク上げ、尚且つ複雑難解な構築式が必要なのだが……。

「……あいつらがアホで助かったわ……。」

『術式構築の時間、たつぷりとれたもんな……。』

一切合切が押し流された荒野を前に、エリアとガガギゴはそう頷き合うのだった。

—4—

ザク……ザク……ザク……

晴れた空の下、二つの足音が重く響いていた。

ザク……ザク……ザク……

足音の主。

それは、憑依装着したエリアとガガギゴ。

よほど緊張しているのだろう。

表情が、異常な程に強張っている。

隈の寄った目は、まるで捕食者を警戒する草食動物の様に辺りをうかがう。

ゆっくりした足取りは次に踏む場所を慎重に探りながら、ソロリソロリと踏みしめていく。

まるで、地雷原でも歩いているかの様である。

鬼気迫る表情で、ガガギゴが言う。

『足元、気をつけろよ。』

血の気の失せた表情で、エリアが答える。

「うん。」

『『フォール・ホール落とし穴』とか、仕掛けてあるかも知れないからな。』

「分かってる。」

『いきなりかまして来るかもしれないからな。』アリス・クラッシュ『地砕き』とか  
『アリス・クラッシュ地割れ』とか。』



「分かっているってば。」  
ピリピリとした緊張感の中、囁く様に繰り返されるガガギゴの忠告。

それに対するエリアの答えは、どんどん苛立たしげになってくる。かなり、気が立っているらしい。

・・・無理もないかもしれない。

霊使いは、エリア自身を入れて6人。

これまで追ってきた面子は、ヒータ、ウイン、ライナ、ダルクの4人。

これにエリアを入れても、1人足りない。

そう。残りの1人。

「地霊使いアウス」である。

6人の中で最も多くの知識を持ち、尚且つ知恵が回る。

手持ちの魔法も『地<sup>アース・クラッシュ</sup>砕き』や『地<sup>アース・クラック</sup>割れ』、各落とし穴シリーズ等、

他の面子とは一線を画するものが揃っている。

そして、もつとも警戒すべきはその性格。

大胆にして狡猾、そして何より、「黒い」。

敵に回したが最後、その多彩極まる手札をいかに相手をおちよくり、陥れるかに集約して使ってくる。

過去に彼女に「玩具」にされ、再起不能（主に精神的な意味で）となってしまう者は数知れない。

エリアがその存在を、ドリアドと双璧と認する所以である。

そんな彼女が、今確実に敵に回っている。

どんな罠が張り巡らされているか、分かったものではない。

緊張するなど言う方が、無理というものだ。

「……………」

「……………」

ソロソロ ヒタヒタ

踏み出す、その一步一步が恐ろしい。

「……………」

「……………」

ソロソロ ヒタヒタ

いつその足元が崩れ、奈落に呑み込まれるか分からないのだから。

「……………」

『…………』

ソロソロ ヒタヒタ

息の詰まる様な時間が続く。

「……………」

『…………』

ソロソロ ヒタヒタ

「……………」

『…………』

ソロソロ ヒタヒタ

―と、

ピタリ。

唐突に、エリアの足が止まった。

『エリア?』

怪訝そうに声をかけるガガギゴ。

しかし、その声が聞こえているのかいないのか。

血の気の失せた顔はうつむき、全身がプルプルと瘡にでも罹った様に震えている。

何か、見ているやばい。

「ふ…………ふふ、ふふふふ…………」

やがて、低く響き始める笑い声。

『エ、エリア?』

気味悪そうに問いかけるガガギゴ。

そして―

「やってられるかー!!!!」

ドカーン!!

キレました。

キレますよね。

「アウス!!いるの!?!聞いているの!?!」

何かのたがが外れたかの様に、周囲に向かって喚き始める。唾然と立ち尽くす、ガガギゴ。

しかし、そんな相棒に構う事なくエリアは声を張り上げる。

「いいえ!!あなたはいるわ!!」  
「ここ」にいる!!絶対に!!そしてアタシ達を見てせせら笑っているのよ!!」

『エ、エリア、落ち着いて?!』

ガガギゴの制止も届かない。髪を振り乱し、爛々と目を光らせるエリア。

正直、めっちゃ怖い。

「もういい!!もうたくさんよ!!出てらっしゃい!!真正面から勝負してやるわ!!そして、あんたを殺してあたしも死ぬー!!」

『エリアー、何言ってるのー?!』

半狂乱で喚きまくるエリア。

何とか落ち着かせようとするガガギゴ。

「さあ、早く出てきなさい!!さもないと、辺り一帯押し流して荒野にするわよー!!!」

さうとう物騒な言葉が、大きく開いた口から飛び出し始める。

ーと、

「アハ、アハハ、アハハハハハッ!!」

何処からともなく、笑い声が聞こえてきた。

どうにも、聞き覚えのある声である。

見れば、いつからいたのだろうか。

道端の木の枝に座ったアウスが、腹を抱えて笑っている。

「アハハ、あんまり笑わせないでおくれよ。エリア女史。」

眼鏡を外して眦の涙を拭きながら、彼女はそんな事を言う。

『ホントにいたし...』

呆れた様に呟くガガギゴ。

その顔には、疲労の色が濃い。

半狂乱のエリア、金切り声で叫ぶ。

いい加減、耳が痛い。

「出たわね、この眼鏡小悪魔!!降りてらっしゃい!!正々堂々勝負よ

!!

「そういきり立たないで。言われなくても、今降りるよ。」

言いながら、アウスは座っていた木の枝から飛び降りる。

スタリと降り立った彼女に向かって、エリアはブンブンと杖を振り回す。

「さあ、来なさい!!後はアンタさえ倒せば、アタシ達は逃げ切れるのよ!!いいえ、逃げ切ってみせる!!」

しかし、そんな魂の叫びをアウスは笑って聞き流す。

「アハハ。嫌だなあ、エリア女史。友である君との争いなんか、ボクが望む筈ないじゃないか?」

「・・・へ?」

その言葉に、一瞬ポカンとするエリア。しかし、すぐにブンブンと首を振る。

「い、いいや!!騙されない!!騙されないわよ!!この世に信じられる事なんて・・・真実なんて何一つありはしないのよ!!アンタだって、そんな事言つといて後ろ向いたらガブツてくるに決まってるー!!!」

「しないって・・・。いやはや、随分と酷い目にあつたらしいね。」

苦笑するアウス。

『ええ・・・まあ、それ相応に・・・』

応えるガガギゴの目には、諦観の色が濃く浮かんでいる。

「でもねえ、ボクが何もしいってのはホントだよ。その証拠に、ほら。」

そして、アウスは持っていた杖をポトンと地面に落とした。

「え?」

『ありや?』

呆氣にとられるエリアとギゴバイトの前で、アウスは落とした杖をエリア達に向かって蹴ってよこす。

コロコロと、こちらに向かって転がってくる杖。

「さ、これでボクは丸腰だ。」

言いながら、両手を広げてみせるアウス。

「憑依装着もしてないし、術も使えない。さて、信用してくれるかな

？」

「そ……そうね。それなら……」

そう言って、エリアは構えていた杖を下ろす……と思いきや、

「なーんて言う訳、ないでしょが!!」

そんな絶叫とともに、杖を振りかざしてアウスに踊りかかる。

「アンタの言う事信じるくらいなら、スカゴブリンの言う事信じる方がまだましよ!!」

その勢いのまま、アウスの脳天に振り下ろされる杖。

しかし――

パキイイイイイイン

杖が叩きつけられたのは、アウスの脳天ではなかった。

それを受けたのは、角と蝙蝠の羽を持ったモルモットの様なモンスタ―。

アウスの使い魔、デヴィことデーモン・ビーバーである。

「んなっ!!使い魔を身代わりにするなんて……!?!」

怒りに顔を引きつらせるエリア。しかし――

「君は実に馬鹿だなあ。そんな事、する訳無いだろ?」

アウスがニコリと「例」の笑みを浮かべる。

そう。振り下ろされた杖は、デーモン・ビーバーの身すれすれで止まっていた。

そして、その間にあるのは――

「ト、罨魔法!!いつの間にな?」

自分の目の前に展開する紅い魔法陣に、驚愕するエリア。

一方、アウスはニコニコと笑みを浮かべながら語る。

「なるほど。正しく、ボクは隠し事をしていたよ。一つはボクが杖なしでも使える魔法を持つてるって事。そして……」

魔法陣の向こうで、デーモン・ビーバーが申し訳なさそうに頭をか

く。

その表情は、心底気の毒そうである。

『すみませんなあ……。これも渡世の義理。堪忍したってや……。』

そんな彼の向こうで、アウスはサラリと言った。

「この術」、実はボクも使えるんだよ。」

瞬間、デーモン・ビーバーの身体が光に包まれたかと思うと、バビュン

その姿がエリアの目の前から消える。

「えっ!?ここ、これって・・・!!」

驚きの言葉が終わらぬうちに、入れ替わる様に落ちてきた光が弾けた。

それを見たガガギゴも、驚愕の声を上げる。

『シ、『位相転移』!!で、でもこの術は・・・』

「何も、ウイン女史の専売特許って訳じゃないだろう?」

クスクス笑いながら、アウスが言う。

眼鏡に光が反射して、表情がよく見えないのが不気味さを誘う。

「い、一体何を・・・!?!」

混乱する思考を必死にまとめながら、エリアは光の中に目を凝らす。

と、

ガシイッ

光の中から伸びてきた手が、エリアの杖を掴む。

「——っ!!?!」

『——っ!!?!』

バキイッ

次の瞬間、見るからに細いその指が絡んだ杖を握りつぶした。

「・・・いけませんね。エリアさん。人に向かって杖を振り下ろすなんて・・・。」

響いてきたのは、優しげでありながら妙に抑揚のない、女性の声。

それを聞いたエリアとガガギゴの顔から、一気に血の気が引いていく。

ジャリッ

光の中から踏み出した足が、地面を踏み締める。

「言つたろ。『ボク』は何もしないって。」

アウスが笑う。酷く、楽しそうに。

『あ……あわ、あわわわわ……』

腰から抜ける力。地面にへたりこんだエリアとガガギゴが、互いに抱き締めあつて震える。

光の中から歩み出る、“恐怖”。

「……全く。遅刻しちや駄目じゃないですか。エリアさん……？」

声も出ないエリア達を見下ろしながら、“彼女”は微笑む。

朗らかに。それはもう、朗らかに。

ガタガタと震えるエリアの頭を、白い指がクシヤリと撫でる。

「……用件は、分かっていますね……？」

光を後光の様に背に負いながら、彼女―精霊術師・ドリアードは優しく問う。

「宿題は、どうしました……？」

「……あ、あの、その、この……」

必死に弁解を試みるが、呂律が回らない。

頼みの相棒も、パクパクと口を開閉させるだけ。

身体は酷く冷えているのに、流れる汗が止まらない。

それが目に滲みるが、瞬きも拭う事も出来ない。

視界を閉ざせば、その間に何が起こるか分からない。

ただただ、恐怖に震える。

「そうですか。分かりました……」

溜息混じりの声。

“彼女”は、言う。

「そんなに怖がらなくて、いいですよ？」

「ふひえ？」

声とも音ともとれないものが、気管を鳴らす。

「貴女には、“4つ”の選択権をあげましょう。」

途端、その背後で展開する4つの魔法陣。

それぞれの中心に刻まれるは、「風」、「林」、「火」、「山」の4文字。

「さて、どれにしましょうか？」

エリアが、声にならない悲鳴を上げる。

そして、“彼女”は優しく問うた。

「さあ。ど・う・し・ま・す?」

・・・良い日であった。

空は高く澄み渡り、遠く雲雀が鳴いている。

太陽はさんさんと降り注ぎ、吹き渡るそよ風が心地良い。

「ああ、本当にいい日だなあ。」

そう言つて気持ち良さそうに伸びをすると、アウスは緑の草の上に腰を下ろす。

ゴソゴソとポケットをまさぐると、出てくるのは銘菓・パンプキン  
グ饅頭。

包み紙を剥きながら、彼女は問う。

「ねえ、そうは思わないかい。エリア女史?」

答えは、ない。

それでも構わず、アウスは続ける。

「まあ、もう少し頑張りなよ。そうしたら、他の皆も呼んでピクニックでもしよう。」

目の前で繰り広げられる惨劇を楽しそうに眺めながら、アウスはニツコリ笑つて饅頭を頬張った。

抜ける様に空の青い、本当に良い日の出来事だった。

終わり